太宰府市の文化財　第58集

太宰府・佐野地区遺跡群XII

カヤノ遺跡第7次調査・殿城戸遺跡第6次調査

2001

太宰府市教育委員会
玉川文化財研究所

太宰府市の文化財　第58集

太宰府・佐野地区遺跡群XII

カヤノ遺跡第7次調査・殿城戸遺跡第6次調査

2001

太宰府市教育委員会
玉川文化財研究所

序

太宰府市では大宰府史跡をはじめとする多くの文化遺産としての指定史跡を抱え、これを次世代に残すため、様々な取り組みを行っております。

今回の報告は大字大佐野字カヤノおよび殿城戸で発見、調査した遺跡であり、カヤノ遺跡は縄文時代を、殿城戸遺跡は古墳時代を主体とする時期の遺跡で、それに関する土器・石器をはじめとする多くの遺物が出土しております。特に本事業は太宰府市の埋蔵文化財事業においてははじめての委託業務であります。

調査・報告に当たりましては、地元の方々や作業に従事された作業員の皆様、玉川文化財研究所にはさまざまな御配慮をいただき、感謝申し上げます。

この報告書が今後の遺跡保護、活用を通じた地元理解の一助になれば幸いに存じます。

太宰府市教育委員会

教育長　關　敏治

例　言

1．本書は、太宰府市教育委員会が平成12年度に実施した太宰府都市計画事業佐野土地区画整理に伴う大佐野・カヤノ遺跡第７次調査と大佐野・殿城戸遺跡第６次調査の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．カヤノ遺跡の調査は、平成12年５月22日から同年７月３日まで実施し、地番は太宰府市大字大佐野439外である。殿城戸遺跡の調査は、平成12年８月28日から同年10月31日まで実施した。地番は太宰府市大字大佐野185－１、185－４～９、186、187、244－２である。

3．発掘調査は、太宰府市教育委員会の指導のもとに（株）玉川文化財研究所（所長　戸田哲也）が行った。

4．検出遺構の実測及び写真撮影は、カヤノ遺跡は高橋勝広・香川達郎、殿城戸遺跡は小山裕之が行い、航空撮影はカヤノ遺跡を（有）空中写真企画、殿城戸遺跡を（株）シン技術コンサルタントが行った。

5．報告書作成業務は（株）玉川文化財研究所において行った。

6．遺構実測図及び遺構配置図はすべて国土調査法第Ⅱ座標系を基準としている。よって図中に示される方位は特に注記のない場合、座標北（G.N.）を指している。

7．遺構実測図中の柱穴・ピットなどに付したマイナス値は確認面からの深度値である。

8．縄文土器の拓本図は、断面図の左側に表面、右側に裏面を置いている。

9．縄文時代石器実測図の縁辺に図示した矢印は、微細な剥離痕範囲を示している。

10．本書の執筆は、戸田哲也の指導のもとに以下のように行い、付属のＣＤ－ＲＯＭデータの編集については小山裕之が行った。

Ⅰ．はじめに／Ⅱ．位置と環境
小山裕之・高橋勝広

Ⅲ．カヤノ遺跡第７次調査
戸田哲也　２-（２）-２）、３
高橋勝広　１、２-（１）、２-（２）-１）、２-（３）、２-（４）、３
中山　豊　石器

Ⅳ．殿城戸遺跡第６次調査
小山裕之　１、２、３
中山　豊　石器
山村信榮・佐藤道文　４（殿城戸遺跡第７次調査について）

11．本文・表・写真図版については付属のＣＤ－ＲＯＭに収容している。詳細はＣＤ－ＲＯＭ内のテキストデータ「はじめにお読みください」を参照のこと。

調査組織

太宰府市教育委員会調査組織

（平成12／2000年度）

総括	教育長	長野治己	（～12月24日）
		關　敏治	（12月25日～）
庶務	教育部長	白石純一	
	文化財課長	津田秀司	（～3月31日）
		木村和美	（4月1日～）
	文化財保護係長	和田敏信	
	文化財調査係長	山本信夫	（～10月23日）
		神原　稔	（11月1日～）
	主任主事	藤井泰人	
		野寄美希	
	嘱託	鈴木弘江	
調査	技術主査	城戸康利	
	主任技師	山村信榮	
		中島恒次郎	
		井上信正	
		高橋　学	
		宮崎亮一	
	技師（嘱託）	下川可容子	
		森田レイ子	
		佐藤道文	

（株）玉川文化財研究所調査組織

所長	戸田哲也	日本考古学協会会員
調査研究部長	河合英夫	日本考古学協会会員
主任研究員	高橋勝広	日本考古学協会会員
主任研究員	小山裕之	日本考古学協会会員
研究員	香川達郎	

目　次

Ⅰ．はじめに…… 1

Ⅱ．位置と環境 …… 2

Ⅲ．カヤノ遺跡第７次調査…… 4

１．調査の方法と経過 …… 4

２．調査の概要 …… 14

（１）層　　序…… 14

（２）縄文時代…… 17

１）土　坑…… 17

２）礫集中…… 18

３）包含層出土遺物…… 20

（３）古　　代…… 47

１）土坑ａ類…… 48

２）土坑ｂ類…… 49

３）土坑ｃ類…… 50

（４）中・近世…… 53

１）柱穴列…… 53

２）土坑列…… 57

３）土　坑…… 58

４）畝溝状遺構…… 62

５）包含層（浅褐色土～暗褐色土）出土遺物…… 64

３．小　結 …… 65

Ⅳ．殿城戸遺跡第６次調査…… 70

１．調査の方法と経緯 …… 70

２．調査の概要 …… 78

（１）古墳時代…… 78

１）竪穴住居跡…… 78

２）廃棄土坑…… 82

３）溝…… 93

（２）古　　代…… 93

１）火葬墓…… 93

２）土　坑…… 96

３）第２面ピット群…… 97

４）その他の遺構…… 97

（３）近世以降…… 98

１）土　坑…… 98

２）溝状遺構…… 99

３）第１面ピット群 …… 100

４）その他の遺構 …… 101

（４）表土・褐色土出土遺物…… 111

３．小　結 …… 117

４．殿城戸遺跡第７次調査について …… 126

Ⅴ．カヤノ遺跡第７次調査に伴う自然科学分析 …… 130

報告書抄録 …… 巻末

Ⅰ．はじめに

今回の調査は、太宰府市都市計画事業佐野土地区画整理（以下、区画整理）に伴う埋蔵文化財の事前調査であり、事業区域内に所在するカヤノ遺跡第７次調査・殿城戸遺跡第６次調査として実施されたものである。

佐野地区の調査は昭和62年（1987）年度から開始され、カヤノ遺跡については平成７年度の１次調査から、各年度ごと及び各調査地区ごとに調査が継続されており、今回が第７次調査となる。過去に調査されたカヤノ遺跡第１次調査地区は第７次（今次）調査地区の南側に接しており、奈良時代後期の溝１条、焼土坑２基、土坑等を検出している。この内、Ｓ－5（溝）は北へ延びる舌状台地を東西に横切るように構築されている。そのＳ－5の南側にＳ－9（焼土坑）が位置している。また、Ｓ－6（土坑）からは縄文時代早期押型文土器が出土している。第１次調査で検出されている焼土坑は火葬墓とともに検出されることが多く、本地点からも同様の遺構が検出される可能性が予想されていた。加えて、本地点は試掘調査により縄文時代の早期押型文期の遺物包含層の存在が想定されたことなど、その成果が期待されていた。今回の調査では、遺構は表土の掘り下げから次第に検出されはじめ、まず近世の柱穴列・土坑・畝状遺構が検出され、その後古代の土坑が見つかった。それらの検出面であるⅢ層（黄褐色土層）上面には縄文時代の礫がすでに散見され、縄文時代の遺構・遺物の検出につとめた。結果的には、縄文時代の明確な遺構は検出されなかったが、縄文時代早期の遺物包含層を確認することができた。

次ぎに殿城戸遺跡第６次調査に触れると、平成７年度の１次調査から、各年度ごと及び各調査地区ごとに調査が継続されており、今回が第６次調査となる。第７次調査区とは北側で隣接しており、古墳時代前期の方形区画溝・竪穴住居址・廃棄土坑等、数多くの遺構を検出している。本地点は南側から延びる丘陵先端部に位置し、調査前には「殿城戸」という地名から、中世山城の一部が検出されるのではないかと期待が持たれた地域でもあったが、調査前に視認されていた丘陵部の大半は現代に盛土造成された地形であり、旧地形は大幅に改変されていたことが判明した。しかしながら、盛土の下には予想していなかった平場が存在し、加えて丘陵斜面部の一部には旧地形が遺存していたことから、古墳時代の竪穴住居跡、廃棄土坑、古代の火葬墓、近世の遺構等を検出するに至った。特に廃棄土坑は第７次調査区で検出された方形区画溝に関連する施設として注目される遺構であり、また、火葬墓の存在は宮ノ本遺跡で検出されている火葬墓と併せて、当地域における古代の墓域の広がり確認するうえでも重要な発見であると思われる。

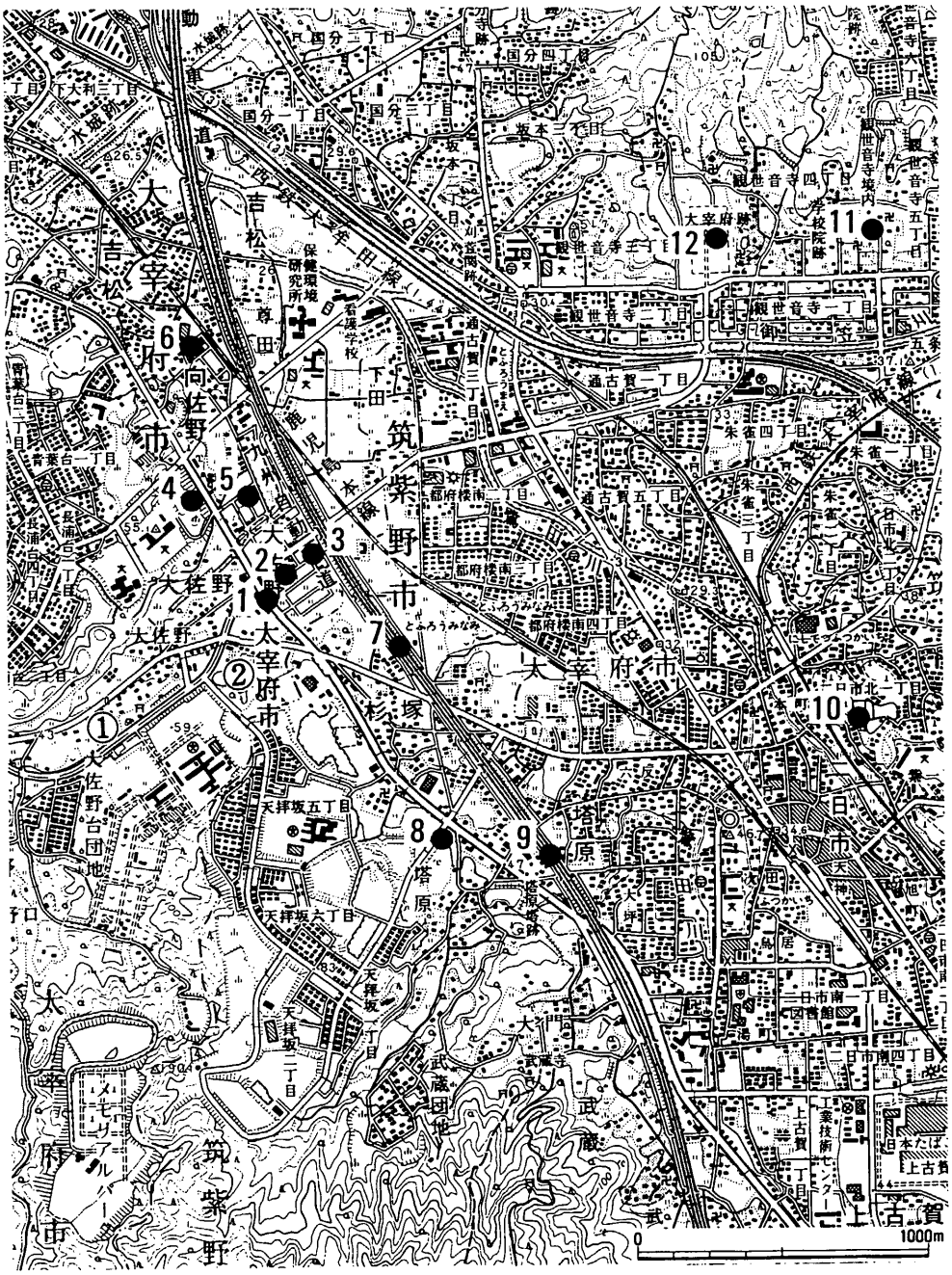
Ⅱ．位置と環境

カヤノ・殿城戸両遺跡の所在する福岡県太宰府市は福岡平野の南深部に位置し、福岡平野を東西に分ける三郡山地と南北に分ける背振山地の会合部にあたる。また、市内には御笠川・鷺田川・大佐野川・牛頸川が北流し、この４河川が山地の会合部付近で合流し博多湾へ注ぐ。

カヤノ遺跡は背振山地の東端の天拝山から北東に派生する丘陵端部に位置し、本丘陵の北側には大佐野川が東流しており、その対岸に宮ノ本丘陵が位置する。殿城戸遺跡は同じく天拝山から北方向に派生する丘陵の斜面部から裾部に立地し、東西方向には平地を挟んで宮ノ本丘陵とは相対する位置関係にある。カヤノ遺跡と殿城戸遺跡は南西方向に約0.8㎞の距離を持つ。両遺跡の周辺には多くの遺跡が存在し、尾崎遺跡・フケ遺跡・雛川遺跡が大佐野川の南岸に、北岸には宮ノ本遺跡・前田遺跡・原口遺跡が位置する。大佐野川南岸の遺跡から見ていくと、尾崎遺跡は丘陵から低地へ張り出す微高地上に位置し、古墳時代前期の集落址が営まれ、同時代後期後半になると集落址及び貯木施設が検出されている。さらに低湿地上に張り出す遺跡がフケ遺跡と雛川遺跡で、弥生時代後期から古墳時代初頭の流路が検出されており、前者では掘立柱建物址を主体とした集落址が、後者では流路の溜まりを利用した堅果類貯蔵用の土坑、木製品の加工素材の貯蔵施設等がそれぞれ検出されている。大佐野川北岸では鉛買地券を出土した遺跡として著名な宮ノ本遺跡が存在し、丘陵の尾根上から斜面部に墳墓群が立地している。古墳時代前期の古墳は丘陵の尾根づたいに構築され、古代の墳墓は古墳の周囲に展開している。奈良時代には火葬墓、平安時代は土壙墓・木棺墓・石棺墓が構築されている。古代の墳墓群は丘陵頂部から斜面部に立地し、丘陵南尾根に木棺墓、北尾根に木蓋土壙墓が作られ、尾根を境に異なる墓制を呈している。前田遺跡は丘陵裾部に位置する弥生時代前期の集落址である。篠振遺跡は丘陵尾根筋に沿って古代から中世の墳墓が展開している。以上のように、今回の調査地区周辺には数多くの遺跡が存在し、今後も調査が行われる予定であり、当地域の歴史的景観を明らかにするうえでもこれからの調査成果が多いに期待される地域である。

参考文献

太宰府市教育委員会 1989～99「太宰府・佐野地区遺跡群Ⅰ～Ⅷ」
太宰府町教育委員会 1980「宮ノ本遺跡」
太宰府市教育委員会 1992「宮ノ本遺跡Ⅱ」
太宰府市教育委員会 1987「篠振遺跡」



①カヤノ遺跡第7次調査　②殿城戸遺跡第6次調査　1．尾崎遺跡　2．フケ遺跡　3．雛川遺跡
4．宮ノ本遺跡　5．前田遺跡　6．原口遺跡　7．剣塚遺跡　8．脇田遺跡　9．唐人塚遺跡
10．峰・峰畑遺跡　11．観世音寺　12．大宰府史跡

第1図　佐野地区周辺の遺跡（1/25,000）

Ⅲ．カヤノ遺跡第７次調査

１．調査の方法と経過

今回の調査は福岡県太宰府市佐野地区カヤノに計画された太宰府市都市計画事業佐野土地区画整理に伴う埋蔵文化財調査として実施されたものである。平成12年、事業の具体化に伴い、太宰府市教育委員会文化財課から（株）玉川文化財研究所に発掘調査業務の委託がなされ、平成12年５月22日から同年７月３日までの約1.5ヶ月間本格調査（630㎡）を実施した。

調査にあたっては「太宰府市埋蔵文化財調査指針」（以下、指針）に則り、『佐野地区遺跡群Ⅰ』（太宰府市教育委員会1989）及び『佐野地区遺跡群Ⅳ』（太宰府市教育委員会1993）の調査方法を参考に行った。

本遺跡は、北東方向へ張り出す本丘陵よりさらに北へ突出した小舌状台地にあたり、その先端部が調査区である。調査区の三方は近現代の段切り地業や土砂取り等がなされ、崖となっている。調査区が乗る台地上も後世の段切り・削平を受けて、南西側から北東側へ下がる地形をほぼ水平に削り取られている。また、調査区北側は段切りによって50㎝ほどの段が認められる。そのため、調査区北側は遺構がほとんど残っておらず、わずかに7SX050の畝溝状遺構の残存が認められる程度であった。

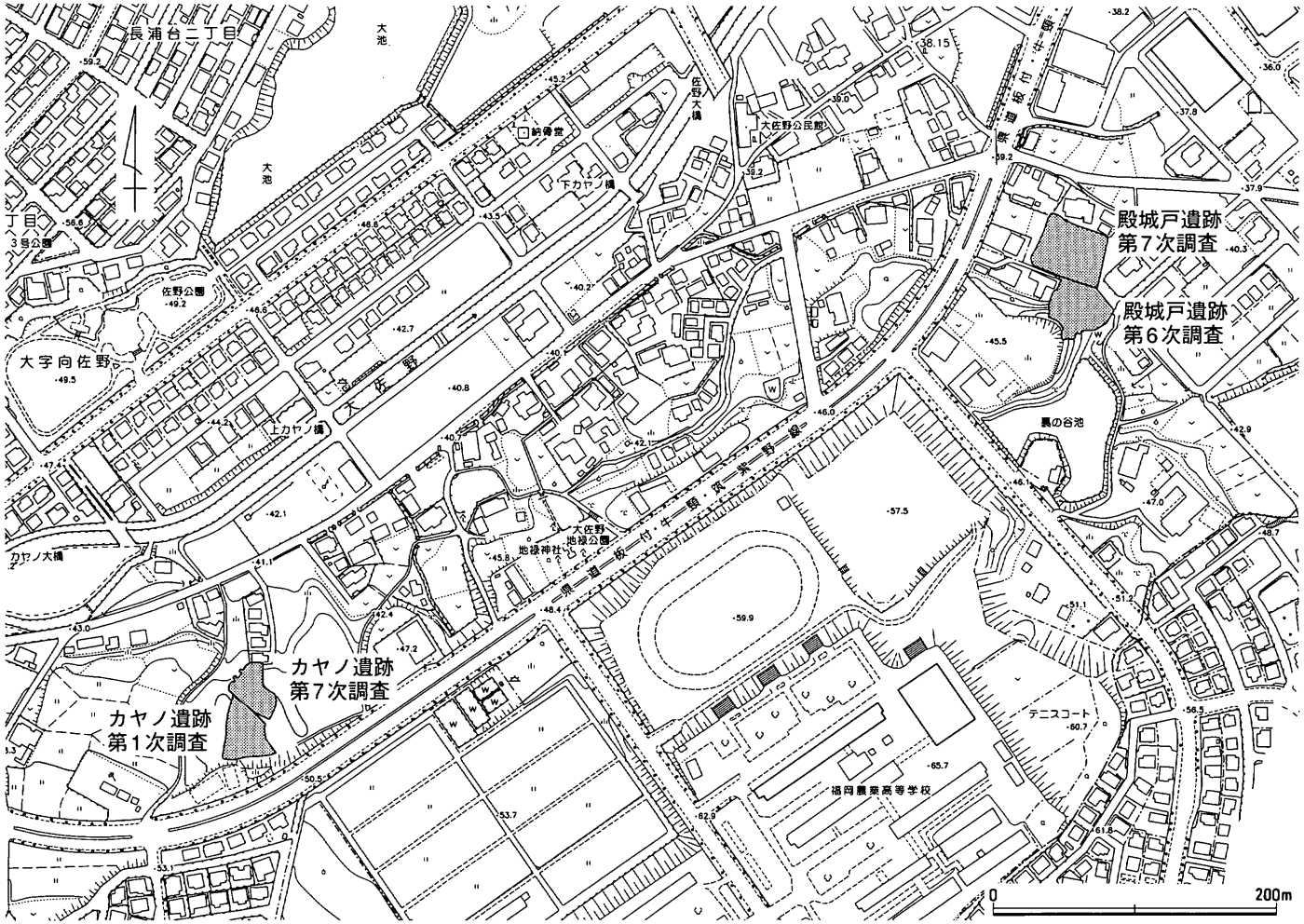
調査範囲は本調査に先立ち太宰府市教育委員会（以下、市教育委員会）が試掘調査を行い、その結果に基づき決定された。調査範囲は基本的に丘陵上の平場とし、試掘調査で縄文時代早期の遺物を出土した西側斜面部をそれに加えている。

調査にあたっては、作業の効率化の観点から重機を用いることとし、平成12年５月22日に重機を搬入し、その重機によって表土の除去を開始した。ただし、重機による表土の掘削は遺構検出面であるⅢ層黄褐色土の上面までとし、それ以下はすべて人力によって行っている。

重機による表土の除去が一定の範囲まで進行した５月25日に遺構の検出作業を開始した。そのため、表土の除去が終了した５月29日には遺構の検出作業も表土除去とほぼ同時に終了している。検出された遺構は古代の土坑10基と近世の柱穴列、土坑23基、畝溝状遺構である。また、この段階で丘陵上に縄文時代早期押型文土器と石器類が少量ながら出土しており、検出面には礫が所々に分布するといった状況であった。

各時代の遺構上面確認が終了した後に３ｍ方眼の地区杭を設置した。方眼は国家座標を基準とし、調査区外の南東隅に仮の０点を設定し、Ｘ軸を南から北へＡ・Ｂ・Ｃのアルファベット順で呼称し、Ｙ軸を東から西へ１・２・３の順で呼称した。

その後、遺構の精査を開始し、また地区杭を利用して縮尺1/100の略測図（遺構確認段階



第2図　カヤノ遺跡第7次・殿城戸遺跡第6次調査位置図（1/5,000）

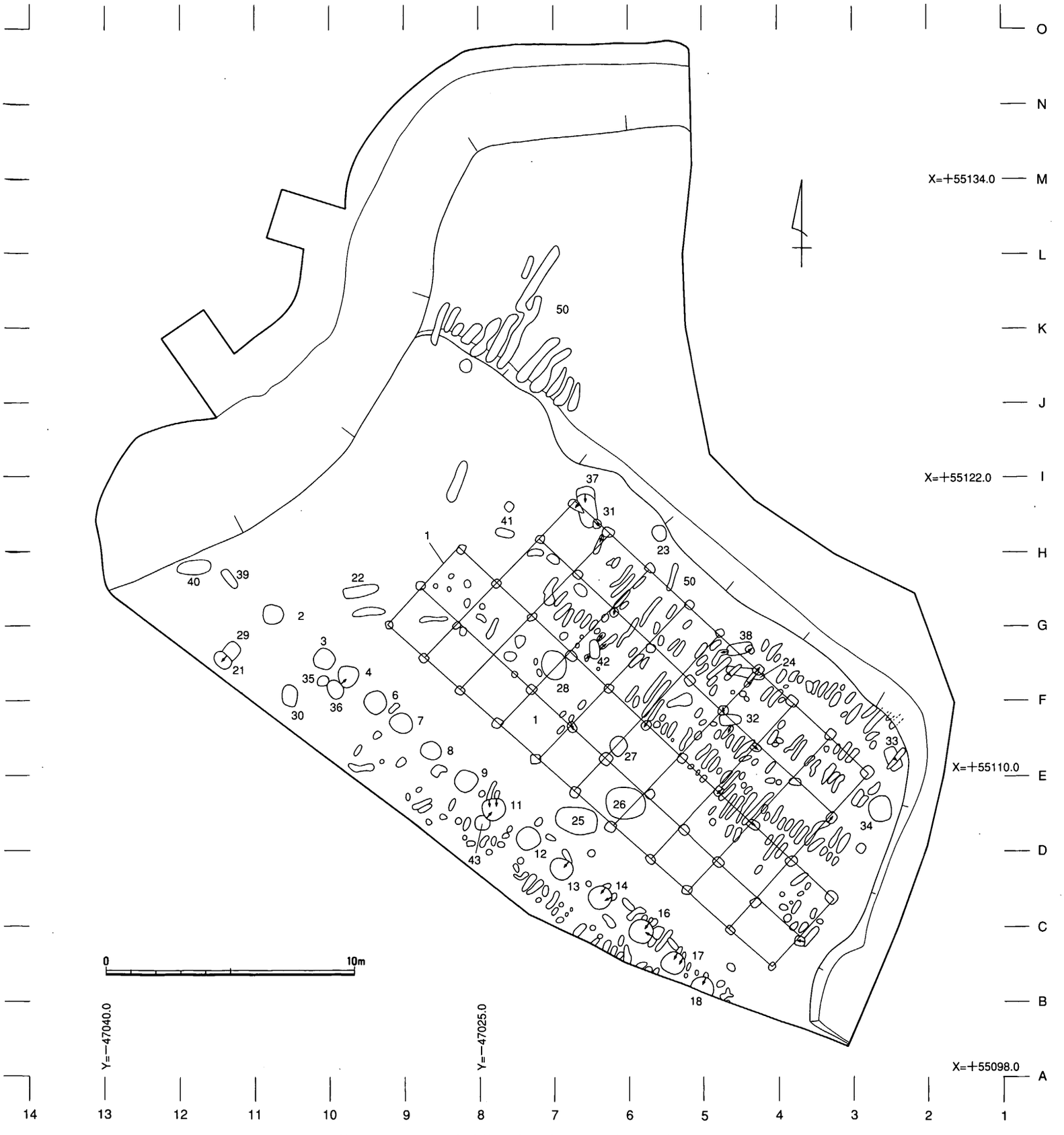
の全測図）を作成した。各遺構にはＳ番号（遺構番号でＳ－1・Ｓ－3等と呼称。この段階では遺構の種別を記さない）を付与し、略測図に記録した。遺構の精査にあたっては土坑・柱穴を半截して土層堆積の確認を行い、その後必要に応じて土層断面図を作成した。特に遺構相互の重複関係の把握は遺構検出段階で行ったが、その確認は土層断面の観察によっている。

個別図（各遺構の実測図）は縮尺1/20で作成したが、7SX001のような大規模な遺構は数枚の分割図とした。縄文時代の遺物は原則として図面に出土位置を落とし、出土番号を付与した。さらに遺物台帳には種別及び出土レベル等の必要事項を記載した。

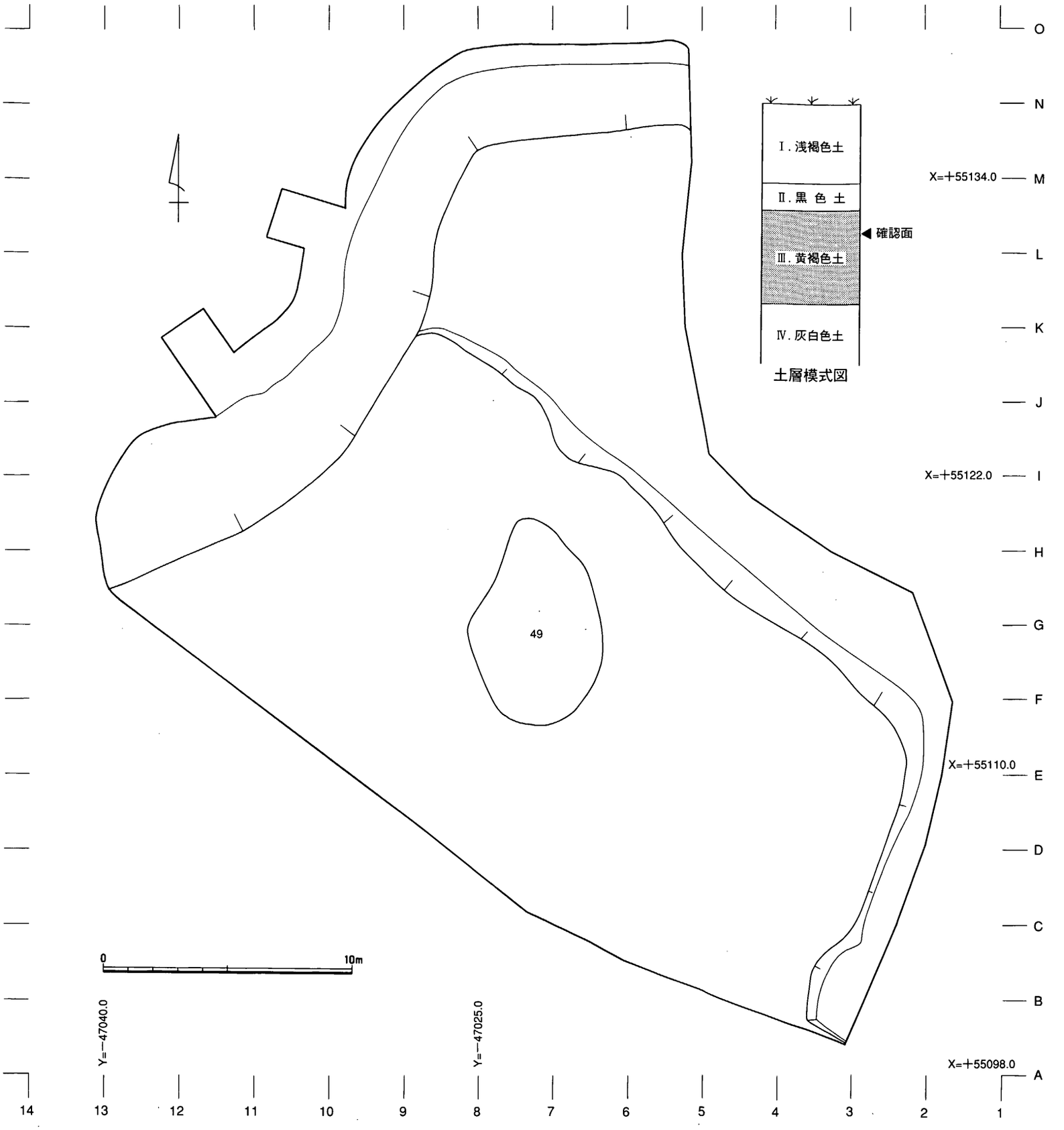
遺構写真は検出時、土層観察、完掘時に撮影し、状況によって遺物出土状況を撮影した。使用フィルムのサイズと種別はブローニがモノクロ・カラーリバーサルを併用し、35㎜がカラーネガ・カラーリバーサルを併用している。

遺構精査は7SX001（１号柱穴列）から始め、精査中に7SX050（畝溝状遺構）よりも7SB001が上にあることが重複関係によって判明した。精査の結果、7SX001は桁行８間、梁行４間を基本とし、さらに二面に廂状の張り出しを持った大規模な柱穴列であることが認識された。その後、６月１日に土坑列（7SK002～018）と7SX050の精査に掛かった。土坑列は配列方向が7SX001の主軸とほぼ同方向を指し、並行することから7SX001に関連するとの認識が得られた。206条に及ぶ畝溝（耕作痕）は多くの遺構と重複し、7SX001と土坑列を除く他の遺構よりも新しいことが判明した。６月５日に古代と近世の土坑の精査を開始した。古代の土坑の一部は坑底に炭化物が大量に含有されていた。また、7SK026は壁面に被熱による赤変が認められたことなどから、古代の土坑は炭化物の含有及び壁の被熱によって三分類した。近世の土坑は多くが7SX050と重複し、すべて7SX050に切られていることから、土坑は近世遺構の中で最も古く位置づけられよう。なお、縄文時代の土坑２基（7SK038・040）はこの段階で検出されており、縄文時代でもより新しいものと推測される。以上の古代から近世の遺構精査は６月15日に終了した。

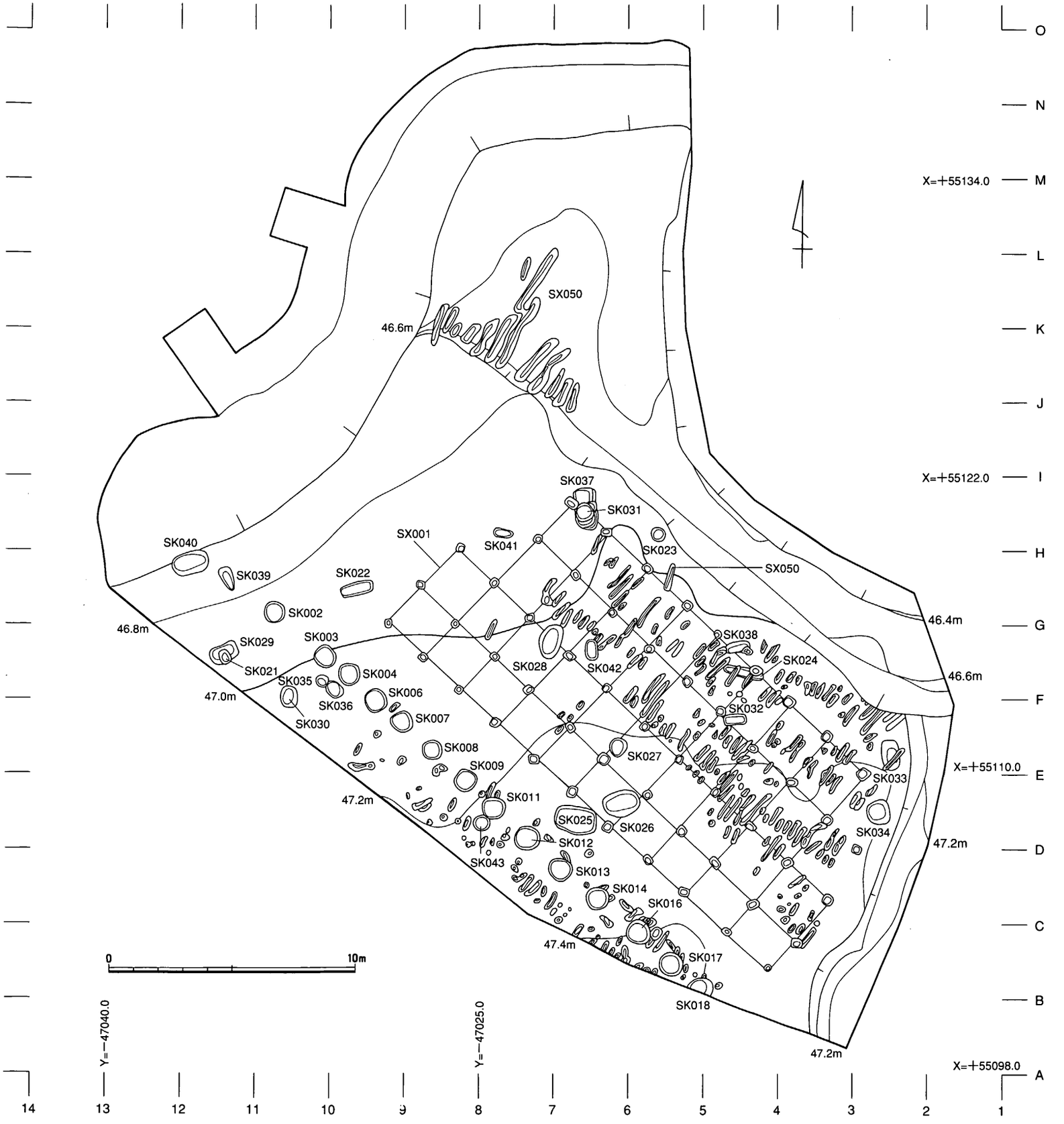
縄文時代の調査は６月15日に調査区西側の斜面部に遺物包含層の有無を確認するトレンチを設定し、掘り下げたが厚さ10～20㎝ほどの表土を取り除くとⅢ層黄褐色土以下の地山が露出しており、包含層は確認されなかった。そこで、西側斜面から北側斜面を全面精査して縄文時代早期の包含層の検出に努めたが、結局斜面部には包含層が残っていないと判明した。続いて６月19日より丘陵上の縄文時代包含層の精査に掛かり、縄文時代の包含層であるⅢ層を調査グリットごとに掘り下げていった。ほぼ全面をおおむね10㎝ほど掘り下げたところ、拳大から人頭大の礫がＦ７区周辺を中心に分布することが確認された。当初この礫集中は縄文時代早期の所産と認識していたが、配石状に集合する箇所にサブトレンチを十字に入れたが竪穴状の掘り込み・炉址・柱穴等は検出されず、この礫分布は本来集積されていたものが



第３図　カヤノ遺跡第７次調査第１面略測図（1/200）



第4図　カヤノ遺跡第7次調査第2面略測図（1/200）



第５図　カヤノ遺跡第７次調査遺構全体図（1/200）

カヤノ遺跡第7次調査 遺構番号台帳

S－番号	遺構番号	種　　別	古 → 新	位　　置
1	7S X001	柱穴列	24・31・32・37→1	B～I 2～9区
2	7S K002	土坑（土坑列）		G10区
3	7S K003	土坑（土坑列）		F9・10区
4	7S K004	土坑（土坑列）		F9区
5				
6	7S K006	土坑（土坑列）		E・F9区
7	7S K007	土坑（土坑列）		E8・9区
8	7S K008	土坑（土坑列）		E8区
9	7S K009	土坑（土坑列）		D・E8区
10				
11	7S K011	土坑（土坑列）	43→50→11	D7区
12	7S K012	土坑（土坑列）		D7区
13	7S K013	土坑（土坑列）		C6・7区
14	7S K014	土坑（土坑列）	50→14	C6区
15				
16	7S K016	土坑（土坑列）	50→16	B5・6区
17	7S K017	土坑（土坑列）	50→17	B5区
18	7S K018	土坑（土坑列）	50→18	B4・5区
19				
20				
21	7S K021	土坑	29→21	F11区
22	7S K022	土坑		G9区
23	7S K023	土坑		H5区
24	7S K024	土坑	24→50→1	F4区
25	7S K025	土坑		D6区
26	7S K026	土坑		D5・6区
27	7S K027	土坑		E6区
28	7S K028	土坑		F6・7区
29	7S K029	土坑	29→21	F11区
30	7S K030	土坑		E・F11区
31	7S K031	土坑	1→37→31	H6区
32	7S K032	土坑	32→50→1	E4区
33	7S K033	土坑	33→50	E2区
34	7S K034	土坑		D2区
35	7S K035	土坑	36と重複	F10区
36	7S K036	土坑	35と重複	F9・10区
37	7S K037	土坑	37→31	H6区
38	7S K038	土坑	38→50	F4区
39	7S K039	土坑		G11区
40	7S K040	土坑		G11・12区
41	7S K041	土坑		H7区
42	7S K042	土坑	42→50	F6区
43	7S K043	土坑	43→11	D7・8区
44				
45				
46				
47				
48				
49	7S X049	礫集中		E～H6～8区
50	7S X050	畝溝状遺構（耕作痕）	近世土坑→50→1	A～K2～10区

散逸した結果と考えられる。出土遺物は縄文時代前期後半の土器・後晩期土器等と石器類が出土している。次に縄文時代早期包含層の精査に掛かったが、調査方法としては３ｍ方眼を利用して調査区南東隅のＡ３区から千鳥格子状に掘り下げて行き、遺物の出土地点を拡張する方法で開始したが、遺物分布が広範囲に及ぶため全面掘削に切り換えて調査を続行した。その結果、縄文時代早期の遺物は調査区東端のＣ２区に遺物集中箇所が認められた。分布範囲はおおむね東半部に分布し、その出土層位はⅢ層下部からⅣ層（白灰褐色土）である。出土遺物は縄文時代早期の押型文土器・無文土器とそれらに伴う石器類が検出された。調査終了にあたっては、航空写真を最後に撮影し、その終了をもって現地調査の完了としている。

参考文献

太宰府市教育委員会 1989『太宰府市の文化財第14集 佐野地区遺跡群Ⅰ』
太宰府市教育委員会 1993『太宰府市の文化財第21集 佐野地区遺跡群Ⅳ』

２．調査の概要

（１）層　序

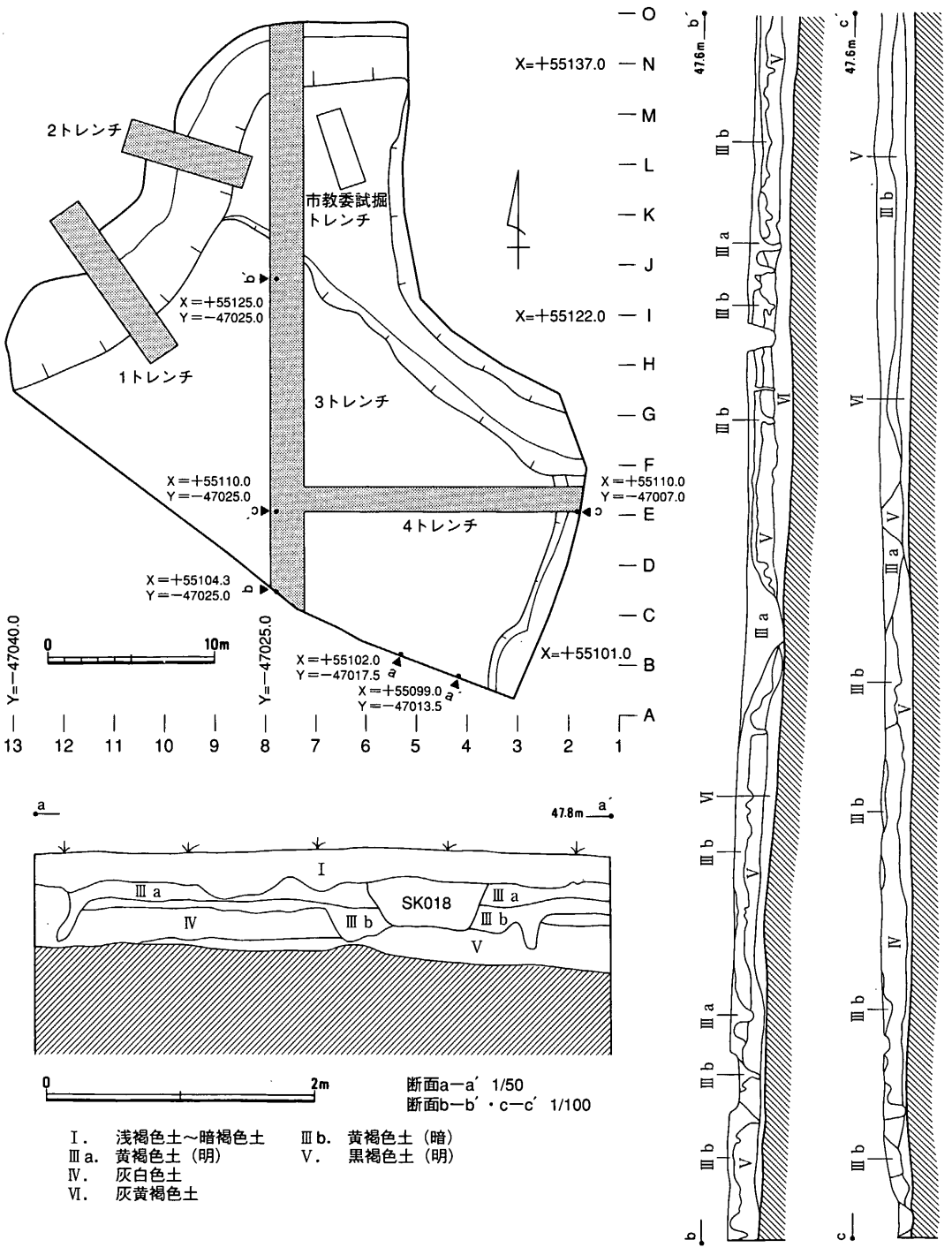
今回の調査区は南から北へ張り出す支丘陵の先端部に位置し、その丘陵の平坦部から斜面部が調査対象となっており、一部谷戸部に調査が及んでいる。そのため本遺跡の基本的な土層堆積は各部位によって異なっている。そこで遺構・遺物が最も多く検出したのは丘陵平坦部であり、丘陵斜面部及び谷戸部からの遺構の検出はなく、遺物もほとんど出土していないことから、主として丘陵部の土層堆積を記述することとする。なお、土層堆積は丘陵先端（北端）の崖線沿いに深掘りを入れ、土層堆積を観察している。

本地点は近世初頭頃に削平地業がなされており、その後に7SX050（畝溝状遺構）が構築され、それ以前の遺構は上部が壊されていると考えられ、古代の包含層である黒色土の堆積が一部にしか認められていない。

以下、各土層の記述を行う。

Ⅰ層　浅褐色土～暗褐色土　１～２㎜ほどの風化花崗岩を含み、締まり・粘性がやや弱い。上下に細分可能で上層が現耕作土、下層が中・近世の遺物包含層と考えられるが、層界の明瞭さに欠ける。層厚は20～60㎝程である。

Ⅱ層　黒色土　１～２㎜ほどの風化花崗岩を含み、締まり・粘性がややある。炭化物を少量含む。古代の遺物包含層。部分的に残存している。



第6図　カヤノ遺跡第7次調査トレンチ配置図（1/400）・土層断面図（1/50・1/100）

Ⅲ層　黄褐色土　2～3㎜ほどの風化花崗岩を多く含み、締まり・粘性があり、乾燥すると堅く締まる。本層はいわゆる黄砂の堆積によって形成された土層と考えられ、色調に違いによって上下2枚に分層が可能である。上層は色調が明るく石英質亜角礫の量がやや少ない。下層は色調がやや暗く石英質亜角礫の量が多い。それぞれ縄文時代中・後期と早・前期の遺物を包含する。また、本層の上面で古代以降の遺構が検出された。層厚は20～40㎝ほどである。

Ⅳ層　白灰褐色土　2～3㎜ほどの風化花崗岩を主体とし、拳大の風化花崗岩の亜円礫も点在する。粘性は基本的に弱いが、乾燥すると堅く締まる。本層は調査区南東部に確認された。本層上部には縄文時代早期の押型文土器が、下部には無文土器を包含する。層厚は20～30㎝ほどである。

Ⅴ層　黒褐色土　2～3㎜ほどの風化花崗岩を含み、締まり・粘性がある。本層から下層は遺構・遺物が検出されていない。層厚は20～30㎝ほどである。

なお、調査区西部では丘陵肩部から谷戸部にかけて2ｍ×10ｍと2ｍ×7ｍのトレンチを2ヶ所に設定している。そのトレンチによると、谷戸部は表土下30㎝で水田粘土層となり、下は湧水で確認できなかったがシルト土壌と考えられる。斜面部は土砂の流出及び掘削によって表土がわずかに被さる程度であり、出土遺物もほとんどなかった。

丘陵上は後世の段切り地業のために2段構造になっており、調査区北半部が1段深く掘り下げられており、Ⅰ層とⅤ層黒褐色土との間の土層が欠落している。そのため、下段はⅠ層の直下がⅤ層となっている。上段は古代以降の遺構検出面を観察すると、C7からH4を結ぶラインの東側と西側で土層堆積が異なっている。露出土は西側がⅢ層上部であるのに対し、東側はⅢ層下部が薄く堆積し所々にⅣ層が露出するといった状況であった。縄文時代遺物包含層の直下にあたるⅤ層面では調査区端のA4区が最も高く、そこから東へはやや急な傾斜となり、北から西へは緩やかに傾斜している。ただし、調査区のほぼ中央のD～F6・7区は周囲に比べて若干高まりとなっており、その高まりを境にその東側にⅣ層灰白色土が堆積している。

（2）縄文時代

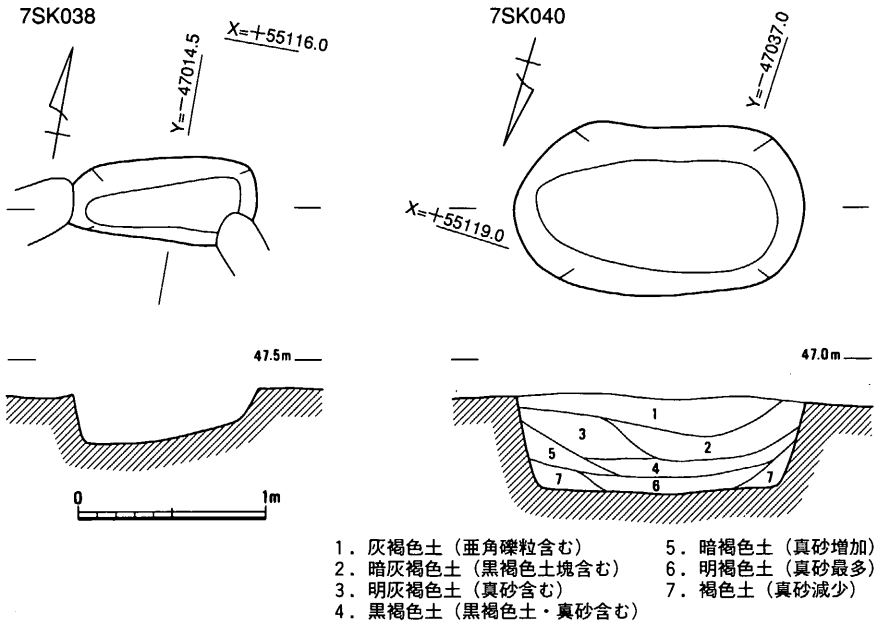
1）土　坑

7SK038（第7図）

本址は調査区西部のF11・12区に位置し、南へ延びる台地尾根筋にあたる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.00m、短軸0.46m、深さ0.36mほどである。主軸方位はN－80°－Eを指す。覆土は7SK038と類似し、暗褐色土を主体とするが、暗灰褐色土・黒褐色土・黄褐色土覆土層が全体にⅢ層と性格が近いために縄文時代に属すると判断した。出土遺物はない。

7SK040（第7図、図版7）

本址は調査区西部のF11・12区に位置し、南へ延びる台地の西側肩部にあたる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.52m、短軸0.89m、深さ0.52mほどである。主軸方位はN－72°－Eを指す。覆土は7SK038と類似し、暗褐色土を主体とするが、暗灰褐色土・黒褐色土・黄褐色土を多く含有している。

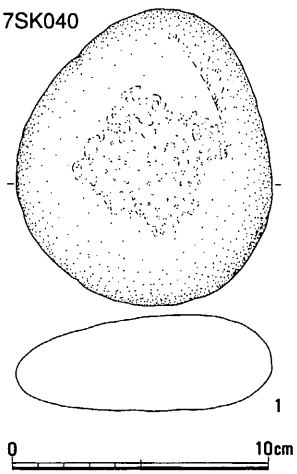


第7図　7SK038・040実測図（1/40）

遺物（第８図、図版16）

本址から出土した遺物は覆土最上層より出土した須恵器の細片１点と１層（灰褐色土）から出土した台石１点であるが、須恵器細片は混入と考えられる。

１は台石である。厚みのある扁平な円礫を素材とする。両面中央に敲打痕が集中する。左端と右下端にも敲打痕が認められる。



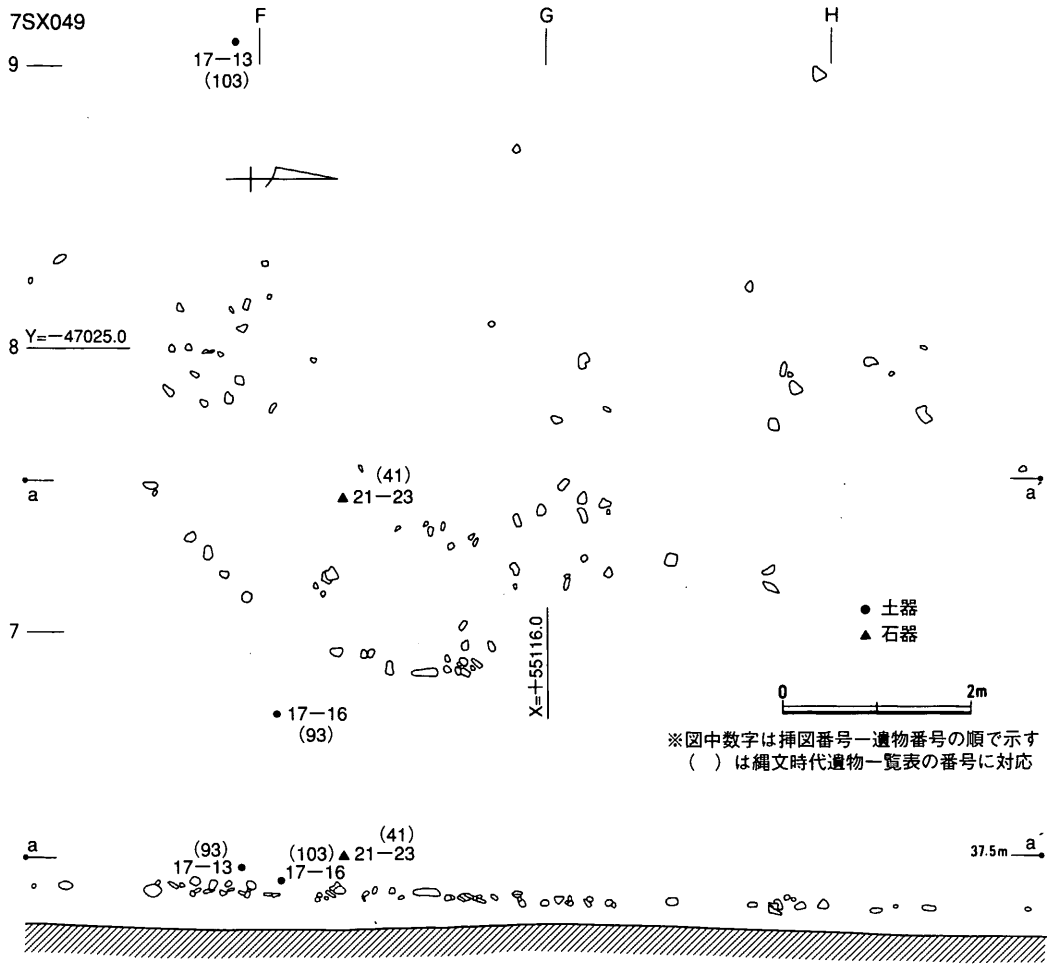
第８図　7SK040出土石器
実測図（1/3）

２）礫集中

7SX049（第９図、図版３・４）

礫は主に調査区の西半部に分布し、東半部には礫が少数見られる程度である。それら礫の出土層位はⅢ層黄褐色土層中にあたる。ただし、西半部の礫分布は全体的に散漫な状態を示しているが、調査区のＥ～Ｈ６～８区にやや多くの礫が集中している。礫は花崗岩の亜角礫が最も多く、次いで亜円礫が多くなっているが、平板な礫も少数見られる。礫の大きさはおおむね10cm以下の小礫であり、最大でも34cmほどである。重量は0.1kg～8.25kgまで測定されているものの、数量的には１kg未満の小礫が大半を占めている。なお、礫は被熱したものも数個認められるが大部分は被熱していない。

最も集礫する調査区のＥ～Ｇ６～８区では10cm～90cmほどの間隔で弧状に並ぶ配列が見られ、また北部と南部では礫十数個のまとまりが認められた。発見当初は配石址と考えていたが、平面的には散漫な分布状態である。礫の垂直分布としては、Ⅴ層の堆積が丘陵の北側先端に向かい下がる傾斜と西側谷戸に向かい下がる傾斜とがあり、各礫は10cm程度の高低差を持ちつつその傾斜に沿って北と西に緩やかに下がった分布をしている。ただし、サブトレンチでの確認によると最も礫の集礫するＤ～Ｅ６・７区はⅤ層黒褐色土上面での高まりが確認されており、さらにこの礫集中より西側と北側には礫の分布が認められるものの、東側と南側には礫分布が極めて少ない。従ってこの礫分布はＥ～Ｇ６～８区に集積していた礫が北側と西側に散逸した結果と考えられる。なお、礫集中の範囲内より出土した遺物としては93（第17図16）、103（第17図13）の縄文時代後・晩期の土器と41（第21図23）の磨石があげられる。しかし、それらの遺物は礫集中の分布レベルよりやや浮いた状態で出土している。



第9図　7SX049（E～H 6～8区部分）実測図（1/80）

3）包含層出土遺物（第10～21図、図版13～18）

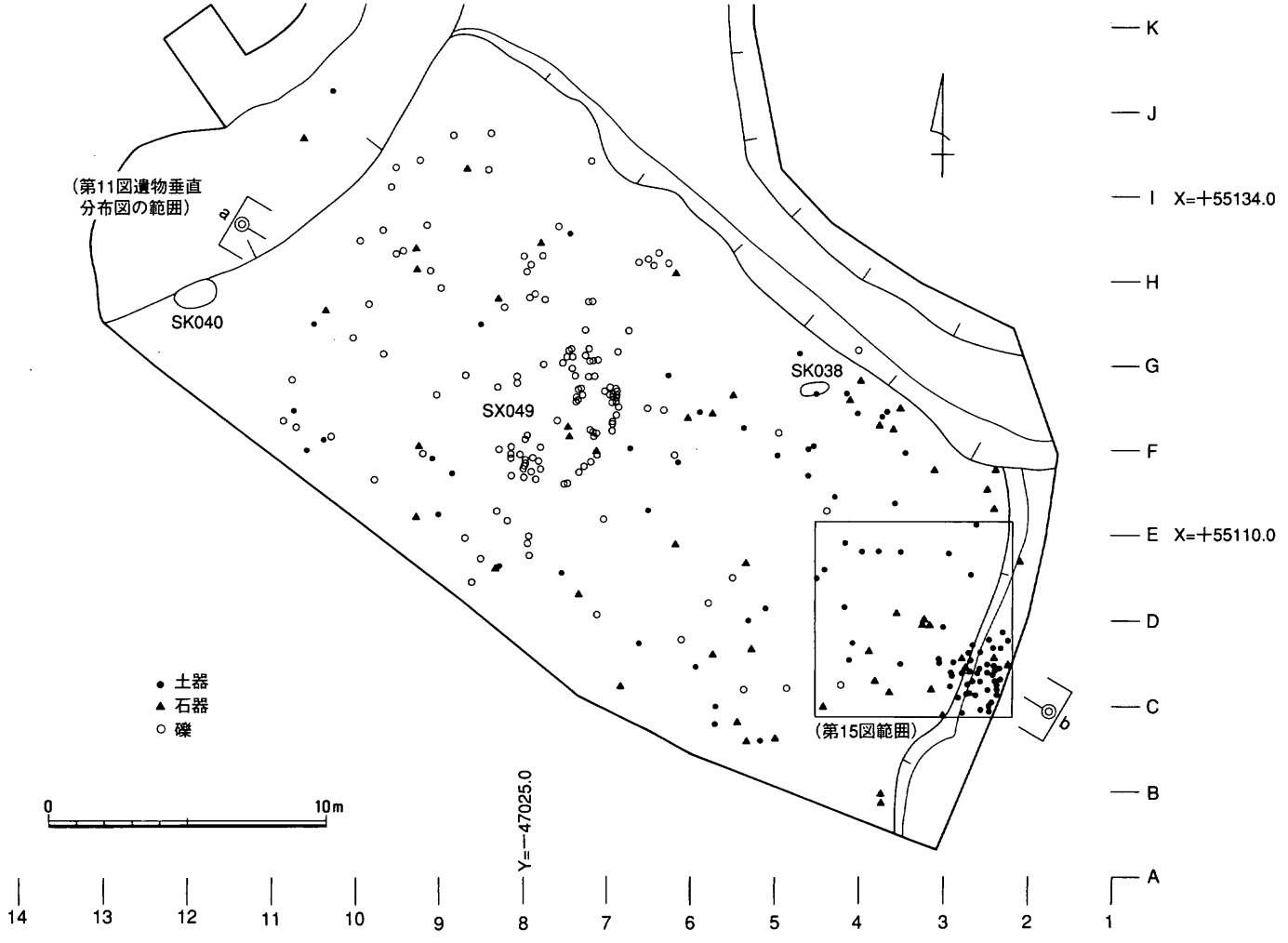
縄文時代早期の遺物包含層の存在は、本調査に先立って行われた市教育委員会の試掘調査の結果及びカヤノ遺跡第1次調査で土坑より押型文土器が出土したことで予想されていた。

調査は表土の除去から開始し、Ⅰ層上部の表土を取り除き、中・近世の遺物包含層であるⅠ層下部の掘削に掛かったが、縄文時代の遺物はすでにこの段階で調査区南部上段において散見されはじめ、Ⅱ層下部～Ⅲ層に入り数が増していった。近世の遺構と古代の遺構はⅡ層の黒色土の堆積がほとんど認められないことからⅢ層上面での遺構確認となり、その検出面に縄文時代の礫が散見され、また古代遺構と近世遺構の覆土中からも縄文時代の遺物が出土するといった状況であった。

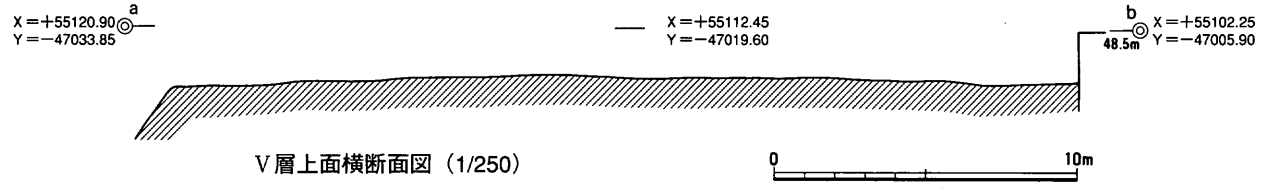
縄文時代の調査は古代以降の遺構調査が完了した後に開始し、まず試掘調査で遺物が出土した西側斜面部に2ｍ×10ｍと2ｍ×7ｍのトレンチを斜面上部から谷戸部へ2本入れて確認を行った。遺物は出土しなかったが、Ⅲ層類似土の堆積がわずかに認められた。そこで西側斜面のⅢ層類似土を全面掘削したが、出土したのは271の黒耀石剝片と274の縄文土器片の2点で、他に土師器・須恵器が混在し、その遺物出土状況よって二次堆積土層と判明した。

縄文時代の遺物は調査区南部上段のほぼ全面に分布することがⅢ層上面の精査段階で確認されたが、掘り下げが進むに従い出土遺物も次第に増えていった。出土遺物の分布は、Ｃ2区に分布の中心を持つ第1群土器（無文土器）、東半部に散在する第2群土器（押型文土器）、中央部東側に散漫に分布する前期後半土器、調査区全面に散在する後晩期土器に分けられる。

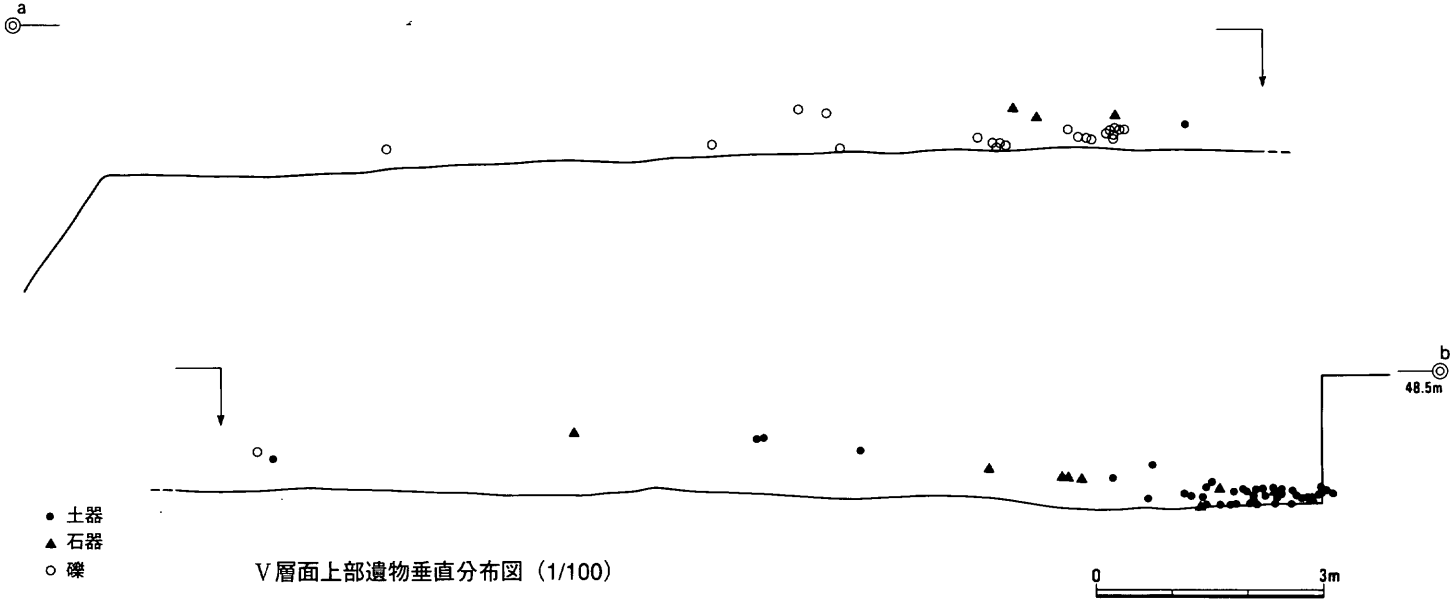
調査区南部上段に分布する縄文時代遺物包含層の調査は地区杭Ａ～Ｋの1～12までの範囲で掘り下げを開始した。Ⅲ層上部の掘り下げは10㎝刻みで行い、おおむね2度の掘り下げでⅢ層下部に達した。ここまでの掘り下げで第4群土器は出土しなくなった。引き続いてⅢ層下部の掘り下げに掛かり、10㎝刻み1～2度でⅣ層またはⅤ層に達し、この段階では第2群の遺物が主体となり、第3群土器も散見された。さらに調査区東側では押型文土器がⅣ層にくい込んでいることから、調査区東側を中心にⅣ層の掘り下げを続けた。その結果、押型文土器はⅣ層の中程で出土しなくなり、それ以下は無文土器だけになった。さらに掘り下げると無文土器はⅤ層では出土せず、無文土器の主体がⅣ層中～下部であることが判明した。礫は調査区ほぼ全面に散在し、中央部のＥ～Ｇ6～8区に当初配石址かと推定したややまとまりがあり、それを7SX049とした。出土層位はⅢ層中である。この礫分布を土器分布に重ねると、おおむね第2・3群土器の分布と重なるとも見られるが、礫の集中部に土器は検出されなかった。第4群土器は礫よりやや浮きぎみに分布している。



第10図　縄文時代遺物分布図（1/250）

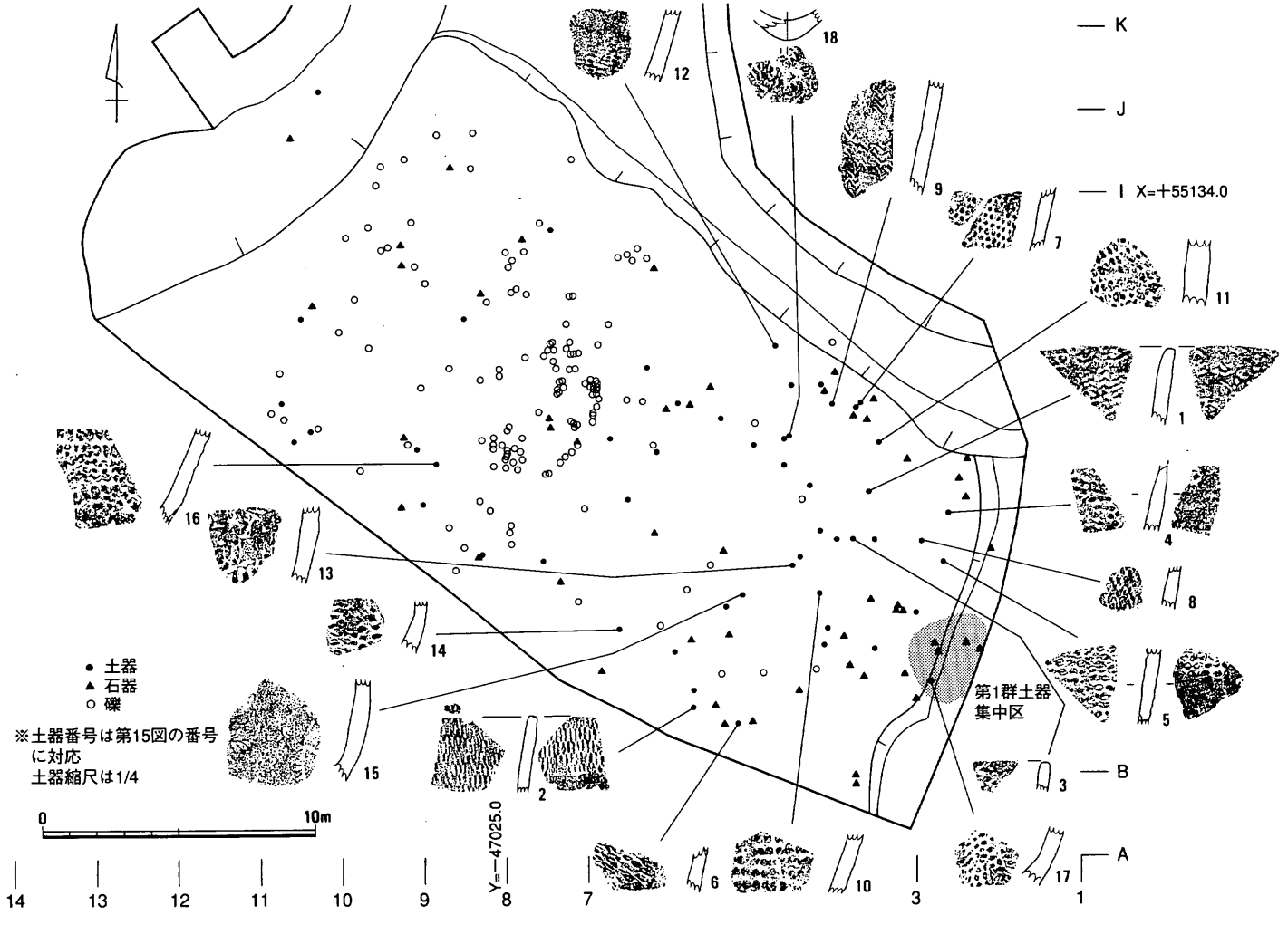


Ⅴ層上面横断面図（1/250）



Ⅴ層面上部遺物垂直分布図（1/100）

第11図　Ⅴ層上面横断面図（1/250）・Ⅴ層面上部縄文時代遺物垂直分布図（1/100）



第12図　縄文時代第１・２群土器平面分布図（1/250）



第13図　縄文時代第３・４群・その他無文土器平面分布図（1/250）

土　器（第14図～第17図、図版13～16）

第１群土器（第14図１～28、図版13）

縄文早期押型文土器包含層の下層より出土した一群の無文土器であり、層位的年代からは押型文土器に先行する時期となる。調査区東側の丘陵端に近いＣ２区を中心として約４ｍ×４ｍの範囲内に集中的に出土した（第11・12・15図参照）。

第15図の垂直分布図に見るように出土層位はⅣ層灰白色土の中～下部にあたるが、直下のⅤ層との層差は明確でありこのⅤ層に混入することはない。この集中出土部分は台地東側縁辺肩部にあたり、より東側の分布範囲については傾斜地形により包含層の連続を確認することはできなかったが、ある程度包含層が失われてしまった可能性がある。

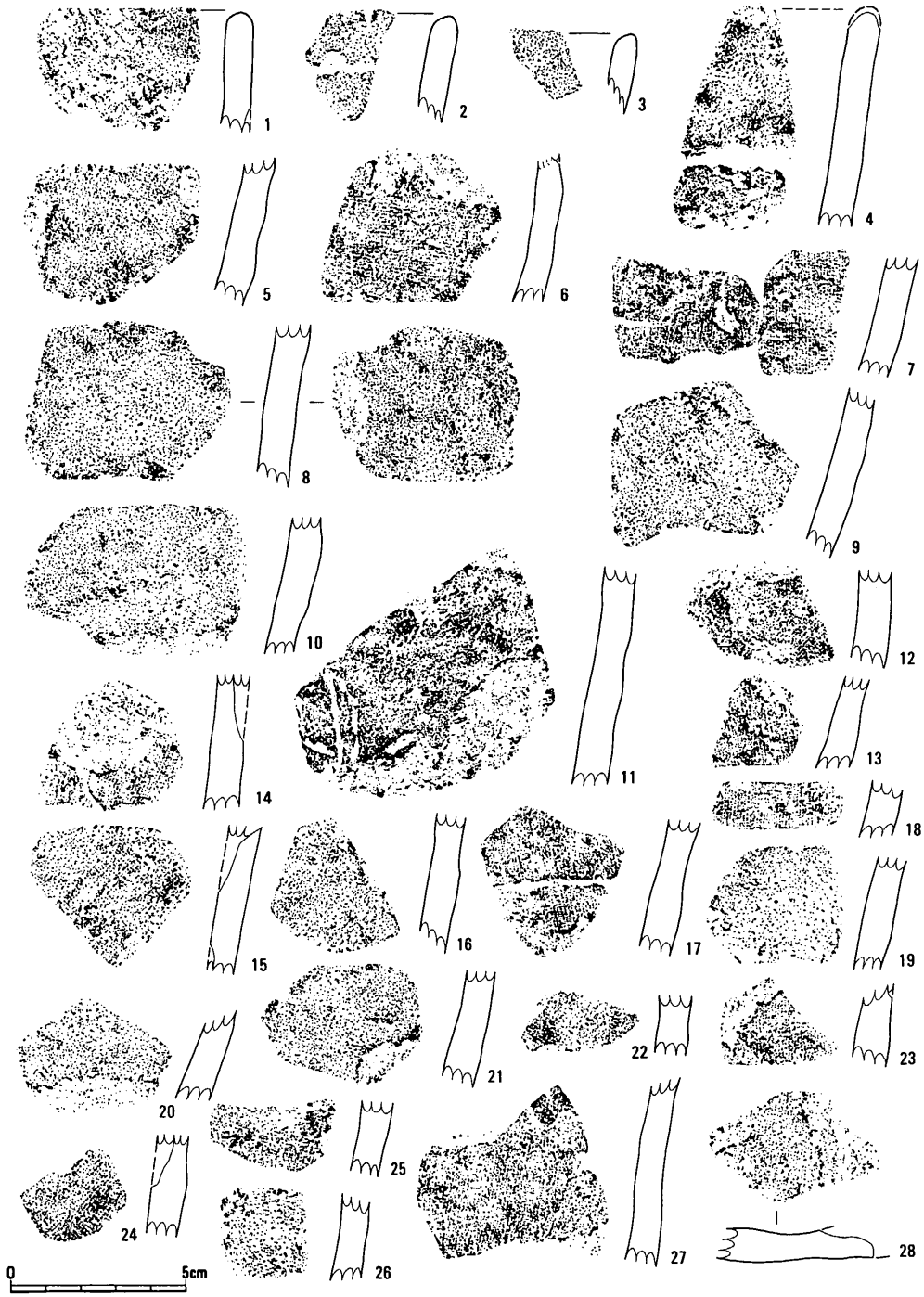
次時期となる押型文土器はⅣ層上～中部に出土しており、垂直分布～投影図では層位的に一部Ⅳ層中部において無文土器と接する観はあるが主体包含層では明らかに上下差を見い出せる。さらに第12図の平面分布上では両者の分布域は異なり、押型文土器は台地東側に広く分布している。無文土器出土範囲ではわずか１片の押型文土器が出土しているが、Ⅳ層上部からの出土であり、これらの点をふまえて無文土器群が押型文土器の下層に属することが確認された。

第１群とした無文土器群は、胎土、色調、整形手法において同一の類としてとらえられる土器群であり、同一個体と思われる破片も存在する。しかしいずれも小破片のうえに接合率が低く、かつ無文土器という類似性の強い土器であるために個体分類を行ったが明確にはしえなかった。一応口縁部３個体は別個体であり、胴部破片の胎土、器面整形の差を加え全体で４～５個体程度の個体差があるものと考えられる。

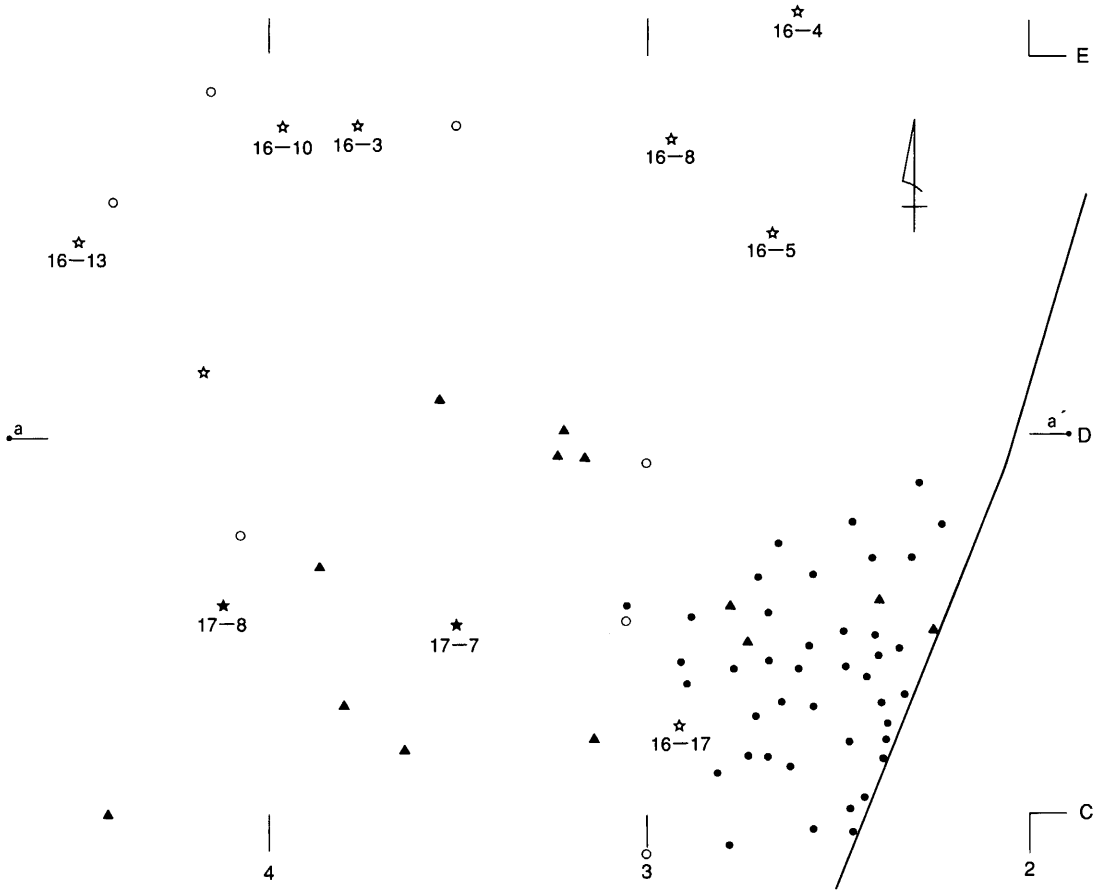
この類似性の強い無文土器群の全体的特徴を述べれば、口縁部断面形態は丸みを持ち、直口ないしはわずかに内、外反する形態となり、胴部がわずかに膨れる器形を持つ単純な深鉢形を呈する。器面には文様は施されず、輪積み（断面では確認できない）あるいは貼り付けた粘土を指頭を用いて横位、斜位さらには部分的に縦位になでつけるように整形を行っている。そのため器内、外面には極めて浅い凹線状の凹みとゆるい凸部が見られ、観察のために指をもって器面をなでると指頭幅の浅い凹凸を確認することができる。器面調整はこのほかに部分的に細い条線状の痕跡が見られ、ヘラ状の器具を併用している可能性がある。

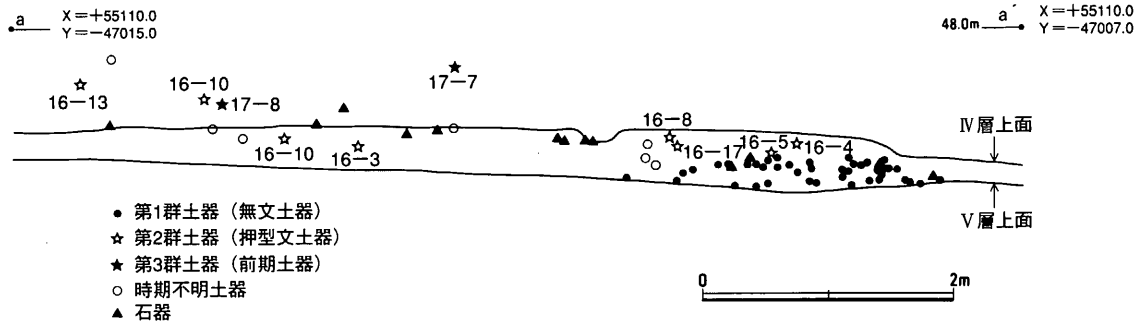
底部破片が出土していないために底部形態は不明であるが、唯一第13図28の破片が平底の可能性を示しており、大いに検討を要するところである。

器厚は８㎜から10㎜までの範囲であり、色調は内外面が灰白色ないし淡褐色を呈し、部分的に灰黒色が見られる。胎土中心部は黒褐色となり、サンドイッチ状の断面色となる。焼成は堅く良好であるが器面が層理的に剝がれる特徴が見られる。



第14図　縄文時代第１群土器拓本図（1/2）





● 第1群土器（無文土器）
☆ 第2群土器（押型文土器）
★ 第3群土器（前期土器）
○ 時期不明土器
▲ 石器

※図中数字は挿図番号ー土器番号の順で示す

第15図　C～E 2～4区縄文時代遺物平面・垂直分布図（1/60）

胎土中には長石、石英の粒子が多く含まれ、比較的緻密な胎土といえるがそれに加え個体によっては黒色の角閃石が目立つものがある。なお2点ほどの器面には繊維状あるいは獣毛状と表現される細い線状の混入物が認められる。以下破片細部について説明を加える。

口縁部破片（第14図1～4、図版13）

1は口縁部破片であり、平縁を呈する。口縁部断面形態は丸く作られ、直口ないしは多少内傾する形態となる。内面には指頭整形の凹凸が認められる。器厚は8㎜と比較的薄く、外面の一部が剝離している。

2は口縁部の小破片であり、口唇部内側に丸みを持つ。ゆるく外反する器形と考えられる。器厚は8㎜と比較的薄い。

3は口縁部の小破片であり、2と同様に口唇部内側に丸みを持つ。直口ないし内傾する口縁部と考えられる。外面には縦方向の指頭整形痕が認められる。

4は口縁部付近の破片と考えられ、頭頂部の表皮が剝がれ、丸く整形された粘土芯があらわれている。口縁部とすればゆるく外反する器形を呈する。外面には縦方向の指頭整形痕が認められ、胎土には長石、石英粒が多く含まれる。なお外面には細長い繊維状の混入物が見られる。

胴部破片（第14図5～27、図版13）

5は外面に浅い2条の凹線状整形痕が残される。6はゆるく膨れる胴部破片であり、外面には浅い指頭状凹凸が残され、内面にも指頭状の凹みと横位の細い条線状調整痕が見られる。7は内外面に浅い凹凸が残され、細い繊維状の混入痕が認められる。

8は破片上端に向かって器厚を増す。断面観察では外面に粘土を貼り加えた状況が認められる。整形上の膨らみと見られるが、外反する口縁部付近の可能性もある。なお内面には特に指頭による浅い凹凸が顕著に見られるが拓本では表出が難しい。9は浅い指頭状凹凸に加え外面に斜め、内面に斜め、横方向の調整痕が認められる。

10は多少膨らみを持った胴下半部の破片であるが、上下逆に見れば内傾する胴上部と見ることもできる。外面には浅い凹線状ともいえる指頭状整形痕が横位に施され、内面にも指頭状凹みが残される。

11～14は色調が灰黒色を呈し、同一個体の可能性もある。11は出土無文土器中の最大破片であり、ゆるくひらく胴下部と考えられる。外面には指頭状の浅い凹凸が見られそのうえで横位に整形痕が見られる。内面は横、斜めの整形痕が認められるが、器面はていねいにミガキ調整されている。なお外面左端に見られる沈線は文様ではなく器面についたキズである。器厚は10㎜を測り、胴部破片の平均的な厚さである。12は内外面ともに平滑であり、13、14は内外面に浅い凹凸が認められる。

15は内面が大きく剝離しているが、破片の範囲ではほとんど曲率を持たず、大形土器あるいは方形などの器形を考慮しなければならない。外面には幅1㎝前後の浅いヘラ状施文具を引いたような整形痕が斜位に認められ細い条痕が見られる。

16の外面には貼り付けた粘土の重なりが認められ横位に低い段を形成する。内面には凹線状の横位整形痕が見られる。17は灰白色の色調を持ち、外面には浅い凹凸が見られる。18の器面は17と類似し平滑となるが、内面に獣毛を思わせる混入痕が認められる。

19は外面のみ横位に整形痕が見られ、内面は平滑である。20、21は内外面に指頭状凹凸が認められ、21の内面は斜位の凹線整形痕が見られる。

22～26は上記無文土器群の部分小破片であり、22は指頭痕が両面に残る。23～25は外面に横位の整形痕が見られ、24の内面には極細の線条痕が部分的に調整痕として見られる。26は両面とも平滑に整形される。

27は胴下部と考えられ、唯一底部に近い破片である。下端断面部には輪積みの跡と思われる痕跡を示しており、この製作法からは平底形態が支持される。破片下からほぼ垂直に立ちあがり上端に向かってひらく底部形態が推定される。外面には凹凸が認められる。

底部破片？(第14図28、図版13)

28は前出の15と同様に破片の範囲ではほとんど曲率が見られず、平板状を呈する。内外面には指頭状凹凸が残され、特に外面にはコブ状の低隆起が残される。本破片はその平板状の器形から考えて、平底の底部破片の可能性を示す意味をもって図示したが、器厚が9㎜という他の胴部破片と変わらない厚さであるところがなお検討を要すところである。

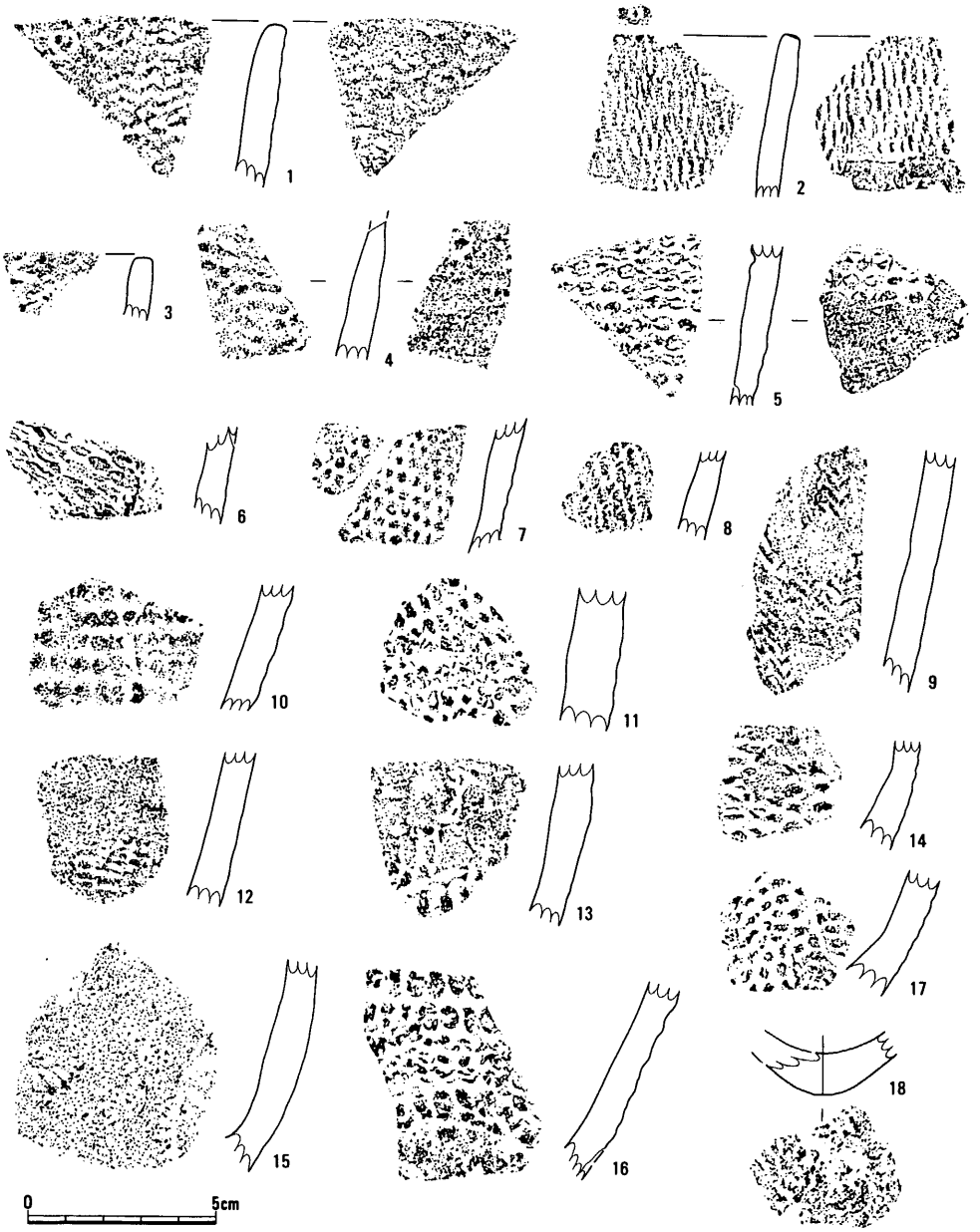
第2群土器（第16図1～18、図版14)

縄文早期押型文土器群に属するものを本群とした。

押型文土器は総点数18片と出土量は少なく、第12図の平面分布に見るように調査区の東側半分に散在して分布するが、D～F 2～4区付近にやや集中する状況を示す。前述のように、Ⅳ層下部に出土する第1群土器とは分布が異なっている。この第2群土器を包含する土層はⅢ層黄褐色土の中～下部からⅣ層上部までであり、垂直分布においても下層の第1群土器との層位差が確認される。押型文土器は第16図に示したものですべてであり、口縁部破片5点、胴部破片9点、底部破片4点の計18点となる。

押型文土器の全体的な様相としては、同一個体が少なく、楕円文が主体となるが押型文の粒形に各種の差が認められる。いずれも縦位あるいは横位、斜位の密接施文を特徴とし、底部付近を除いて無文帯は形成されない。口縁部内外面においては原体条痕その他の文様は施されない。また底部は尖底形態を有しあまり鋭角とはならない。

胎土は砂粒が多く含まれ、特に長石、石英の混入が顕著である。焼成は比較的堅いが、砂



第16図　縄文時代第２群土器拓本図（1/2）

粒の多いものは脆い。色調は口縁部付近が黒褐色を呈し、胴部は赤褐色を呈するものが多い。器厚は7㎜から9㎜までのものが大部分であり、第16図11のみ12㎜と厚く、他の破片と比べて異質である。

これらの押型文分布域中には無文土器の共伴状況は見られず、その組成中には含まれないものといえよう。

以下破片細部について説明を加える。

口縁部破片（第16図1～5）

1は外反する口縁部形態を持ち、内外面ともに山形文を横位に密接施文する。なお口唇上には施文されない。器厚は8㎜。

2は外反する口縁部形態を持ち、内外面ともに細身の楕円文が縦位に施文される。内面は口縁から3.5㎝の幅で施文される。口唇上にも同一施文具により外面と同一方向に回転施文される。器厚は7㎜。

3は直口する口縁部小破片である。外面に楕円文が横位施文され、口唇上、内面への施文はみられない。器厚は6㎜と薄手である。

4は口縁部に近い破片であり、大きく外反する器形を持つ。口縁端は欠損しているが、内外面ともに楕円文が横位施文される。内面への施文幅は2.3㎝を残し以下無文となる。口唇部に近い部分では器厚7㎜、下端では9㎜を測り、口縁に向かって薄くなる断面形態を持つ。

5は口縁部に近い破片であり外反する形態を持つ。内外面ともに楕円文が横位施文される。内面の施文幅は1.5㎝を残し以下無文となる。器厚7㎜。

胴部破片（第16図6～14）

6、7は楕円文が横位に施文され、8は楕円文が縦位に施文される。

9はくずれた山形文を横位に密接施文する。内面には整形痕かと思われる凹線状の凹みが横位に認められる。器厚9㎜。

10は楕円文が横位に、11は楕円文が斜位に施され、11は器厚が12㎜と厚手の土器であり、他の破片との差異が大きい。

12は胴下部破片であり、楕円文が破片下部に横位施文される。破片上部の施文は不鮮明であり、弱い回転施文による部分的に生じた無文部の観がある。13も胴下部破片であり下端部に楕円文が横位施文され、上端部は浅く施文が行われたために不鮮明に見える。なお刺突痕のように見える部分はキズ跡である。

14は胴下部破片であり丸みを持って底部に移行する形態となる。文様は楕円文が横位施文される。

底部破片（第16図15～18）

15は丸底に近い尖底形態を有し、拓本では表出できないがわずかに楕円文が施文される。器厚は平均して11㎜を測り底部近くでも変化しない。また本例は胎土中に長石、石英粒の混入が著しく他の破片との差異が大きい。

16はやや大粒の、17はやや小粒の楕円文が横位施文され、17は底部先端近くまでの施文が見られる。

18は尖底部であり、丸みを持った尖底形態となる。本例は尖底先端まで楕円文が横位施文される。

第３群土器（第17図１～８、図版15）

縄文前期後半期に属すると考えられる沈線文、刺突文の施される土器を本群とした。総点数は８点であり出土分布は調査区の中央部東側に散漫に検出され、１点のみ西側縁辺部にも見られる。出土層位は第15図の第１、２群土器重複部で見るようにⅢ層中より出土しており、資料数は少ないが第１、２群より上層に包含される。以下破片細部について説明を加える。

１は頸部付近と考えられる小破片であり、両端が尖る細い半截竹管状施文具により左から右へと押し引き文が施される。施文具の幅は２㎜と細く、平行して２条が認められる。器厚は４㎜と極めて薄く小形土器であったことが推定される。色調は外面が淡褐色、内面は暗灰色を呈する。

２は内湾する器形の胴上部付近かと考えられるが、外反する口縁部付近と見ることもできる。文様は低い隆帯が縦に垂下し、隆帯上及び隆帯をはさんで両側に５条の浅い並行沈線が引かれ、沈線間に１列の刺突文が施文される。器厚８㎜、色調は黄褐色を呈する。

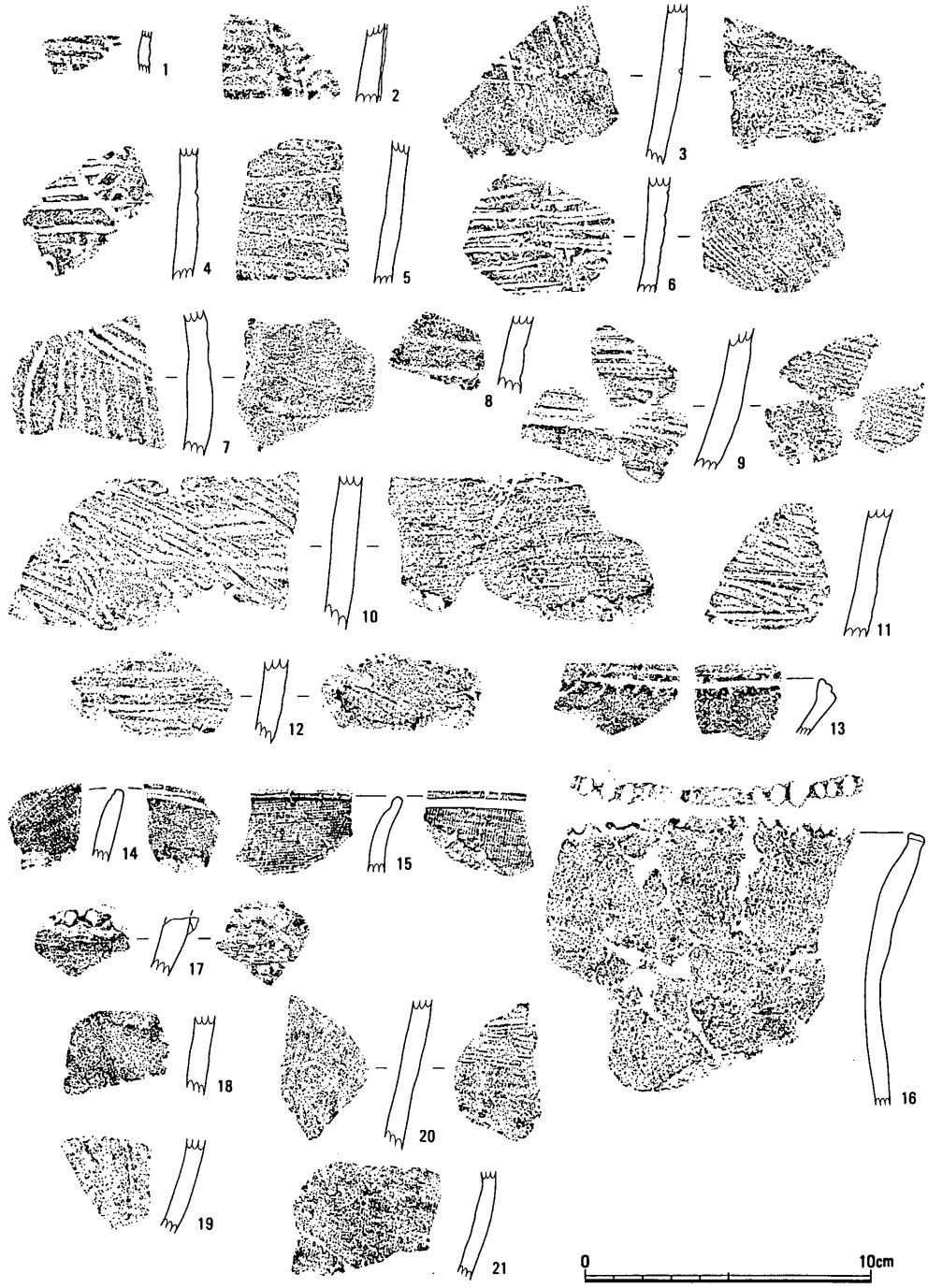
３は破片上部に縦位の浅い条線文が施され、条線文の下端を画するように三角形を呈する刺突文と、左端にわずかに２条の沈線文が残されている。刺突列以下は無文となる。内面には細く浅い条線が横位に認められる。色調は黒褐色を呈する。

４は５条の粗雑な横位沈線文が施され、上端と下端の沈線間に円形及び斜めの列点文が施される。色調は黒褐色を呈する。

５は屈曲の少ない胴部破片であり、細く浅い粗雑な横位沈線文が間隔をあけて５条認められる。６は粗い沈線が横位に施文され、並行短沈線文の粗雑な変化と見られる。内面には斜め方向に条線状の調整痕が見られる。

７は内湾する胴上部と考えられ、文様は斜め方向と縦方向の浅く雑な沈線文が施される。色調は赤褐色を呈し、胎土には角閃石の混入が目立つ。８は７と類似する胎土、色調を持ち、浅い斜め方向の沈線文が認められる。７と同一個体の可能性がある。

第４群土器（第17図９～17、図版15・16）



第17図　縄文時代第３・４群土器拓本図（2/5）

縄文後、晩期に属する土器類を本群とした。無文精製鉢類と二枚貝条痕文及び無文の深鉢、そして刻目突帯文の施される1点があり、条痕文深鉢については明確な所属時期が確定できなかった。出土総数は17点であり調査区全体に散漫に出土しているが、わずかに調査区西側のE・F9・10区付近に条痕文と無文鉢類が近接して出土している。また調査区中央部Ⅲ層中に発見された礫分布地点においては、無文深鉢の大形破片が出土しており、丘陵西側斜面にかけてはⅢ層のおそらく上部に後、晩期の面があったと考えることができる。

以下破片細部について説明を加える。

9～12は二枚貝による深い条痕文が施される。10は比較的大形破片であり、多少膨らみを持つ胴部形態を呈する。条痕は横位に施された上から斜位にも施される。内面は浅いヘラ状の調整痕が横位に施される。色調は褐色を呈し胎土には長石、石英粒が多く混入する。

9は10と同一個体の可能性があるが、やや膨らむ器形を持ち、内面の調整痕は多少細い。

11はわずかに屈曲する器形を持ち、外面に横位、斜位の条痕文が施される。本例も胎土に長石、石英粒を多く含む。

12は9、10と出土地点が近いが別個体と考えられ、類似する条痕文が横位施文される。

13～15は無文精製鉢類である。

13は2点の破片資料であり接合しないが同一個体と考えられる。口縁部はくの字状を呈し2条の沈線が施される。器厚は5㎜と薄い。後期後半に属すと考えられる。

14は口縁裏に沈線が1条施され波状口縁を呈する。内外面ともに器面が研磨されている。晩期前半に属すと考えられる。色調は暗褐色を呈す。

15は強く外反する口縁部形態を有し、口縁裏に1条の沈線が施される。内外面ともに器面が研磨されている。晩期中～後半に属すと考えられる。色調は赤褐色を呈す。

16は口縁部が外反し胴部で膨らむ器形を持つ無文深鉢である。口唇上に丸棒状施文具による刻目が施される。外面は特に研磨されないがていねいに器面調整されており、内面には横位の擦痕状整形痕が認められる。胎土には細かい砂粒状の長石、石英の混入が目立つ。色調は赤褐色を呈す。器形及び口唇上の刻目の手法から晩期中～後半に属すと考えられる。

17は小破片であるが刻目突帯文が施される。無文部は研磨されており、内面は横位の整形痕が見られる。器厚は10㎜を測り、色調は黒褐色、胎土には長石、石英の混入が見られる。破片の屈曲から頸部の突帯かと考えられる。晩期終末期に属すと考えられる。

その他の無文土器（第17図18～21、図版16）

帰属時期不明の無文土器が4点出土している。

18は灰褐色を呈し、内外面が平滑に調整される。胎土には角閃石の混入が顕著であり、第3群土器の胎土と類似する。出土位置が東半部であることを含め第3群の時期と推定される。

19は鋭い沈線が縦に1条認められ下端には横位の沈線がわずかに残される。文様構成は不明であるが器厚が6㎜と薄く内面が平滑に研磨されている手法より、後期に属す可能性がある。色調は褐色を呈す。

20は胴部に膨らみを持つ形態を持ち、内面には指頭による調整痕が認められる。器厚は6㎜と薄く色調は黒褐色を呈する。所属時期は不明。

21は外面が平滑に調整され、内面には細い条痕文が部分的に認められる。色調は赤褐色を呈す。後期に属す可能性がある。

石　器（第18～21図、図版5・16～18）

包含層からは計61点の石器が出土した。その内訳は石鏃8点、石匙2点、二次加工がある剝片2点、使用痕がある剝片7点、礫器1点、磨石4点、石皿1点、石核2点、剝片34点（黒曜石24点、安山岩10点）である。

これらは縄文土器破片と同じくⅢ・Ⅳ層から出土し、その平面分布には出土層位ごとに偏りが認められる。Ⅳ層中～下部の石器は調査区東側C2区の無文土器集中から、使用痕がある剝片1点（17）、剝片3点が出土した。Ⅳ層上部の石器は調査区東側E2・F3区付近とC3区付近にやや集中して出土し、Ⅲ層下部の石器は調査区中央部から調査区南壁にかけて散漫な状態で出土した。これらは押型文土器分布と一致する。Ⅲ層上部の石器は調査区西側から中央部、南東部にかけて出土し、最も散在した分布状態となる。

本石器群は時間幅を持つが、主体時期は出土状態と石鏃や石匙の形態的特徴から縄文時代早期・前期と考えられる。また、磨石・石皿以外の石器類・剝片の石材は黒曜石と安山岩に限られ、黒曜石が占める割合は石器類約84％、剝片約71％、全体で75.5％となり、圧倒的に漆黒色の黒曜石が多い。最下層の無文土器に伴う4点の剝片類が黒曜石・安山岩とも2点ずつとなるほかは黒曜石が主体となる石材のあり方に出土層位による違いは認められない。

以下に、剝片以外の石器をすべて図示し、分類ごとに説明を加える。なお、各石器の出土層位・石材・重量は、縄文時代包含層遺物一覧表（34～39頁）に記してある。

石　鏃（1～8）

1～6・8は凹基無茎石鏃である。いずれも丁寧な二次加工によって成形される。1は脚部末端が尖り、細身の両側縁はやや内湾し、その先端部は屈折する。8は末端が尖る脚部破片である。2・3・5は脚部末端が角張り、4も同様な形状の脚部を持っていたと考えられる。3は長脚であるが、一方は短い。7は平基無茎石鏃である。二次加工の度合いは少なく、裏面に広く主要剝離面が残されたいわゆる剝片鏃となる。

石　匙（9・10）

9は横形の石匙である。横長剝片を素材とし、全縁辺に両面の二次加工が施される。裏面に主要剝離面、正面にそれと同一方向の打撃によるネガティブな1面の剝離面が広く残る。

10は縦形の石匙である。縦形剝片を素材とし、両側縁抉り部に両面、右側縁に片面の二次加工が施される。素材剝片は自然面を打面とし、左側縁は素材のエッジのままで、部分的に使用痕状の微細な剝離痕が認められる。

二次加工がある剝片（11・12）

11は下端に片面の二次加工が施された薄い剝片である。刃部は直状を呈する。12は左側縁と下端に両面の二次加工が施された厚みのある剝片である。下端刃部は弱く抉れる。いずれも正面には原礫面が残存する。

使用痕がある剝片（13～19）

13～19は縦長あるいは横長剝片の縁辺に微細な剝離痕が認められる剝片である。ここでは1㎜以下の微細剝離が一定の範囲に連続するものを使用痕がある剝片とし、単発的な微細剝離は含めていない。13～16は錐状を呈する縁辺、17～19は直状あるいは湾曲する縁辺に微細剝離がある。13・14以外の正面には原礫面が残存し、18・19はこれを打面とする。13・14の打面は剝離面で、15は点打面となる。13・15・18・19は主要剝離面と同一方向の打撃によるネガティブな剝離面を正面に持つ縦長剝片である。

石　核（20・21）

20は3方向の剝片剝離が認められる石核である。裏面全体に原礫面が残る。上下の打面はこの原礫面で、もう一方の打面は残っていない。21は二方向の剝片剝離が認められる石核である。右側面全面と正面の一部、上面の約半分に原礫面が残る。上面は打面調整剝離が行われるが、残された平坦な原礫面も打面となる。下位方向からの打面は残っていない。いずれの石核も、連続する縦長剝片の作出は認められない。この2点は調査区東側F3区Ⅳ層上部から約50㎝の間隔を置いて出土した。

礫　器（22）

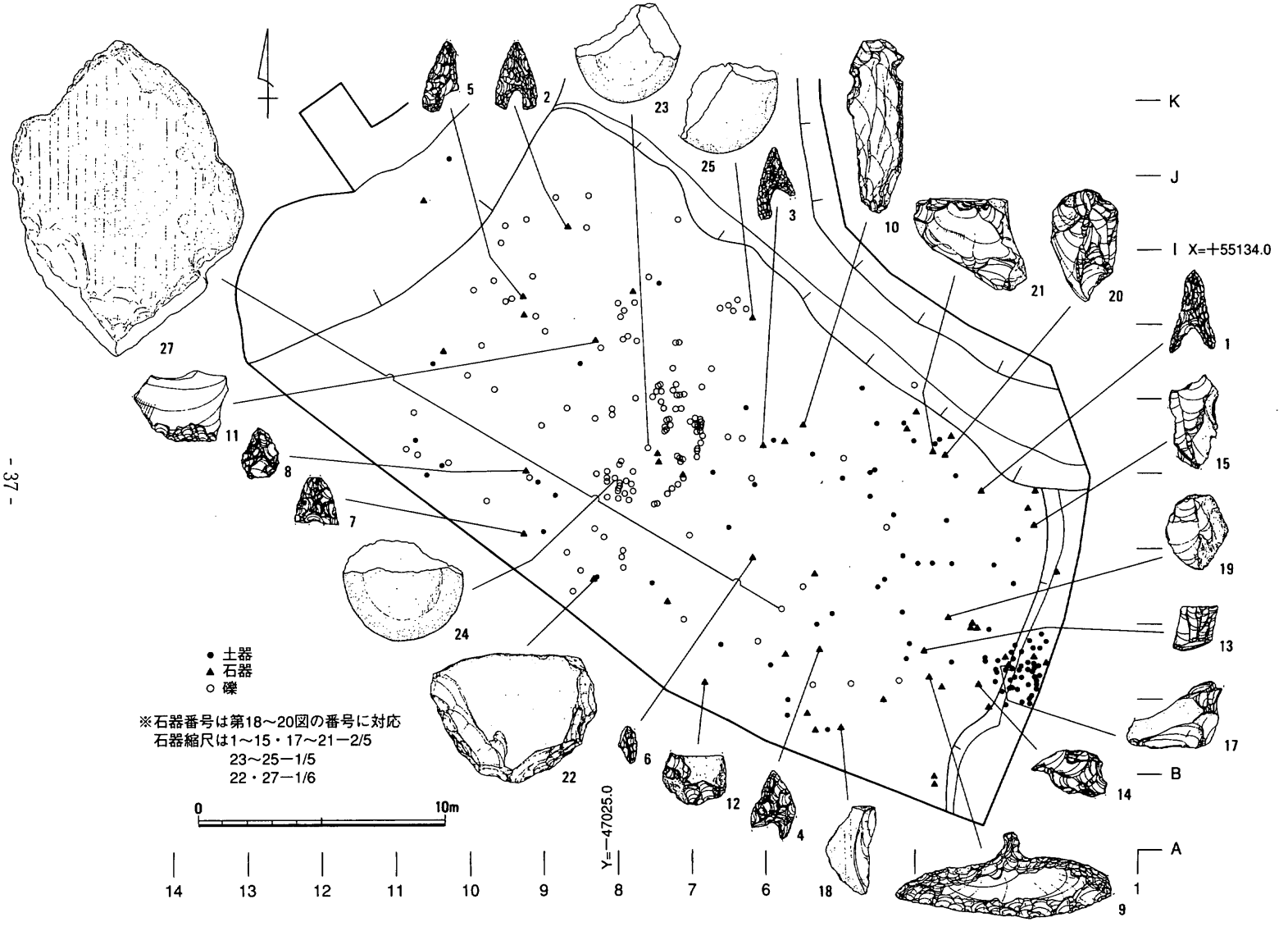
22は横形の礫器である。扁平な亜角礫を素材とする。刃部は両面加工で、上辺以外の縁辺に作出される。

磨　石（23～26）

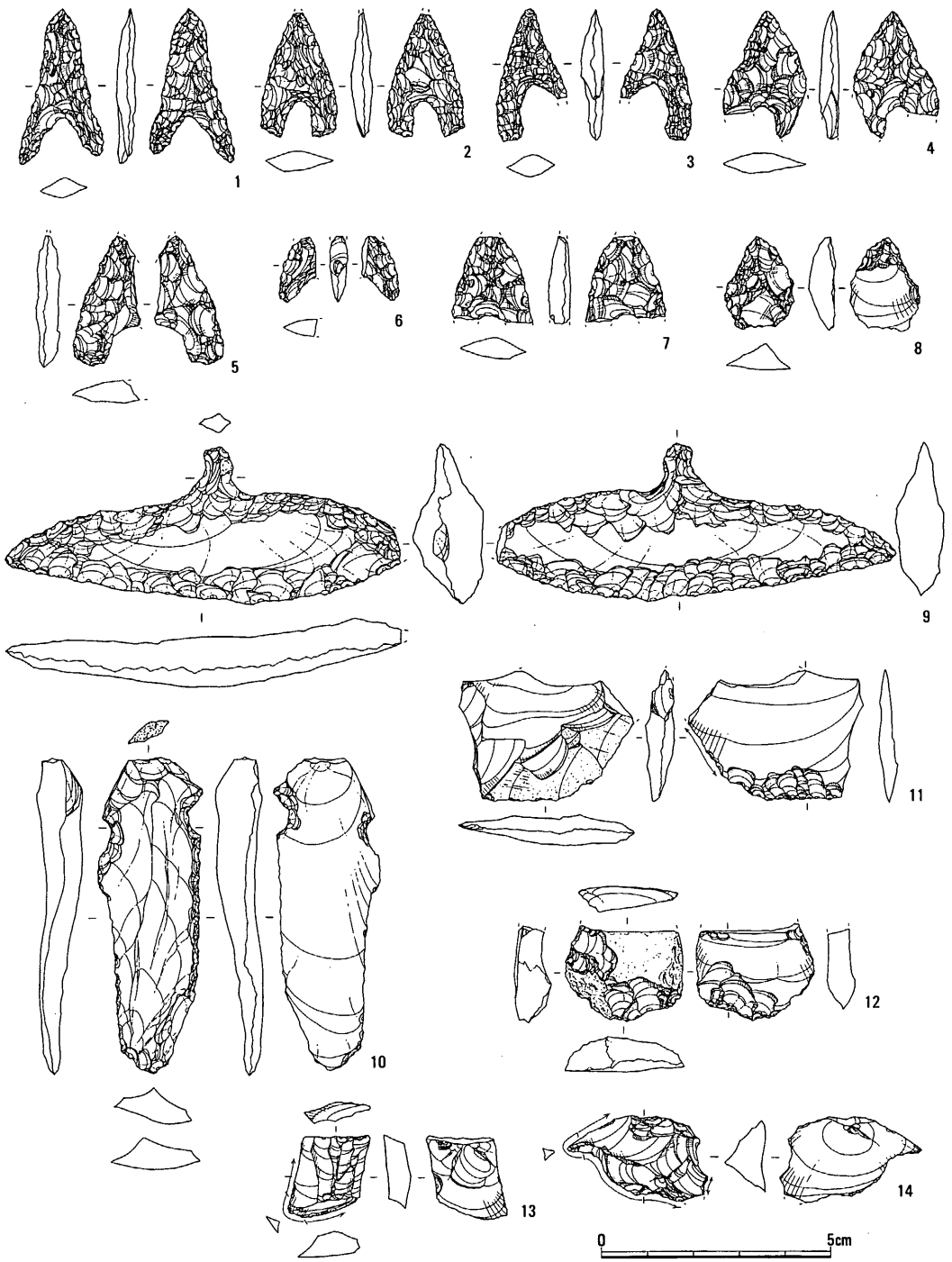
23・24は面取り状の平坦面が見られる磨石である。23は両面、24は正面に平坦面がある。この平坦面は使用に伴うものと考えられる。25・26は自然礫のまま使用された磨石である。

石　皿（27）

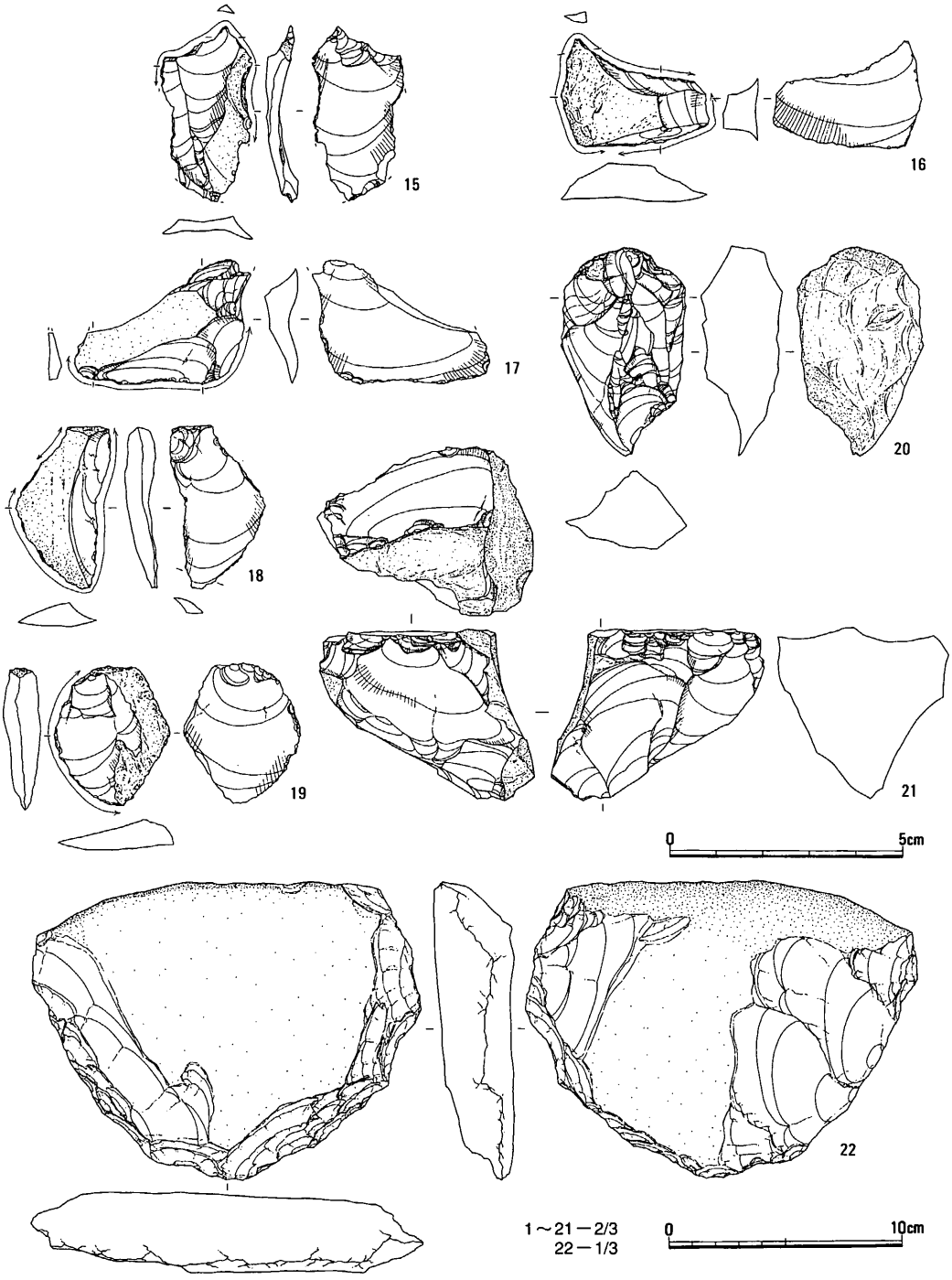
27は石皿である。扁平礫を素材とする。正面を使用面とし、縁辺部以外は滑らかな状態である。中央のやや下位には、極めて浅い窪みが認められる。



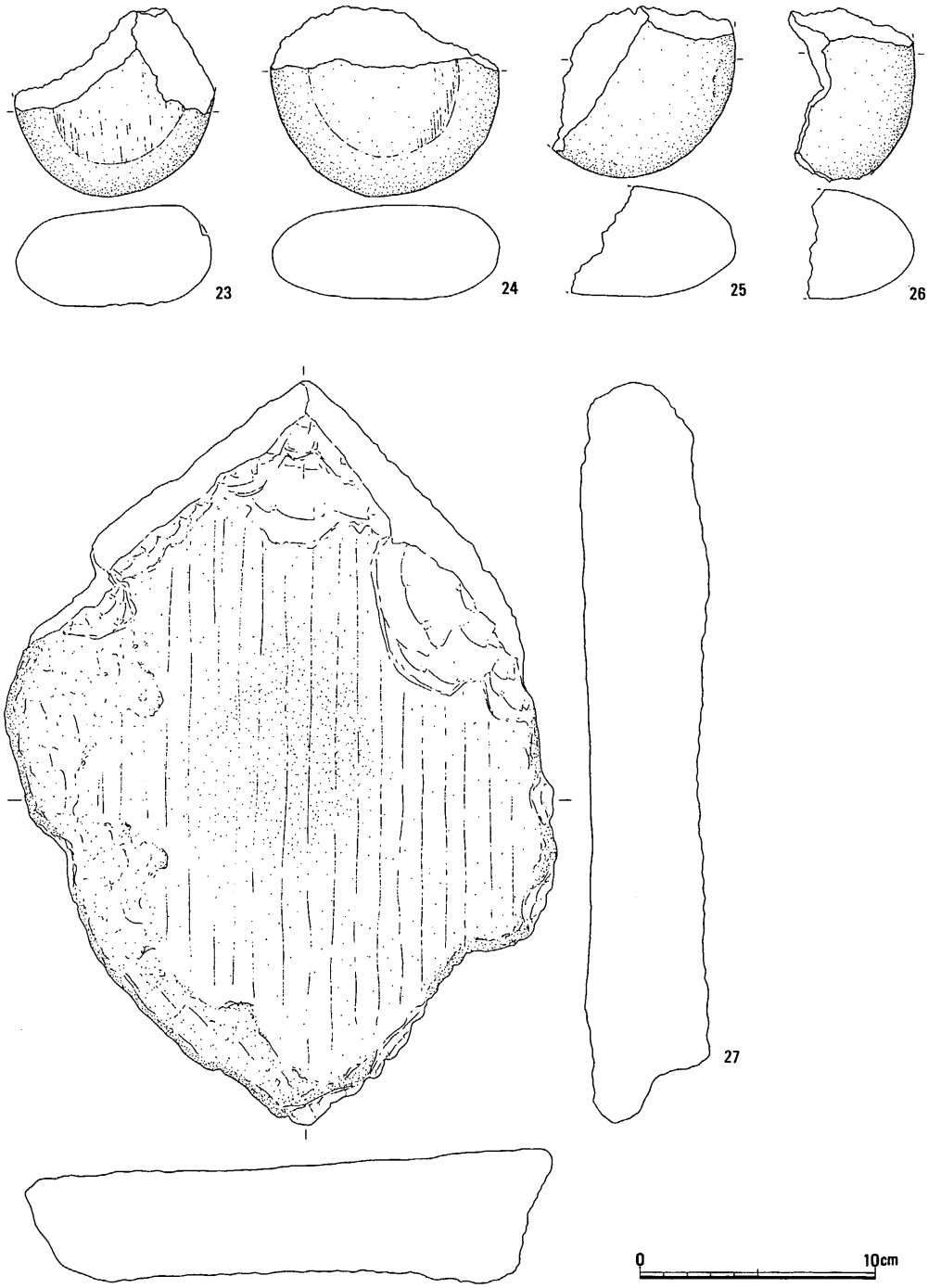
第18図　縄文時代出土石器平面分布図（1/250）



第19図　縄文時代出土石器実測図１（2/3）



第20図　縄文時代出土石器実測図２（2/3・1/3）



第21図　縄文時代出土石器実測図３（1/3）

カヤノ遺跡第7次調査 縄文時代包含層遺物一覧表

番号	R番号	種別	位置	出土層位／土色	時期	挿図番号	備考
1	001	石匙	F 5	Ⅲ層上部／黄褐色土		第19図10	安山岩 10.81g
7	002	土器	C 3	SX050 覆土		第17図 7	
8		礫	C 4	Ⅲ層上部／黄褐色土			
9		礫	C 5	Ⅲ層上部／黄褐色土			
12		剥片	D 2	Ⅲ層／黄褐色土			黒曜石
13	004	土器	D 3	Ⅲ層上部／黄褐色土	早期	第16図13	押型文
15		土器	D 4	SX050 覆土			
16		礫	D 5	Ⅲ層上面／黄褐色土			
17		剥片	D 5	Ⅲ層上面／黄褐色土			黒曜石
19		礫	D 8	Ⅲ層上部／黄褐色土			
20		土器	D 8	Ⅲ層上部／黄褐色土			
24		礫	E 6	Ⅲ層類似土黄褐色土			
26		礫	E 7	Ⅲ層上部／黄褐色土			
32		礫	E 9	Ⅲ層上部／黄褐色土			
37		剥片	F 3	Ⅰ層下部／暗褐色土			黒曜石 4.15g
39		礫	F 6	Ⅲ層上部／黄褐色土			
40		礫	F 6	Ⅲ層上部／黄褐色土			
41	007	磨石	F 7	Ⅲ層上部／黄褐色土		第21図23	閃緑岩 328g
42		礫	F 7	Ⅲ層上部／黄褐色土			
44		礫	F 8	Ⅲ層上部／黄褐色土			
45		礫	F 8	Ⅲ層上部／黄褐色土			
46		礫	F 8	Ⅲ層上部／黄褐色土			
47	008	土器	F10	Ⅲ層上面／黄褐色土	後・晩期	第17図9·10	2破片
48		礫	F10	Ⅲ層上部／黄褐色土			
57		土器	G 8	Ⅲ層上面／黄褐色土	時期不明		
63		剥片	H 9	Ⅲ層上部／黄褐色土			安山岩
64		礫	H 9	Ⅰ層下部			
66		剥片	G10	Ⅲ層上部／黄褐色土			黒曜石
69	009	土器	G10	Ⅲ層上部／黄褐色土	前期	第17図 2	
71	010	石鏃	I 8	Ⅲ層上部／黄褐色土		第19図 2	安山岩 1.45g
72	011	石匙	C 3	Ⅲ層／黄褐色土		第19図 9	安山岩 21.81g
73	012	使用痕がある剥片	E 2	Ⅲ層／黄褐色土		第20図15	黒曜石 2.28g
74		剥片	C 5	Ⅲ層／黄褐色土			安山岩
75	013	土器	D 4	Ⅲ層／黄褐色土	時期不明	第17図19	無文
76	014	石鏃	D 4	Ⅲ層／黄褐色土		第19図 6	黒曜石 0.32g
78	015	土器	C 4	Ⅲ層／黄褐色土	前期	第17図 8	
80		土器	C 5	Ⅲ層／黄褐色土	早期		押型文 小破片 拓本ナシ

番号	R番号	種別	位置	出土層位／土色	時期	挿図番号	備考
81		土器	D 3	Ⅲ層／黄褐色土			
82	016	土器	B 5	Ⅲ層／黄褐色土	早期	第16図 2	押型文
83		土器	B 5	Ⅲ層／黄褐色土	時期不明		早前期？
84		剥片	B 3	Ⅲ層／黄褐色土			安山岩
85		剥片	A 3	Ⅲ層／黄褐色土			安山岩
86		剥片	A 3	Ⅲ層／黄褐色土			安山岩
87		土器	C 3	Ⅲ層／黄褐色土	時期不明		早前期？
88		土器	D 5	Ⅲ層／黄褐色土			
89		土器	E 4	Ⅲ層／黄褐色土	時期不明		
90		土器	E 6	Ⅲ層／黄褐色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
91	017	土器	F 5	Ⅲ層／黄褐色土	前期	第17図 3	
92	018	土器	E 6	Ⅲ層／黄褐色土	時期不明	第17図21	無文
93	019	土器	F 6	Ⅲ層／黄褐色土	後・晩期	第17図16	
94		剥片	F 7	Ⅲ層／黄褐色土			安山岩
96	020	土器	F10	Ⅲ層／黄褐色土	後・晩期	第17図14	
97	021	石鏃	H 9	Ⅲ層／黄褐色土		第19図 5	黒曜石　1.43g
98	022	土器	E 6	Ⅲ層／黄褐色土	前期	第17図 6	
99		剥片	H 7	Ⅲ層／黄褐色土			黒曜石
100		土器	H 7	Ⅲ層／黄褐色土	時期不明		早前期？
101	023	磨石	H 6	Ⅲ層／黄褐色土		第21図25	閃緑岩　306g
102	024	石鏃	C 5	Ⅲ層／黄褐色土		第19図 4	黒曜石　1.46g
103	025	土器	E 9	Ⅲ層／黄褐色土	後・晩期	第17図13	
104	026	土器	D 4	Ⅲ層／黄褐色土	早期	第16図10	押型文　168と接合
105	027	土器	F 6	Ⅲ層／黄褐色土	前期	第17図 4	
106		剥片	E 7	Ⅲ層／黄褐色土			黒曜石
107		礫	C 4	Ⅲ層／黄褐色土			
108	028	石皿	D 5	Ⅲ層／黄褐色土		第21図27	花崗岩　4.98kg
109		礫	E 4	Ⅲ層／黄褐色土			
110		礫	C 6	Ⅲ層／黄褐色土			
111		礫	F 4	Ⅲ層／黄褐色土			
112～115		礫	D 7	Ⅲ層／黄褐色土			
116・117		礫	D 8	Ⅲ層／黄褐色土			
118・119		礫	E 8	Ⅲ層／黄褐色土			
120	029	磨石	E 8	Ⅲ層／黄褐色土		第21図24	閃緑岩　370g
121～126		礫	E 7	Ⅲ層／黄褐色土			
127		礫	E 8	Ⅲ層／黄褐色土			
128～130		礫	E 7	Ⅲ層／黄褐色土			
131～133		礫	E 8	Ⅲ層／黄褐色土			

番号	R番号	種別	位置	出土層位／土色	時期	挿図番号	備考
134・135		礫	F 8	Ⅲ層／黄褐色土			
136・137		礫	F 7	Ⅲ層／黄褐色土			
138～143		礫	E 7	Ⅲ層／黄褐色土			
144～157		礫	F 7	Ⅲ層／黄褐色土			
158		礫	G 7	Ⅲ層／黄褐色土			
159・160		礫	F 8	Ⅲ層／黄褐色土			
161		礫	F 9	Ⅲ層／黄褐色土			
162		礫	F 7	Ⅲ層／黄褐色土			
163		礫	F 9	Ⅲ層／黄褐色土			
164	030	石鏃	E 3	Ⅳ層／灰白色土		第19図 1	黒曜石 1.44 g
165	031	土器	E 2	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図 4	押型文
166	032	土器	D 2	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図 8	押型文
167	033	土器	D 3	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図 3	押型文
168	034	土器	D 3	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図10	押型文　104と接合
169	035	使用痕がある剥片	D 3	Ⅳ層／灰白色土		第20図19	黒曜石 4.84 g
170	036	使用痕がある剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土		第19図13	黒曜石 1.73 g
171	037	土器	D 5	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図15	押型文
172		剥片	B 5	Ⅳ層／灰白色土			安山岩 14.3 g
173	038	土器	E 3	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図11	押型文
174	039	石核	F 3	Ⅳ層／灰白色土		第20図21	黒曜石 43.6 g
175	040	土器	E 3	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図 1	押型文
176	041	土器	E 4	Ⅳ層／灰白色土		第17図11	
177		土器	F 4	Ⅳ層／灰白色土	時期不明		早前期？
178	042	土器	F 4	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図18	押型文
179		剥片	F 3	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 0.42 g
180		剥片	F 4	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 2.91 g
181	044	土器	F 4	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図 9	押型文
182	045	土器	F 3	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図 7	押型文
183	046	土器	F 3	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図 7	押型文
185		剥片	E 2	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 0.55 g
186		剥片	E 2	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 1.55 g
187～201		礫	F 6	Ⅲ層／黄褐色土			
202～215		礫	G 7	Ⅲ層／黄褐色土			
216～219		礫	H 7	Ⅲ層／黄褐色土			
220～222		礫	G 7	Ⅲ層／黄褐色土			
223・224		礫	G 8	Ⅲ層／黄褐色土			
225～229		礫	H 9	Ⅲ層／黄褐色土			
230		礫	G 9	Ⅲ層／黄褐色土			

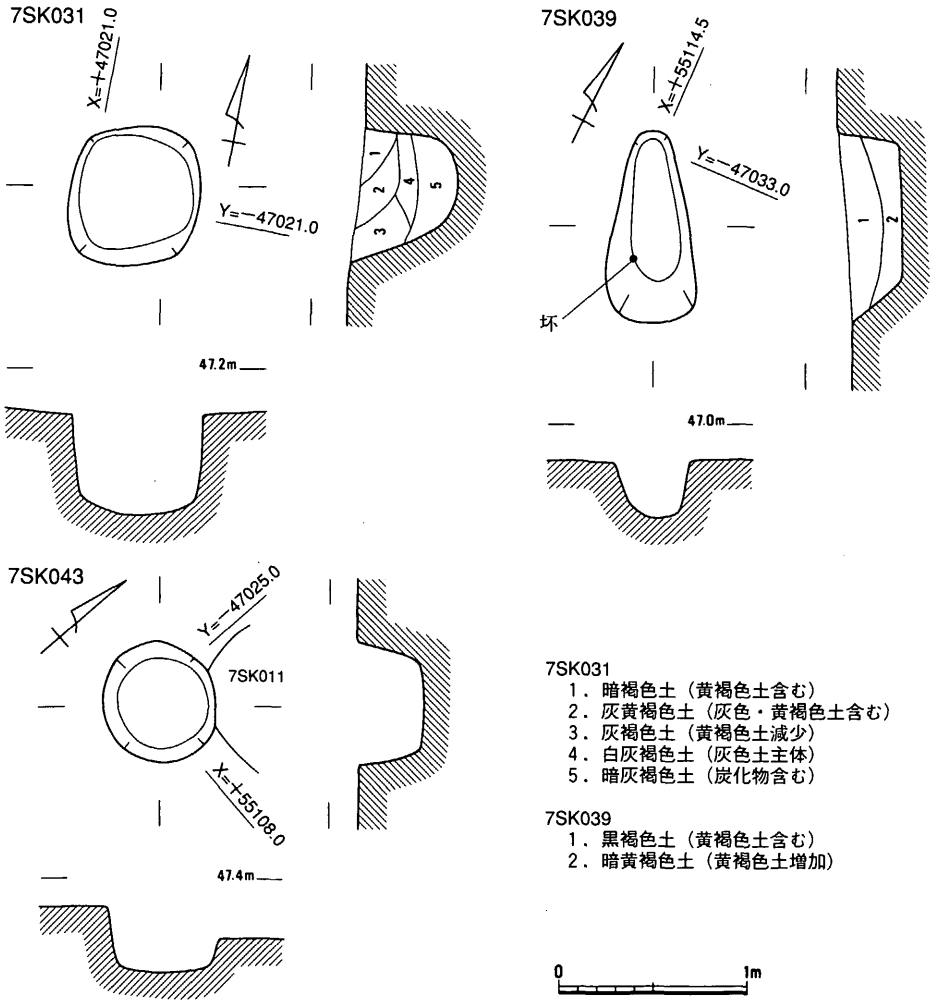
番号	R番号	種別	位置	出土層位／土色	時期	挿図番号	備考
231		礫	G10	Ⅲ層／黄褐色土			
232		礫	G 9	Ⅲ層／黄褐色土			
233		礫	H 7	Ⅲ層／黄褐色土			
234・235		礫	G 6	Ⅲ層／黄褐色土			
236		礫	H 6	Ⅲ層／黄褐色土			
237		礫	H 6	Ⅲ層／黄褐色土			
238		礫	H 6	Ⅲ層／黄褐色土			
239		礫	H 6	Ⅲ層／黄褐色土			
240		礫	H 6	Ⅲ層／黄褐色土			
241		礫	H 6	Ⅲ層／黄褐色土			
242		礫	I 7	Ⅲ層／黄褐色土			
243～245		礫	I 8	Ⅲ層／黄褐色土			
246～248		礫	I 9	Ⅲ層／黄褐色土			
249		礫	I 8	Ⅲ層／黄褐色土			
250・251		礫	F10	Ⅲ層／黄褐色土			
252		礫	G 3	Ⅲ層／黄褐色土			
253	047	土器	D 7	Ⅲ層／黄褐色土	前期	第17図 1	
254		剥片	D 7	Ⅲ層／黄褐色土			黒曜石
255		土器	E 9	Ⅲ層／黄褐色土	時期不明		早前期？
256	048	使用痕がある剥片	B 5	Ⅲ層下部／黄褐色土		第20図18	黒曜石 2.9g
257		剥片	B 5	Ⅲ層下部／黄褐色土			黒曜石 0.25g
258	049	土器	B 5	Ⅲ層下部／黄褐色土	早期	第16図 6	押型文
259		剥片	C 4	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 1.56g
260		剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 1.76g
261		土器	C 4	Ⅳ層／灰白色土	時期不明		早前期？
262	050	使用痕がある剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土		第19図14	黒曜石 1.76g
263	051	土器	C 2	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図17	押型文
264		土器	C 2	Ⅳ層／灰白色土	時期不明		
265		剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 0.24g
266		剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 0.30g
267		剥片	D 3	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石 4.31g
268	052	石核	F 3	Ⅳ層／灰白色土		第20図20	黒曜石 17.75g
269	053	土器	F 4	Ⅳ層／灰白色土	時期不明	第17図18	無文
270	054	土器	G 4	Ⅳ層／灰白色土	早期	第16図12	押型文
271		剥片	I10	Ⅰ層／暗褐色土			黒曜石 0.53g
272		土器	I10	Ⅰ層／暗褐色土	時期不明		極少破片
274		土器	J10	Ⅰ層／暗褐色土			
279	055	土器	C 2	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第14図 7	305と接合

番 号	R番号	種 別	位置	出土層位／土色	時 期	挿図番号	備 考
280	056	土器	C 2	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 26	
281	057	土器	C 2	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 12	
282	058	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 1	
283	059	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 22	
284	060	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 5	
285	061	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 6	
286		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
287	062	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 11	
288		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
289	063	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 24	小破片　拓本ナシ
290		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
291	064	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 2	小破片　拓本ナシ
292	065	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 27	
293	066	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 9	
294	067	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 14	
295	068	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 21	
296		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
297	069	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 17	
298	070	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 10	小破片　拓本ナシ
299	071	土器	C 4	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 18	
300	072	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 8	
301	073	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 3	
302	074	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 4	334 と接合
303		剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土			安山岩
304	075	使用痕がある剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土		第 20 図 17	黒曜石　4.13 g
305	076	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 7	279 と接合
306		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
307	078	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 28	小破片　拓本ナシ
308	079	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 20	
309	080	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 25	
310	081	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 13	
311	082	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 23	
312		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
313		剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土			黒曜石　0.12 g
314	083	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 15	
315		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
316	084	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 19	
317・318・320		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ

番号	R番号	種別	位置	出土層位／土色	時期	挿図番号	備考
321		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	時期不明		
322		土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器		小破片　拓本ナシ
323		剥片	C 3	Ⅳ層／灰白色土			安山岩　4.01 g
324	085	土器	C 6	Ⅲ層下部／黄褐色土	早期	第 16 図 14	押型文
325	086	二次加工剥片	C 6	Ⅲ層下部／黄褐色土		第 19 図 12	黒曜石　4.22 g
326	087	礫器	D 8	Ⅲ層下部／黄褐色土		第 20 図 22	ホルンフェルス　385 g
327	088	土器	D 8	Ⅲ層下部／黄褐色土	早期	第 16 図 16	押型文
328	089	石鏃	E 9	Ⅲ層下部／黄褐色土		第 19 図 7	黒曜石　1.48 g
329	090	石鏃	F 8	Ⅲ層下部／黄褐色土		第 19 図 8	黒曜石　1.14 g
330	091	二次加工剥片	G 8	Ⅲ層下部／黄褐色土		第 19 図 11	黒曜石　4.6 g
331	092	石鏃	F 6	Ⅲ層下部／黄褐色土		第 19 図 3	黒曜石　1.09 g
332	093	土器	F 5	Ⅲ層下部／黄褐色土	時期不明	第 17 図 20	無文
333		剥片	F 5	Ⅲ層下部／黄褐色土			黒曜石　0.09 g
334	094	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 4	302 と接合
335	095	土器	C 3	Ⅳ層／灰白色土	無文土器	第 14 図 16	
336	096	土器	D 2	Ⅳ層／灰白色土	早期	第 16 図 5	押型文
337	097	土器	F 10	Ⅲ層下部／黄褐色土	後・晩期	第 17 図 12	
338	098	土器	F 4	SK038 覆土	後・晩期	第 17 図 15	
339		土器		Ⅰ層／浅褐色土	後・晩期		
340	099	土器		Ⅰ層／浅褐色土	後・晩期	第 17 図 17	刻目突帯
341	100	土器		暗褐色土	前期	第 17 図 5	SX050 覆土
342	101	使用痕がある剥片		Ⅳ層／灰白色土		第 20 図 16	黒曜石　5.83 g
343		剥片		Ⅳ層／灰白色土			安山岩　6.9 g
344		剥片		Ⅳ層／灰白色土			安山岩　0.75 g
345		剥片		Ⅳ層／灰白色土			安山岩　0.16 g
346		剥片		Ⅳ層／灰白色土			黒曜石　0.21 g
347		剥片		Ⅳ層／灰白色土			黒曜石　0.21 g
348		剥片		Ⅳ層／灰白色土			黒曜石　0.61 g
349	102	磨石		Ⅲ層／黄白色土		第 21 図 26	閃緑岩　215 g

（3）古　代

今回の調査で検出された古代の遺構は、尾根上より土坑10基が検出された。土坑は調査区のほぼ全面に確認され、調査区南部の中ほどにややまとまりが認められる。土坑には、坑底に炭化物層が存在するものが見られ、また炭化物層が存在し壁面が被熱したものもあった。そこで、今回の調査では土坑を３分類することとし、炭化物層のないものを土坑ａ類、炭化物層がありさらに壁の被熱したものを土坑ｂ類、炭化物層が存在し壁面の被熱しないものを土坑ｃ類とした。なお出土遺物がほとんどないため近世土坑との区分は、古代の土坑にはⅡ層（黒色土）が堆積し、近世の土坑にはⅠ層（暗褐色土）が堆積しており、この覆土の相違によって区分した。



第22図　7SK031・039・043実測図（1/40）

1）土坑ａ類

土坑ａ類は坑底に炭化物層を持たず、壁面の被熱も認められない土坑を本類とした。

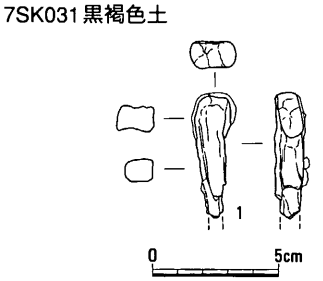
7SK031（第22図、図版７）

本址は調査区ほぼ中央のＨ６区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。重複関係は7SX001・7SK037と重複し、新旧関係では7SK037→本址→7SX001の順で構築されている。平面形は略方形を呈し、規模は長軸0.77ｍ、短軸0.68ｍ、深さ0.53ｍほどである。覆土は灰褐色土で、炭化物を少量含む。

遺物（第23図、図版19）

本址からは須恵器坏１点、須恵器細片１点、鉄製釘１点が覆土中より出土している。この内、図示し得た遺物は鉄製釘１点である。

１の鉄製釘は断面が方形で、端部を折り曲げて頂部としている。



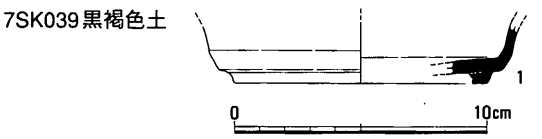
第23図　7SK031出土遺物実測図（1/3）

7SK039（第22図、図版７）

本址は調査区東部のＦ11区に位置し、北へ延びる台地の西側肩部にあたる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.04ｍ、短軸0.45ｍ、深さ0.28ｍほどである。主軸方位はＮ－23°－Ｅを指す。覆土は黒褐色土で、炭化物の含有量が少ない。本址の出土遺物は１層（黒褐色土）中より出土している。

遺物（第24図、図版19）

本址の出土遺物は須恵器坏ｃ3類が１点である。高台は体部－底部の屈曲よりわずかに内側に取り付けられ、両側から丁寧にナデ調整されている。



第24図　7SK039出土遺物実測図（1/3）

SK043（第22図）

本址は調査区南部のＤ７・８区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。重複関係は7SK011と重複し、新旧関係は本址→7SK011の順で構築されている。平面形は略円形を呈し、規模は長軸0.64ｍ、深さ0.35ｍほどである。覆土は暗茶褐色土で、炭化物を少量含んでいる。本址から出土した遺物はない。

2）土坑ｂ類

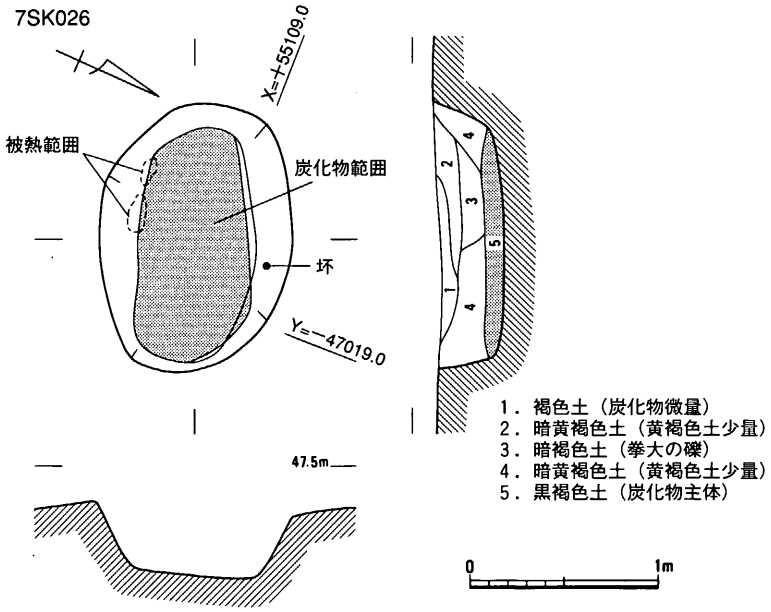
土坑ｂ類は坑底に炭化物層が存在し、壁面の被熱したものを本類とした。

7SK026（第25図、図版８）

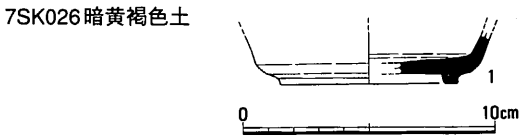
本址は調査区南部のＤ５・６区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.45ｍ、短軸1.02ｍ、深さ0.35ｍほどである。主軸方位はＮ－69°－Ｅを指す。坑底には厚さ５cmほどの炭化物を主体とした土層が認められた。また、壁面には火熱によって赤化した部分が認められた。覆土は黒褐色土を主体とし、炭化物及び黄褐色土の含有量によって分層され、本址の出土遺物は４層（暗黄褐色土）中より出土している。なお骨片と思われるものは認められなかった。

遺物（第26図、図版19）

本址の出土遺物は須恵器坏ｃ3類が１点である。高台は体部－底部の屈曲よりわずかに内側に取り付けられ、両側からナデ調整されているがやや鋭さに欠ける。



第25図　7SK026実測図（1/40）



第26図　7SK026出土遺物実測図（1/3）

3）土坑ｃ類

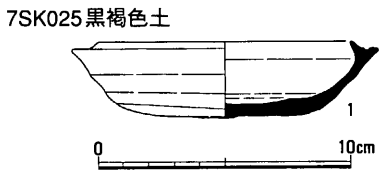
土坑ｃ類は坑底に炭化物層があり、壁面の被熱が認められないものを本類とした。

7SK025（第28図、図版８）

本址は調査区南部のＤ６区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.68ｍ、短軸1.09ｍ、深さ0.20ｍほどである。主軸方位はＮ－77°－Ｗを指す。坑底には炭化物を多量に含む土層が厚さ10cmほど認められたが、壁面は被熱していない。覆土は黒褐色土で、炭化物を少量含んでいる。なお骨片等は認められない。本址１層（褐色土）の最上部から須恵器坏Ｈ（1962）が１点出土している。本土坑の推定時期とは合致せず、転用ないしは、土坑直上層がＩ層であることから混入物の可能性がある。

遺物（第27図、図版19）

須恵器坏Ｈ１点は、受部の立ち上がりは口縁部よりもやや高くなっている。底部はヘラ切り離し後未調整で、太宰府ⅣＢ類に分類される。



第27図　7SK025出土遺物実測図（1/3）

7SK027（第28図）

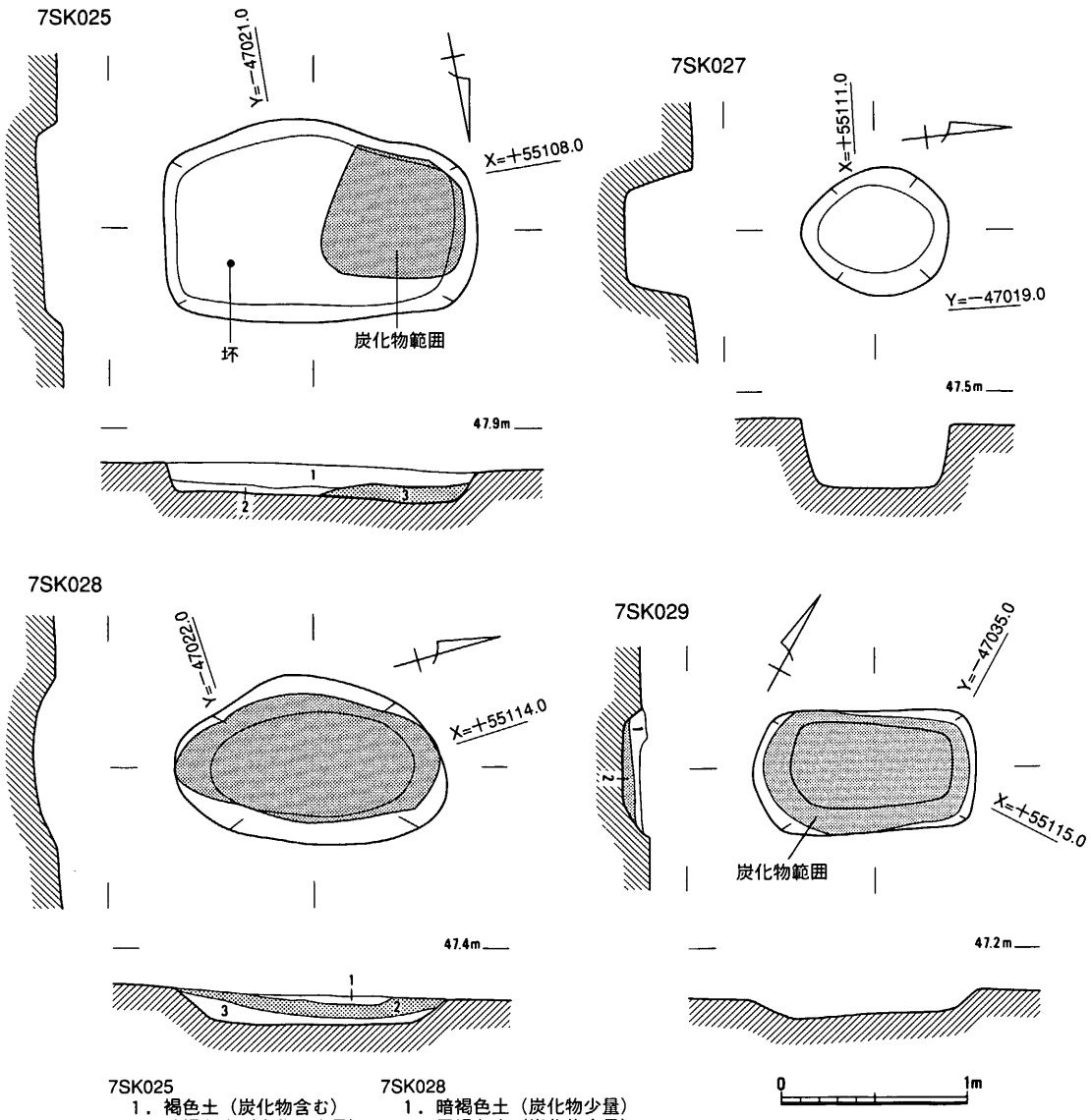
本址は調査区南部のＥ６区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.80ｍ、短軸0.69ｍ、深さ0.38ｍほどである。主軸方位はＮ－４°－Ｅを指す。坑底には炭化物を多量に含む土層が認められたが、壁面は被熱していない。覆土は黒褐色土で、炭化物を含む。なお、骨片等は認められなかった。本址の出土遺物はない。

7SK028（第28図、図版９）

本址は調査区ほぼ中央のＦ６・７区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.46ｍ、短軸0.91ｍ、深さ0.17ｍほどである。主軸方位はＮ－８°－Ｅを指す。坑底には炭化物を多量に含む厚さ10cmほどの土層が認められたが、壁面は被熱していない。覆土は上から暗褐色土、黒褐色土・暗黄褐色土の順で堆積している。なお骨片等は認められなかった。本址からは遺物が出土していない。

7SK029（第28図、図版９）

本址は調査区西部のＦ11区に位置し、南へ延びる台地の西側肩部にあたる。重複関係としては7SK021と重複し、新旧関係では本址→7SK021の順に構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.29ｍ、短軸0.76ｍ、深さ0.17ｍほどである。主軸方位はＮ－61°－Ｅを指す。坑底には厚さ５cmほどの炭化物層を確認したが、壁面は被熱していない。覆土は黒褐色土である。なお骨片等は認められなかった。本址からは遺物が出土していない。



7SK025
1．褐色土（炭化物含む）
2．暗褐色土（炭化物少量）
3．黒褐色土（炭化物多量）

7SK028
1．暗褐色土（炭化物少量）
2．黒褐色土（炭化物多量）
3．暗黄褐色土（黄褐色土含む）

7SK029
1．黒褐色土（炭化物多量）
2．黒褐色土（炭化物主体）

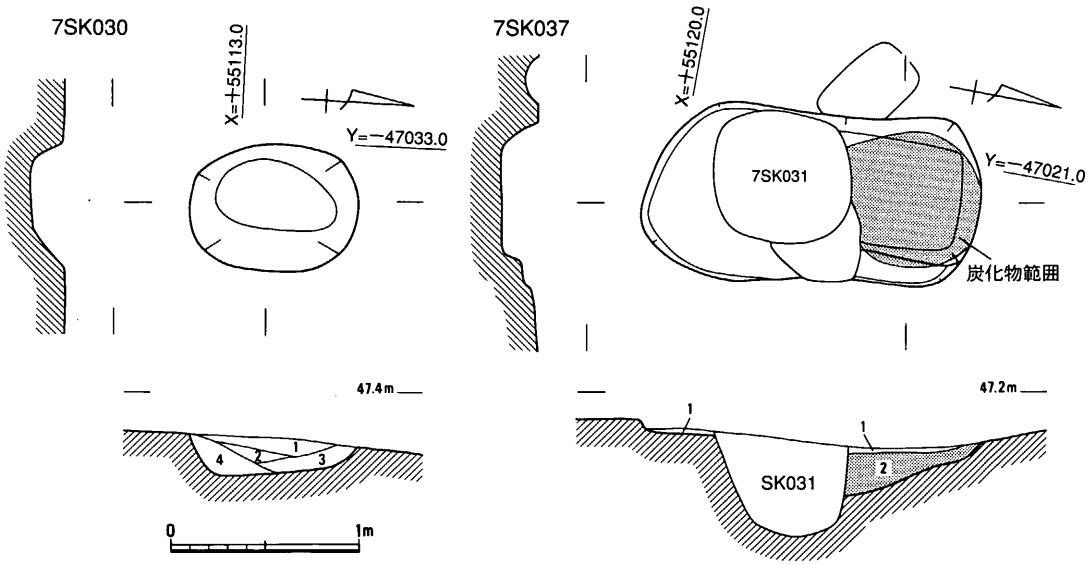
第28図　7SK025・027～029実測図（1/40）

7SK030（第29図、図版９）

本址は調査区西部のＦ・Ｇ11区に位置し、南へ延びる台地の西側肩部にあたる。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.89ｍ、短軸0.67ｍ、深さ0.14ｍほどである。主軸方位はＮ－４°－Ｗを指す。坑底には炭化物を多く含む土層が厚さ５cmほど堆積していたが壁面は被熱していない。覆土は褐色土から黒褐色土である。なお骨片等は認められなかった。本址からは遺物が出土していない。

7ST037（第29図）

本址は調査区中央部のＨ６区に位置し、南へ延びる台地尾根筋にあたる。重複関係としては7SK031と重複し、新旧関係では本址→7SK031の順に構築される。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.75ｍ、短軸0.92ｍ、深さ0.62ｍほどである。掘り込みは東側から南側がテラス状に段堀りされている。主軸方位はＮ－６°－Ｗを指す。坑底には厚さ10～20cmほどの炭化物層を確認したが、壁面は被熱していない。覆土は黒褐色土である。骨片等は認められなかった。本址からは遺物が出土していない。



7SK030
1．黒褐色土（炭化粒子多量）
2．暗褐色土（炭化物減少・黄褐色土含む）
3．褐色土（炭化物増加・黄褐色土減少）
4．暗黄褐色土（炭化物減少・黄褐色土多量）

7SK037
1．暗褐色土（炭化物多量）
2．黒褐色土（炭化物主体）

第29図　7SK030・037実測図（1/40）

（4）中・近世

今回の調査で検出された遺構は柱穴列1ヶ所、1列に並ぶ土坑列、単独の土坑11基、建物として認識できなかったピット、耕作痕と考えられる畝溝状遺構である。これらの遺構はほとんどが調査区南半の上段に集中し、畝溝状遺構の一部が調査区北半の下段まで残っている。7SX001と平行して1列に並ぶ7SK002～004・006～009・011～014・016～018の14基の土坑（土坑列）は、北へ延びる台地に対し共に横切るように配置されている。このことから、土坑列は柱穴列に伴う施設と推察され、区画施設と考えられる。単独の土坑は特に集中することがないものの主軸方位に共通性が認められ、長方形・長楕円形の7SK022・024・032・041はほぼ東西方向を指している。この内7SK022・024に主軸方位がほぼ直交配置の7SK042と北東方向を指す7SK033を加えるならば、各土坑の間隔は7.5～8.0ｍほどの間隔でほぼ直線的に東西方向へ並んでいるものと想定され、7SK032も方向性が一致する。これらの土坑は耕作に関連するものと考えられ、土坑の向きに関連するであろう農道及び農地区画等が想定される。また、畝溝状遺構は佐賀県下和泉一本椎遺跡・鹿児島県持躰松遺跡（『はたけの考古学』2000年日本考古学協会編）等では、縦方向が一定の間隔を置きつつ連続し、本址の7SX050（畝溝状遺構）と類似する。

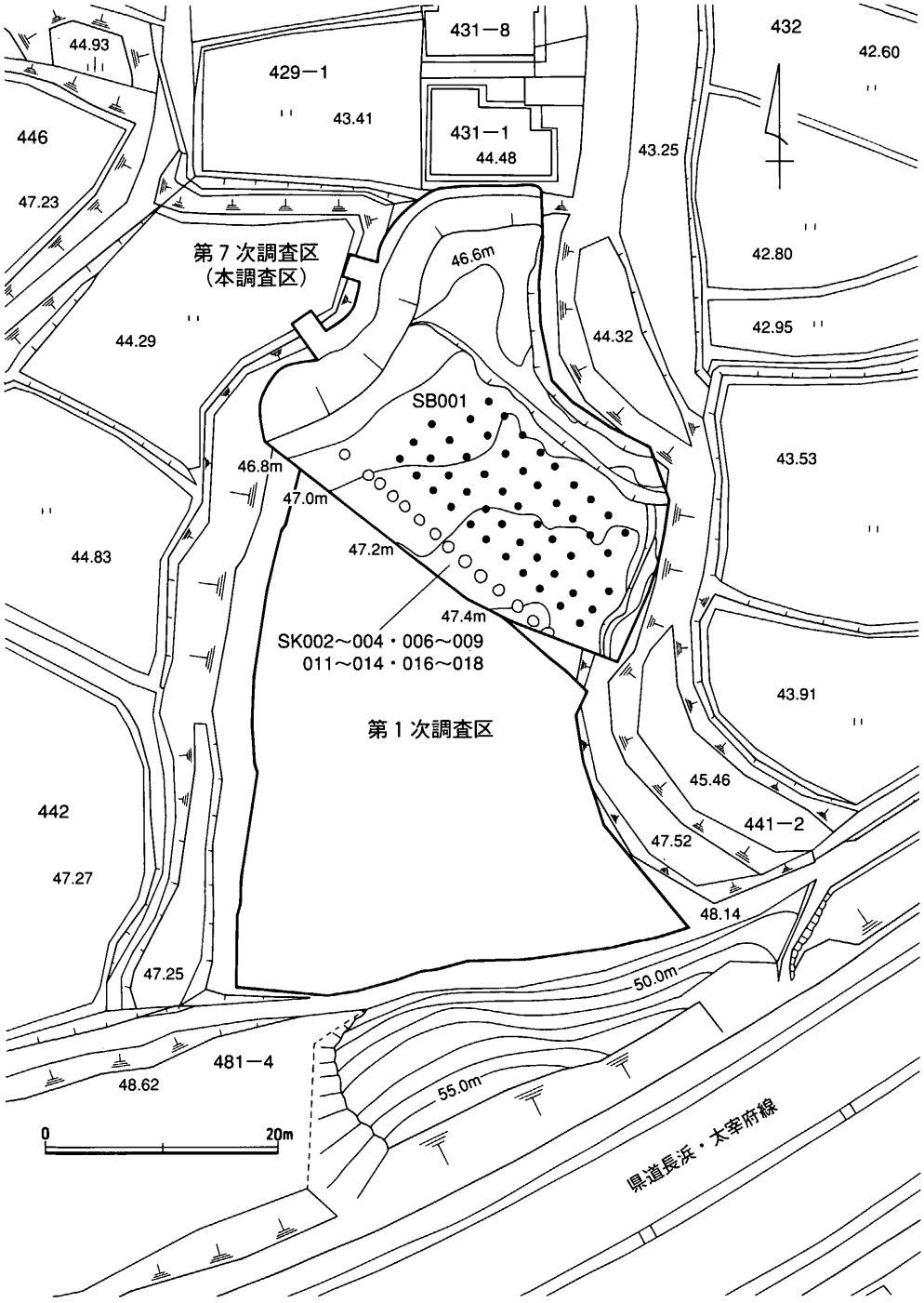
1）柱穴列

7SX001（第30～32図、図版11）

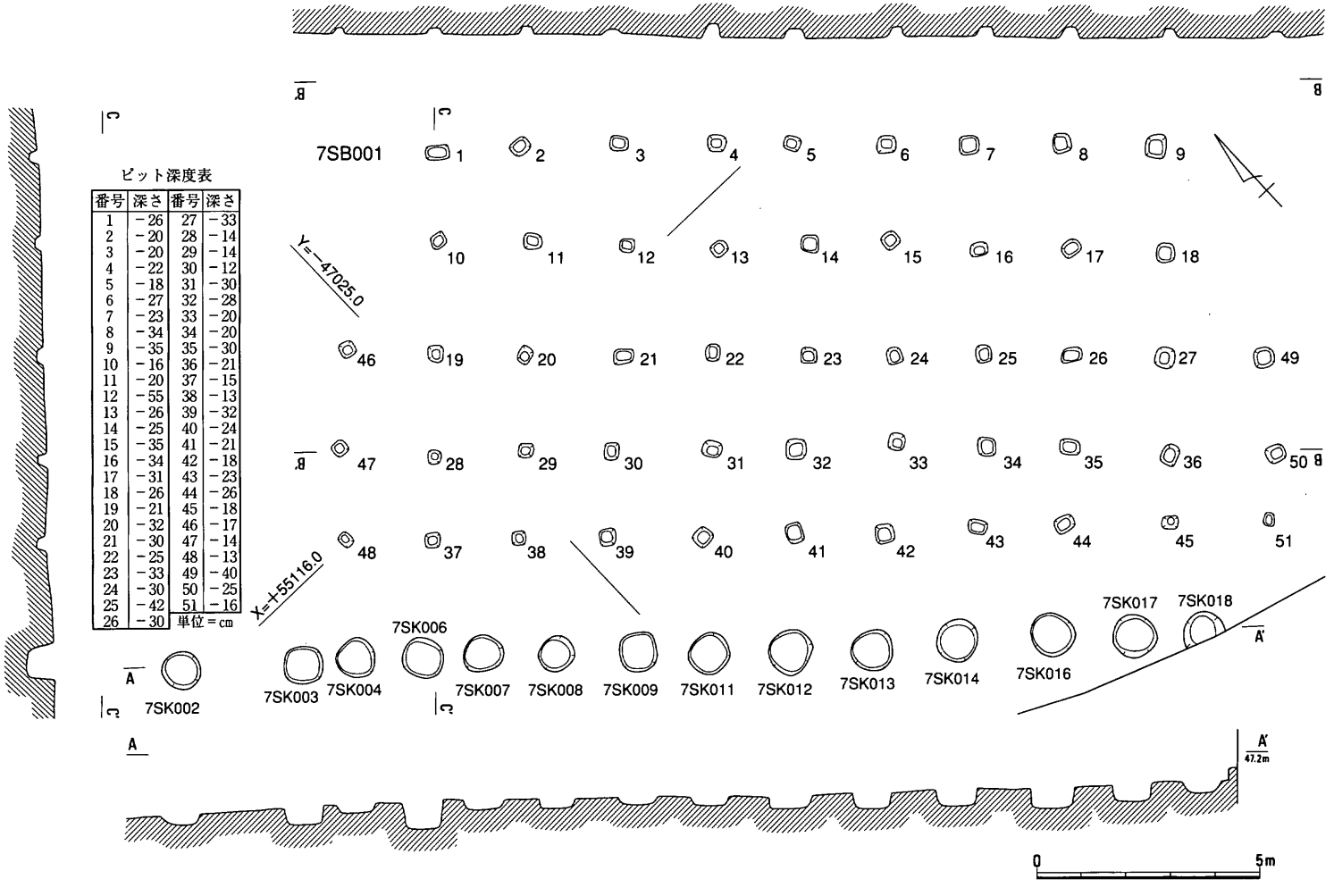
本址は調査区中央部から南西部に位置し、発掘区ではＥ～Ｈ２～８区にあたる。本址は7SX050、7SK024・031・032を壊して構築され、遺存状態は比較的良好である。本址は長方形に並ぶ柱穴列で、柱穴は略方形を呈し、規模は方34～45㎝にまとまるが、検出面からの深さは10～38㎝でややばらつきがある。各柱穴の覆土は暗褐色土であるが、やや茶色がかる。

建物を想定した場合には平面形が桁行８間、梁行４間の身舎を基本形とする坪堀の建物と推定され、その規模は桁行総長（北西－南東）が16.35ｍ、梁行総長（北東－南西）が8.55ｍを測り、芯々部分の面積は約139.79㎡で大規模である。南東妻柱列と北西妻柱列沿いに廂状の張り出しが伴い、北西妻柱列から2.1ｍ、南東妻柱列から2.25ｍほどの間隔置いている。主軸方位はＮ－46°－Ｗを指す。

柱間寸法は、桁行は北東側柱列は北西側より１間目1.95ｍ、２間目2.25ｍ、３間目2.10ｍ、４間目1.80ｍ、５間目1.95ｍ、６間目1.95ｍ、７間目2.10ｍ、８間目2.10ｍ、南西側柱列は北西側より１間目1.80ｍ、２間目2.10ｍ、３間目2.10ｍ、４間目2.10ｍ、５間目1.95ｍ、６間目2.10ｍ、７間目2.10ｍ、８間目2.10ｍを測る。梁行は北西妻柱列が北東側より１間目2.10ｍ、２間目2.40ｍ、３間目2.10ｍ、４間目1.80ｍ、南東妻柱列が北東側より１間目2.40



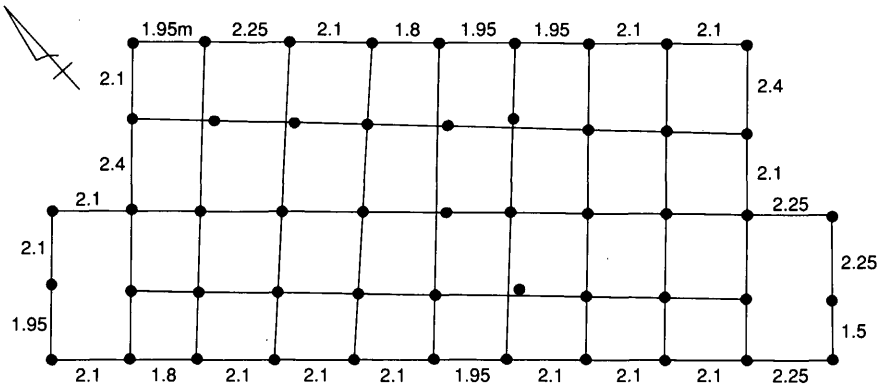
第30図　カヤノ遺跡第７次調査区周辺の地形図（1/600）



ピット深度表

番号	深さ	番号	深さ
1	−26	27	−33
2	−20	28	−14
3	−20	29	−14
4	−22	30	−12
5	−18	31	−30
6	−27	32	−28
7	−23	33	−20
8	−34	34	−20
9	−35	35	−30
10	−16	36	−21
11	−20	37	−15
12	−55	38	−13
13	−26	39	−32
14	−25	40	−24
15	−35	41	−21
16	−34	42	−18
17	−31	43	−23
18	−26	44	−26
19	−21	45	−18
20	−32	46	−17
21	−30	47	−14
22	−25	48	−13
23	−33	49	−40
24	−30	50	−25
25	−42	51	−16
26	−30	単位＝cm	

第31図　7SX001・7SK002～004・006～009・001～014・016～018実測図（1/150）

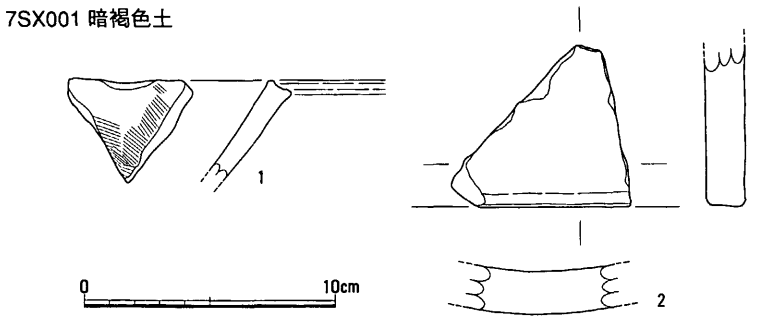


第32図　7SX001模式図（1/200）

m、2間目2.10m、3間目2.25m、3間目1.65mを測る。

遺物（第33図、図版19）

本址から出土した遺物は土師器系鍋1点、唐津系椀1点、平瓦1点で、この内唐津系椀は細片のため図示し得なかった。1の土師器系鍋は在地の製品と推測され、口唇端の中央がやや窪む特徴を有し15～16世紀代の製品と推定されるが、本址の時期としてはやや古式であり混入品であろう。2の平瓦はいわゆる三州瓦である。本址は畝溝状遺構・土坑との重複関係では最も新しくなっており、加えて次に述べる本柱穴列に付随すると考えられる土坑列出土遺物と考え合わせればおおむね17世紀以降と推定される。



第33図　7SX001出土遺物実測図（1/3）

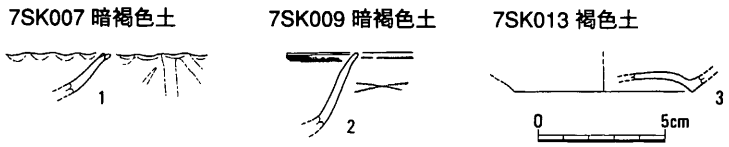
2）土坑列（第31図、図版10）

本址は調査区南側のＢ４～Ｇ10にかけて7SK002～004・006～009・011～014・016～018が検出され、7SX001の南西側柱列から２ｍほどの間隔でほぼ並行しており、7SX001に伴う構造と想定され、丘陵基部と柱穴列が構築される丘陵先端部を区画するように配置されている。重複する遺構は7SK036・7SK043・7SX050があり、新旧関係では7SK043→7SK036・7SX050→本址の順で構築されている。

検出された土坑列の長さは23ｍほどで、ほぼ直線的に南東－北西方向に並んでいる。各土坑の平面形は略円形を呈し、坑底は平坦なものが多く、壁は垂直ぎみに立ち上がるものが多くなっている。ただし、7SK007・7SK014・7SK017は坑底の中央がやや窪み、かつ壁の立ち上がりもやや開きぎみである。規模は径0.80～0.98ｍを測り、まとまった数値を示す。それに対し土坑深度は0.15～0.58ｍとやや不規則である。覆土はＩ層の暗褐色土を主体とするが、黄褐色土・黒褐色土を多量に含み人為的な影響が看取される。

遺物（第34図）

7SK004・006の２基を除く各土坑から須恵器・土師器・陶磁器類が少量出土した。出土遺物の内、図示し得た遺物は7SK007の１唐津系波皿、7SK009の２肥前系染付椀、7SK013の３土瓶である。１は口縁部がヘラ状工具によって押捺され波状を呈するもので、灰釉が施されている。時期は17世紀前半頃の所産と考えられる。２は肥前系染付椀または猪口と推定され、18世紀以降の製品とされよう。３は土瓶の底部で特に肥厚することなく厚さ２㎜ほどで、上げ底を呈している。４（図版19のＲ－001）は同一個体と考えられる破片で、１～２㎜の薄い器壁に釉が施され、イッチン描きの罫線が施こされる。時期は19世紀以降と考えられ、表土からの混入品とする。



第34図　7SK007・009・013出土遺物実測図（1/3）

3）土　坑

土坑は調査区南部に検出され、調査区南部ほぼ全面に見られるものの集中することなく極めて散漫な分布状態である。ただし、土坑には方向性が認められ、ほぼ東西に向くものと南北に向くものが見られる。平面形は略円形・楕円形・隅丸長方形を呈し、隅丸長方形のものは長軸に対し短軸が半分以下しかなく、かなり細長い形態である。覆土中にはⅠ層（浅褐色土・暗褐色土）が堆積しており、古代の土坑と区別することができた。

7SK021（第35図）

本址は調査区西部のＦ11区に位置し、北へ延びる台地の西側肩部にあたる。7SK029と重複し、新旧関係では7SK029→本址の順で構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.70ｍ、短軸0.54ｍ、深さ0.05ｍほどである。主軸方位はＮ－31°－Ｗを指す。覆土は暗褐色土を主体とするが、黄褐色土を多量に含むため暗黄褐色を呈する。炭化物を少量含む。本址から遺物は出土していない。

7SK022（第35図）

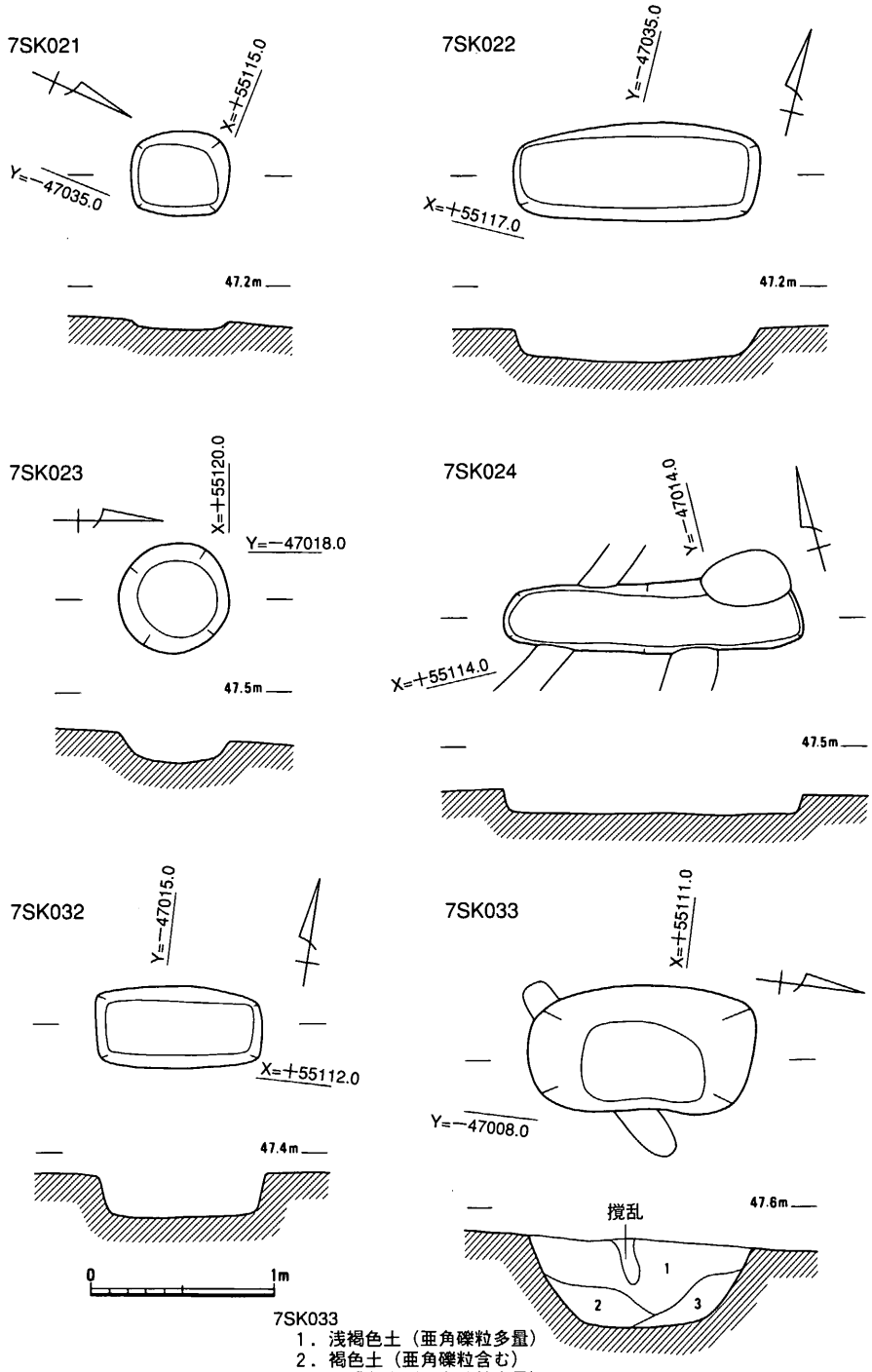
本址は調査区中央のＧ９区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.33ｍ、短軸0.55ｍ、深さ0.21ｍほどである。主軸方位はＮ－72.5°－Ｅを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。本址から遺物は出土していない。

7SK023（第35図）

本址は調査区東部のＨ５区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。平面形は略円形を呈し、規模は径0.60ｍ、深さ0.18ｍほどである。覆土は暗褐色土を主体する。本址から遺物は出土していない。

7SK024（第35図）

本址は調査区東部のＦ４区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。7SX001・7SX050と重複し、新旧関係は本址→7SX050→7SX001の順で構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.54ｍ、短軸0.38ｍ、深さ0.16ｍほどである。主軸方位はＮ－76.5°－Ｅを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。本址から遺物は出土していない。



7SK033
1．浅褐色土（亜角礫粒多量）
2．褐色土（亜角礫粒含む）
3．暗褐色土（亜角礫粒少量）

第35図　7SK021～024・032・033実測図（1/40）

7SK032（第35図）

本址は調査区東部のＥ５区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。7SX001・7SX050と重複し、新旧関係では本址→7SX050→7SX001の順で構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.90ｍ、短軸0.46ｍ、深さ0.26ｍほどである。主軸方位はＮ－85°－Ｅを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。本址から遺物は出土していない。

7SK033（第35図、図版12）

本址は調査区東部のＥ２区に位置し、北へ延びる台地の東側肩部にあたる。7SX050と重複し、新旧関係では本址→7SX050の順で構築されている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.21ｍ、短軸0.69ｍ、深さ0.53ｍほどである。主軸方位はＮ－６°－Ｗを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。

7SK034（第36図）

本址は調査区東部のＤ２区に位置し、北へ延びる台地の東側肩部にあたる。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.02ｍ、短軸0.89ｍ、深さ0.46ｍほどである。主軸方位はＮ－9.5°－Ｗを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。本址から遺物は出土していない。

7SK035（第36図、図版12）

本址は調査区西部のＦ10区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。7SK036と重複するものの切り合いがわずかであるため、新旧関係は明確でない。平面形は略円形を呈し、規模は径0.48ｍ、深さ0.11ｍほどである。覆土は暗褐色土を主体とする。本址から遺物は出土していない。

7SK036（第36図、図版12）

本址は調査区西部のＦ10・11区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。7SK035と重複するものの切り合いがわずかであるため、新旧関係は明確でない。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸0.74ｍ、短軸0.63ｍ、深さ0.12ｍほどである。主軸方位はＮ－43°－Ｗを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。本址から遺物は出土していない。

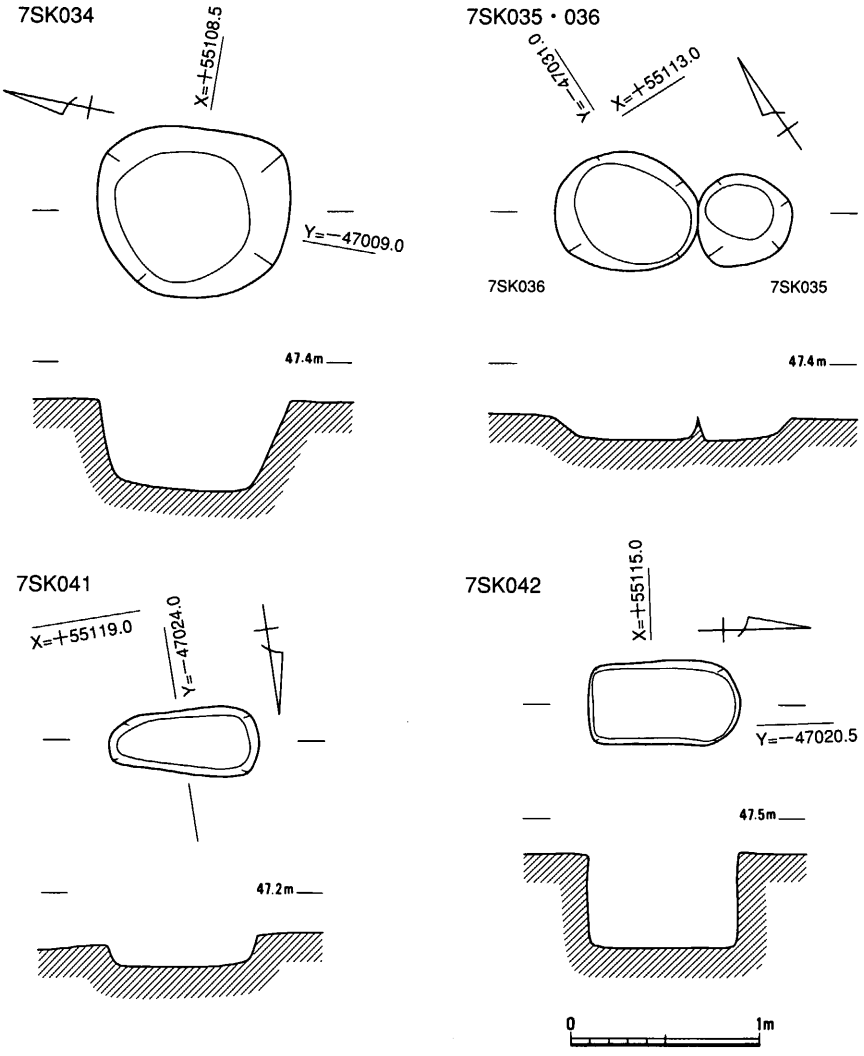
7SK041（第36図）

本址は調査区西部のＨ７区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.78ｍ、短軸0.37ｍ、深さ0.17ｍほどである。主軸方位はＮ－81°

－Wを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。

7SK042（第36図）

本址は調査区中央のＦ６区に位置し、北へ延びる台地の尾根筋にあたる。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.80ｍ、短軸0.45ｍ、深さ0.50ｍほどである。主軸方位はＮ－１°－Ｅを指す。覆土は暗褐色土を主体とする。本址から遺物は出土していない。



第36図　7SK034・035・036・041・042実測図（1/40）

4）畝溝状遺構

7SX050（第38図）

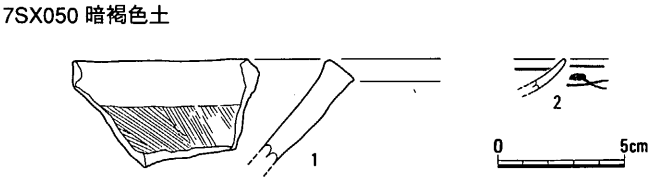
本址は調査区北半のほぼ全面と南半の一部に206条検出され、幅15～20cm、深さ５～20cmほどの小溝が、ほぼ一定の間隔で並列するものである。重複する遺構は7SX001と7SK024・032・033があり、新旧関係では7SK024・032・033→本址→7SX001・土坑列の順で構築されている。規模はピット状のものから３ｍを超すものまであるが、おおむね２ｍ前後のものが多くなっており、畝溝底には凹凸が目立っている。畝溝相互の重複はわずかに認められる程度であるが、畝溝相互の間隔はかなり密であり一度に形成されたものではなく継続して耕作された結果と考えられる。また、畝溝は１条の長さが２ｍ前後のものが多く、ほぼ北東－南西方向に掘られ、横方向（北西－南東）には密に並列するのに対し、縦方向（北東－南西）には一定の間隔を置きつつ連続するようである。そのことから畝溝状遺構は横方向（北西－南東）に連続するグループに区分が可能と考えられ、各グループの境には一定の間隔が置かれていたと推測される。特に３ｍほど間隔のあいた部分は路面こそ検出されなかったが道状の施設が考慮される。覆土は暗褐色土である。

遺物（第37図、図版19）

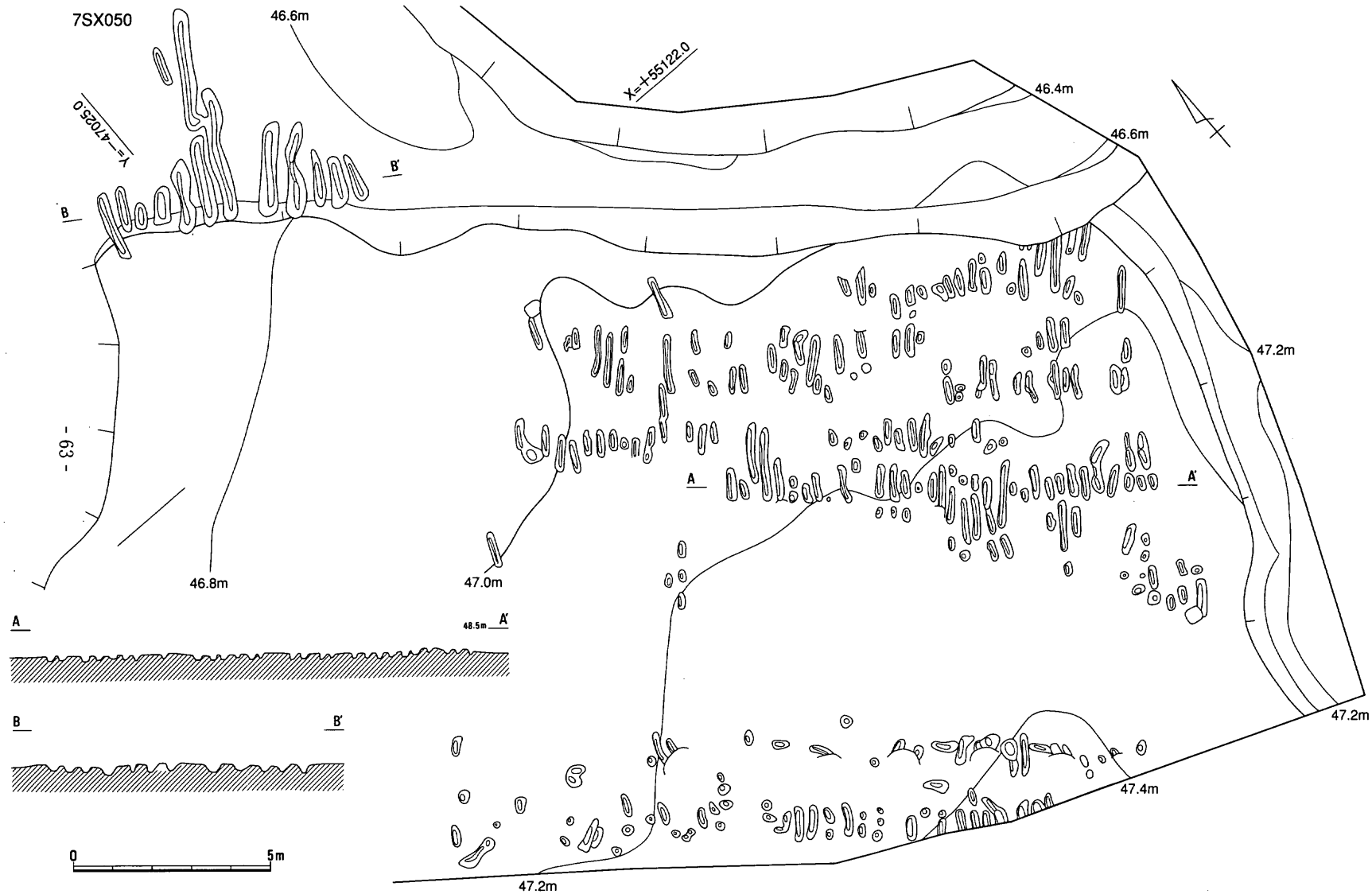
本址の出土遺物は中国産染付皿１点、土師質土器鍋１点が出土している。

１の土師器系土器鍋は在地産と推定され、15～16世紀代の製品と考えられ、やや古式である。２の中国産染付皿はやや古式で小野分類皿Ｃ群に分類され15世紀後葉～16世紀前葉と考えられる。

以上の遺物で時期を決定するのは躊躇せざるを得ないが、7SX001及び7SK024・032・033との重複関係によって、おおむね17世紀代の所産と考えられる。



第37図　7SX050出土遺物実測図（1/3）



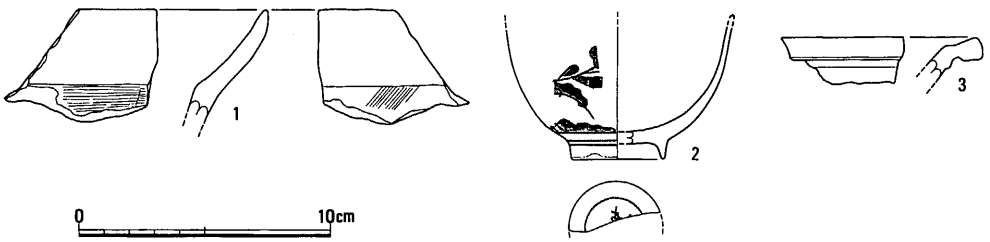
第38図　7SX050実測図（1/150）

5）包含層（浅褐色土～暗褐色土）出土遺物（第39図、図版19）

中・近世の遺物は基本的にⅠ層（浅褐色土～暗褐色土）に包含されていたもので、土師質土器・国産陶磁器が多く包含され、須恵器・土師器・縄文土器・石器類も見られた。これらの遺物は細片であり、図示し得た遺物は以下の3点である。

1の土師質土器鍋は口縁部内面の屈曲が明瞭に認められ、口縁部は外傾するが丸みをもって立ち上がり、口唇部は丸く収まる。口縁部はヨコナデ、胴部はハケメが残る。鍋としてはやや古式と考えられ、15世紀後半から16世紀前半頃にあてておきたい。2の肥前系染付椀はやや小振りで、畳付を除き全面に施釉されている。器面には草花文が描かれ、高台内の圏線内に文字が書かれている。3の唐津系大皿は遺存部分に象嵌が見られないもののいわゆる三島手の大皿と考えられる。

暗褐色土



第39図　暗褐色土出土遺物実測図（1/3）

参考文献

佐賀市教育委員会 1996「下和泉一本椎遺跡Ⅱ－4～9区の調査」『佐賀市文化財調査報告書73集』

金峰町教育委員会 1998「持躰松遺跡第1次調査」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書（10）』

小野　正敏 1982「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№.2

奈良国立文化財研究所 1962「平城宮跡発掘調査報告書Ⅱ」

奈良国立文化財研究所 1976「平城宮跡発掘調査報告書Ⅶ」

3．小　結

カヤノ第７次調査地点は、北方に延びる小丘陵の突端に近い部分にあたり、両側は小さな谷によって限られた約630㎡の狭い平坦地であった。しかしこの面積の中で、縄文時代、古代、そして近世と複数の時代において包含層・遺構が残されていた。そして事前には予期し得なかった縄文土器の様相、性格不明な土坑群、近世の畑跡、柱穴列（建物址？）等々の記録が得られた。

縄文時代について

縄文時代ではⅢ、Ⅳ層とした包含層中において、出土量はそれほど多くはないが各期の土器群が層位を異にし、また分布範囲も異にして存在していた。特に縄文早期押型文土器とその下層から出土した浅い指頭痕を特徴とする無文土器の一群との関係は注目されるところである。押型文土器は口縁部破片の様相からは早水台式期までは下らず、稲荷山式の中での多少の時間差と変差を持つものと位置づけておきたい。従って押型文土器の下層から出土した指頭痕の顕著な無文土器群は稲荷山式段階以前に属する可能性があろう。初期押型文土器の系譜と無文土器群の系譜、そして両者との関連について検討すべき資料と考えられる。

縄文前期後半とした第３群土器は、曽畑式後半以降のものと考えられるが、出土量が少なく明確に型式幅を認定することはできなかった。そのうえで、曽畑式後半以降の知見に新たなバラエティーを加えることができよう。

縄文後・晩期とした第４群土器はさらに出土量が少なくかつ時間幅も持っているが、礫集中、石器の分布等も認められ、何回かの人間活動の痕跡を認めることができる。特に礫集中については斜面の緩傾斜に沿って流出したような分布を示し、何等かの人為性を考えさせるが、時期そして遺構としての認定を行うことはできない状態であった。

縄文時代石器群はⅢ層中において石鏃、石匙、磨石、石皿等の定形石器が出土している。今回発見された縄文土器の時期に幅広く伴うものと考えられ、土器分布と重ね合わせることにより大略の時期を推定することは可能であろう。残念なことに下層の無文土器中には剥片類は共存するが定形石器は出土せず、この段階の石器様相は明らかとはなっていない。

いずれにせよ今回発見されたこれらの縄文時代遺物は明確な生活跡的状況を示していないが、石器群の共伴も含め近接した範囲内に生活跡が遺存していた可能性が高い。さらに下層の無文土器類については今後本地域から類例の発見が期待されるところである。

（戸田哲也）

古代の土坑について

Ⅲ層直上面を確認面とする炭化物を含む土坑Ｃ類及び壁面が被熱していた土坑ｂ類については、その形態と内容物から見て同一の目的を持って作られた可能性が高い。

同様の遺構についてはすでに本遺跡を含む太宰府市西域の篠振遺跡、宮ノ本第３・４次調査区において焼土坑とも呼ばれる遺構として認識されていた。篠振遺跡では尾根地形上に９基発見され、内４基中に焼骨片が遺存していた。焼壁の存在自体は９基中５基であるが、焼壁の遺存しない４基中２基からも焼骨片が出土しており、同報告書においては基本的に炭化物層の存在をもって全て同類とされた。この土坑の性格については焼骨の遺存状態、棺台と推定された台石、掛木と推定された木炭塊等々から火葬所としての推定を行われたうえで、墓としていたことは明確ではない点をもって「火葬施設」という区分がなされている。

本遺跡から検出された土坑ｂ、ｃ類も骨片こそ伴わないが同一地区であること、丘陵上の選地であることを念頭に篠振例と同種の遺構とする可能性があろう。また宮ノ本例は丘陵裾部の谷中央付近に位置しており、やはり骨片は検出されていない。

調査終了後本遺跡の４基の土坑を選んで自然科学上の分析を行った。分析結果は後段に収録しているが、この分析結果からは、リンの含有量が著しく低く、墓壙としての性格は否定的となろう。一方樹種同定からは仏教儀式にも用いられる榁（しきみ）が２基の土坑中に存在しているという結果が得られた。

以上、焼土坑と呼ばれる遺構の葬制的一面をとりあげて可能性を指摘してきたが、骨片の全く見られない点は依然疑問として残るところであり、炭化物層、焼壁という現象を派生させる他の要因についても考慮していかねばならないであろう。その意味においても今後の類例の発見に期待したい。

近世の遺構について

古代の火葬墓の上層に存在した畑跡については時期的に近世に下るものと考えられるが、畑の考古学が取りあげられる研究趨勢の中で新資料の追加となるものである。その畑地利用後に形成された柱穴列と円形土坑列についてはやはり時期、性格ともに不明といわざるを得ない。８間×４間の総柱状で、柱間平均が桁行約２ｍ、梁行1.8m、全体規模で東西16.35m、南北8.4mという配置を持ち、柱穴の間取りからは居宅とは考えられず、また生活に関わる遺物の出土も見られない。仮に柱穴列に上屋を架構したとすれば極めて巨大な建物が想定されることとなり、立地・景観から考えても疑問といわざるを得ない。また村落に伴う何等かの施設とするにも村落内に位置せず、幅狭い丘陵上に存在する点も不自然であろう。

以上の所見に立てばこの柱穴列は居住に関わる構造物とする可能性は低く、円形土坑列の構成も含めて現状では生業関連の施設と推定しておきたい。　（高橋勝広）

カヤノ遺跡第7次調査 出土遺物一覧表

S－1　PIT 5

須　恵　器	坏？

S－1　PIT 8

土　師　器	片

S－1　PIT10

国 産 陶 器	無釉陶器片

S－1　PIT13

須　恵　器	鉢×壺

S－1　PIT15

土　師　器	片

S－1　PIT19

瓦　　類	平瓦

S－1　PIT26

石　製　品	and-f

S－1　PIT27

土師質土器	擂鉢

S－1　PIT29

土　師　器	坏a系
肥前系陶磁器	片

S－1　PIT30

土　師　器	片

S－1　PIT31

須　恵　器	坏

S－1　PIT36

石　製　品	ob-f

S－1　PIT40

須　恵　器	坏？
師　恵　器	片

S－1　PIT52

土　師　器	坏？
国 産 陶 器	褐釉土管

S－1　PIT53

土　師　器	片

S－1　柱穴

土　師　器	片

S－2

須　恵　器	坏？

S－3

土　師　器	片
縄 文 土 器	粗製鉢

S－7

須　恵　器	坏？
土　師　器	坏、片
国 産 陶 器	唐津

S－8

土　師　器	片

S－9

須　恵　器	甕
土師質土器	擂鉢？
肥前系陶磁器	坏

S－11

土　師　器	鍋×釜、片
縄 文 土 器	鉢

S－12

土　師　器	鍋？、片

S－13　暗褐色土

須　恵　器	坏？
土　師　器	片
国 産 陶 器	土瓶
瓦　　類	片

S－13　褐色土

須　恵　器	坏？
土　師　器	片
土師質土器	焙烙
国 産 陶 器	土瓶

S－14　暗黄褐色土

須　恵　器	蓋3
土　師　器	片
石　製　品	ob-f

S－16　暗黄褐色土

須　恵　器	坏×皿、片
土　師　器	片

S－17　黄褐色土

須　恵　器	蓋3、壺×鉢
土　師　器	片

S－18　黄褐色土

須　恵　器	坏

S－25

須　恵　器	坏 IVb

S－26

須恵器	坏
土師器	片

S－28　暗褐色土

石製品	ob-f

S－31　暗褐色土

須恵器	坏？、片
金属製品	鉄製品

S－33

土師器	坏？、片
瓦類	片

S－38

縄文土器	精製浅鉢

S－39

須恵器	坏c3

S－40

土師器	片

S－41

土師器	坏a

S－42

須恵器	坏

S－50

須恵器	甕、坏a、坏、坏×皿、坏IVb、蓋3、高坏、片
土師器	甕、甕？、甕（角閃石入り）、坏a、坏、坏？、坏×皿、鍋？、片
瓦類	瓦片
石製品	and-f、ob-f
肥前系陶磁器	椀、皿、椀×皿、皿×瓶？
国産陶器	白釉瓶、擂鉢、褐釉壺×甕、褐釉甕？、鉢、
縄文土器	粗製鉢
金属製品	スラッグ、釘

表　土

須恵器	甕、壺、坏c3、坏IV、坏IVb、坏a、坏、坏？、蓋3、蓋c、蓋？、片
土師器	甕、片
石製品	ob-f、cb-f、and-f
土師質土器	焙烙、甕、鍋、擂鉢
肥前系陶磁器	瓶
国産陶器	緑釉椀、緑釉急須、紅皿、大甕、無釉
縄文土器	鉢、粗製鉢
金属製品	スラッグ
土製品	焼土塊

1トレンチ　茶褐色土

肥前系陶磁器	大皿、青磁椀

1トレンチ　青灰色土

須恵器	甕、片
国産陶磁器	土瓶、土管
金属製品	L字ボルト

浅褐色

須恵器	甕、坏蓋
土師器	坏a糸、片
石製品	ob-f
土師質土器	擂鉢
瓦質土器	大甕、丸椀

暗褐色土

須恵器	壺、坏、坏？、蓋2
土師器	片
瓦類	瓦
肥前系陶磁器	椀
国産陶器	黒釉坏×鉢
国産磁器	椀

黒色土

須恵器	甕、坏IV、坏c3、坏a糸、坏、坏×皿、坏？、蓋3、鉢？、焼台？、片
須恵器	甕、甕？、坏×皿、皿？、鍋、片
須恵器	坏Ⅲ、皿
須恵器	ob-f、ob-uf、and-f
須恵器	小坏、赤絵坏、
須恵器	緑釉椀？、瓶、擂鉢、褐釉
須恵器	粗製鉢
須恵器	スラッグ
須恵器	焼土塊

黄褐色土

須恵器	坏c3、坏、坏？、蓋？、片
土師器	甕×鍋、小皿a×糸、坏×Ⅲ糸、坏×皿、坏、片
龍泉窯系青磁	
石製品	ob-f、ob-uf、and-f、ob-ap、ob-rf、礫器
国産陶器	
縄文土器	押型文片、精製鉢、粗製鉢、浅鉢、片
金属製品	スラッグ
土製品	焼土塊

黄褐色土下部

石製品	ob-f、ob-uf、and-f、ob-ap
縄文土器	片

灰白色土

須恵器	坏片
土師器	片
石製品	ob-f、ob-uf、and-f、ob-コア、ob-p
縄文土器	押型文、後・晩期粗製鉢、片

正　誤　表

68頁の該当部分と差し替えてください。

黒色土

須　恵　器	甕、坏IV、坏c3、坏a糸、坏、坏×皿、坏？、蓋3、鉢？、焼台？、片
土　師　器	甕、甕？、坏×皿、皿？、鍋、片
須　恵　器	坏Ⅲ、皿
石　製　品	ob-f、ob-uf、and-f
肥前系陶磁器	小坏、赤絵坏、
国産陶磁器	緑釉椀？、瓶、擂鉢、褐釉
縄文時代	粗製鉢
金属製品	スラッグ
土　製　品	焼土塊

カヤノ遺跡第7次調査 遺物計測表

S－1（7SB001）PIT27　　単位＝cm、（ ）＝復元数値、現：現存高

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・土鍋	1	R001	1		現 3.6			○	○	○			

S－1（7SBI001）PIT19

器種	番号	R－	図番号	現存長	現存幅	厚さ	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
陶・瓦	1	R001	2	6.4	7.0	1.6				○	○		

S－7（7K007）暗青褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
陶・波皿	1	R001	1		現 1.8								

S－9（7SK009）

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
染磁・椀	1	R001	2		現 3.0								肥前系

S－13（7SK013）褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
陶・土瓶	1	R001	3		現 0.8	(7.0)		○					

S－13（7SK013）暗黄褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
陶・土瓶?	1	R001			現 1.5								緑釉

S－25（7ST025）

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
須・坏H身	1	R001	1	(10.0)	現 3.0	7.5				○	○		

S－26（7SK026）暗褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
須・坏c	1	R001	1		2.0	(7.0)			○		○		

S－31（7SK031）褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	現存長	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
鉄・釘	1	R001	1		5.0								

S－39（7SK039）黒褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
須・坏c	1	R001	1		現 2.4	(10.0)			○		○		

S－50（7SX050）

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・土鍋	1	R001	1		現 4.2								
染磁・皿	1	R002	2		現 1.3								肥前系

表　土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・鍋	1	R001	1		現 4.5			○	○				

浅褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
染磁・椀	1	R001	2		現 5.2	(3.6)							肥前系

暗褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
陶・皿	1	R001	3		現 1.8								折縁皿

Ⅳ．殿城戸遺跡第６次調査

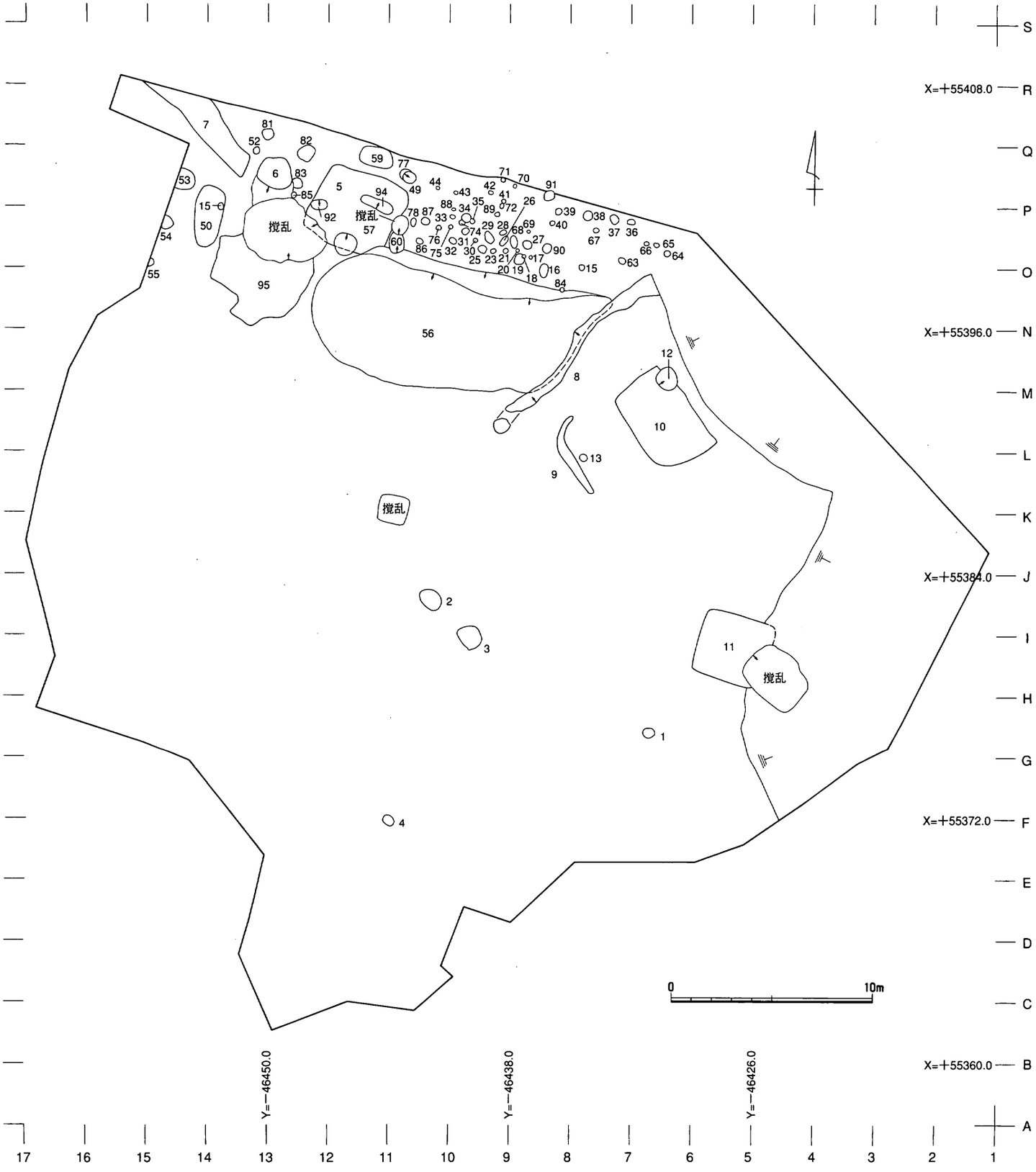
１．調査の方法と経緯

今回の調査は福岡県太宰府市佐野地区殿城戸に計画された太宰府市都市計画事業佐野土地区画整理に伴う埋蔵文化財調査として実施されたものである。

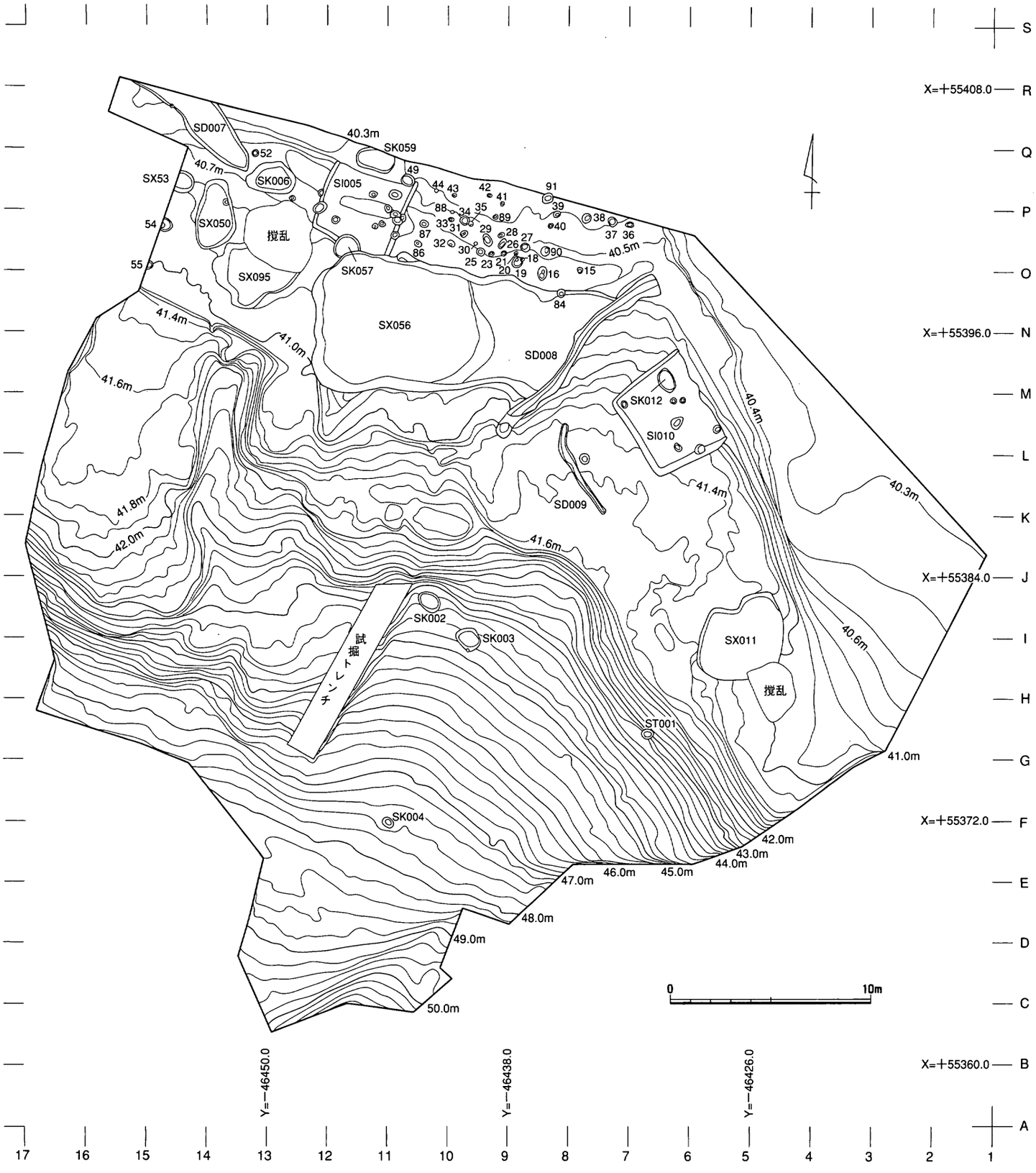
平成12年、事業の具体化に伴い、太宰府市文化財課から（株）玉川文化財研究所に発掘調査業務の委託がなされ、平成12年８月28日から同年10月31日までの約２ヶ月間本格調査（1,287㎡）を実施した。

対象区の調査前状況は南から北側に半島状にせり出した丘陵斜面地に竹林が繁茂しており、「殿城戸」という地名から中世城郭の存在が予測されていた地点である。

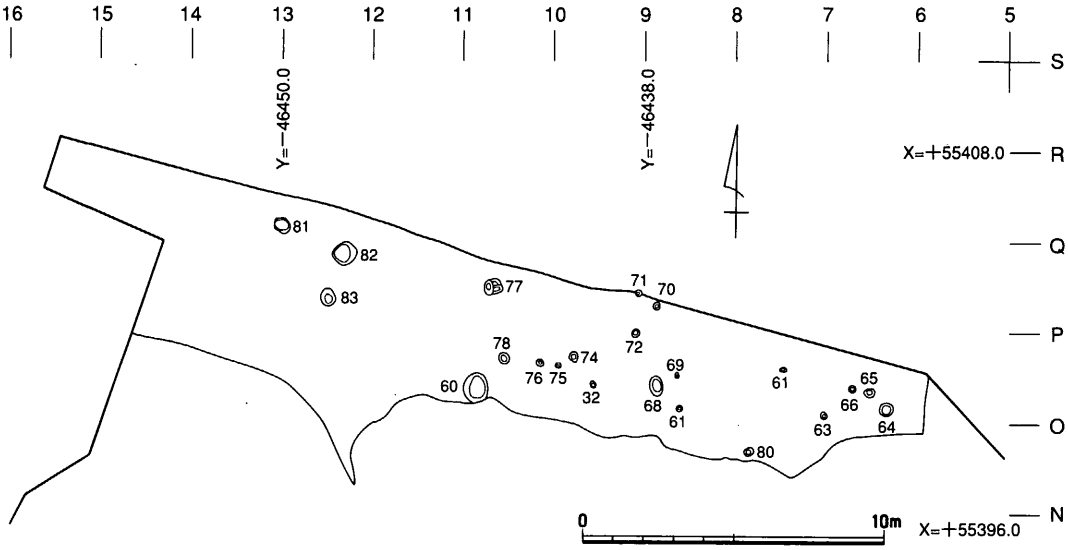
調査はまず、試掘トレンチを入れて、調査対象となる層位までの深度を確認した。その結果、現況の丘陵北側斜面部の約⅔は近・現代の造成による客土によるものであるとともに、丘陵の西部（Ｆ12・13、Ｇ11～16、Ｈ・Ｊ10～16、Ｋ～Ｍ13～16区）は重機によると思われる撹乱を受けていること、北～東部（Ｇ～Ｊ１～７、Ｋ～Ｑ６～12、Ｎ～Ｑ13～15区）客土下約１～３ｍには近世～古代の遺構・遺物を包蔵する平坦面が存在することが確認され、引き続き約１ヶ月間かけて重機により客土を排除し、旧地形となる丘陵斜面部と平坦面から古墳時代前期から近世に至る遺構群を検出した。遺構群の検出面は平坦面北側では２面に分かれ、第１面の調査を平成12年10月25日に、第２面（区）の遺構精査は平成12年10月30日に終了し、同年10月31日に太宰府市教育委員会による現地終了立ち会いを行い、発掘調査を終了した。



第40図　殿城戸遺跡第6次調査遺構略測図（1/250）



第41図　殿城戸遺跡第6次調査第1面遺構全体図（1/250）



第42図　殿城戸遺跡第6次調査第2面遺構全体図（1/250）

殿城戸遺跡第6次 遺構台帳

S－番号	遺構番号	種　別	古→新	位　置
1	6ST001	火葬墓		G 7
2	6SK002	土　坑		I 10
3	6SK003	土　坑		H・I 9
4	6SK004	土　坑		E・F 10・11
5	6SI005	住居址	5 →57	O・P 10～12
6	6SK006	廃棄土坑		P 12・13
7	6SD007	溝状遺構		P～R 13・15
8	6SD008	溝状遺構	56→ 8	L～N 6～9
9	6SD009	溝状遺構		K・L 7・8
10	6SI010	住居址	10→12	K～M 5～7
11	6SX011	不明遺構		H・I 4・5
12	6SK012	土　坑	10→12	M 6
13		ピット		K 7
14		ピット		N 8
15		ピット		N 7
16		ピット		N・O 8
17		ピット		O 8
18		ピット		O 8
19	6SX019	ピット		O 8
20		ピット		O 8
21		ピット		O 9
22		ピット		O 9
23		ピット		O 9
24		ピット		O 9
25		ピット		O 9
26		ピット		O 9
27		ピット		O 8
28	6SX028	ピット		O 9
29		ピット		O 9
30	6SX030	ピット		O 9
31		ピット		O 9
32		ピット		O 9・10
33		ピット		O 9
34		ピット		O 9
35		ピット		O 9
36		ピット		O 6
37		ピット		O 7
38		ピット		O 7
39		ピット		O 8
40		ピット		O 8
41		ピット		O 9
42		ピット		O 9
43		ピット		O 9
44		ピット		P 10
45		ピット		P 10
46		ピット		P 10
47		ピット		P 10

S－番号	遺構番号	種　別	古→新	位　置
48		ピット		P10
49		ピット		P10
50	6SX050	不明遺構		O・P13・14
51		ピット		O・P13
52		ピット		P13
53	6SX053	ピット		P14
54	6SX054	ピット		O14
55	6SX055	ピット		N・O14
56	6SX056	不明遺構		L～O 7～12
57	6SK057	土　坑	5→57→56	O11
58		欠　番		
59	6SK059	廃棄土坑		P10・11
60		ピット		P・Q10・11
61		ピット		O 8
62		ピット		O 9
63		ピット		O 7
64		ピット		O 6
65		ピット		O 6
66		ピット		O 6
67		ピット		O 7
68		ピット		O 9
69		ピット		O 8
70		ピット		P 8
71		ピット		P 9
72		ピット		O・P 9
73		ピット		Q14
74		ピット		O 9
75		ピット		O 9
76		ピット		O10
77		ピット		P10
78		ピット		O10
79		欠　番		
80		ピット		N 7
81		ピット		Q12・13
82		ピット		Q・P12
83		ピット		P12
84		ピット		N 8
85		ピット		P12
86		ピット		O10
87		ピット		O10
88		ピット		O 9
89		ピット		O 9
90		ピット		O 8
91		ピット		P 8
92		ピット		O・P11・12
93		ピット		P12
94		撹　乱		P11
95	6SX095	不明遺構		N・O12・13

2．調査の概要

殿城戸第6次調査で発見された遺構群の検出面は2面に分かれる。第1面遺構群は丘陵斜面部から調査区北側の平坦部までの範囲であり、調査前に厚く堆積していた客土、及びG～M4～10区の範囲で堆積していた包含層（暗褐色土）を除去した後、にぶい黄褐色土面で検出された。第2面遺構群はN～Q5～15区の範囲で第1面下約20cmの明黄褐色土面からの検出である。第1面で検出された遺構群は近代から古墳時代前期に帰属する火葬墓1基、住居跡2軒、土坑6基、溝状遺構3条、不明遺構3基、ピット群、第2面で検出された遺構群は古墳時代前期から古代に帰属するピット群である。火葬墓と土坑3基は丘陵斜面部から、他の遺構は調査区北側の丘陵下部平坦面から検出された。

以下、時期別に各遺構・遺物について説明する。

（1）古墳時代

1）竪穴住居跡

6SI005（第43図、図版22）

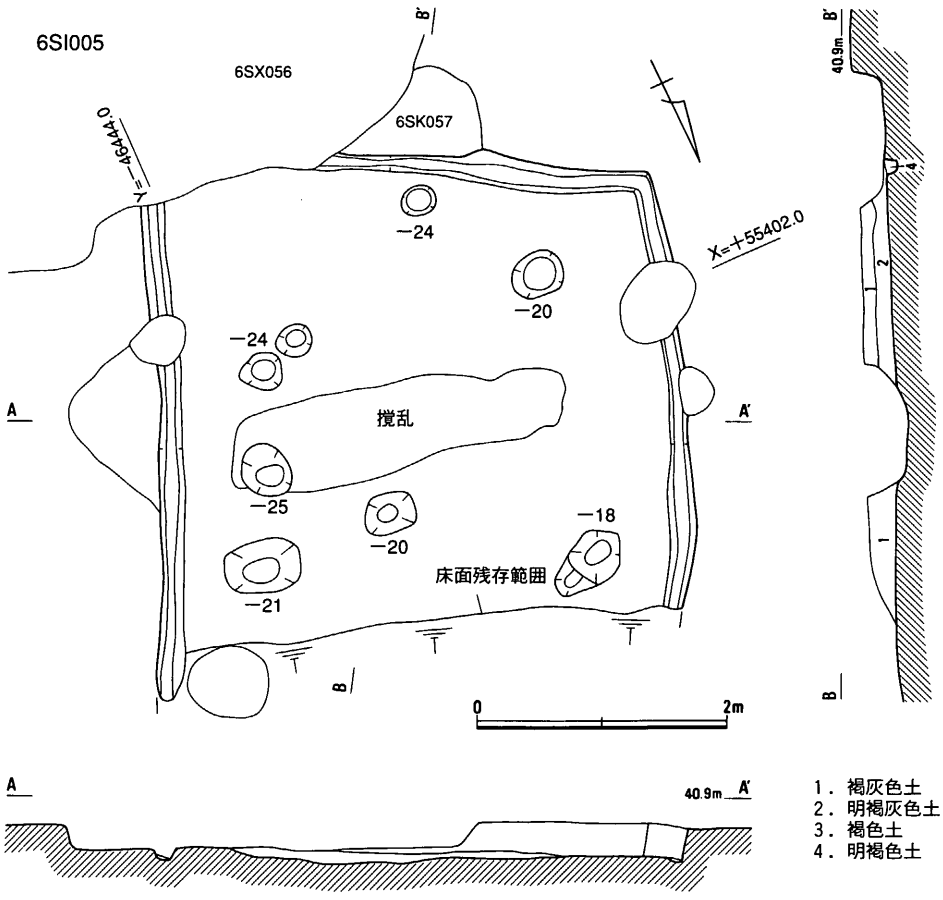
本住居跡は調査区北西部グリッドではO・P10～12区で検出された。住居跡北辺部を近・現代のブロック塀、中央部を撹乱により破壊されていた。6SX056・6SX057とは重複し、本住居跡が古い。平面形は隅丸方形を呈するものと推定され、壁溝は残存範囲で全周する。床面は直床式で顕著な硬化面は認められない。柱穴は略円形・楕円形を呈し、8基検出されている。規模は現存長軸で4.22m、短軸3.6m、最大壁高23cm、壁溝規模は幅14～27cm、深さ4cm前後、柱穴規模は径27～65cm、深さ18～25cmを測る。なお、第43図中に記してある柱穴の－値は床面からの深度値（単位＝cm）である。

6SI005出土遺物（第44図、図版32）

土師器 小形高坏（1） 復元口径8.7cm、底径9.6cm、器高5.2cmを測る。器形は脚部が「ハ」の字状に広がり、坏部は浅く外傾して直線的に立ち上がる。外面調整は摩耗が著しく観察し得ないが、脚部内面はナデ調整が施される。色調は橙色を呈し、胎土は細砂粒を含み脆い。焼成は良好である。

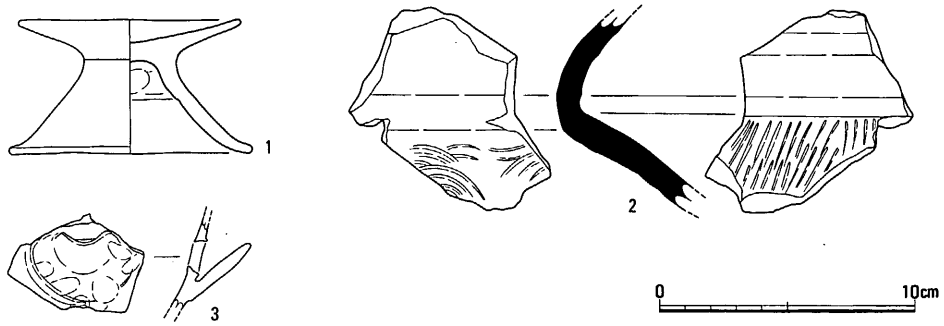
須恵器 甕（2） 現存高7.5cmを測る甕の頸部破片である。外面調整は縦方向タタキ、内面は同心円状の当て具痕跡を残す。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成は良好で硬く焼き締まる。

施釉陶器 片口鉢（3） 現存高3.5cmを測る片口鉢口縁部破片で、混入品である。片口部を貼り付け、指頭により圧着している。内外面には黒褐色を呈する薄い鉄釉が施釉される。胎土は黄橙色を呈し、緻密である。焼成は良好で硬質に焼き締まる。近世の製品である。



第43図　6SI005実測図（1/60）

6SI005 褐灰色土



第44図　6SI005出土遺物実測図（1/3）

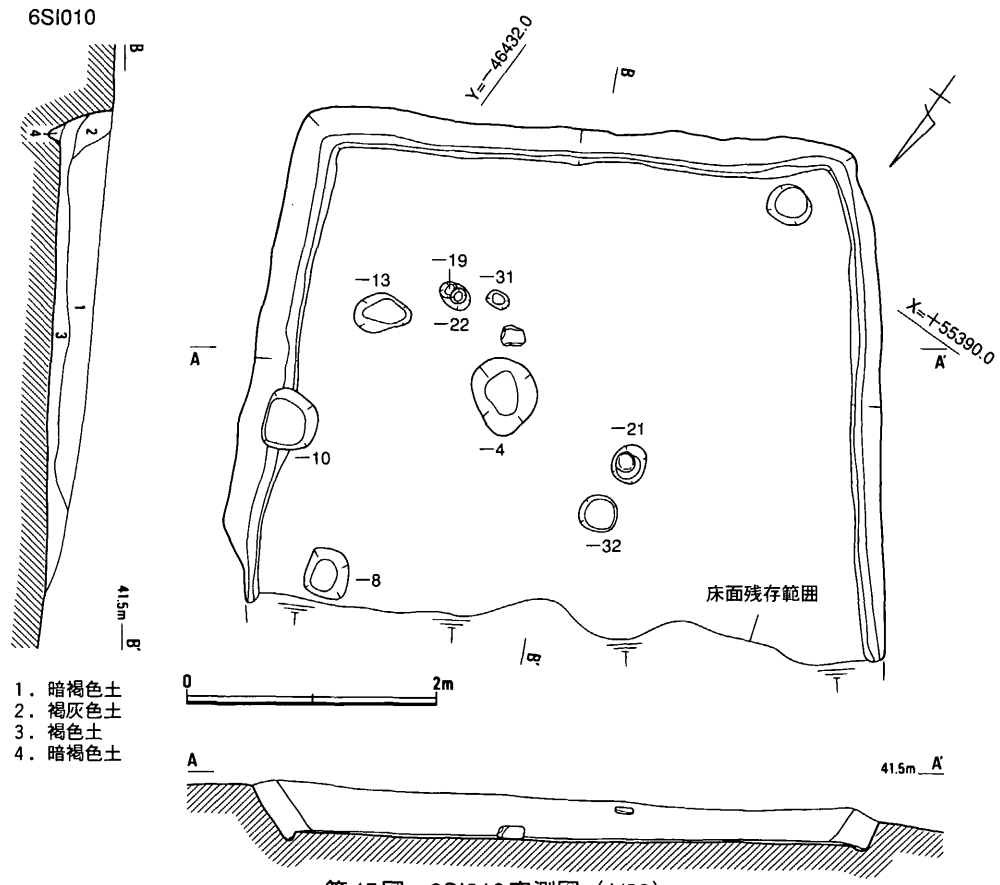
6SI010（第45図、図版22）

本住居跡は調査区北東部グリッドではK～M５～７区で検出された。住居北東辺は近・現代の削平を受け、破壊されていた。6SX012と重複し、本住居跡が古い。平面形は隅丸方形を呈し、壁溝が周囲に巡る。床面は直床式で顕著な硬化面は認められない。柱穴は８基検出され、略円形・楕円形を呈する。中央部では厚さ２cmほどの焼土範囲が検出された。浅い窪みを持ち、炉とも思われるが、地床面の被熱痕跡が認められないことから焼土範囲とした。住居跡の規模は現存長軸で4.91m、短軸3.91m、最大壁高40cm、壁溝規模は幅11～33cm、深さ10cm前後、柱穴規模は径18～46cm、深さ10～31cmを測る。なお、第45図中に記してある柱穴の－値は床面からの深度値（単位＝cm）である。

6SI010出土遺物（第46図、図版32）

須恵器

蓋（１）　口径11.6cm、器高4.3cmを測る。器形は天井部が平らで裾部は直立気味、口縁部

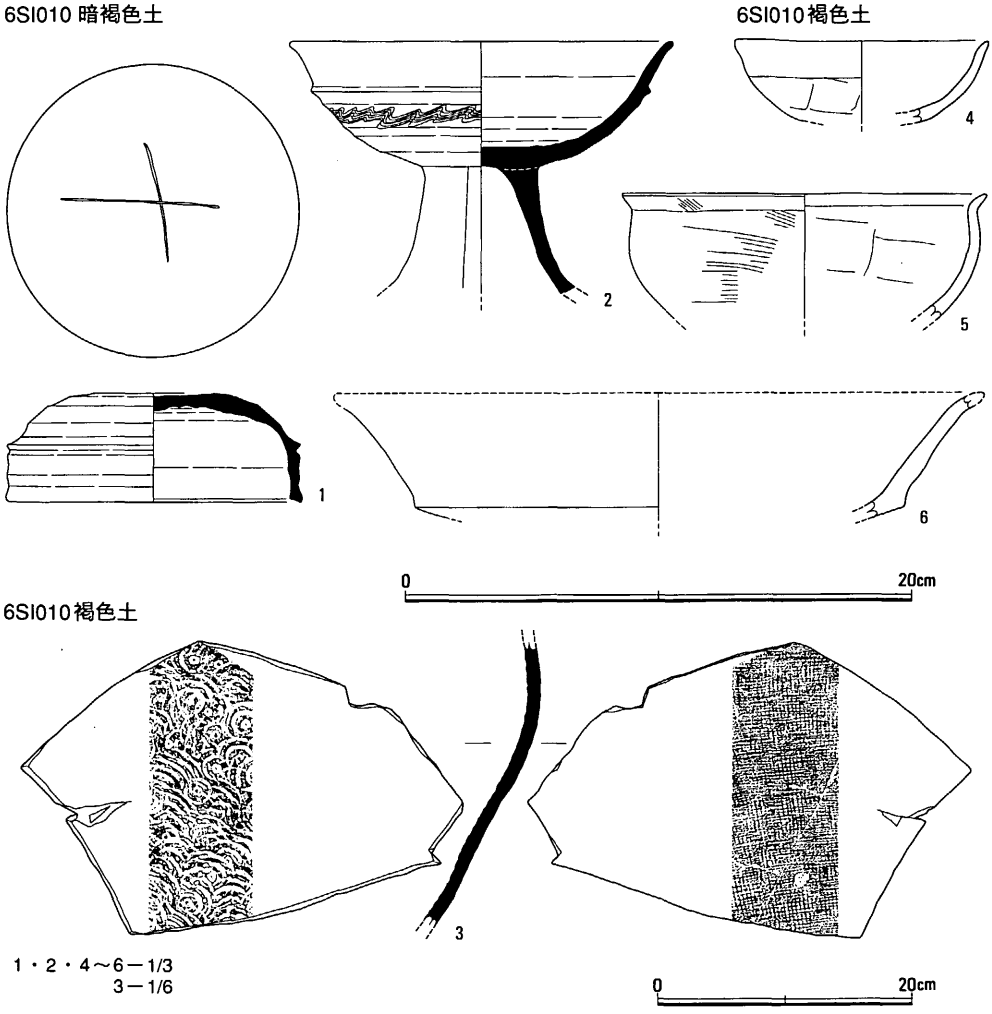


第45図　6SI010実測図（1/60）

は面取され平坦である。外面調整は基本として回転ナデ成形によるが、天井部は回転ヘラケズリ調整がなされ、頂部に十字状のヘラ記号が施される。胎土は緻密で色調は灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。器形的特徴からTK－208併行の製品と思われる。

高坏（２） 復元口径15.0cm、現存高10.0cmを測る。器形は坏部が丸く立ち上がり、口唇部がわずかに外反する。脚部は「ハ」の字状に広がり、長方形の透穴が１ヶ所残存している。調整は回転ナデ成形を基本とし、坏部外面下位には７本一単位の櫛描きによる波状文が施文される。胎土は緻密で色調は灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。器形的特徴からTK－208併行の製品と思われる。

甕（３） 現存高23cmを測る甕の胴部破片である。外面調整は格子目タタキ、内面は同心



第46図 6SI010出土遺物実測図（1/3・1/6）

円状の当て具痕跡を残す。胎土は緻密で灰色を呈し、焼成は良好で硬く焼き締まる。

土師器

坏（４・５） ４は復元口径10.0cm、現存高3.4cmを測る。器形は内湾気味に立ち上がる。調整は摩耗により観察し得ないが、一部にナデ調整が観察される。胎土は灰白色を呈し、細砂粒を含む。焼成は良好である。５は復元口径14.4cm、現存高5.0cmを測る。器形は内湾気味に立ち上がり、口唇部を外反させる。調整は外面ハケメ、内面はヘラナデ調整による。胎土は橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む。焼成は良好である。

高坏（６） 復元口径25.5cm、現存高5.0cmを測る高坏坏部の破片である。器形は外反して立ち上がり、下位に稜を持つ。調整は摩耗が著しく、観察し得ない。胎土は橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・金雲母を含む。焼成は良好である。

２）廃棄土坑

6SK006（第47図、図版23・24）

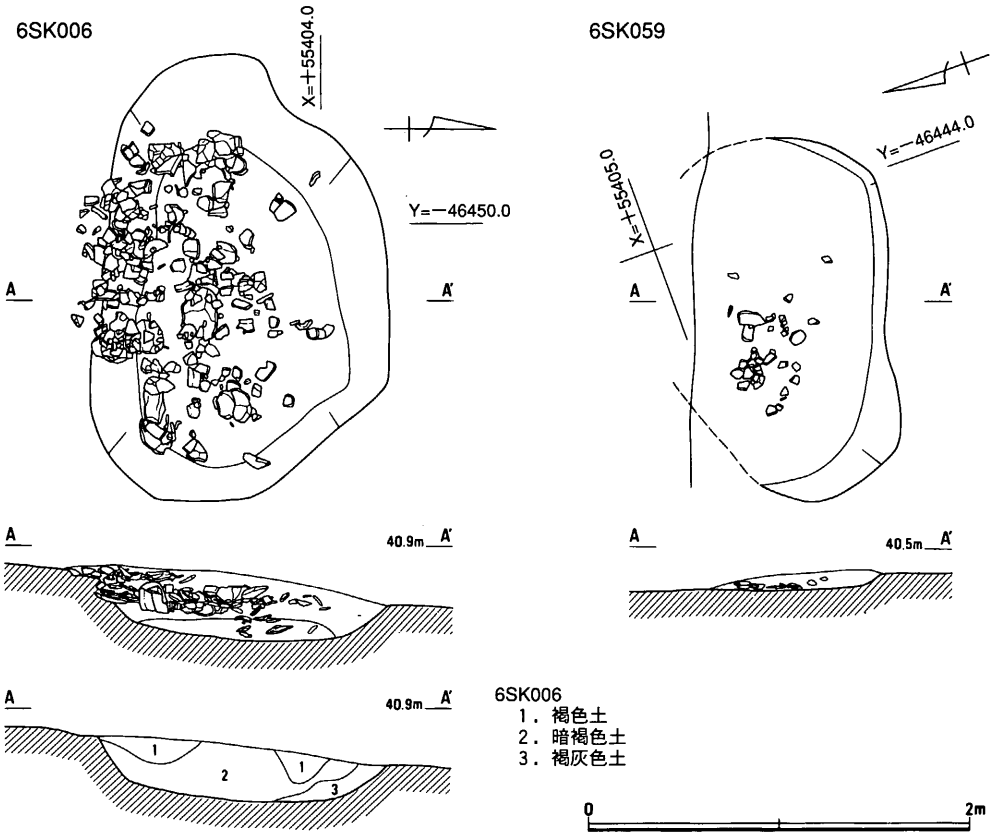
本址は調査区北部平坦面、グリッドではＰ12・13区で検出された。6SD007とは北西方向で隣接しており、検出面は北側に傾斜している。殿城戸７次調査において検出された方形区画溝（7SD100）に伴う廃棄土坑と同一の性格を有する遺構である。土坑内からは破砕した多数の土師器（布留式甕・山陰系二重口縁壺・庄内系甕）が密集して出土しているが、多くは布留式甕で占められている。なお、覆土は褐色土・暗褐色土・褐灰色土の３層に分層される。

平面形は不整楕円形を呈し規模は長軸235cm、短軸153cm、深さ29cmを測る。

6SK006出土遺物（第48～51図、図版33～35）

土師器

壺（１～５） １は現存高16.0cmを測る甕の胴部上位から頸部破片である。器形は球形胴から頸部は「く」の字状を呈する。外面調整は胴部上位に縦位のハケメが残り、以下をヘラナデ調整、内面は輪積み痕跡が明瞭に残り、部分的に指ナデ調整が施される。胎土はにぶい黄橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子を含み緻密である。焼成は良好である。２は復元口径18.8cm、最大胴径32.8cm、現存高33.1cmを測る。器形は球形胴から頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部を丸く収める。外面調整は胴部に縦位のハケメ・ヘラナデ調整、内面には頸部付近に輪積み痕跡が残り、以下にハケメ→ケズリ調整が施される。胎土は明黄褐色を呈し、細砂粒・赤色粒子・白色粒子・金雲母を含み緻密である。焼成は良好である。３は口径17.4cm、胴部最大径28.0cm、現存高21.5cmを測る。器形は球形胴から頸部が「く」の字状に屈折し、口縁部中位ではわずかに肥厚しながら、口唇部を丸く収める。外面調整は胴部に横位・斜位のハケメ調整、口縁部には横ナデ、内面には胴部ヘラナデ、頸部・口縁部付近には横ナデ・指ナ

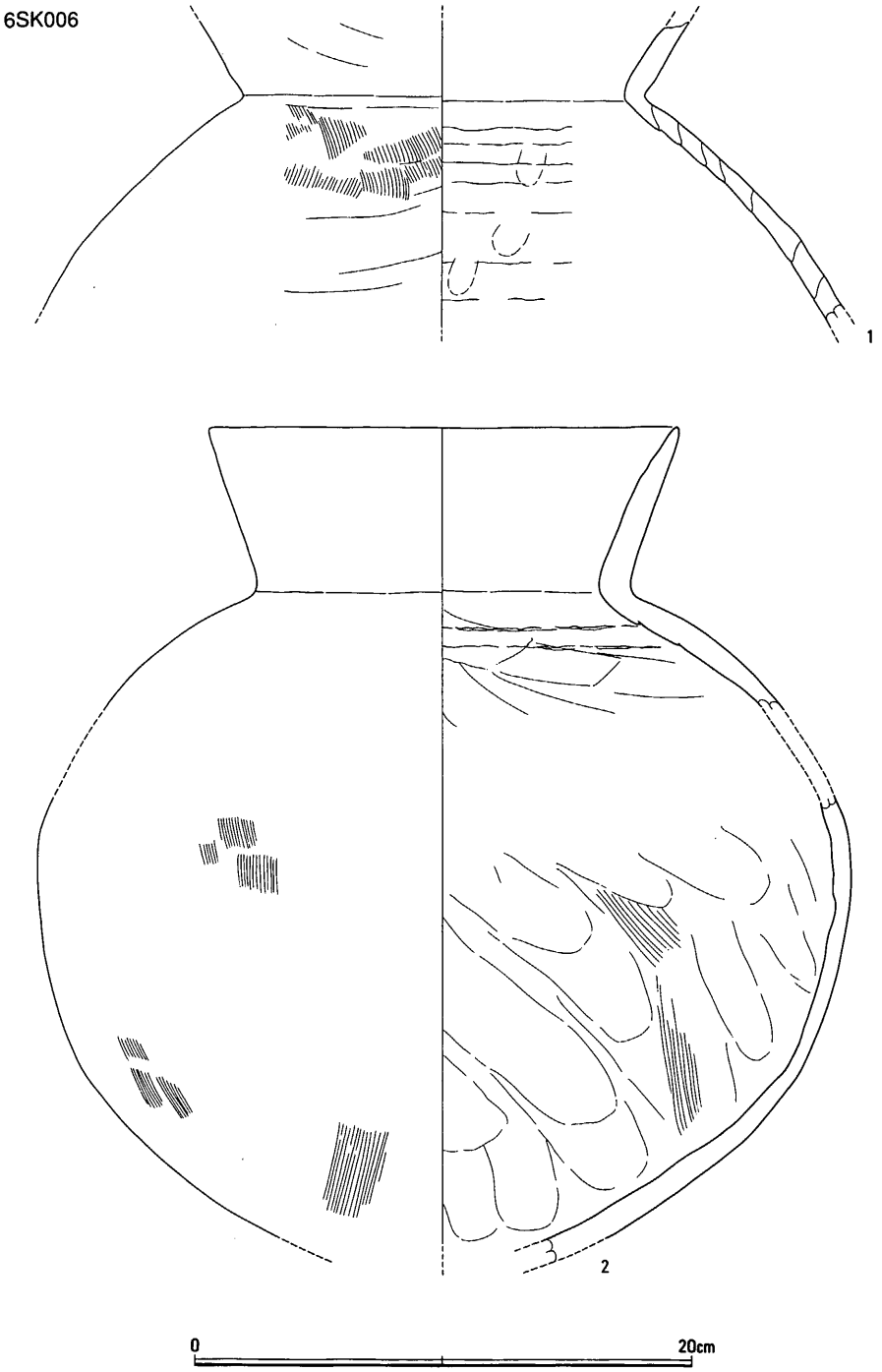


第47図　6SK006・059実測図（1/40）

デ調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、砂粒・赤色粒子・白色粒子・小礫を含む。焼成は良好である。４は口径18.4cm、胴部最大径28.7cm、現存高31.7cmを測る。器形は球形胴から頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部を丸く収める。外面調整は胴部に縦位・斜位のハケメ調整、口縁部には横ナデ、内面には胴部ハケナデ、頸部・口縁部下端には指頭による調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土は浅黄橙色を呈し、砂粒・粗砂粒を含む。焼成はやや軟質である。５は口径16.8cm、胴部最大径30.0cm、現存高25.0cmを測る。器形は球形胴から頸部が緩い「く」の字状に屈折し、口唇部を丸く収める。

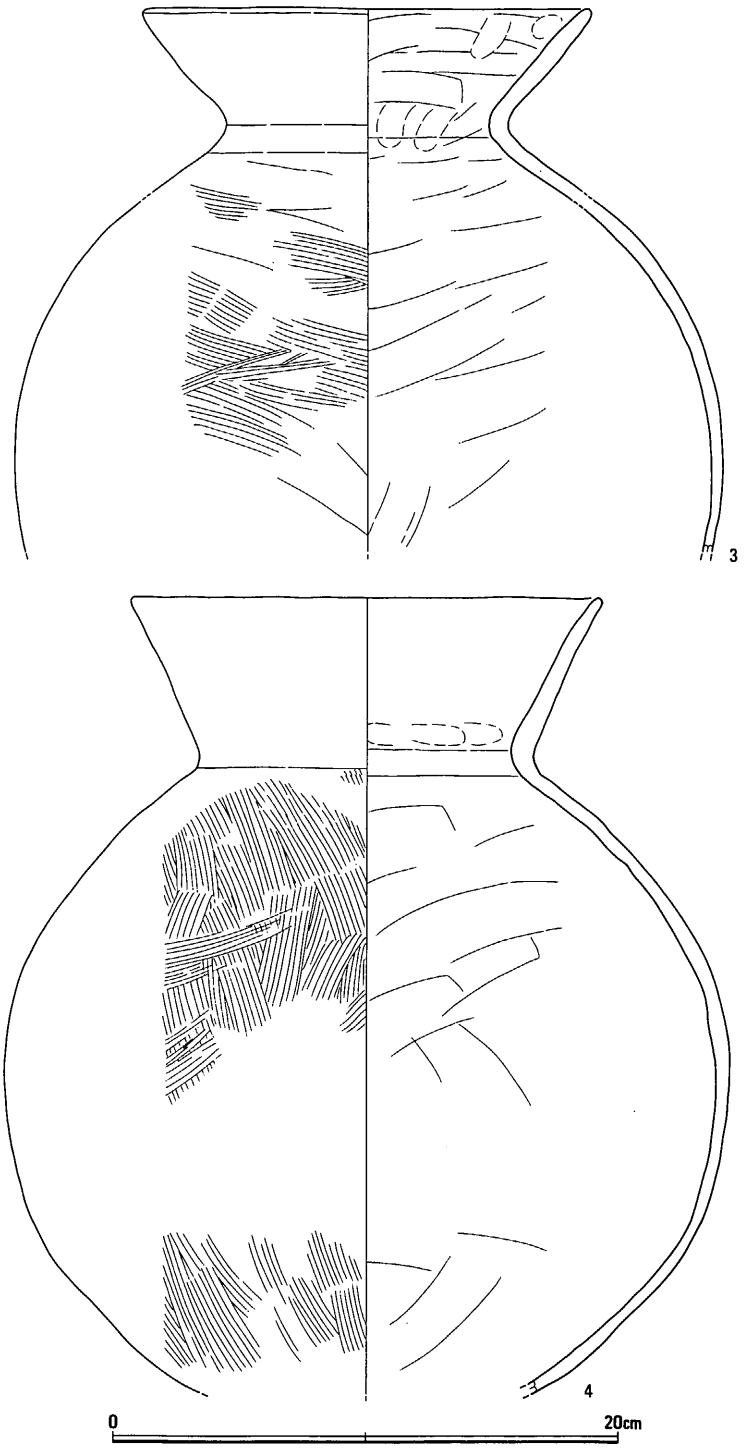
外面調整は胴部に斜位のハケメ、口縁部には横ナデ、内面には胴部ハケナデ、口縁部には横ナデによる調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、砂粒・粗砂粒を含む。焼成はやや軟質である。

甕（６～16）　６は復元口径27.0cm、現存高4.5cmを測る頸部以上の破片である。器形は頸部が短く「く」の字状に屈折し、口唇部を平坦に仕上げている。外面調整は胴部・口縁部へ

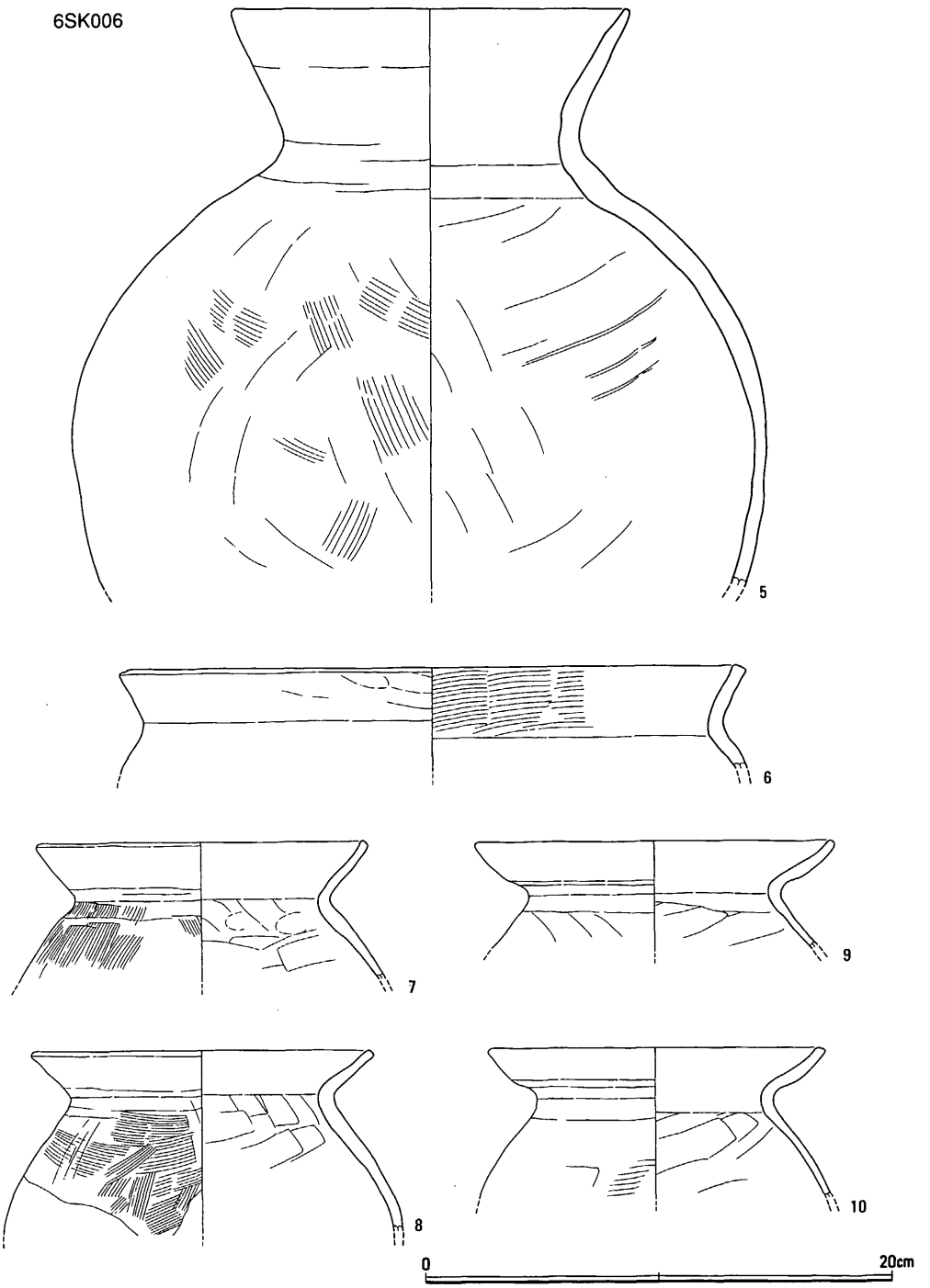


第48図　6SK006出土遺物実測図１（1/3）

6SK006

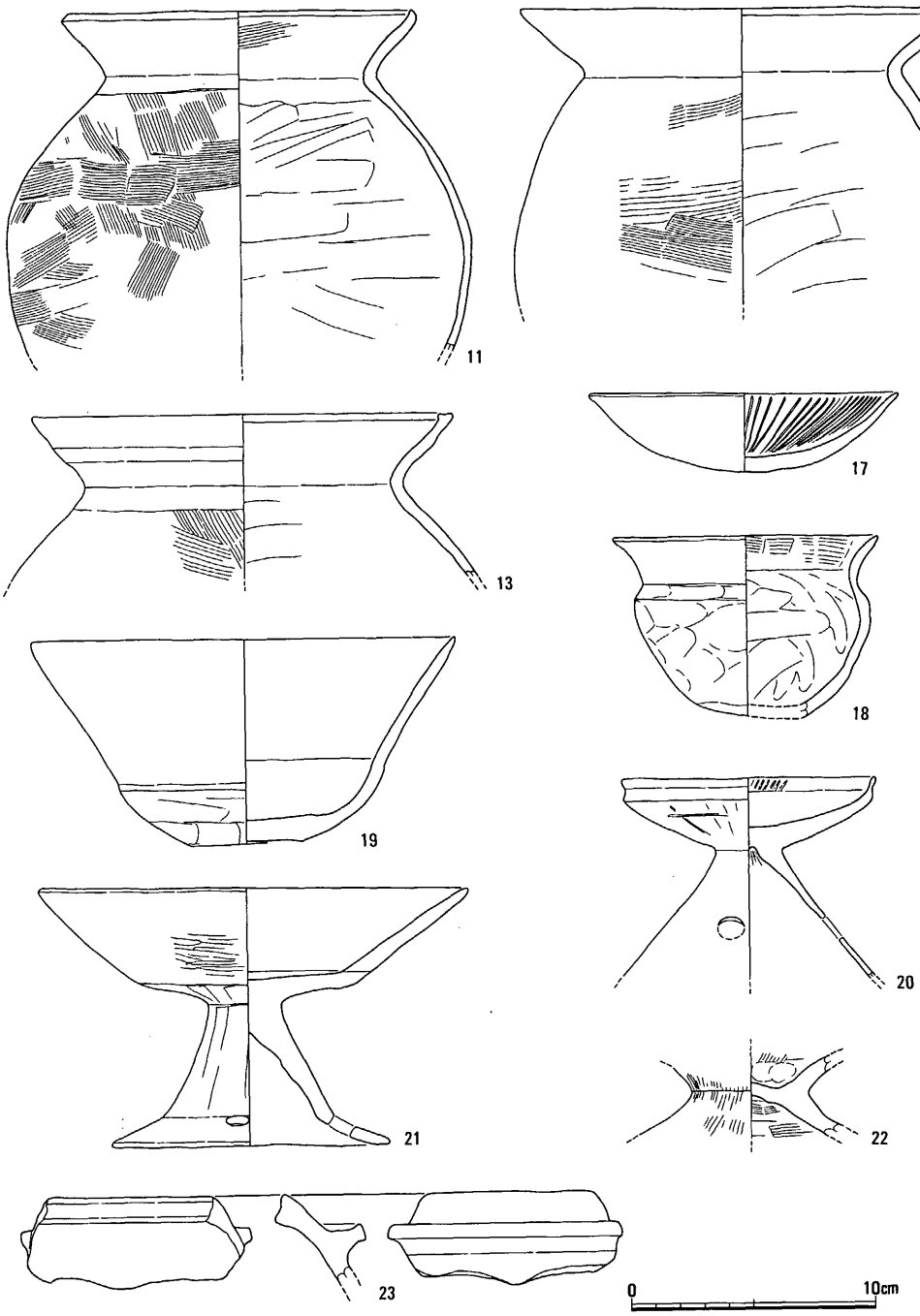


第49図　6SK006出土遺物実測図２（1/3）



第50図　6SK006出土遺物実測図３（1/3）

6SK006



第51図　6SK006出土遺物実測図4 （1/3）

ラナデ、内面には口縁部に横ハケメ調整が施されている。胎土は浅黄橙色を呈し、粗砂粒・白色粒子・黒雲母を含む。焼成は良好である。7は復元口径14.0cm、現存高6.0cmを測る胴部上位の破片である。頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部を丸く収める。外面調整は胴部に縦位のハケメ、口縁部には横ナデ、内面には胴部に横位のヘラナデ、口縁部には横ナデによる調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、砂粒・赤色粒子を含む。焼成はやや軟質である。8は復元口径14.4cm、現存高7.9cmを測る胴部上位以上の破片である。頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部を丸く収める。外面調整は胴部に斜位のハケメ、口縁部には横ナデ、内面には胴部に斜位のヘラナデ、頸部には縦位のナデ、口縁部には横位のナデによる調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、砂粒・赤色粒子・金雲母を含む。焼成はやや軟質である。9は復元口径15.2cm、現存高4.7cmを測る肩部以上の破片である。頸部は「く」の字状に屈折し、口縁部は中位で肥厚しながら、口唇部はやや平坦に仕上げる。内外面調整は肩部にヘラナデ、口縁部には横ナデ調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土は橙色を呈し、砂粒・赤色粒子を含む。焼成は良好である。10は復元口径14.0cm、現存高6.5cmを測る肩部以上の破片である。頸部は「く」の字状に屈折し、口縁部は中位で肥厚しながら口唇部をやや平坦に仕上げる。外面調整は肩部にハケメ、口縁部には横ナデ調整、内面には肩部にヘラナデ、口縁部には横ナデ調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土はにぶい橙色を呈し、砂粒・粗砂粒を含む。焼成は良好である。11は口径14.0cm、胴部最大径19.0cm、現存高14.0cmを測る胴部下位以上の破片である。器形は球形胴から頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部を上方にわずかにつまみ上げる。

外面調整は胴部に縦位・横位・斜位のハケメ、口縁部には横ナデ、内面には胴部ヘラナデ、口縁部には横ナデによる調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、粗砂粒・金雲母を含む。焼成は良好である。12は口径17.8cm、胴部最大径18.5cm、現存高12.1cmを測る胴部下位以上の破片である。器形は球形胴から頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部は平坦に仕上げられ、内側にわずかに突出する特徴を持つ。外面調整は胴部に横位のハケメ、口縁部には横ナデ、内面には胴部ヘラナデ、口縁部には横ナデによる調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、砂粒・赤色粒子・白色粒子を含み、焼成は良好である。13は復元口径17.0cm、現存高6.7cmを測る胴部上位以上の破片である。

器形は頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部は平坦に仕上げられ、内側にわずかに突出する特徴を持つ。外面調整は胴部に縦位・斜位のハケメ、口縁部には横ナデ、内面には胴部ヘラナデ、口縁部には横ナデによる調整が施され、器壁は薄く作られている。胎土はにぶい黄橙色を呈し、砂粒・黒色微粒子を含む。焼成は良好である。14～16（図版35）は庄内系のタタキ甕胴部破片である。外面には粗いタタキ目が残り、胎土は橙色・灰色を呈する。胎土は

砂粒を含み、焼成は良好である。

坏（17） 口径12.5cm、器高3.2cmを測る丸底坏である。外面調整は摩耗により観察し得ないが、内面には放射状のミガキ調整が観察される。胎土は橙色を呈し、細砂粒・微砂粒を含み、焼成は良好である。

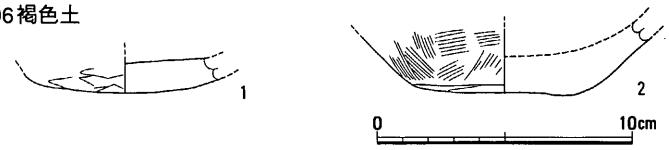
小形丸底壺（18） 口径10.2cm、器高6.7cmを測る。器形はやや扁平な球形胴から頸部は「く」の字状に外反する。内外面に横ヘラミガキ調整が施される。胎土はにぶい橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子を含み、焼成は良好である。

小形広口壺（19） 口径17.2cm、底径4.6cm、器高8.5cmを測る。器形は底部が平底で、わずかに球形を呈する胴部から口縁部は朝顔形に外反して立ち上がる。調整は摩耗が著しいため観察し得ない。胎土は橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・白色微粒子・金雲母を含み、焼成は良好である。

小形器台（20） 復元口径10.2cm、現存高8.2cmを測る。器形は坏部は浅く広がり、口縁部で直立気味に立ち上がる。脚部は「ハ」の字状に広がり円形の透孔が2ヶ所遺存している。脚部の内側にも穿孔を意識したような窪みが見られるが、脚部から坏部にかけての穿孔はなされていない。調整は内外面ヘラミガキ調整が施されている。胎土は黄橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・金雲母を含み、焼成は良好である。

高坏（21・22） 21は口径12.4cm、復元底径11.2cm、器高10.5cmを測る。器形は坏部は浅く直線的に外傾し、坏部下位に稜を持つ。脚部は「ハ」の字状に広がり、円形の透穴が3ヶ所遺存している。調整は坏部内外面はヘラミガキ、脚部内外面にはヘラナデ調整が施されている。胎土は橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・白色粒子を含み、焼成は良好である。22は現存高3.3cmを測る。脚部器形は「ハ」の字状に浅く広がり、坏部は外傾する。調整は外面がハケメ→ナデ、内面は坏部がハケメ→指頭調整、脚部にはハケメ調整が施されている。胎土は灰黄色を呈し、細砂粒を含む。焼成は良好である。

弥生土器 甕（23） 現存高3.8cmを測る。弥生中期須玖式期の甕の口縁部破片であり、混入品である。器形は口縁部直下に断面矩形の突帯が巡り、口縁部は平坦に仕上げられる。調整は、内外面共に横ナデ調整が施されており、胎土は橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む。焼成は良好である。



第52図 6SK006出土遺物実測図5（2/3・1/3）

6SK006褐色土出土遺物（第52図、図版36）

土師器 甕（1・2） 1は現存高1.4cmを測る丸底甕の底部破片である。外面調整はヘラナデ、内面には指頭調整が施されている。胎土はにぶい橙色を呈し、砂粒・細砂粒・赤色粒子を含む。焼成は良好である。2は底径7.2cm、現存高2.4cmを測る平底甕の底部破片である。

外面調整は底部をヘラナデ、胴部を横位・縦位のハケメ調整が施されているが、内面については剥離が激しく調整は観察し得ない。胎土は浅黄橙色にぶい橙色を呈し、砂粒・細砂粒・赤色粒子を含む。焼成は良好である。

6SK006暗褐色土出土遺物（第53図、図版36）

土師器 甕（1・2） 1は口径14.0cm、胴部最大径19.0cm、現存高14.0cmを測る肩部以上の破片である。器形は球形胴から頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部を上方にわずかにつまみ上げる。摩耗が著しく、内外面に縦位のハケメ調整がわずかに観察されるにすぎない。

器壁は薄く作られており、胎土は浅黄色を呈し、砂粒・小礫を含む。焼成は良好である。

2は復元口径18.0cm、現存高6.1cmを測る胴部上位以上の破片である。器形は頸部が「く」の字状に屈折し、口唇部は平坦に仕上げられ、内側にわずかに突出する特徴を持つ。内外面調整は摩耗が著しいため観察し得ないが、器壁は薄く作られている。胎土は橙色を呈し、砂粒・粗砂粒・黒色微粒子を含む。焼成は良好である。

壺（3） 復元口径19.4cm、現存高5.4cmを測る山陰系の二重口縁壺の口縁部破片である。

器形は朝顔形に広がり、下端に段が付く。内外面調整は摩耗が著しいため明瞭には観察し得ないが、ヘラナデ調整が施されていると思われる。胎土はにぶい橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子を含む。焼成は良好である。

坏（4） 口径14.7cm、器高3.2cmを測る丸底坏である。内外面にはヘラナデ調整が施される。胎土はにぶい橙色を呈し、砂粒・赤色粒子・金雲母を含み、焼成は良好である。

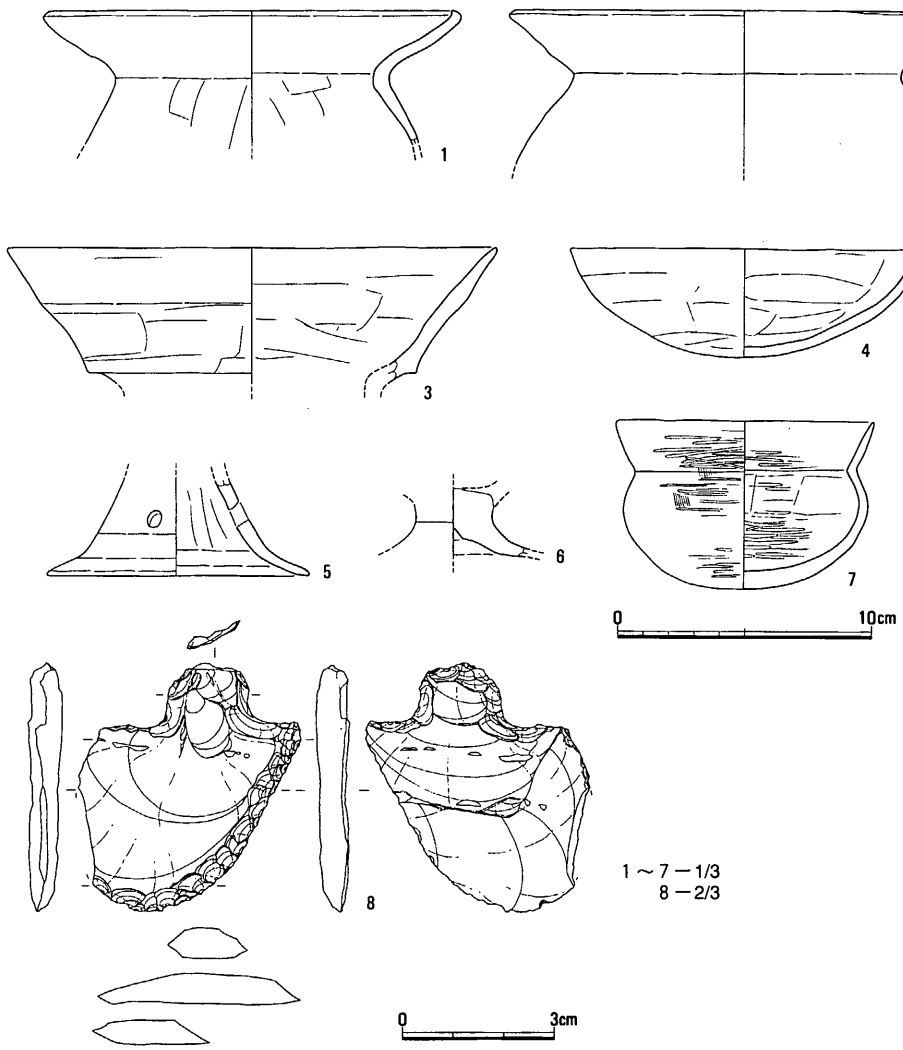
高坏（5） 底径10.4cm、現存高3.9cmを測る。脚部器形は「ハ」の字状に広がり、透孔が3ヶ所穿たれる。調整は摩耗が著しいため観察し得ない。胎土はにぶい赤褐色を呈し、細砂粒を含む。焼成は良好である。

小形器台（6） 現存高2.1cmを測る脚部破片である。器形は脚部は「ハ」の字状に低く広がり、脚部の内側に穿孔を意識したような窪みが見られる。調整は摩耗が著しいため観察し得ない。胎土は橙色を呈し、砂粒・細砂粒を含み、焼成は良好である。

小形丸底壺（7） 口径10.6cm、器高7.5cmを測る。器形は歪んだ球形胴から頸部は緩いの字状に外反する。外面調整は胴部が指ナデ、口縁部が横ナデ、内面には胴部がヘラナデ・指ナデ、口縁部にはハケメ→横ナデ調整が施される。胎土はにぶい黄橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・金雲母を含み、焼成は良好である。

石器（8） 本址からは1点の石器が出土した。所属時期は縄紋時代で、混在遺物となる。縦型の石匙であり、つまみ部は幅広で、身部は三角形状を呈する。つまみ部は両面加工によって作出され、刃部は右側縁から下端にかけて片面の二次加工によって作出される。左側縁の状態は欠損するため詳細は不明だが、残存する裏面縁辺に微細な剥離痕が認められる。素材剥片は剥離面を打面とし、正面には主要剥離面が全面に残り、裏面のネガティブな剥離面はそれと同一の打撃方向のものと90°異なる方向のものが見られる。

6SK006暗褐色土



第53図　6SK006出土遺物実測図6（2/3・1/3）

6SK059（第47図、図版25）

本址は調査区北部平坦面、グリッドではP・Q10・11区で検出された。北部及び上面を現代の削平・撹乱により破壊されている。土坑内からは土師器が一定数密集して出土しており、遺物の出土状況、土坑の規模等から6SK006との類似性が指摘されよう。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸192cm、短軸101cm、深さ18cmを測る。

6SK059出土遺物（第54図、図版36）

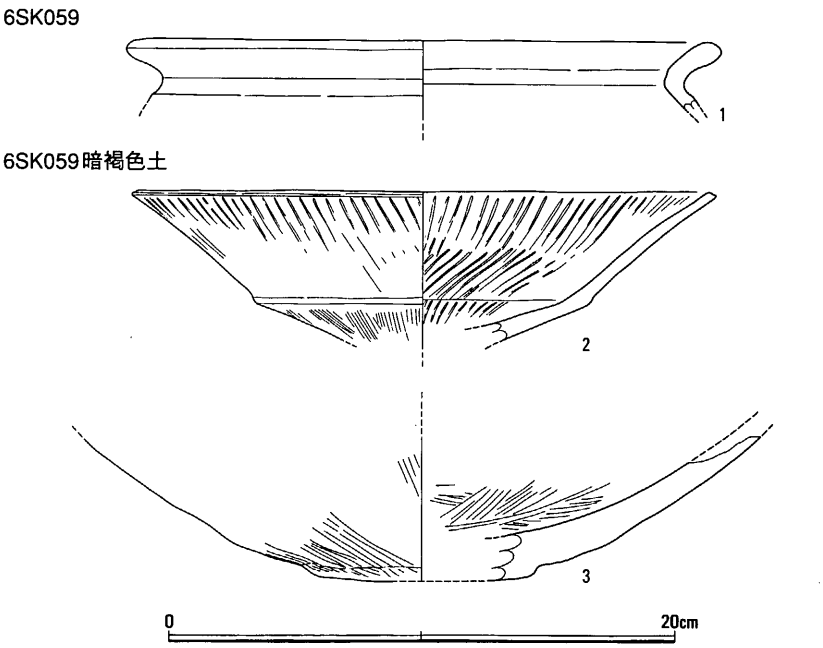
土師器

甕（1・3） 1は復元口径22.8cm、現存高2.8cmを測る甕の頸部から口縁部破片である。器形は「く」の字状に短く外反し、口縁部は肥厚する。調整は摩耗が著しく観察し得ない。

胎土は明黄褐色を呈し、白色細砂粒・赤色粒子・金雲母を含み、焼成は良好である。3は復元底径9.0cm、現存高5.8cmを測る甕底部下半の破片である。器形は底部が小さく体部は丸く立ち上がる。調整は内外面にハケメ調整が施される。胎土は浅黄橙色を呈し、赤色粒子・白色粒子・金雲母を含む。焼成は良好である。

高坏（2） 復元口径23.2cm、現存高6.0cmを測る高坏坏部の破片である。器形は外反して立ち上がり、下位に稜を持つ。調整は内外面に荒いハケメと放射状のミガキ調整が施される。

胎土は橙色を呈し、砂粒・赤色粒子・白色粒子・金雲母を含む。焼成は良好。

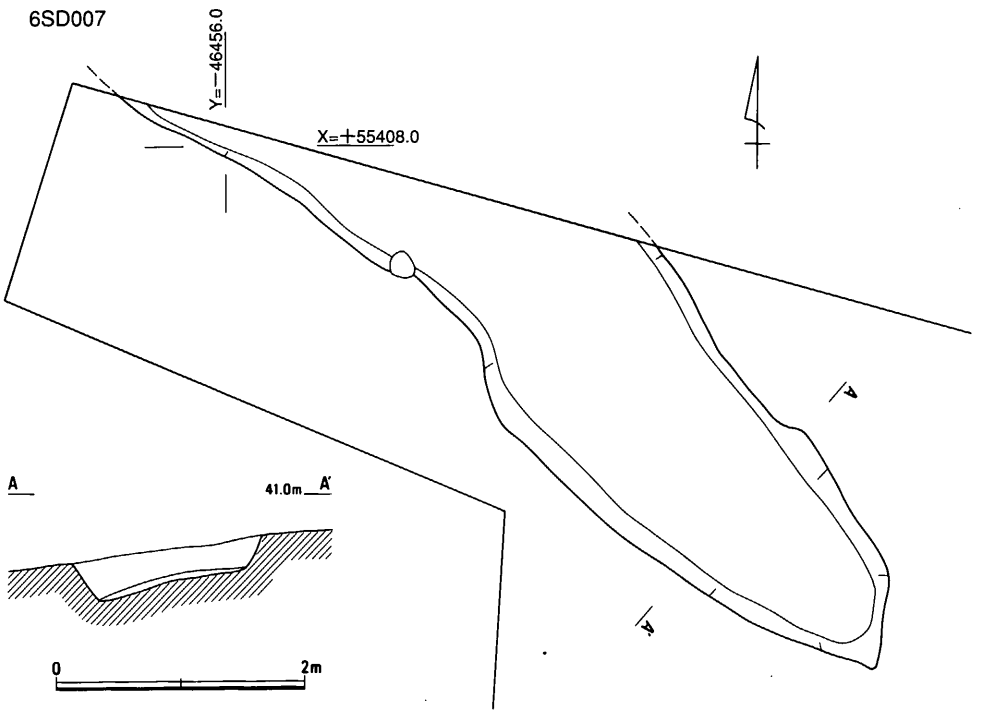


第54図　6SK059出土遺物実測図（1/3）

3）溝

6SD007（第55図、図版25）

本址は調査区北西端平坦面、グリッドではＰ～Ｒ－13～15区で検出された。走行方向は北西から南西方向に走行する。北部は殿城戸遺跡第７次調査区に向かって延びており、第７次調査における7SD105と同一の遺構である。加えて南東部では6SK006と隣接しており、互いに有機的関係の基に機能していたものと推定されるほか、第７次調査で検出された方形区画溝（7SD100）との関係が注意されよう。断面形は逆台形を呈し、底面は北側に傾斜している。規模は総延長5.08m、最大幅172cm、深さ34cmを測る。



第55図　6SD007実測図１（1/60）

（2）古　代

1）火葬墓

6ST001（第56図、図版26）

本址は調査区丘陵斜面西南部グリッドではＧ７区で検出された。火葬墓の上面は北方向傾斜側に向かって上面が一部流出しており、埋納されていた火葬蔵骨器の胴部上位以上及び蓋に使用されていた土師器坏は破片となって散乱し、火葬蔵骨器内の炭化物・骨片類も斜面側

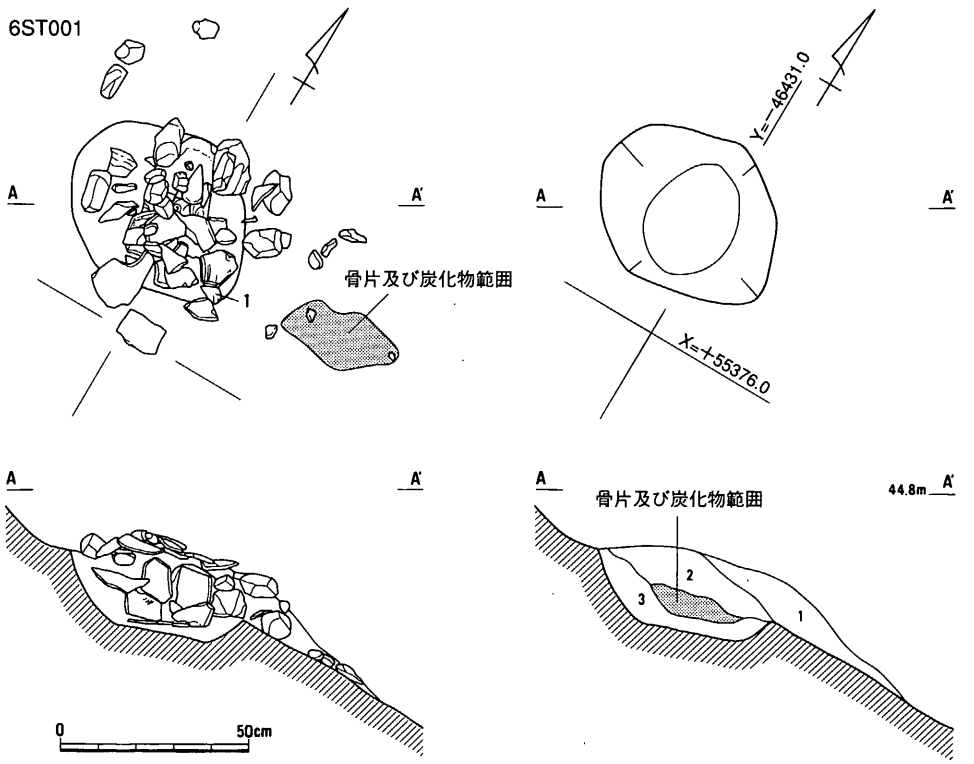
に一部流出していた。検出面から火葬蔵骨器底部までの深度は約20cmを測り、蔵骨器の周囲には10～15cm大の角礫が数個据えられていた。火葬蔵骨器が埋納されていた土坑の平面形は略楕円形を呈し、規模は長径55cm、短径45cm、深さ22cmを測る。

火葬人骨は、灰化した骨は少なく、黒色化した細かい骨片が大半を占め、人骨の総重量は510ｇを測る。火葬墓の時期は蔵骨器から９世紀前半（大宰府ⅥＢ期）に比定される。

6ST001出土遺物（第57図、図版37）

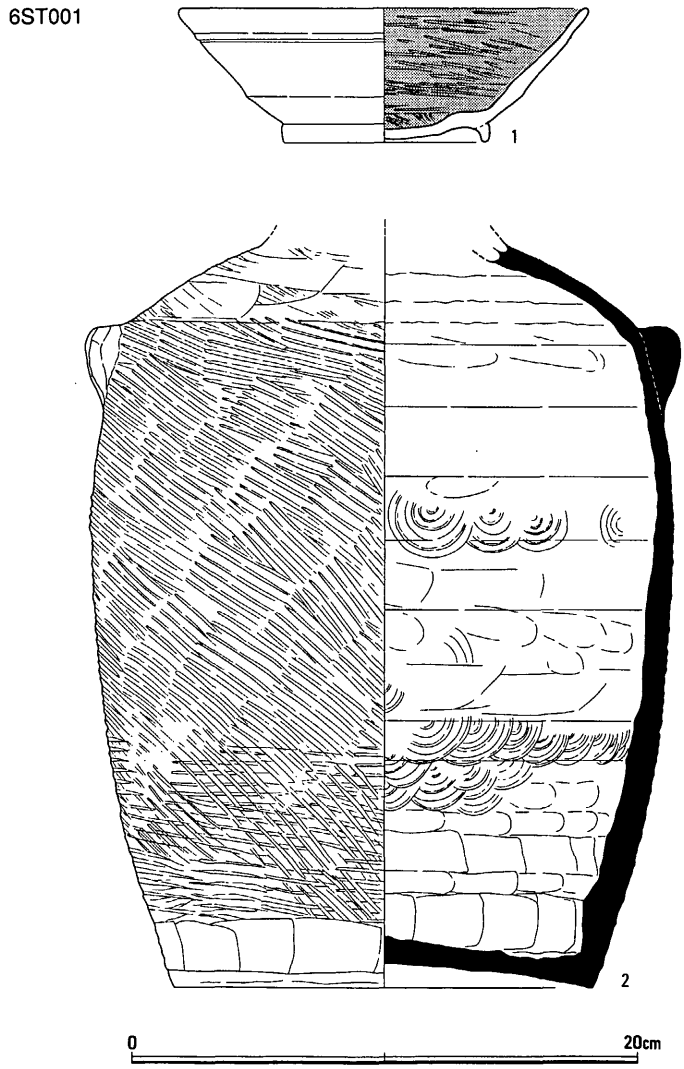
黒色土器Ａ類（１） 火葬蔵骨器の蓋として転用されていた椀ｃ１である。口径16cm、底径8.1cm、器高5.3cmを測る。器形は底部に断面三角形の高台が付き、底部は丸く突出する。体部は直線的に外傾して立ち上がり、端部を丸く収める。調整は体部回転ナデ→内面ヘラミガキ黒色処理、底部を回転ヘラケズリ→高台貼り付け周辺ナデ調整を行う。胎土は外面橙色、内面はオリーブ黒色を呈し、微粒子・金雲母を含む。焼成は良好である。

須恵器 壺（２） 火葬蔵骨器として使用されていた双耳壺である。底径16.5cm、現存高29.8cmを測る。器形は頸部付近までほぼ筒型を呈し、頸部で細くすぼまる。耳は肩部に一個残存していた。調整は外面については底部ヘラケズリ、胴部下位底部付近では横ヘラケズリ



第56図 6ST001実測図（1/20）

→横ナデ、胴部～肩部では横方向及び斜行タタキ、肩部～頸部付近では斜行タタキ→ヘラナデ、内面については胴部下位付近で指頭調整・横ヘラケズリ、胴部では同心円状当て具痕跡、胴部上位ではヘラケズリ調整がなされる。胎土は明赤褐色を呈し、白色粒子を含み、焼成は良好で硬く焼き締まる。本品は肥後荒尾窯系の製品である。



第57図　6ST001出土遺物実測図（1/3）

2）土　坑

古代の土坑は3基検出され、いずれの土坑からも遺物は出土しなかった。

6SK002（第58図、図版27）

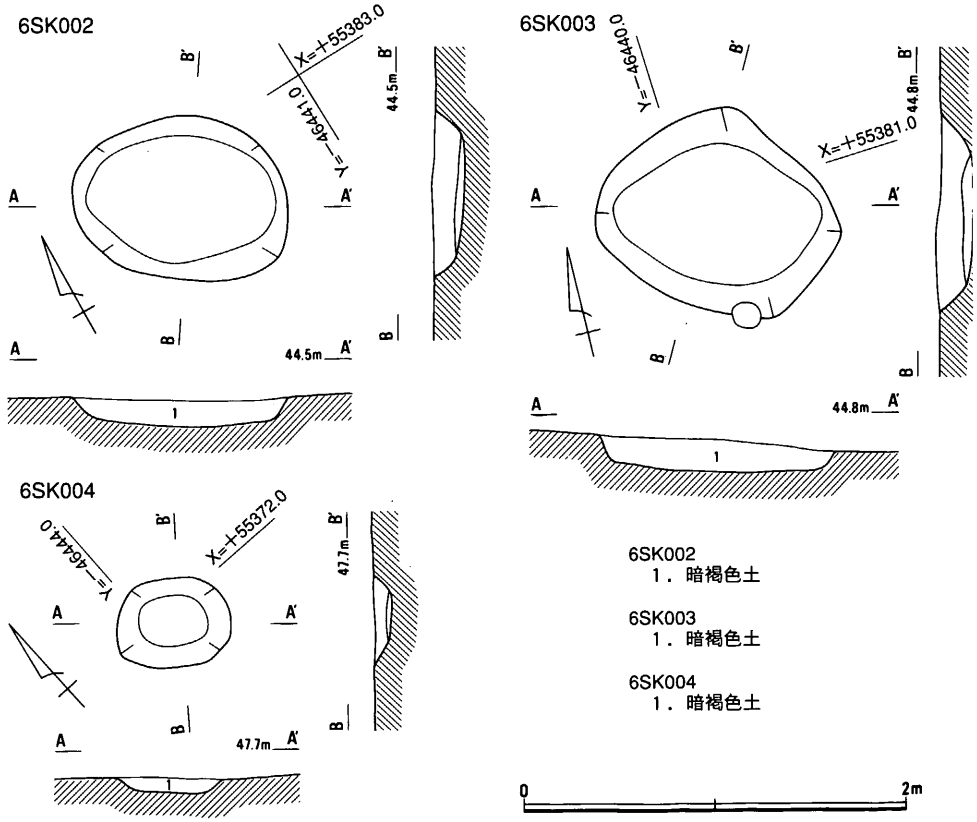
本址は調査区丘陵上面南部、グリッドではⅠ10区で検出された。平面形は楕円形を呈し、覆土は暗褐色土の1層に分層される。規模は長軸112cm、短軸86cm、深さ14cmを測る。

6SK003（第58図、図版27）

本址は調査区丘陵上面南部、グリッドはH・Ⅰ9区で検出された。平面形は不整楕円形を呈し、覆土は暗褐色土1層に分層される。規模は長軸130cm、短軸106cm、深さ17cmを測る。

6SK004（第58図、図版27）

本址は調査区丘陵上面南部、グリッドではE・F10・11区で検出された。平面形は楕円形を呈し、覆土は暗褐色土1層に分層される。規模は長軸60cm、短軸47cm、深さ8cmを測る。



第58図　6SK002～004実測図（1/40）

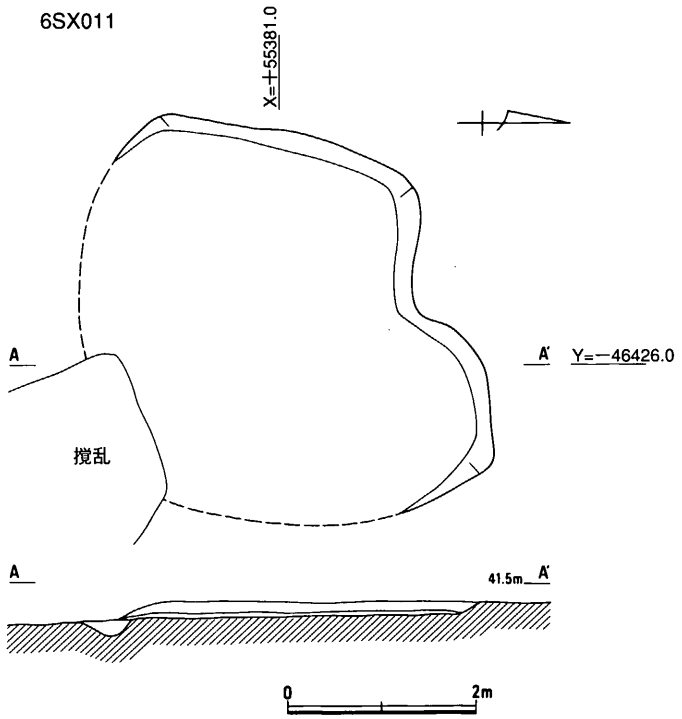
3）第２面ピット群（第42図、図版28）

第２面の遺構群は、第１面の確認面であるにぶい黄褐色土を除去した後、明黄褐色土層で確認したピット群であり、合計24基検出された。暗褐色土・褐色土の覆土を持ち、弥生時代～古代までの遺構と判断された。これらのピットは本来掘立柱建物址や柵等の何らかの遺構を構成する柱穴と思われるが、調査区の制約もあり、構成する遺構の抽出には至らなかった。

4）その他の遺構

6SX011（第59図）

本址は調査区北東部平坦面、グリッドではＨ・Ｉ４・５区で検出された。南側に向かって傾斜し、消滅している。平面形は隅丸長方形を二つ重ね合わせたような形状を呈する。遺構確認段階では方形プランであり、さらに上面には遺物が一定量出土したことから、住居跡として調査を進めたが、底面の傾斜、平面形の不定形等から最終的には地形の落ち込みに遺物包含層が堆積したものと判断された。規模は長軸2.1m、短軸2.07m、深さ８cmを測る。



第59図　6SX011実測図（1/80）

（3）近世以降

1）土　坑

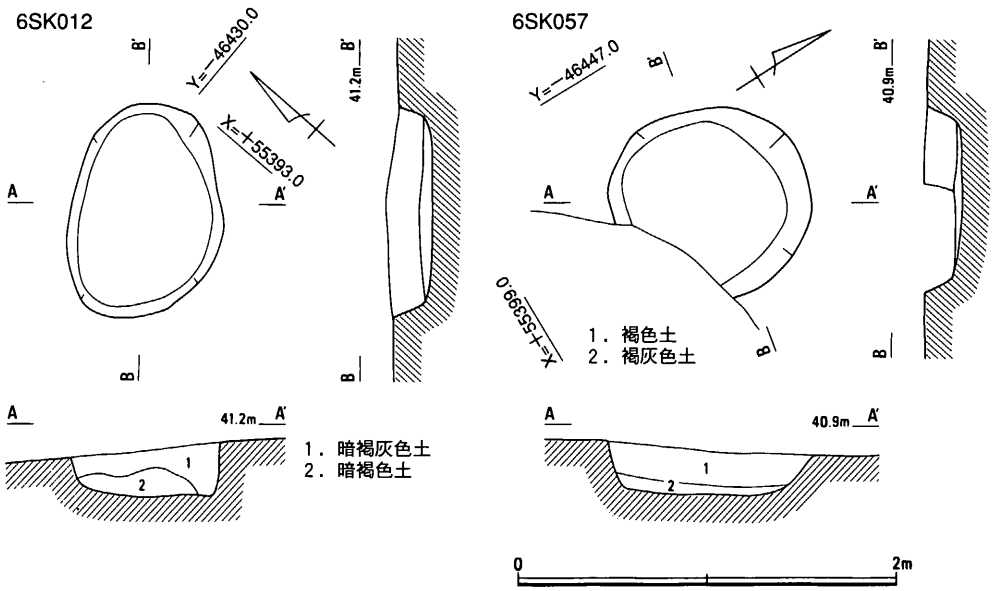
土坑は2基検出され、土層観察・重複関係から近世の遺構と判断した。

6SK012（第60図、図版28）

本址は調査区北東部平坦面、グリッドではM6区で検出された。6SI010と重複し、本址が新しい。平面形は楕円形を呈し、覆土は暗褐灰色土と暗褐色土の2層に分層される。規模は長軸112cm、短軸80cm、深さ28cmを測る。

6SK057（第60図、図版28）

本址は調査区北西部平坦面、グリッドではO11区で検出された。6SI005・6SX056と重複し、6SX056より古いほかでは本址が新しい。覆土は褐色土と褐灰色土の2層に分層され、平面形は略円形を呈する。規模は径106cm、深さ24cmを測る。

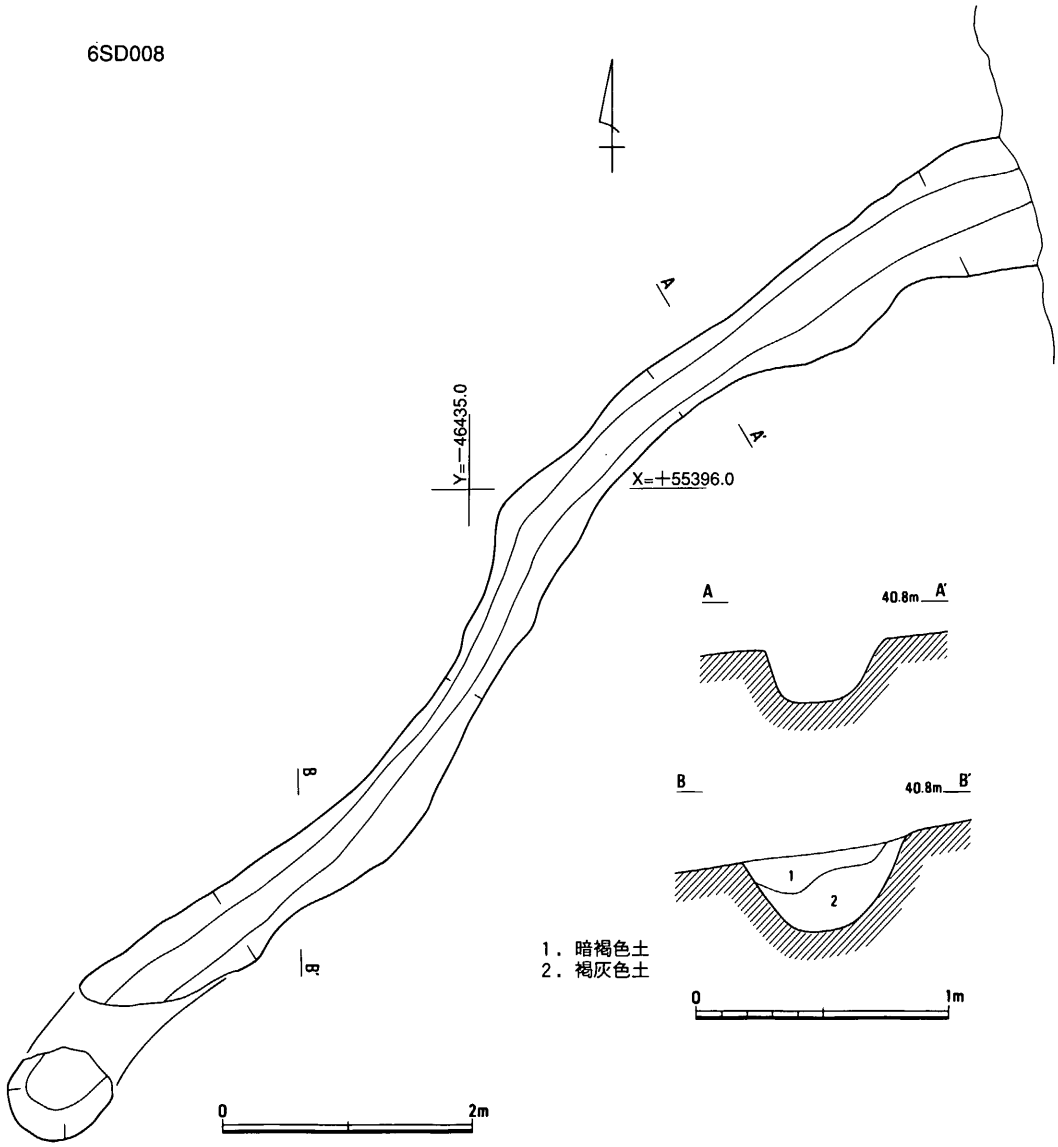


第60図　6SK012・057実測図（1/40）

2）溝状遺構

6SD008（第61図、図版29）

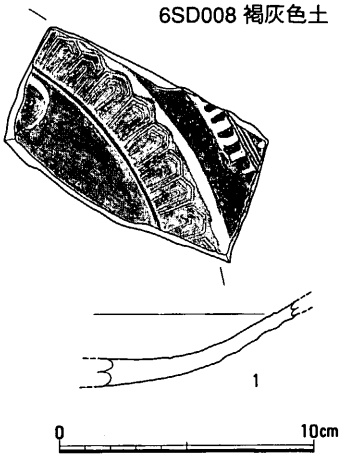
本址は調査区北東平坦面、グリッドではＬ～Ｎ６～９区で検出された。6SX056と重複し、本址が新しい。北東から南西方向に蛇行しながら走行する。断面形はＵ字形を呈し、覆土は暗褐色土と褐灰色土の２層に分層される。規模は、総延長11.1ｍ、幅32～107㎝、深さ33㎝を測る。褐灰色土からの出土遺物から18世紀以降の遺構と判断した。



第61図　6SD008実測図（1/30・1/60）

6SD008出土遺物（第62図、図版37）

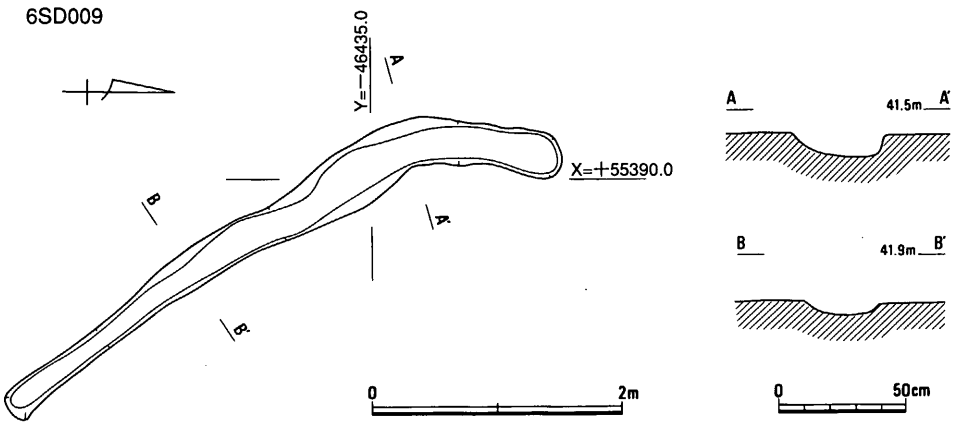
陶器 皿（１） 現存高3.5cmを測る肥前系象嵌陶器皿である。文様は剣先文が見込み周囲を巡り、釉は象嵌部分が乳白色、他が灰オリーブ色、胎土はにぶい橙色を呈し、堅緻である。焼成は硬質に焼き締まる。18世紀の製品である。



第62図　6SD008出土遺物
実測図（1/3）

6SD009（第63図）

本址は調査区北東部平坦面、グリッドではＫ・Ｌ７・８区で検出された。走行方向は南東から北西方向に直進し、Ｌ８グリッド付近で北方向に屈折する。断面形はＵ字形を呈し、覆土は暗褐色土の１層に分層される。規模は総延長５ｍ、幅19～47cm、深さ８cm前後を測る。



第63図　6SD009実測図（1/30・1/60）

３）第１面ピット群

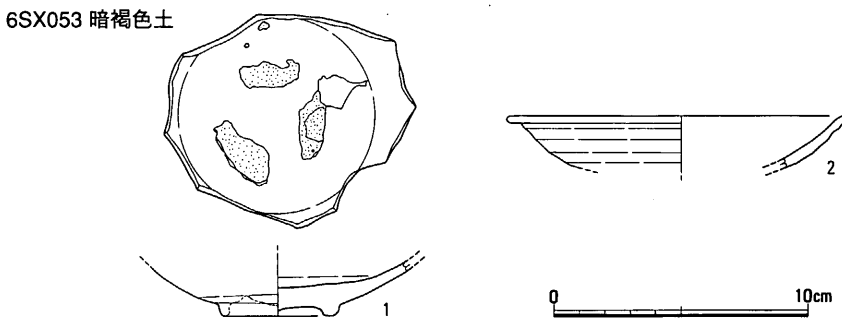
第１面で検出されたピットは合計42基検出された。その内近世に帰属する遺構は暗褐色土・黒褐色土を覆土に持つピットで、その他の褐色土・褐灰色土を覆土に持つ第１面ピットは古墳時代前期にまで遡る可能性を持つ遺構と判断した。また、第１面ピット群は第２面のピット群と同様に総体として構成する遺構の抽出には至らなかった。

6SX053出土遺物（第64図、図版37）

陶器

椀（１） ピット群の一つである6SX053から出土した唐津椀である。底径4.4cm、現存高2.2cmを測る。器形は高台底部から体部が湾曲して立ち上がる。高台内径には離砂が付着し、見込み部分にも３ヶ所の目跡が遺存する。釉は灰オリーブ色の灰釉が内外面に施釉され、胎土はにぶい黄橙色を呈し、堅緻である。焼成は良好で硬質に焼き締まる。16世紀末から17世紀初頭の製品と思われる。

皿（２） 復元口径13.8cm、現存高2.1cmを測る端反形の皿である。釉は淡黄色の灰釉が全面施釉され、胎土は淡黄色を呈し、堅緻である。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀代の製品と思われる。

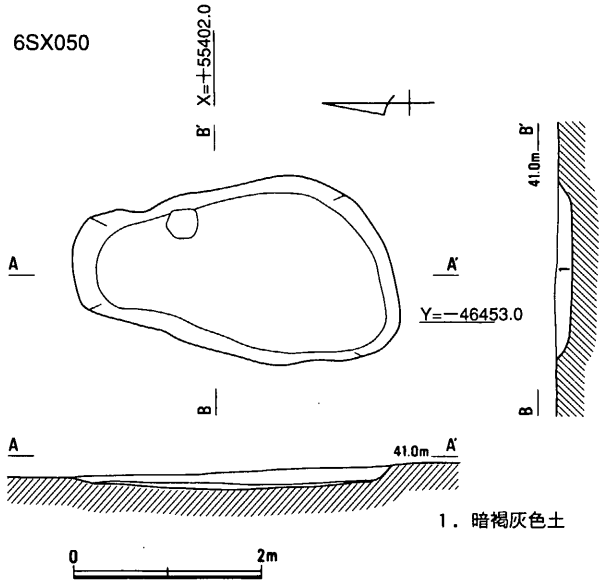


第64図　6SX053出土遺物実測図（1/3）

４）その他の遺構

6SX050（第65図、図版29）

本址は調査区北西部平坦面、グリッドではＯ・Ｐ13・14区で検出された。北東部分で近・現代のピットと重複し、本址が古い。平面形は不整楕円形を呈し、覆土は暗褐灰色土の１層に分層される。規模は長軸3.36m、短軸2.0m、深さ20cmを測る。



第65図　6SX050実測図（1/80）

6SX050出土遺物（第66図、図版38）

磁器 椀（１） 復元底径4.5cm、現存高1.2cmを測る肥前系磁器丸椀である。高台外面には二重圏線が群青色

を呈する呉須により染付けされ、高台端部には離砂が付着している。胎土は灰白色を呈し堅緻である。焼成は良好で硬質に焼き締まる。18世紀代の製品。

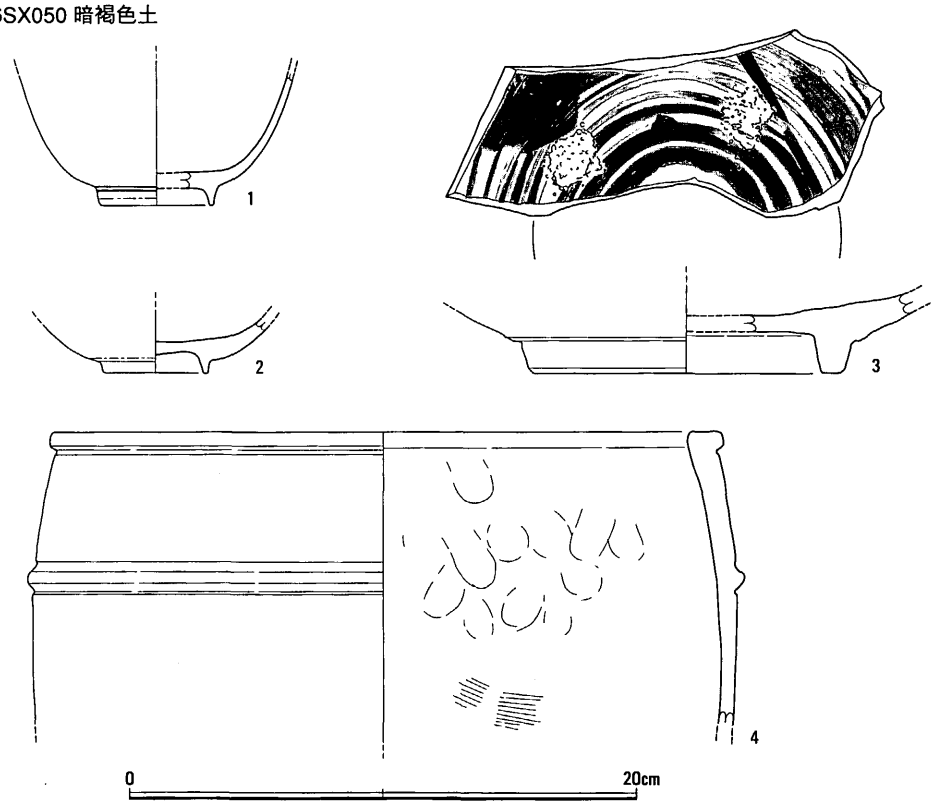
陶器

椀（２） 復元底径4.2cm、現存高2.1cmを測る肥前系陶器椀である。内外面にはオリーブ褐色の灰釉が施釉され、胎土はにぶい黄橙色を呈し、緻密。焼成はやや軟質である。

皿（３） 復元底径21.2cm、現存高3.2cmを測る肥前系陶器三彩大皿である。内面には淡黄色・黄褐色・緑色により三彩が施され、その上にオリーブ褐色の灰釉が施釉される。胎土はにぶい褐色黄橙色を呈し、緻密。焼成は良好で硬質に焼き締まる。18世紀代の製品である。

瓦質土器 甕（４） 復元口径21.7cm、現存高11.7cmを測る無釉の樽形甕である。口唇部を平坦に仕上げ、口唇部外面と胴部上位に突帯が巡る。調整は内面に指頭圧痕とハケメがわずかに観察され、胎土は黄灰色を呈し、砂粒・細砂粒を含む。焼成はやや軟質である。

6SX050 暗褐色土



第66図 6SX050出土遺物実測図（1/3）

6SX056（第67図、図版30・31）

本址は調査区北部平坦面、グリッドではＬ～Ｏ７～12区で検出された。北西部で6S1005と6SK057、東部で6SD008と重複し、6SD008より古いほかでは本址が新しい。また、遺構確認時には北側に溝状遺構が重複しているかに見えたが、精査の結果、覆土の差異によるものであることが判明した。平面形は東西に長軸を持つ不整長方形を呈し、Ｎ９区付近で東部に向かって深くなる段差を持ち、底面北西部付近では層厚約１cmの炭化物の集中範囲が２ヶ所認められた。覆土は14層に分層でき、いずれも人為的な埋土と認められ、明瞭な自然流入土は観察されない。遺物については弥生時代・近世初頭の破片遺物が混在して出土しており、廃棄的な状況も看取される。規模は長軸13.65m、短軸6.18m、深さは東部で28cm前後、西部で50cm前後を測る。構築時期に関しては出土遺物が初期伊万里を中心とするものであることから、17世紀前半代に求められる。

6SX056褐灰色土出土遺物（第68図、図版39）

国産磁器

椀（１） 復元口径8.4cm、底径4.2cm、器高6.0cmを測る肥前系磁器白磁椀である。器形は胴張り形で、外面には草花文が陽刻され、明緑灰色の白磁釉が生掛けされる。胎土は灰白色を呈し堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀前半の製品。

小坏（２） 口径5.0cm、底径2.3cm、器高3.0cmを測る肥前系磁器白磁小杯である。器形は端反形で、灰白色の白磁釉が内面と外面体部下半まで生掛けされる。胎土は淡黄色を呈し堅緻であるが、焼成はやや甘い。17世紀前半の製品。

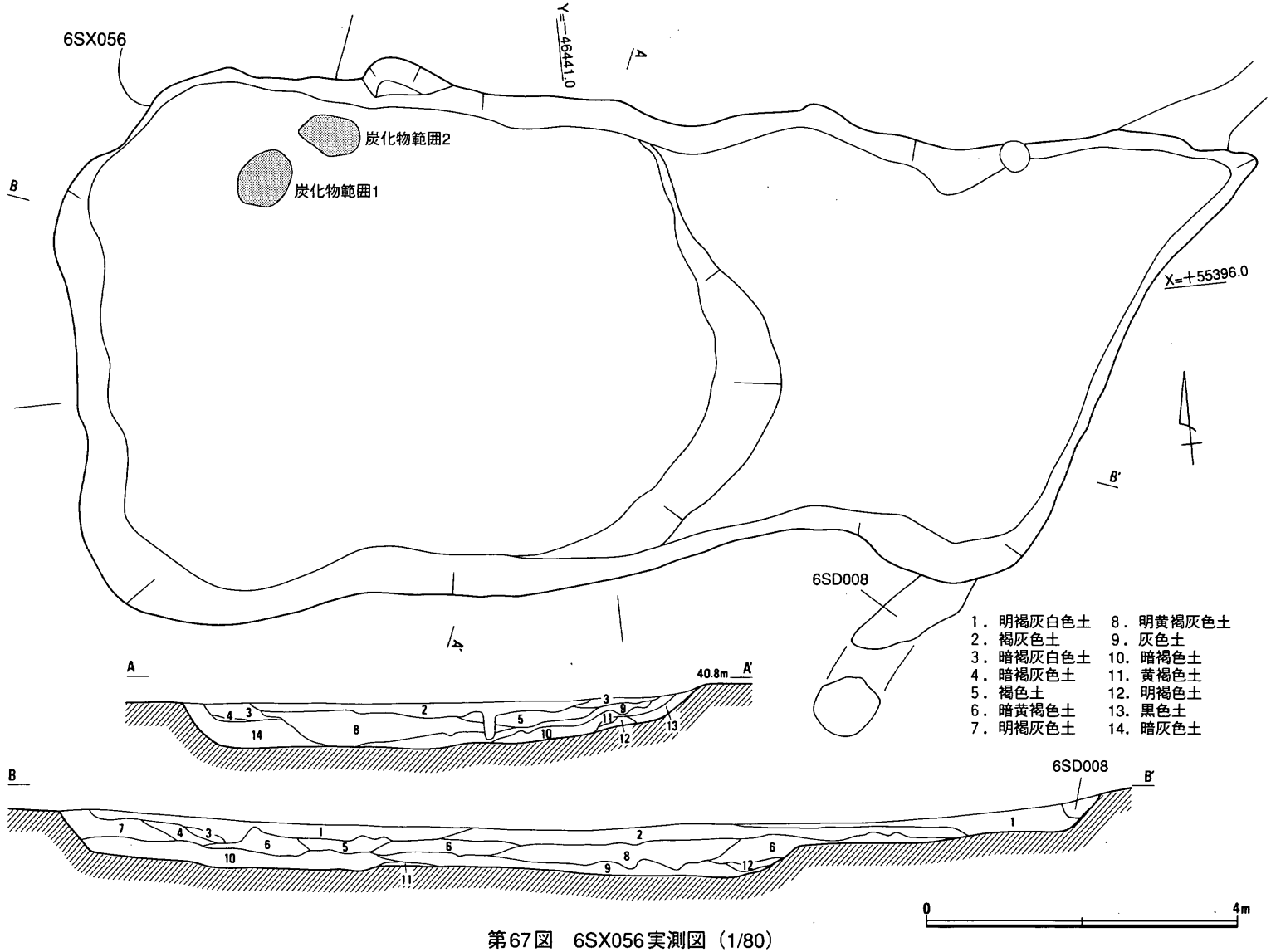
折縁皿（３） 復元口径22.0cm、現存高3.8cmを測る肥前系青磁折縁皿の底部破片である。見込みにはヘラ切りによる文様が刻まれ、オリーブ灰色の青磁釉が内外面に施釉される。胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀前半の製品。

陶器 椀（４） 底径5.3cm、現存高3.0cmを測る陶器椀の底部破片である。内外面に灰白色の灰釉が施釉され、胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀前半の製品。

弥生土器 甕（５） 復元底径8.0cm、現存高2.1cmを測る甕底部下半の破片である。器形は底部が小さく体部は直線的にやや直立気味に立ち上がる。調整は底部ヘラナデ、胴部外面に縦位のハケメ調整が施され、内面は摩耗のため調整は明らかではない。胎土はにぶい黄橙色を呈し、白色粒子・赤色粒子を含む。焼成は良好である。

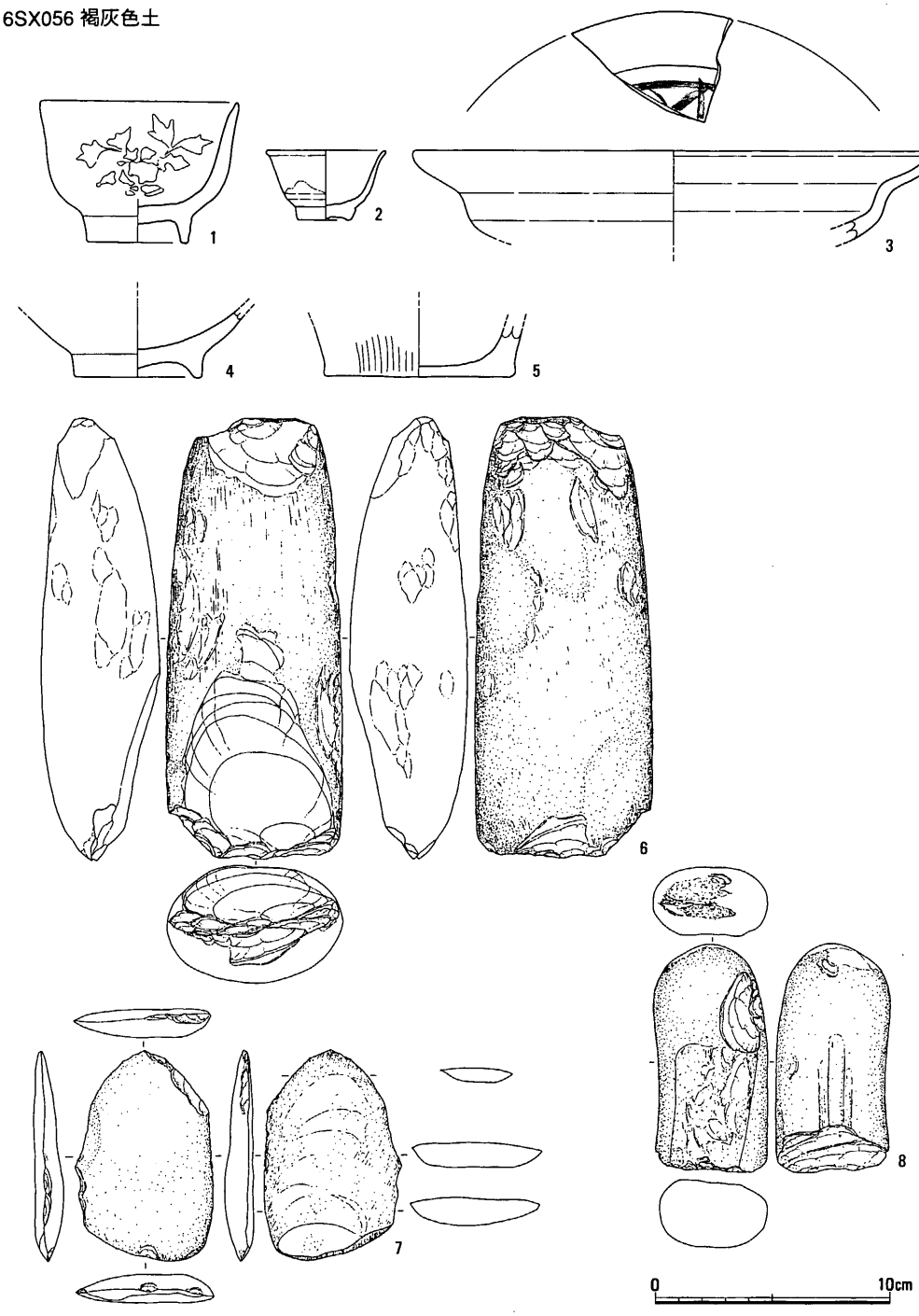
石器

本址からは混入遺物として石器が３点出土している。内訳は太型蛤刃石斧１点、刃器状を呈する磨製石器１点、砥石１点である。所属時期は弥生時代のものが主体である。

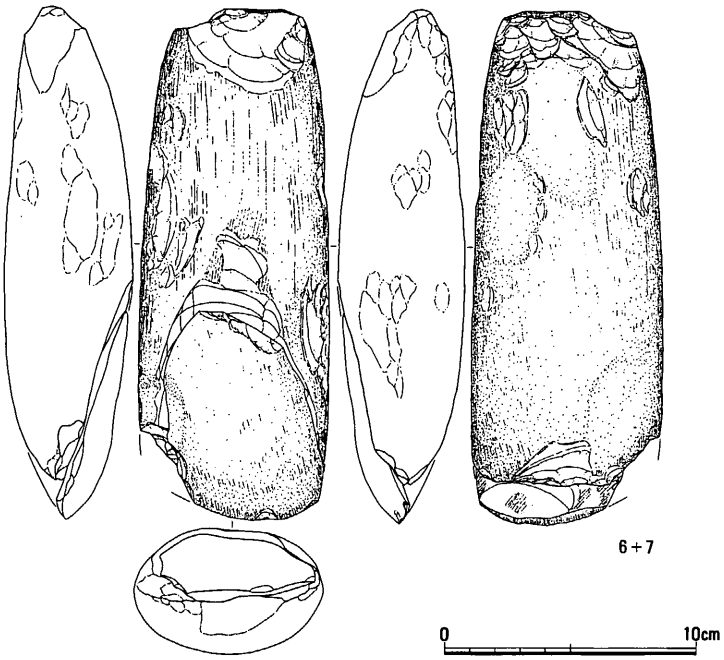


第67図　6SX056実測図（1/80）

6SX056 褐灰色土



第68図　6SX056出土遺物実測図1 （1/3）



第69図　6SX056出土遺物（19・20）接合図（1/3）

太型蛤刃石斧（6）　全面にわたり良く研磨されるが、部分的に研磨以前の調整痕と考えられる剥離面が残存する。また、自然面か剥離痕かの区別が判然としない浅い窪みも見られる。上端には平坦面が作出されるが、これを切る剥離面がある。刃部は正面に薄く剥がれた欠損面、両面に刃部再生あるいは使用に伴うと考えられる剥離面が観察される。

磨製石器（7）　6の刃部破片を転用した刃器状を呈する磨製石器である。剥落面のリング、フィッシャーは下端以外はほとんど磨き消される。特に縁辺部は著しく研磨され、その断面形態は鋭利となる。この縁辺部の側面観は直状を呈する。裏面縁辺には使用痕と考えられる微細な剥離痕が観察される。これらのことから本来の刃部以外の縁辺に新たに刃部が作出された石器と考え、刃器状を呈する磨製石器とした。左側縁と下端の小剥離は磨製石斧時のものと考えられるが、上端の小剥離は剥落後のものである。

第69図には6＋7の接合状態を図示した。7の剥落面とその縁辺部は著しく研磨されているため、6の剥落面と密着する箇所が確認できず、厳密には6と7の間に接合関係は認められない。両者とも本来の遺物包含層から遊離した単独出土の状態であることも、2点の石器が同一個体であったと考える際の不安材料になっている。しかし、石材や大きさ、形状、器面の状態と湾曲の在り方から、7は6の欠損面に接合するものであることは間違いない。この欠損状態は刃部方向からの衝撃によって剥落し、使用に伴う欠損を想定できる。また、6

の刃部縁辺に見られる剥離面の存在から、7が剥落した後も使用されたことが分かる。6の全長は7の剥落時よりも短くなっているが、これも剥落後に行われた使用の結果と考えられる。この太型蛤刃石斧の所属時期は、形態的特徴から弥生時代中期に位置付けられる。刃器状を呈する磨製石器も、これと同時期の製品と考えられる。

砥石（8） 厚みのある棒状礫を素材とし、正面には面取り状の平坦面が形成され、裏面には幅7㎜ほどの縦位の研磨痕が観察される。材質は緻密な砂岩で、目は細かい。下端の欠損面端部に微細な剥離痕、上端に敲打痕、右側縁上方に剥離面が見られることから、欠損後敲石に転用された石器と考えられる。所属時期は不明である。

6SX056褐色土出土遺物（第70図、図版40）

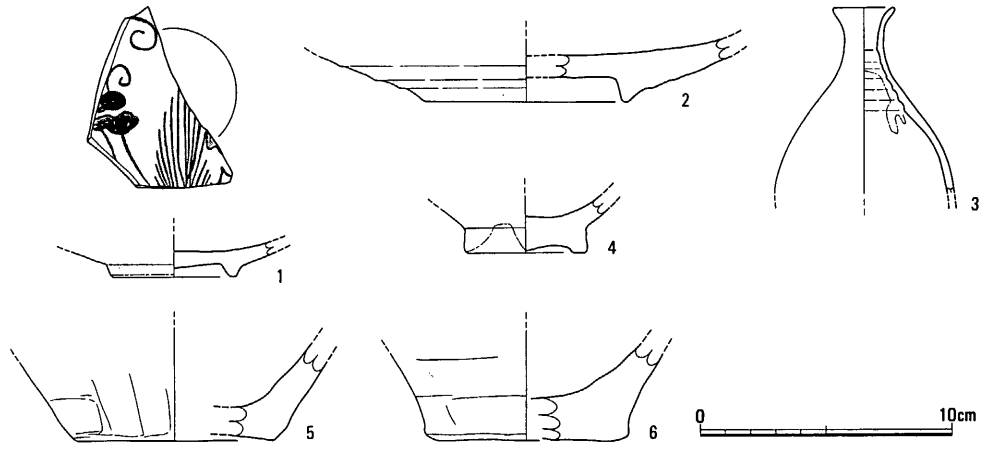
国産磁器

皿（1・2） 底径5.0cm、現存高1.4cmを測る肥前系磁器染付け皿の底部破片である。見込みには緑灰色を呈する呉須により草花文が染付けされる。胎土はにぶい黄橙色を呈し、堅緻。焼成は軟質である。17世紀前半の製品。 2は復元底径8.0cm、現存高2.5cmを測る肥前系磁器大皿の底部から体部破片である。高台畳付けには離砂が付着する。胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。17世紀前半の製品。

壺（3） 復元口径2.4cm、現存高7.4cmを測る肥前系白磁徳利の胴部上位以上の破片である。明緑灰色の白磁釉が外面及び内面口縁部付近に生掛けされる。胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀中葉頃の製品と思われる。

陶器 椀（4） 底径4.8cm、現存高2.3cmを測る肥前系陶器椀の底部破片。内外面に灰白色の灰釉が施釉、胎土は淡黄橙色を呈し堅緻、焼成はやや軟質である。17世紀前半の製品。

6SX056褐色土



第70図 6SX056出土遺物実測図2 (1/3)

弥生土器

甕（５・６） ５は復元底径8.0cm、現存高3.9cmを測る甕底部下半の破片である。器形は底部が小さく体部は直線的に外傾して立ち上がる。調整は底部・胴部外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデ調整が施される。胎土は橙色を呈し、赤色粒子・白色粒子・金雲母を含み、焼成は良好である。６は復元底径8.0cm、現存高3.8cmを測る甕底部下半の破片である。器形は底部が小さく体部は直線的に外傾して立ち上がる。調整は底部・胴部外面にヘラケズリ、内面にはヘラナデ調整が施される。胎土はにぶい黄橙色を呈し、白色粒子・金雲母を含み、焼成は良好である。

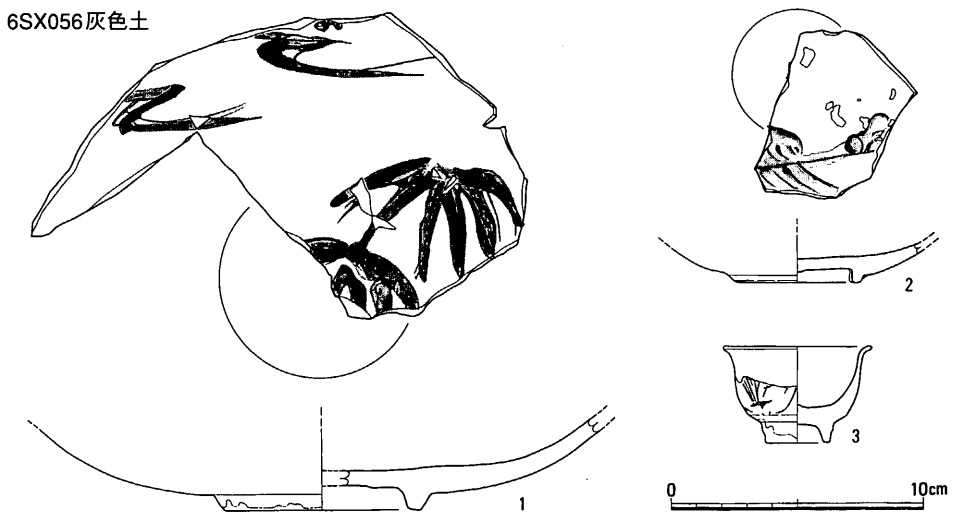
6SX056灰色土出土遺物（第71図、図版40）

国産磁器

皿（１・２） １は底径7.8cm、現存高3.8cmを測る肥前系磁器染付け大皿の底部から体部破片である。高台畳付けには離砂が付着し、見込みにはオリーブ灰色を呈する呉須により笹・草花文？が染付けされる。胎土は灰色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まり、17世紀前半の製品。２は底径5.6cm、現存高1.9cmを測る肥前系磁器染付け皿の底部破片である。高台畳付けには離砂が付着し、見込みには群青色の呉須により野菜文？が染付けされる。

胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀前半の製品。

小坏（３） 復元口径5.9cm、底径2.5cm、器高3.8cmを測る肥前系磁器染付小杯である。器形は端反形で外面には群青色を呈する呉須により蘭文が染付けされる。胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀前半の製品。



第71図 6SX056出土遺物実測図３（1/3）

6SX056暗褐色土出土遺物（第72図、図版41）

舶載磁器

皿（1） 復元口径15.2cm、底径7.4cm、現存高3.1cmを測る染付け皿である。内面には群青色を呈する呉須により「寿」と雲竜文が染付けされる。胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。明末～清初の製品。

国産磁器

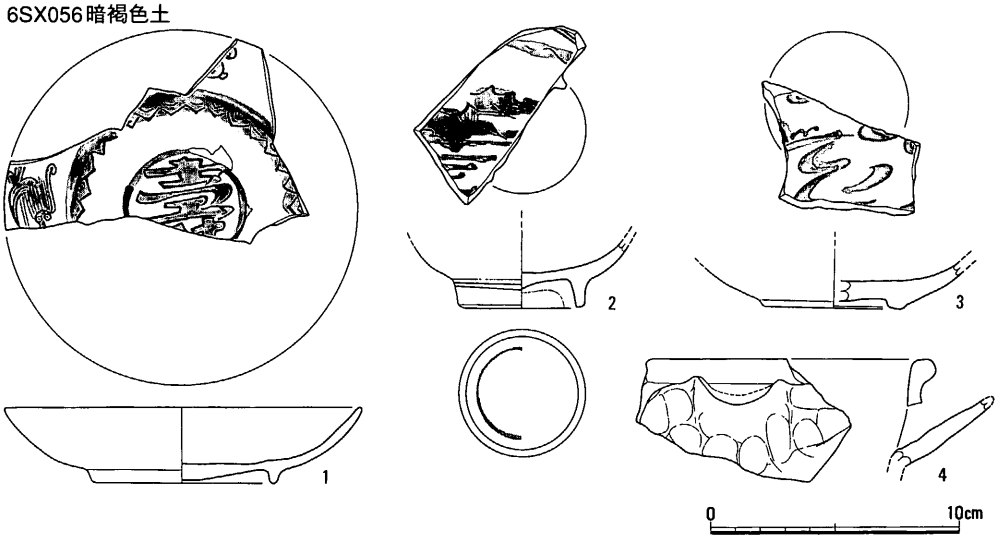
椀（2） 底径5.1cm、現存高2.7cmを測る肥前系磁器染付椀の底部から体部破片である。見込みには群青色を呈する呉須により海・舟・島が、外面高台部及び高台内部には二重圏線が染付けされる。胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀中葉の製品。

皿（3） 底径5.6cm、現存高1.9cmを測る肥前系磁器染付け皿の底部破片である。見込みには群青色を呈する呉須により雲文？が染付けされる。胎土は灰白色を呈し、堅緻精良。焼成は良好で硬質に焼き締まる。17世紀前半の製品。

陶器 片口鉢（4） 現存高4.3cmを測る片口鉢の片口部破片である。内外面ににぶい褐色を呈する鉄釉が施釉され、指頭により片口部を圧密している。胎土は褐色を呈し、堅緻である。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。17世紀中葉の製品。

6SX095（第73図）

本址は調査区北西部平坦面、グリッドではN・O12・13区で検出された。平面形は不整方

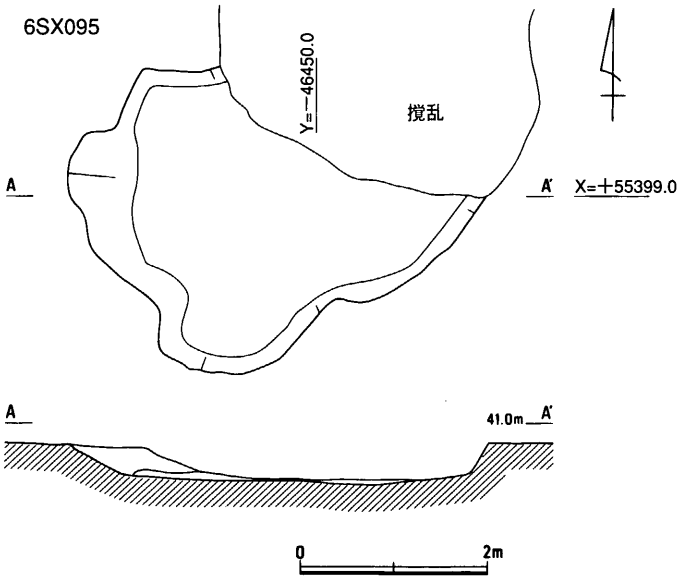


第72図 6SX056出土遺物実測図4 (1/3)

形を呈し、北東部は現代の撹乱により破壊される。規模は現存長軸4.4m、短軸3.2m、深さ40cmを測る。

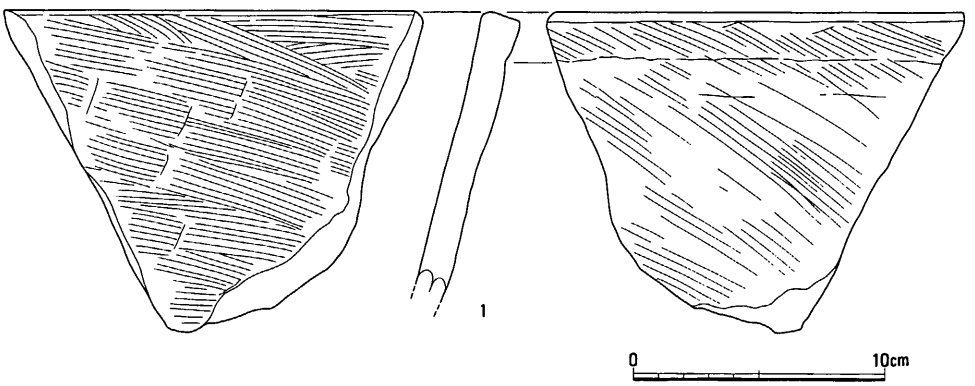
6SX095出土遺物（第74図、図版41）

土師質土器 甕（1） 現存高11.6cmを測る樽形大甕口縁部の破片である。調整は内外面に



第73図　6SX095実測図（1/80）

6SX095



第74図　6SX095出土遺物実測図（1/3）

斜位のハケメ調整が施され、口縁部は平坦に作られる。胎土は橙色を呈し、砂粒・細砂粒を含む。焼成は土師質で良好である。

（4）表土・褐色土出土遺物（第75～77図、図版42～44）

当遺跡における包含層の分布は、G～M4～10区の範囲で堆積していた褐色土である。層厚は平均10cm前後を測り、丘陵下部の平坦面との境界ではやや厚く堆積していた。出土遺物は古墳時代前半から奈良時代までの遺物を中心とするが、植物根の攪乱により混入したとみられる縄紋時代の石器、近世の遺物も存在する。褐色土包含層の形成時期は攪乱による混入遺物を除外すると大枠として古墳時代前期から古代に形成されたものと認められよう。一方、表土からは近世の遺物が主体的に採集されているが、褐色土包含層中から混在した遺物と思われる越州窯青磁破片・須恵器・土師器片も採集されている。

以下、表土・褐色土出土の遺物について説明する。

表土出土遺物（第75図，図版42）

土師器

ミニチュア（1） 口径2.4cm、器高2.1cmを測る、手捏ねのミニチュア土器である。胎土は橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む。焼成は良好である。

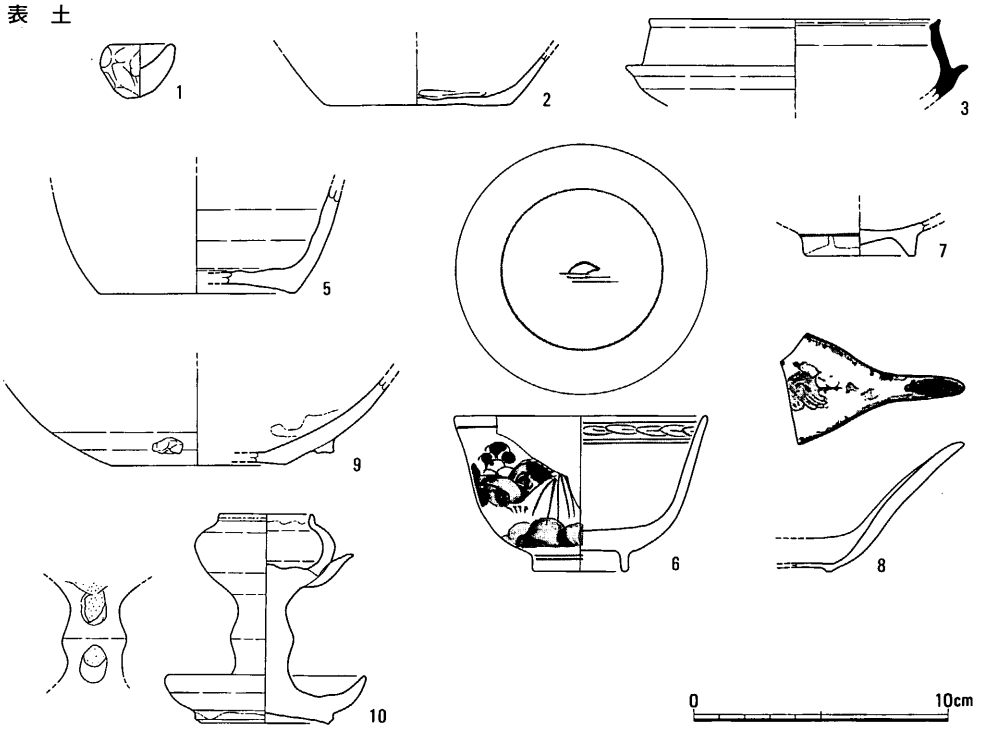
坏（2） 復元底径7.4cm、現存高2.1cmを測る。坏aの底部破片である。調整は外面底部が不定方向のヘラケズリ、内面には指頭調整がなされる。胎土はにぶい黄橙色を呈し、細砂粒・赤色粒子・金雲母を含み、焼成は良好である。

須恵器 坏（3） 復元口径11.5cm、復元受部径13.5cm、現存高3.5cmを測る。丸底の底部から体部はやや内傾気味に立ち上がり、口縁端部は面取りがなされ平坦である。外面調整は基本として回転ナデ成形によるが、底部は回転ヘラケズリ調整がなされる。胎土は緻密、色調は灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。器形的特徴からTK－208併行の製品と思われる。

越州窯系青磁

壺（4・5） 4（図版42）は壺の肩部破片であり、現存高4.5cmを測る。外面にオリーブ色の青磁釉が施釉される。胎土は灰色を呈し堅緻。焼成は良好で硬質に焼きしまる。5（図版42）は復元底径7.6cm、現存高4.3cmを測る、壺の底部破片である。内外面に灰オリーブ色の青磁釉が施釉される。胎土は灰色を呈し、緻密である。焼成は良好で硬質に焼き締まる。

表 土



第75図　表土出土遺物実測図（1/3）

国産磁器

椀（6・7）　6は復元口径9.9cm、底径3.7cm、器高6.2cmを測る肥前系磁器染付椀である。器形は腰張形で、外面には群青色を呈する呉須により草花文、高台部には二重圏線、内面口縁部には四方襷文、見込みには帆掛け船が染付けされる。胎土は灰白色を呈し、堅緻精良である。焼成は良好で硬質に焼き締まる。19世紀前半の製品。7は底径4.4cm、現存高1.4cmを測る肥前系磁器染付椀である。群青色を呈する呉須により高台部外面に二重圏線が染付けされる。胎土は浅黄橙色を呈し、堅緻である。焼成はやや軟質である。18世紀代の製品か。

散り蓮華（8）　現存長7.0cm、器高5.1cmを測る肥前系磁器散り蓮華である。銅板転写により内面に草花文が施文される。胎土は灰白色を呈し、堅緻である。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。近代の製品であろう。

陶器 土瓶（9）　復元底径7.7cm、現存高3.5cmを測る施釉陶器の土瓶の底部破片である。器形は平底の底部から体部はやや湾曲しながら外傾して立ち上がり、体部下位に獣足状の突起が貼り付けられる。外面には灰黄褐色を呈する鉄釉が施釉され、胎土はにぶい橙色を呈し、堅緻である。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。

秉燭（10） 口径3.6cm、底径5.0cm、器高8.3cmを測る。手付皿台付の秉燭である。底部を除く内外面に褐色を呈する鉄釉が施釉される。胎土は灰赤色を呈し、堅緻である。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。18世紀代の製品。

褐色土出土遺物（第76・77図，図版43・44）

土師器

高坏（1） 現存高3.9cmを測る。脚部器形は「ハ」の字状に浅く広がる。調整は摩耗が著しいため観察し得ない。胎土は橙色を呈し、砂粒・細砂粒を含む。焼成は良好である。

甑（2・3） 2は復元口径25.0cm、現存高14.0cmを測る胴部下半以上の破片である。器形は体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部はわずかに外反し、口唇部は平坦に仕上げられる。外面調整は体部が縦位のハケメ、口縁部が横ナデ、内面は体部がヘラナデ、口縁部には横ナデ調整が施される。胎土はにぶい橙色を呈し、細砂粒を含む。焼成は良好である。

3は現存高7.3cmを測る把手付き甑の把手破片である。指頭調整により把手を貼り付けている。浅黄橙色を呈し、細砂粒を含み、焼成は良好である。

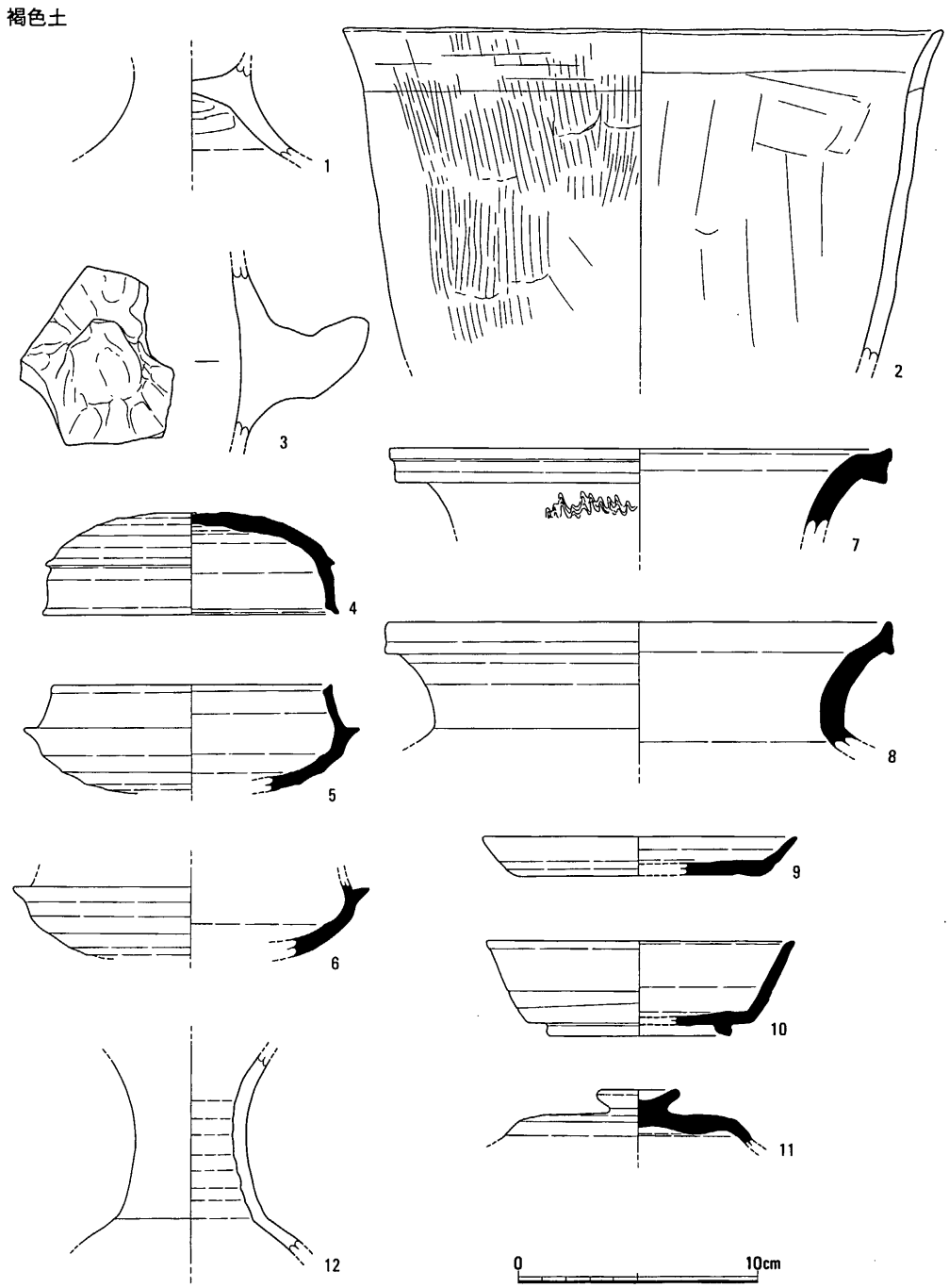
須恵器

蓋（4） 復元口径12.4cm、器高4.3cmを測る。器形は天井部が平らで裾部は直立気味、口縁部は面取りがなされ平坦である。外面調整は基本として回転ナデ成形によるが、天井部は回転ヘラケズリ調整がなされている。胎土は緻密で色調は灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。器形的な特徴からTK－208併行の製品と思われる。

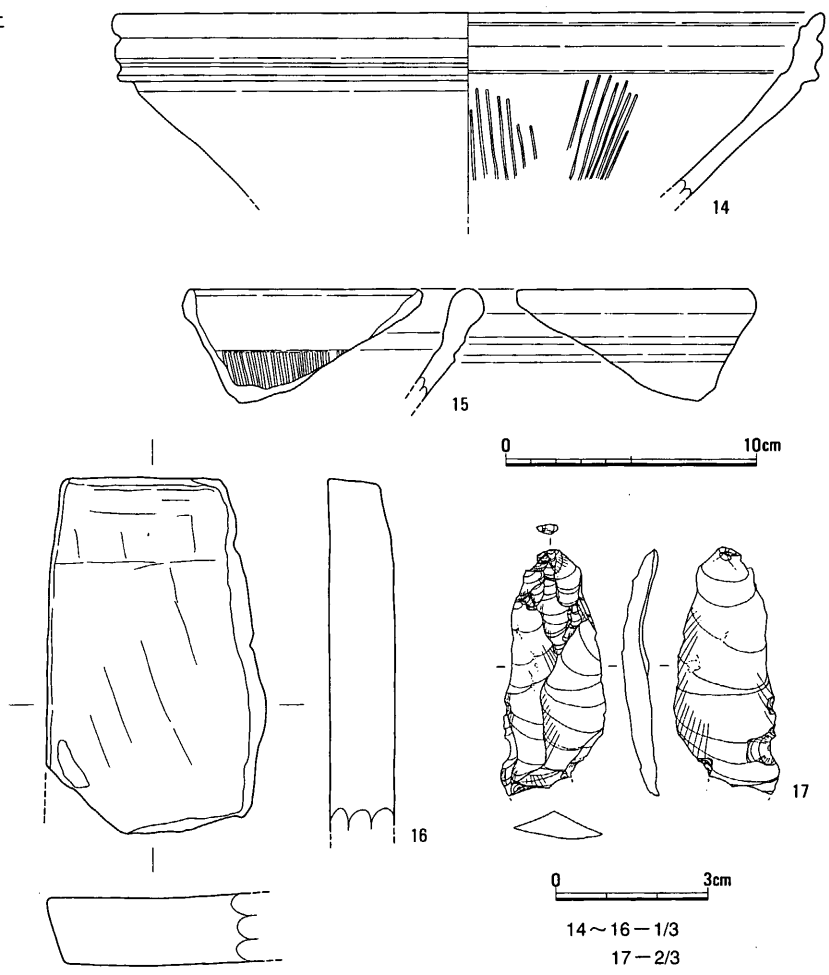
坏（5・6） 5は復元口径11.7cm、復元受部径14.2cm、現存高4.5cmを測る。丸底の底部から体部はやや内傾気味に立ち上がり、口縁端部は面取りがなされ平坦である。外面調整は基本として回転ナデ成形によるが、底部は回転ヘラケズリ調整がなされる。胎土は緻密、色調は灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。器形的特徴からTK－208併行の製品と思われる。6は復元受部径15.0cm、現存高3.4cmを測る。丸底の底部から体部はやや内傾気味に立ち上がり、口縁端部は面取りがなされ平坦である。外面調整は基本として回転ナデ成形によるが、底部は回転ヘラケズリ調整がなされる。胎土は緻密、色調は灰色を呈する。焼成は良好で硬質に焼き締まる。MT－15併行の製品かと思われる。

甕（7・8） 7は復元口径21.0cm、現存高3.6cmを測る頸部以上の破片である。器形は口縁部を外側に屈曲させ、口唇部を平坦に仕上げ、口縁部直下外面には4本一単位の櫛描き波状文が施文される。胎土は灰色を呈し、堅緻である。焼成は良好で硬く焼き締まる。8は復元口径21.0cm、現存高5.5cmを測る頸部以上の破片。器形は口縁部を外側に屈曲させ、口唇部はT字状を呈する。胎土は灰色を呈し堅緻で、焼成は良好で硬く焼き締まる。

坏a（9） 復元口径13.0cm、復元底径10.0cm、現存高1.7cmを測る。坏aの破片である。



第76図　褐色土出土遺物実測図１（2/3・1/3）



第77図　褐色土出土遺物実測図２（2/3・1/3）

調整は外面底部が不定方向のヘラケズリ、体部にはナデ、内面にはナデ、指頭調整がなされる。胎土は灰色を呈し、細砂粒を含み、焼成は良好である。

坏ｃ３（10）　復元口径13.0cm、底径7.6cm、器高4.0cmを測る、坏ｃ３の破片である。調整は回転台ナデ調整により高台部を貼り付けた後、周辺にナデ調整が施される。胎土は灰色を呈し、堅緻である。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。

蓋ｂ（11）　つまみ径3.0cm、現存高2.5cmを測る、蓋bの破片である。器形はつまみが環状を呈し、天井部は平坦である。調整は回転台ナデ調整が施される。胎土は灰色を呈し、堅緻である。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。

越州窯青磁

壺（12） 壺の肩から頸部の破片であり、現存高8.5cmを測る。二次焼成を受けたためか、釉色が黄褐色に変色している。胎土は灰色を呈し堅緻。焼成は良好で硬質に焼きしまる。

瓶（13）（図版43） 現存高3.9cmを測る、瓶の肩部破片である。二次焼成を受けたためか釉色が灰白色に変色している。胎土は灰白色を呈し、緻密である。焼成は良好で硬質に焼き締まる。

陶器

擂鉢（14・15） 14は復元口径28cm、現存高7.4cmを測る擂鉢の体部下半以上の破片である。口縁部の縁帯は内側が隆帯状にやや張り出し、外側では二条の凹線が施される。擂目は８本一単位で、残存範囲では２ヶ所に擂り目が認められる。胎土は赤褐色を呈し、砂粒・細砂粒を含み、焼成は良好で硬質に焼き締まる。18世紀代の製品。15は現存高4.4cmを測る擂鉢の口縁部破片である。残存している部位では内面すべてに擂目が入り、口縁部は肥厚する。内外面には灰褐色の鉄釉が施釉され、胎土は浅黄橙色を呈し、砂粒・細砂粒を含む。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。17世紀後半代の製品かと思われる。

瓦（16） 現存長14.0cm、幅8.2cm、厚さ2.6cmを測る平瓦の破片である。調整は凹面がヘラナデ、狭端縁は面取りが、凸面・側縁ではヘラケズリ調整がなされている。胎土は灰色を呈し、砂粒・細砂粒・赤色粒子・白色粒子を含む。焼成は良好で、硬質に焼き締まる。

石器（17） 撹乱層から１点の剥片が出土した。本来の遺物包含層から出土した石器はない。25は黒曜石製の縦長剥片である。下端を欠損する。剥離面を打面とし、正面には主要剥離面と同一方向の打撃によるネガティブな剥離面が見られる。裏面縁辺には小剥離が見られ、二次加工がある剥片に分類できるかもしれない。

3．小　結

殿城戸遺跡が立地する佐野地区では近年区画整理に伴い各地で調査が行われ、当該地の原始から古代の景観が明らかになりつつある。今回、そうした状況下で行われた調査では古墳時代から近世に至る遺構群が検出され、成果をあげることができた。

以下、小結として各時期の遺構群の特徴について概要を述べることとする。

古墳時代前期の特徴的な遺構としては廃棄土坑（SK005、SK059）があげられる。土坑からは布留式古相段階の土師器甕類・高坏・椀・器台等が大量に出土しており、土器相としては布留式が大半を占めるが、庄内系のタタキ甕・山陰系の二重口縁壺も少数共伴している。隣接地である殿城戸第７次調査区においては方形区画溝コーナー付近から廃棄土坑が４基検出されている。本調査区で検出された廃棄土坑も７次調査での方形区画溝の南東コーナー付近に位置しており、７次調査で検出された廃棄土坑群の一群として加えられよう。

なお、７次調査区の廃棄土坑出土遺物について、調査時の所見では土師器高坏・小形丸底甕が甕類などの日常雑器に比べて出土比率が高いことがあげられており、一方、本調査区における２基の廃棄土坑では器台・高坏類に対して甕類の出土率が圧倒的に高く、内容の差異が注意される。

古墳時代中期の遺構としてはSI005とSI010の２軒の住居跡があげられる。6SI005は出土遺物が僅少であり、図示し得た遺物についても時期決定に際しては良好な資料とは言い得ないが、床面直上出土である１の高坏を基準とするならば、５世紀代の遺構として捉えられよう。6SI010についてはTK－208併行の須恵器蓋が出土しており、他の須恵器・土師器についても５世紀中葉段階の遺物に集約される。隣接地である殿城戸第７次調査区においても当該期（５世紀代）の住居跡が数件検出されており、上記した住居跡とあわせて古墳時代中期の集落址を構成していたものと推定される。

古代では当該期の遺構は９世紀前半（大宰府ⅥＢ期）に比定される火葬墓（ST001）が１基、土坑（SK002～004）３基が丘陵斜面部から検出されており、土坑については時期決定資料に乏しいことから土層観察により大枠として古代の遺構と判断された。

火葬墓の存在は宮ノ本遺跡で検出されている墓域と併せて当地域の丘陵部に９世紀代の墓域が存在することが明らかとなった。また、斜面包含層中の越州窯系青磁壺片・須恵器甕・坏片から墓域の広がりを推測することもできよう。

中世については当初、「殿城戸」という地名から中世城郭関連の遺構の検出が期待されたが、遺構・遺物は全く検出されなかった。なお、残存している包含層中にも全く中世遺物が見られないこと、古代の火葬墓を検出した東側丘陵斜面部でも当該期の地業の痕跡、遺構が

見あたらないこと等、本調査区に限れば中世期の人的活動は認められない。

近世では溝状遺構・性格不明遺構が検出された。具体的な時期としては17世紀前半から18世紀代の時間枠内で遺構が構築されており、特徴的な遺構としてはSX056があげられる。

SX056は不定形な掘り込みを持ち、底面には炭化物範囲が２ヶ所認められる。出土遺物は17世紀前半代を中心として弥生土器・石器などの混入遺物も含まれており、遺構の廃絶は人為的な埋土によるものである。本遺構の性格については当初、調査区北側に展開する可耕地との関わりから農耕に関連した水利施設かとも推測したが、土層に滞水の痕跡が認められないこと、本址から取水する施設（溝）が付随していないことに加え、出土遺物の様相に椀・皿類が多く、屋敷地遺跡の様相に近い点などから、水利施設の可能性は低いと考えられる。

一方、出土遺物が示している屋敷地的内容が果たしてどこから持ち込まれたかは確定することはできないが、至近距離からの移動を念頭に置き、殿城戸丘陵部に集落が存在していた可能性を示すものと考えておきたい。

（小山裕之）

参考文献

久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究XIX－庄内式併行期の土器生産とその動き－』庄内式土器研究会

九州近世陶磁学会 2000「九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念」

大橋康二 1994『古伊万里の文様』理工学社

殿城戸遺跡第6次調査 出土遺物一覧表

S－1

須恵器	有耳壺
土師器	椀c
その他	人骨

S－2

土師器	片

S－3

土師器	甕a？(1)

S－5

須恵器	甕
土師器	高坏、片

S－5　褐灰色土

須恵器	甕
土師器	高坏
無釉陶器	擂鉢
石製品	石匙
弥生土器	甕、坏

S－6

土師器	布留甕、高坏、坩、壺、丸底壺、小形器台、高坏
石製品	花崗岩礫
弥生土器	中期樽形土器(1)

S－6　褐色土

弥生土器	中～後期高坏(1)、片(3)

S－6　暗褐色土

土師器	布留甕、高坏、丸底坩、小形丸底壺

S－8　褐灰色土

土師器	布留甕
肥前系陶磁器	皿×坏
国産陶器	象嵌大皿、褐釉擂鉢

S－10　褐色土

須恵器	壺a×c、蓋2、甕
土師器	布留甕、高坏、坏
弥生土器	中期壺？

S－10　暗褐色土

須恵器	甕、高坏、坏c3、鉢×壺、坏？
土師器	布留甕、把手付き甕、片
石製品	ob-f(1)
土師質土器	煙突
肥前系陶磁器	皿
国産陶器	椀、鉢

S－14

土師器	布留甕

S－18

土師器	片

S－19　暗褐色土

土師器	布留甕

S－20　暗褐色土

土師器	甕？

S－22　褐色土

土師器	片

S－27　褐色土

土師器	片

S－29　黒褐色土

土師器	片

S－32　褐色土

弥生土器	片

S－34　褐色土

土師器	片

S－50　暗褐色土

須恵器	坏a？
瓦質土器	樽形鉢、大甕
肥前系陶磁器	染付け椀(4)、皿(1)
国産陶器	肥前系三彩皿、褐釉椀鉢
弥生土器	甕

S－53

土師器	片(4)
肥前系陶磁器	くらわんか皿
国産陶器	唐津坏、産地不明椀

S－56　褐灰色土

須恵器	甕、鉢？、鉢b？、蓋3
土師器	甕、高坏
瓦類	瓦片
石製品	石斧片？、棒状石製品、太型蛤刃石斧
肥前系陶磁器	青磁皿、染付け小椀、白磁椀、小坏、染付け大皿
国産陶器	椀、丸椀、無釉擂鉢
弥生土器	中期甕
金属製品	板状鉄製品
その他	石炭

S－56　褐灰色土

須　恵　器	鉢b、鉢b？、蓋2、坏c3
土　師　器	高坏
土師質土器	焙烙
石　製　品	石斧片？、棒状石製品、太型蛤刃石斧
肥前系陶磁器	染付椀、小椀、小坏、染付け大皿、徳利、椀、雑釉椀
国産陶器	褐釉壺、鉢、擂鉢、鉢？
弥生土器	中期甕
縄文土器	押型文

S－56　灰色土

須　恵　器	壺a×c、
瓦　　類	平瓦
肥前系陶磁器	青磁壺、染付小杯、皿、染付け大皿
国産陶器	唐津鉄釉皿、褐釉大皿、擂鉢

S－56　暗褐色土

須　恵　器	坏c、坏c3
土　師　器	甕？、坏？
瓦　　類	丸瓦（無文）、平瓦
肥前系陶磁器	染付椀、皿、染付け大皿
国産陶器	褐釉鉢注口、褐釉鉢、褐釉皿
中国陶器	万頭心椀?
弥生土器	中期広口壺

S－59

土　師　器	西新町系大甕、布留甕、高坏、片

S－60　褐灰色土

須　恵　器	甕、坏c3
土　師　器	甕
瓦質土器	樽形鉢
肥前系陶磁器	丸椀

S－56　暗褐色土

須　恵　器	坏、蓋2
土　師　器	布留甕

S－62　褐灰色土

土　師　器	片

S－63　褐灰色土

土　師　器	片

S－95

土　師　器	片
瓦質土器	大甕
肥前系陶磁器	片

表　土

須　恵　器	甕、鉢、坏2、坏？、蓋b、高坏
土　師　器	甕、坏？
越州窯系青磁	瓶
肥前系陶磁器	染付丸椀、椀、散り蓮華
国産陶器	褐釉甕、褐釉瓶、白釉皿、燭、大鉢
弥生土器	後期壺、甕、支脚
土　製　品	手捏ね

E11　褐色土

越州窯系青磁	壺

G・H8・9　褐色土

土須恵器	甕？、壺？、坏2、坏？
土　師　器	坏？
弥生土器	後期大甕
金属製品	楔状鉄製品

G9　褐色土

土　師　器	片
土師質土器	煙突

H5　褐色土

須　恵　器	甕、皿a、高坏×2、蓋3
土　師　器	甕

H・I5　褐色土

須　恵　器	甕、高坏×2、坏2
弥生土器	後期壺

H・I6・7

須　恵　器	甕？、鉢？、坏c3、蓋2、蓋3、皿a、高坏
土　師　器	坏aヘラ
越州窯系青磁	壺
瓦　　類	平瓦
肥前系陶磁器	染付筒椀、端反坏
国産陶器	擂鉢
弥生土器	中期甕
金属製品	板状鉄製品、釘（断面四角）

I・J6・7　褐色土

須　恵　器	甕、鉢b？
土　師　器	甕
肥前系陶磁器	三彩大皿

I・J7　褐色土

須恵器	甕、壺
土師器	坏
石製品	ob、縦長剥片
瓦質土器	鉢
肥前系陶磁器	染付片
国産陶器	擂鉢
弥生土器	鉢

I・J7・8　褐色土

須恵器	甕
土師器	把手甕、坏、坏a？
弥生土器	中期甕

J7　褐色土

須恵器	甕、甑、坏、坏4、坏？、蓋3
土師器	甕、片

K・J6　褐色土

須恵器	甕
土師器	椀c、高坏
石製品	ob-rf(1)
弥生土器	中期壺

K6・7　表土

瓦類	瓦
国産陶器	白釉坏、褐釉長胴壺

K6・7　褐色土

土師器	甕、片
石製品	ob-f(1)
瓦質土器	鍋

L・M13　褐色土

国産陶器	褐釉擂鉢

K・J6　褐色土

須恵器	壺？
弥生土器	片

N7　褐色土

石製品	ap

殿城戸遺跡第6次調査 遺物計測表

S－1（6ST001）　　単位＝cm、（ ）＝復元数値、現：現存高

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・椀 c1	1	R002	1	(16.0)	(5.3)	(8.1)	○		○				黒色土器A
須・壺	1	R001	2		現 29.8	16.5			○	○			双耳壺
人骨	1	R003											火葬骨

S－5（6SI005）褐灰色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・高坏	1	R003	1	(8.7)	(5.2)	(9.6)			○				
須・甕	1	R002	2		現 7.5		○						
陶・片口	1	R001	3		現 3.5								鉄釉

S－6（6SK006）

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・壺	1	R017	1		現 16.0			○					布留式甕
土・壺	2	R010	2	(18.0)	現 21.5			○		○	○		布留式甕
土・壺	3	R018	3	17.4	現 21.5			○	○	○			布留式甕
土・壺	4	R001	4	18.4	現 31.7			○	○				布留式甕
土・壺	5	R002	5	16.8	現 25.0			○	○				布留式甕
土・甕	1	R008	6	(27.0)	現 4.5			○		○			布留式甕
土・甕	2	R004	7	(14.0)	現 6.0			○	○	○			布留式甕
土・甕	3	R003	8	(14.4)	現 7.9			○	○	○			布留式甕
土・甕	4	R007	9	(15.2)	現 4.7			○	○	○			布留式甕
土・甕	5	R005	10	(14.0)	現 6.5			○	○	○			布留式甕
土・甕	6	R020	11	14.0	現 14.0			○	○	○			布留式甕
土・甕	7	R019	12	17.8	現 12.1			○	○	○			布留式甕
土・甕	8	R006	13	17.0	現 6.7			○	○	○			布留式甕
土・坏	1	R011	17	12.5	3.2							○	
土・小形丸底壺	1	R021	13	10.2	6.7							ヘラ○	
土・小形広口壺	1	R022	19	17.2	8.5	4.6							
土・小形器台	1	R013	20	(10.2)	現 8.2							ヘラ○	透孔2ヶ所
土・高坏	1	R012	21	12.4	11.2	10.5				○		ヘラ○	透孔3ヶ所
土・高坏	2	R014	22		現 3.3			○	○				
弥生・甕	1	R016	23		現 3.4								

S－6（6SK006）

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・甕	1	R023	14		現 6.3		○						庄内系
土・甕	2	R024	15		現 4.7		○						庄内系
土・甕	3	R025	16		現 3.3		○						庄内系

S－6（6SK006）褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・甕	1	R001	1		現 1.4					○			布留式甕
土・甕	2	R002	2		現 2.4	7.2							布留式甕

S－6（6SK006）暗褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
土・甕	1	R002	1	14.0	現14.0			○					布留式甕
土・甕	2	R001	2	(18.0)	現 6.1								布留式甕
土・壺	1	R007	3	(19.4)	現 6.1					○?			二重口縁・山陰系
土・坏	1	R004	4	14.7	3.2					○			
土・小形丸底壺	1	R003	7	10.6	7.5			○	○	○			
土・小形器台	1	R006	6		現 2.1								
土・高坏	1	R005	5		現 3.9	10.4							

石器

S－6暗褐色土

器種	番号	R－	図番号	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
石匙	1	R008	8	4.9	3.9	0.6		サヌカイト	

S－8（6SD008）褐灰色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
陶・象嵌大皿	1	R001	1		現 3.5								灰釉

S－10（6SK010）暗褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
須・蓋	1	R001	1	11.6	4.3						ヘラ○		天井部十字状ヘラ書き
須・高坏	1	R002	2	15.0	現10.0								櫛描き波状文
土・高坏	1	R003	5	14.4	現 5.0			○		○			
土・高坏	2	R004	6	25.5	現 5.0								

S－10（6SI010）褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
須・甕	1	R002	3				○						
土・坏	1	R001	4	(10.0)	現 3.4				○				

S－50（6SX050）暗褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
磁・椀	1	R001	1		現 5.2	(4.5)							肥前系
陶・椀	2	R002	2		現 2.1	(4.2)							灰釉
陶・大皿	1	R003	3		現 3.2	(21.2)							三彩
瓦質・甕	1	R004	4	(21.7)	現11.7			○					

S－53（6SX053）暗褐色土

器種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備考
陶・椀	1	R001	1		現 4.4	4.4							灰釉
陶・皿	1	R002	2	(13.8)	現 2.1								灰釉

S－56（6SX056）褐灰色土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
磁・椀	1	R001	1	(8.4)	3.8	2.5							初期伊万里
磁・小杯	1	R002	2	(5.0)	3.0	2.3							
青磁・皿	1	R004	3	(22.0)	現 3.8								折縁皿・初期伊万里
陶・椀	1	R003	4		現 3.0	5.3							灰釉
弥生・甕	1	R005	5		現 2.1	(8.0)							

石器

S－56褐灰色土

器種	番号	R－	図版番	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	備　考
太形蛤刃石斧	1	R007	6	18.6	7.5	4.9		砂岩	
磨製石器	1	R008	7	8.2	5.8	1.2		砂岩	
砥石	1	R006	8	9.5	4.6	2.8		安山岩	

S－56（6SX056）褐色土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
染磁・皿	1	R002	1		現 1.4	5.0							初期伊万里
染磁・皿	2	R001	2		現 2.5	8.0							初期伊万里
磁・壺	1	R003	3	(2.4)	現 7.4								初期伊万里
陶・椀	1	R004	4		現 2.3	4.8							灰釉
弥生・甕	1	R005	5		現 3.9	(8.0)				○	ヘラ○		
弥生・甕	2	R006	6		現 3.8	(8.0)							

S－56（6SX056）灰色土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
染磁・小杯	1	R001	3	(5.9)	3.8	2.5							初期伊万里
染磁・皿	1	R003	2		現 1.9	5.6							初期伊万里
染磁・皿	2	R002	1		現 3.8	7.8							初期伊万里

S－56（6SX056）暗褐色土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
染磁・皿	1	R001	1	(15.2)	現 3.1	7.4							舶載磁器
染磁・皿	2	R002	2		現 2.7	5.1							初期伊万里
染磁・皿	3	R003	3		現 1.9	5.6							初期伊万里
陶・片口	1	R004	4		現 4.3								鉄釉

S－59（6SK059）

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
土・甕	1	R001	1	(22.8)	現 2.8			○					

S－59（6SK059）暗褐色土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
土・甕	1	R001	3		現 5.8	(9.0)			○				
土・高坏	1	R002	2	(23.2)	現 6.0			○				○	

S－95（6SX095）

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
土師質・甕	1	R001	1		現 11.6			○					

表土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
土・ミニチュア	1	R002	1	2.4	2.1								手捏ね
須・坏	1	R003	3	(11.5)	現 3.5						ヘラ○		
土・坏a	1	R008	2		現 2.1	(7.4)					ヘラ○		
越磁・壺	1	R004	5		現 4.3	(7.6)							
染磁・椀	1	R006	6	(9.9)	6.2	3.7							肥前系
染磁・椀	2	R009	7		現 1.4	(4.4)							肥前系
磁・散り蓮華	1	R010	8	現	5.1								肥前系
陶・土瓶	1	R001	9		現 3.5	(7.7)							鉄釉
陶・乗燭	1	R005	10	3.6	8.3	5.0							鉄釉

表土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
越磁・壺	2	R011	4		現 4.5								有耳壺

褐色土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
土・高坏	1	R001	1		現 3.9								
土・甑	1	R002	2	(25.0)	14.1			○	○	○			
土・甑	2	R003	3		現 7.3								
須・蓋	1	R004	4	(12.4)	現 4.3						ヘラ○		
須・坏	1	R005	5	(11.7)	現 4.5						ヘラ○		
須・坏	2	R006	6		現 3.4						ヘラ○		
須・甕	1	R007	7	(21.0)	現 3.6								櫛描き波状文
須・甕	2	R008	8	(21.0)	現 5.5								
須・皿a	1	R009	9	(13.0)	1.7	(10.0)			○		○		
須・坏c1	1	R010	10	(13.0)	4.0	7.6			○				
須・蓋b	1	R011	11		現 2.5				○				
越磁・壺	1	R012	12		現 8.5								二次焼成を受ける
陶・擂鉢	1	R013	14	(28.0)	現 7.4								
陶・擂鉢	2	R014	15		現 4.4								鉄釉
瓦	1	R016	16	現幅 8.2	現長 14.0	厚 2.6							

褐色土

器　種	番号	R－	図番号	口径	器高	底径	タタキ	ハケメ	ナデ	ヘラナデ	ケズリ	ミガキ	備　考
越磁・瓶	1	R015	13		現 3.9								

褐色土　石器

器　種	番号	R－	図版番	長さ	幅	厚さ	重量	石　質	備　考
剥片	1	R017	17	4.7	1.9	0.5		黒曜石	

4．殿城戸遺跡第７次調査について

本調査地点は福岡県太宰府市大佐野183、184－1で、現地での調査は平成12年４月３日から10月９日まで実施した。

６次調査との係わり

殿城戸遺跡第７次調査は、第６次調査区（本報告分）と隣接しており、溝状遺構7SD105が６次調査区から延長してくる6SD007と連続する形で確認される。埋土の堆積状況は、土層観察より南から北へと堆積しており、北側部分で立ち上がり不明瞭である。遺物の出土が無いため時期は不明であるが、布留系の土器が出土する土坑7SK045・075に切られることから、古墳時代初頭以前の埋没していた可能性が考えられる。また、６次調査区では、布留式古相併行期に位置付けられる土坑が６次調査区と７次調査区の接する地点付近で２基検出されているが、７次調査区でも同時期と考えられる、土器が廃棄がされている土坑が４基確認されている。これらの土坑は、７次調査区で検出された１辺約18ｍの方形区画溝（7SD100）のコーナー近くで構築されている。７次調査区で確認される土坑群は、土坑が埋没する過程で土器が廃棄されており、土器廃棄を目的として構築されたとは考えにくい。出土する土器は7SK045・075では甕、壺などの日用雑器が多く、7SK403、404では小型丸底壺、高坏、小型器台などの祭祀的要素をもつものが出土している。６次調査で確認された6SK006からも丸底壺、坩、小型器台などが見られ、時期的な問題も含む詳細な検討が必要である。土器の時期、配置状況から方形区画溝（7SD100）と何らかの関係が窺える。

また、本調査区南側、６次調査区との境目付近にカマドをもつ住居跡（7SI155）が確認された。平面プランは不定形な方形を呈し、カマドは住居の西側に付設されていた。住居床面には柱穴が幾つか見られたが、明確に主柱穴と判断するには至らなかった。出土遺物は土師器の坏、甕などが見られ、また、覆土から須恵器片が１点出土しており、古墳時代中期以降の住居跡と考えられる。

方形区画溝について

第７次調査では、古墳時代前期の集落の一部が確認された。集落は、区画溝7SD100を中心として展開していると考えられる。尾崎遺跡、脇道遺跡など過去の周辺調査と照らし合わせると、区画溝7SD100は弥生時代後期から古墳時代前期に亘る竪穴住居跡を主体とする集落の最奥部に立地している。

・住居と方形区画溝（7SD100）の関係

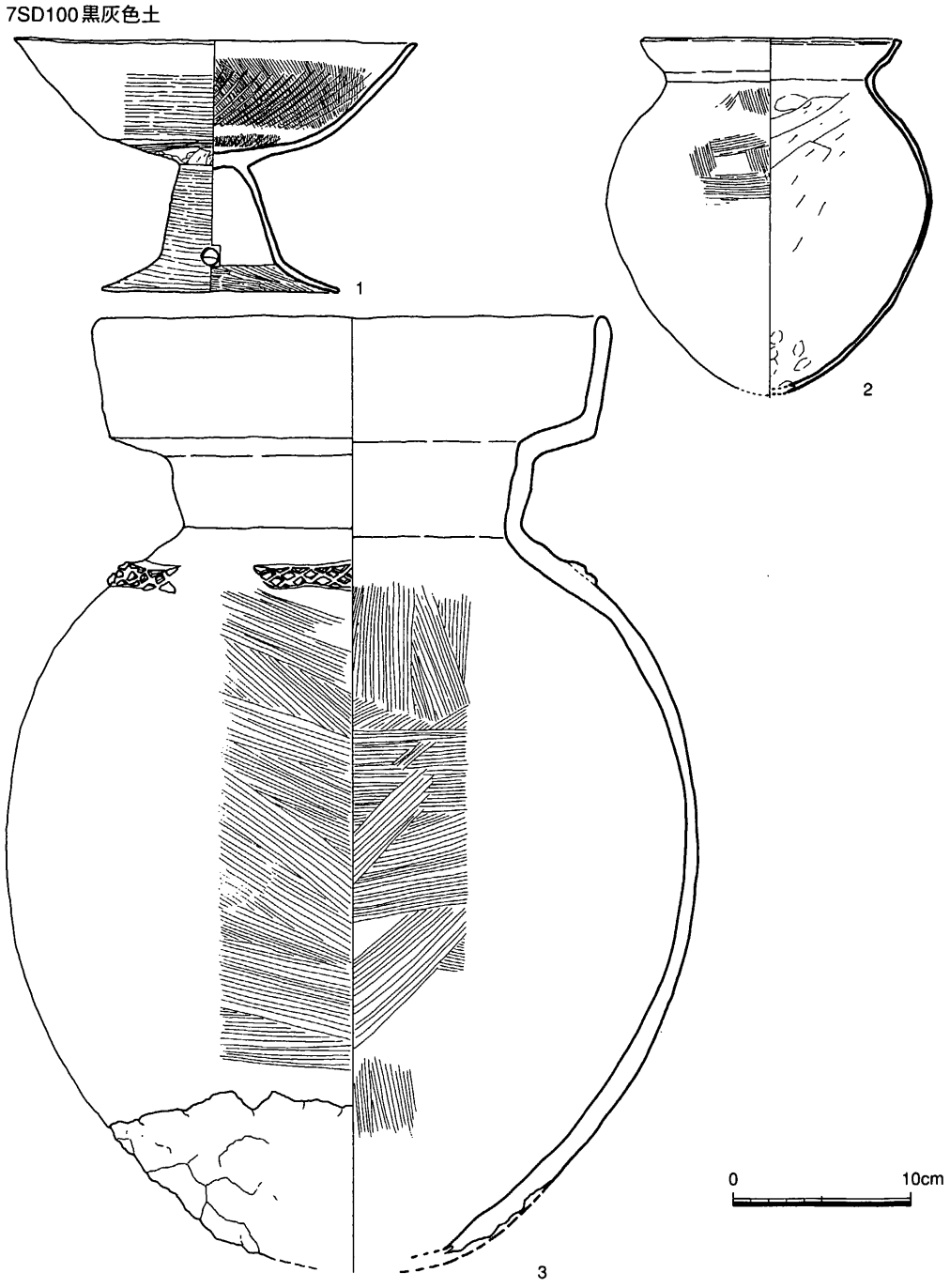


第1図　殿城戸遺跡第7次調査遺構配置図（S=1/400）

本調査区での住居の平面プラン、方向は7SD100と類似している。住居の配置状況は7SD100の東辺溝のラインに揃えて構築されているように見られる。これらのことから住居と7SD100との間に有機的関係が存するものと思われる。

・土坑と方形区画溝（7SD100）の関係

前述したが、土坑は方形区画溝（7SD100）の四隅の延長方向に築かれており、また、各土坑からの土器の出土状態を考えると、土器は分別しながら廃棄された可能性がある。現時点で整理を行っていないため不明な部分が多く、詳細については本報告で行いたい。



第２図　7SD100出土遺物（S=1/4）

・掘立柱建物と方形区画溝（7SD100）の関係

7SD100の内部空閑には南東隅に掘立柱建物が確認される。遺物の出土が無いため時期は不明であるが、主軸の傾きから7SD100に付随する可能性がある。規模は1間×2間で各柱間は南北2.4ｍ・2.1ｍ、東西4.4ｍを測る。現状では住居ないし倉庫の判別はできない。また、掘立柱建物の西側には遺構は少なく広場として利用されていたと考えられる。

方形区画溝の性格について

7SD100の周辺には杭痕、柵列など外部と視覚的に隔絶するような施設は無く、北側の陸橋部にも遮蔽するような施設は存在しない。7SD100内部と外部（集落）を区別するものは溝だけであり、陸橋部を通じて自由に往来ができ、外部からは容易に内部の様子が窺える。以上のことから7SD100の性格を考えると、居館とした場合、出土遺物の量や性質（非日用性）、建物の規模（居住施設、政殿などの使い分けが無い）、周囲との断絶性が看取されないなどから、その可能性は低いと思われる。また、掘立柱建物と周辺の住居を比較すると、規模などの優越性が感じられないことから祭殿とも考えにくい。立地状況、住居群との関連、開放性、居住空間としての要素の希薄性から、7SD100は古墳時代前期集落とオープンスペース（公共的な広場）との境界を目的として築かれたと考えられる。

6次調査地は、天拝山から派生する丘陵地の末端部に位置している。弥生時代後期から古墳時代前期の集落は、6次調査地を背後にする形で展開している。今回の調査では、弥生時代と考えられる掘立柱建物跡も確認され、掘立柱建物を壊した後に方形区画溝が構築されており、丘陵付近の微高地は竪穴住居が密集する北側の平野部と「場」の性質を異にすると思われる。これらのことから6次調査地の立地する丘陵地は集落最南部を仕切る境界線と考えられ、7SD105（6SD007）はその境界線に付随する施設の可能性が考えられる。

出土遺物（7SD100黒灰色土層）

1　高坏　深めの坏部をもち、内面に細かな単位の刷毛で放射状に調整を行った後、その方向とは逆向きに放射状のミガキが施されている。外面は坏部、柱部の接合部付近に掻き目状の刷毛目が見られ、全体的に横方向の連続した磨きを施している。

2　甕　布留系の甕で、跳ね上げ状の口縁端部を有し、胴部中央付近に最大径がくる倒卵形を呈す。内面は粗い削りが施されている。

3　壺　山陰系の影響を受けたと思われる在地の二重口縁壺である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、胴部中央付近に最大径がみられ、全体的に卵状の器形をする。底部付近は一定な高さより下が表面剝離する。

Ⅴ．カヤノ遺跡第７次調査に伴う自然科学分析

はじめに

カヤノ遺跡は大佐野川東岸の天拝山から北東方向に派生する丘陵上に位置する。今回の発掘調査では、古代の多量に炭化物を伴う土坑、縄文時代の遺物が検出されている。太宰府市及び周辺で検出されている火葬墓は、蔵骨器を伴わないものが多く、遺構内から骨粉が確認される場合が多い。今回の多量に炭化物を伴う土坑も蔵骨器を伴わないものであるが、炭化材片が出土したものの骨粉類の確認はされていない。

そこで、今回は土坑の性格、とくに土坑内土壌中に骨粉の存在の有無を確認することを目的として、微細物分析と土壌化学分析を実施する。土壌化学分析では、骨や人体に多量に含まれるリン酸含量の測定（リン酸分析）を選択した。また、火葬墓・焼土坑、縄文時代の遺物包含層から出土した炭化材の樹種同定を行い、当時の木材の選択状況や古植生についても検討する。

１．試料

（１）土坑

試料は、古代と考えられる土坑４基（7SK025,7SK026,7SK029,7SK037）から採取された炭化材混じりの土壌試料である。7SK029が２試料あるため、合計５試料である。炭化材は、試料数が少なかった7SK026から３点、他の４試料からは各５点、合計23点を抽出した。炭化材を抽出した後の試料から、リン分析に必要な量を採取し、残りを微細物分析用試料とした。

（２）縄文時代の遺物包含層

試料は、縄文時代の遺物包含層から採取された炭化材２試料（№184,E3）である。いずれも多数の炭化材が含まれており、それぞれから５点、計10点を抽出した。

２．分析方法

（１）樹種同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

（２）微細遺物同定

試料を低温で乾燥（40℃で１昼夜程度）させたあと、１㎜の篩にかけて残渣を集める。これを実体顕微鏡や肉眼で観察し、炭化材や骨など同定可能な遺物を抽出する。

（3）リン酸分析

硝酸・過塩素酸分解－バナドモリブデン酸比色法により土壌中の全リン酸を測定した（土壌養分測定法委員会，1981）。以下に各項目の操作工程を示す。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.00㎜の篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸（HNO３）約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸（HClO４）約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸（P205）濃度を測定する。この測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン酸含量（P205mg/g）を求める。

3．結果

（1）樹種同定

樹種同定結果を表1・図版45～47に示す。炭化材は、針葉樹1種類（マツ属複維管束亜属）と広葉樹6種類（クリ・コナラ属アカガシ亜属・ヤマグワ・シャシャンボ・シキミ・ムラサキシキブ属）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。

表1　炭化材の樹種同定結果

地区	遺構名など	時　代	試料名	層位など	樹種（　）内は点数
	縄文時代の包含層	縄文時代	№184	黄褐	広葉樹 (2)
					コナラ属アカガシ亜属 (3)
			E3	黄褐色土	コナラ属アカガシ亜属 (5)
D－6	7SK025（土坑）	古代		3層	マツ属複維管束亜属 (5)
	7SK026（土坑）	古代		黒褐色土	クリ (3)
F－11	7SK029（土坑）	古代			シャシャンボ (1)
					ムラサキシキブ属 (2)
					シキミ (1)
					コナラ属アカガシ亜属 (1)
				3層	コナラ属アカガシ亜属 (4)
					シキミ (1)
H－6	7SK037（土坑）	古代			クリ (3)
					シキミ (1)
					ヤマグワ (1)

・マツ属複維管束亜属（Pinus subgen. Diploxylon）　　マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・ヤマグワ（Morus australis Poiret）　　クワ科

試料は小片。環孔材で、孔圏部の列数は不明、小道管は漸減しながら、塊状に複合して斜方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、1～6細胞幅、1～50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・シキミ（Illicium anisatum L.）　　シキミ科

散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では多角形、単独または2～4個が複合して散在する。道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～2細胞幅、1～20細胞高。

・シャシャンボ（Vaccinium bracteatum Thunb.）　　ツツジ科スノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に散在する。道管の分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、1～7細胞幅、10～60細胞高。

・ムラサキシキブ属（Callicarpa）　　クマツヅラ科

散孔材で、横断面では多角形、管孔は単独または2～3個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～3細胞幅、1～20細胞高。

（2）微細遺物同定

各試料からは炭化物が検出されたが、炭化種実や骨片は全く検出されなかった（表2）。炭化物量は火葬墓では比較的多かったが、焼土坑では少なかった。また、試料には骨のよう

表2　微細遺物同定結果

地区	遺物名など	層位など	分析量(湿重量)	単価物量	種　実	骨　片	所　見
D－6	7SK025（土坑）	3層	840g	＋＋＋	－	－	白色物質は花崗岩の風化岩片
	7SK026（土坑）	黒褐色土	960g	＋	－	－	白色物質は花崗岩の風化岩片
P－11	7SK029（土坑）		880g	＋＋＋	－	－	白色物質は花崗岩の風化岩片
		3層	1000g	＋＋	－	－	白色物質は花崗岩の風化岩片
H－6	7SK037（土坑）		730g	＋＋＋	－	－	白色物質は花崗岩の風化岩片

＋＋＋：多い　＋＋：普通　＋：少ない　－：検出されない

に見える白色物質が点在したが、実体顕微鏡観察の結果、風化した花崗岩片や風化した長石類（花崗岩に由来すると思われる）であった。

（3）リン酸分析

分析結果を表2に示す。対象とした試料の土性は、CL（埴壌土）～SCL（砂質埴壌土）であり、粘質な土壌であるものの、相当量の砂が含まれることから、潜在的な成分保持能力が低いことが推察される。一方、土色については10YR2/1～3/1と黒色味が強く、比較的腐植が多く含まれていることが予想される。分析結果ではリン酸含量は、1.00～1.24P205mg/gと、各試料ともに著しく低い傾向にあり、試料ごとの差異は認められない。

表3　土坑のリン酸分析結果

地区	遺構名など	層位など	土性	土　色		P205(mg/g)
D－6	7SK025(土坑)	3層	CL	10YR2/1	黒	1.24
	7SK026(土坑)	黒褐色土	SCL	10YR2/1	黒	1.02
F－11	7SK029(土坑)		SCL	10YR3/1	黒褐	1.16
		3層	SCL	10YR2/1	黒	1.17
H－6	7SK037(土坑)		SCL	10YR2/1	黒	1.00

1) 土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修, 1967）による。
2) 土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編, 1984）の野生土性による。
CL……埴壌土（粘土15～25%, シルト20～45%, 砂3～65%）
SCL……砂質埴壌土（粘土15～25%, シルト0～20%, 砂5～85%）

4．考察

（1）縄文時代の炭化材

縄文時代の遺物包含層から出土した炭化材は、常緑広葉樹のアカガシ亜属と種類不明の広葉樹であった。炭化材の用途などの詳細は不明であるが、アカガシ亜属が多いことから、主としてアカガシ亜属の木材を利用していたことが推定される。

アカガシ亜属は、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成種であり、現在の遺跡周辺にも広く分布している。福岡市野芥大藪遺跡では、縄文時代の自然木や種実にアカガシ亜属が多数認めら

れている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1998)。この結果から、本地域でも縄文時代にアカガシ亜属が遺跡周辺に分布し、その木材を利用していたことが推定される。

（2）土坑の炭化材

炭化材は、火毘葬時の燃料材もしくは墓内の防湿材等と考えられている。土坑から出土した炭化材は、針葉樹のマツ属複維管束亜属、常緑広葉樹のアカガシ亜属・シキミ・シャシャンボ、落葉広葉樹のクリ・ムラサキシキブ属・ヤマグワの合計7種類に同定された。遺構別にみてみると、7SK025がマツ属複維管束亜属1種類であったのに対して、7SK029・7SK037は広葉樹かならなり、かつ複数の種類が利用されていた。また、7SK029と7SK037では共通して利用されていた種類はシキミだけであった。

このように今回の土坑から出土した炭化材の組成は遺構ごとで異なっていることが特徴である。各遺構の炭化材が利用されていたものだとすれば、特定の樹種を利用するという傾向がなかったことになる。ただし、上記したシキミだけは2基の遺構から検出されている。シキミは葉や枝に独特の香気がある常緑の小高木である。本種は仏教儀式と関係が深い樹木であり、平安時代の「枕草子」の頃から仏事には「樒（シキミ)」、神事には「榊（サカキ)」が区別されて利用され、中世に入るとはっきりとシキミと言えば仏事の花に限られることになる（萩原,1997)。今回のシキミが仏事で利用されていたかは判断できないが、本遺跡および周辺遺跡の発掘調査成果を含めて評価する必要がある。

今回の炭化材の種類は、大宰府史跡第170次調査の際に8世紀末～9世紀初頭の井戸堆積物で行った花粉分析結果（パリノ・サーヴェイ株式会社，1997）で得られている、周辺植生を構成する要素にも認められる。このことから、今回の種類を含め、遺跡周辺にはアカガシ亜属などの常緑広葉樹を主とする植生が見られ、そこから木材を得ていたことが推定される。遺構による種類構成の多様性および違いは、用材選択の違い等を反映している可能性もあるが、周辺で入手可能なあらゆる木材を利用していた、あるいは遺構の構築時期差による周辺植生の違いなど示している可能性が考えられる。

一方、7SK026から出土した炭化材はクリであった。クリは7SK037でも確認されており、本種もまた周辺に分布していたものが利用されたことが推定される。

（3）土坑内の骨の有無

土坑の土壌中には骨片は全く確認されなかった。骨片のように見えるのは全て花崗岩の岩片であった。太宰府市の丘陵地は、第三期中新世に形成された西南日本外帯花崗岩類で構成されており、これに由来すると思われる。また火葬墓の場合、副葬品の一部とみられる炭化した種実が検出される場合もあるが、今回は全く検出されなかった。

リン酸分析の結果は、九州地方で行われた土壌中のリン酸の天然賦存量（川崎ほか，1991）と比較しても低い。これは、九州地方以外の地域で行われた調査結果（Bowen,1983;Bolt･Bruggenwert,1980;川崎ほか,1991;天野ほか,1991）と比較しても同様である。当社がこれまで行った調査では、遺構覆土に骨片などが認められたときには、6.0～10.0P205mg/gの高い値が得られることが多いが、今回の値は非常に低い。また、骨片が含まれている場合には、埋葬の形態によって土坑内の骨の密度が違うことから、ばらついた値になると思われるが、今回の値はどの試料もほぼ1 mg/mg前後であり均質であった。

以上、今回の分析調査結果から、炭化物を多量に含む土坑は、埋葬に関する痕跡を認めることができなかった。炭化材が出土していることから、何らかを燃やしたことが推定されるが、炭化材自体が各土坑内での燃料材ではなく、炭化材（防湿材としての炭）を持ち込んだ可能性もある。今後、太宰府市内で確認されている骨粉は含むが蔵骨器を含まない土坑についても同様な調査を行い、炭化物のみを多量に含む土坑と比較することで今回の結果を再評価するようにしたい。

5．まとめ

今回の発掘調査で確認された炭化物を多量に含む土坑は、分析結果から葬送に関する遺構であることを指示する結果が得られなかった。ただし、炭化材組成が遺構間で共通項がほとんど見いだせなかったことなどは本土坑の性格を考える資料となる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bowen,H.J.M.（1983）『環境無機化学 －元素の循環と生化学－』．浅見輝男・茅野充男訳,297p.，博友社［Bowen,H.J.M.　(1979) Environmental Cemistry of Elements］.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳，309p.，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.（1976）SOIL CHEMISTRY］.

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂.

萩原秀三郎（1997）シキミ.「朝日百科植物の世界」,9,p.28.

川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27.

農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1997）大宰府史跡第170次調査の自然科学分析.「大宰府史跡学業院中学校整備に伴う埋蔵文化財発掘帖佐報告書」，p.121-126，太宰府市教育委員会.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1998）野芥大藪遺跡における自然科学分析．福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告－4 －福岡市早良区賀茂所在野芥大藪遺跡第1次調査」，p.82-96，福岡市教育委員会.

ペドロジスト懇談会編（1984）土壌調査ハンドブック．156p.，博友社.

図　　版

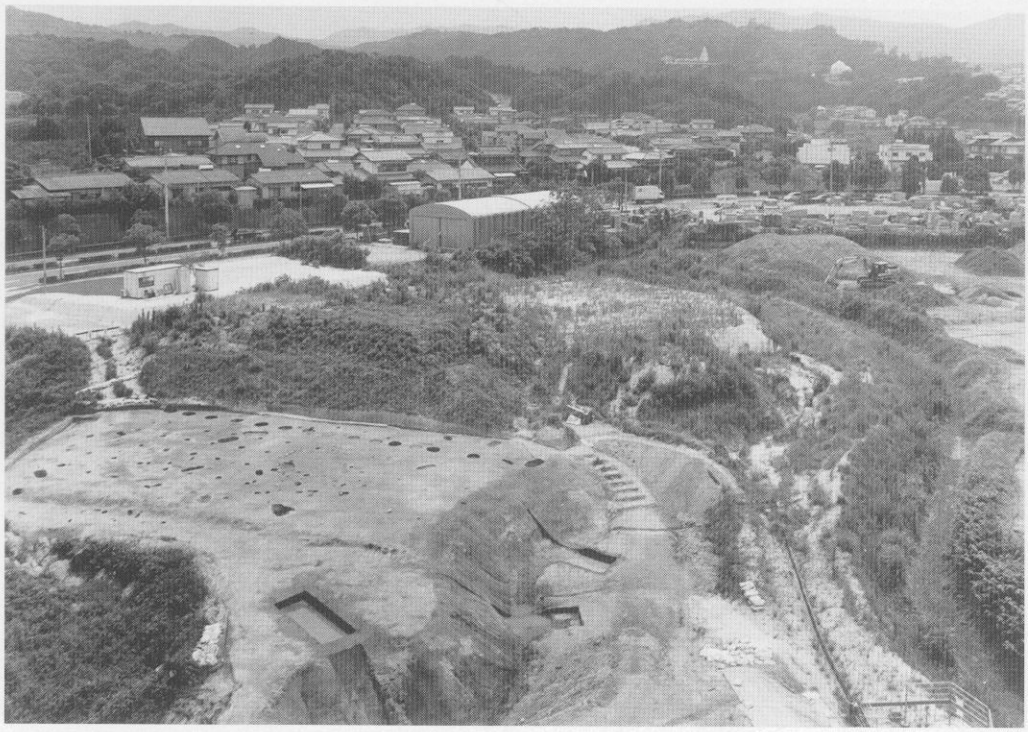


カヤノ遺跡第7次調査区遠景（東上空から）



調査前風景（東から）

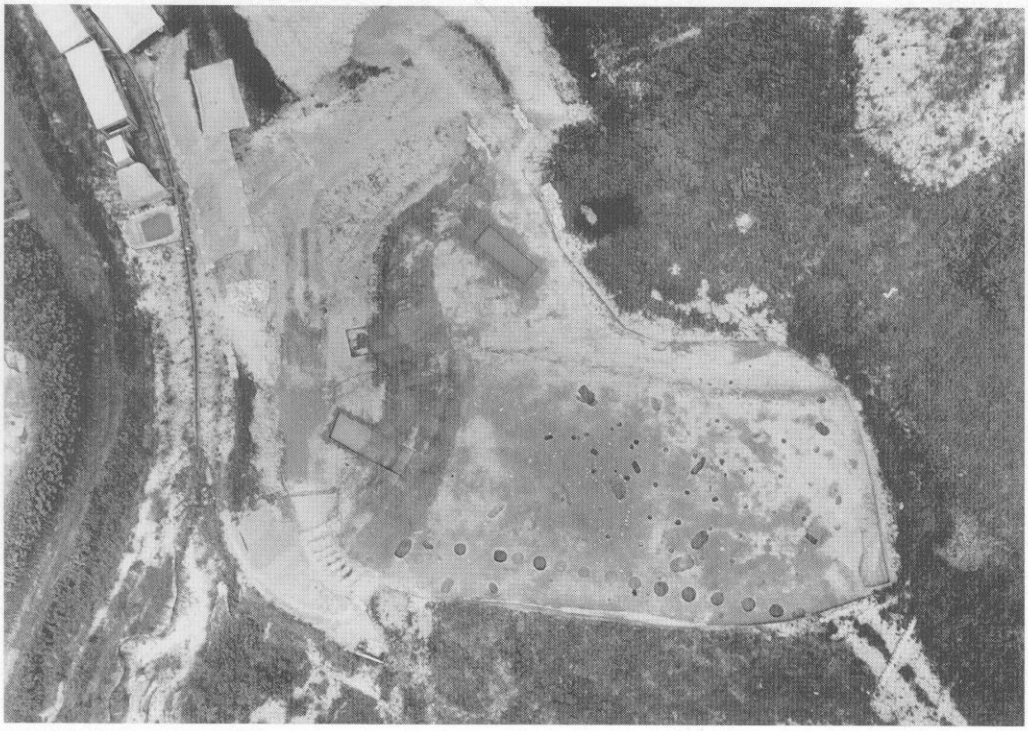
図　版　2



カヤノ遺跡第7次調査区全景（北上空から）



遺跡全景（東から）

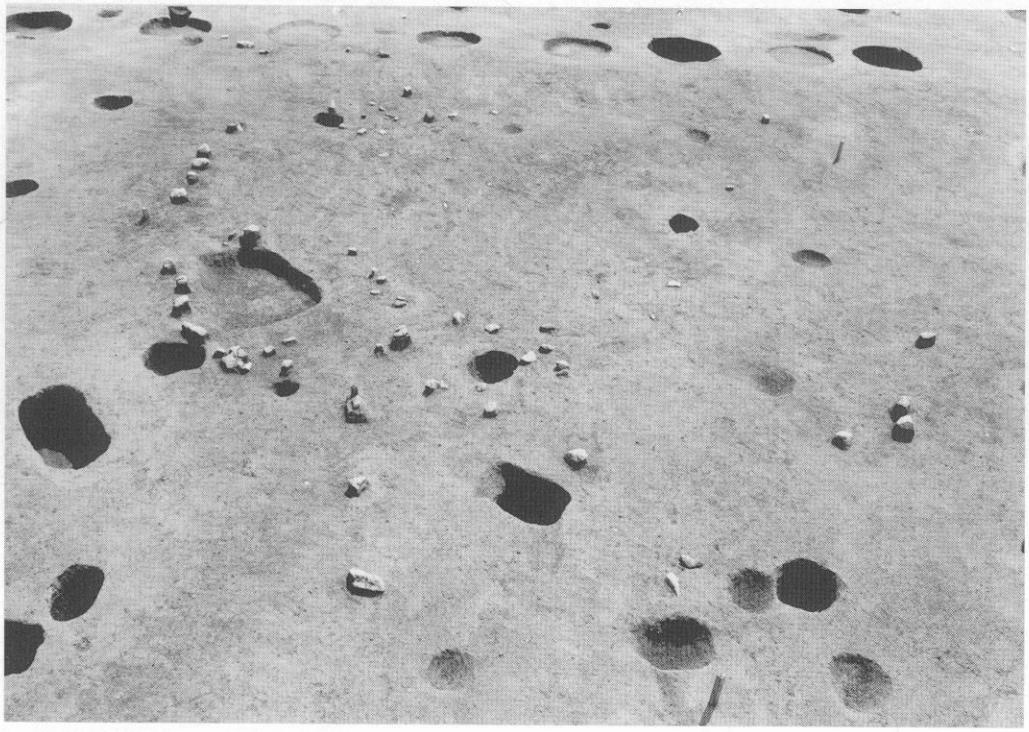


遺跡全景（上空から）



縄文時代礫集中全景（南から）

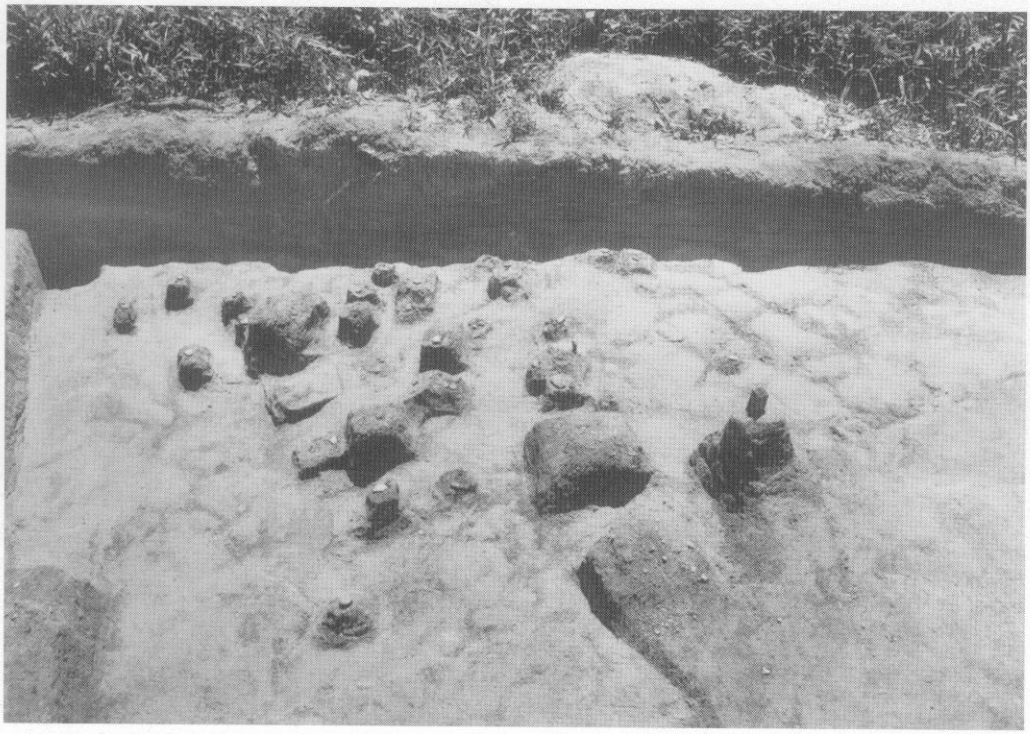
図　版　4



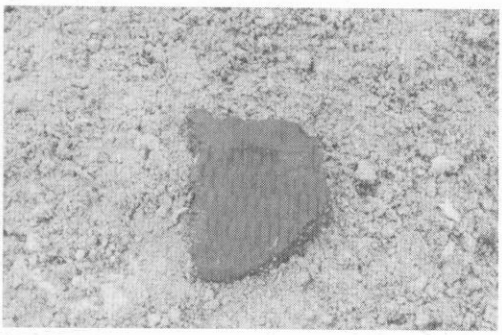
縄文時代7SX049全景（北から）



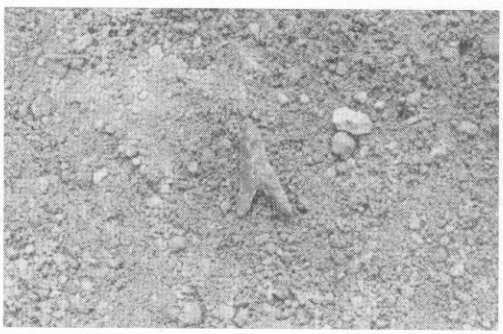
縄文時代遺物出土状況（北西から）



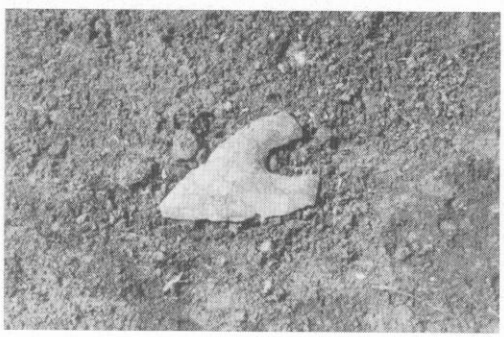
縄文時代遺物出土状況（西から）



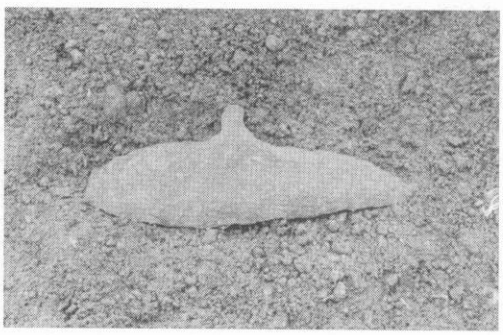
第16図2



第19図1



第19図2



第19図9

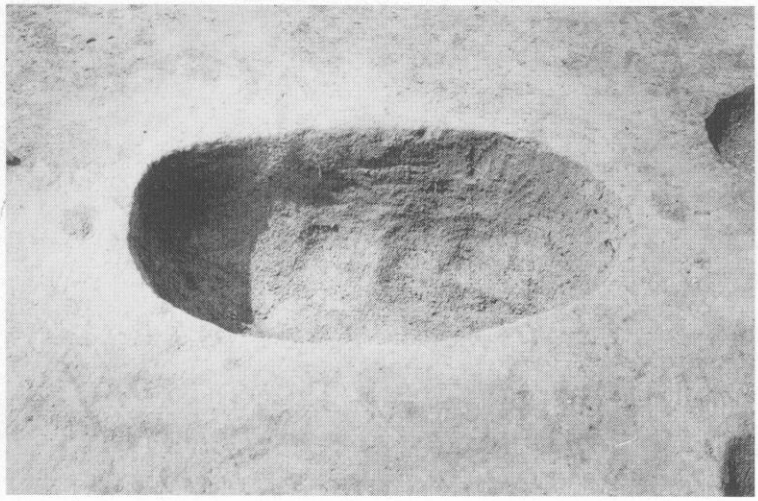
図　版　6



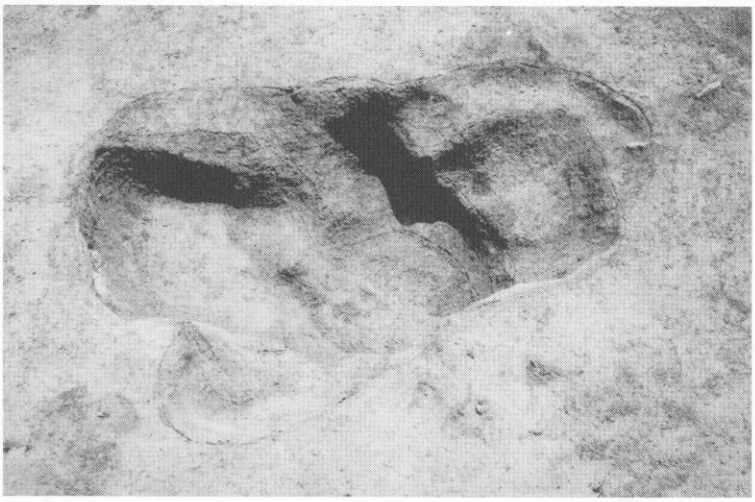
縄文時代トレンチ調査（北から）



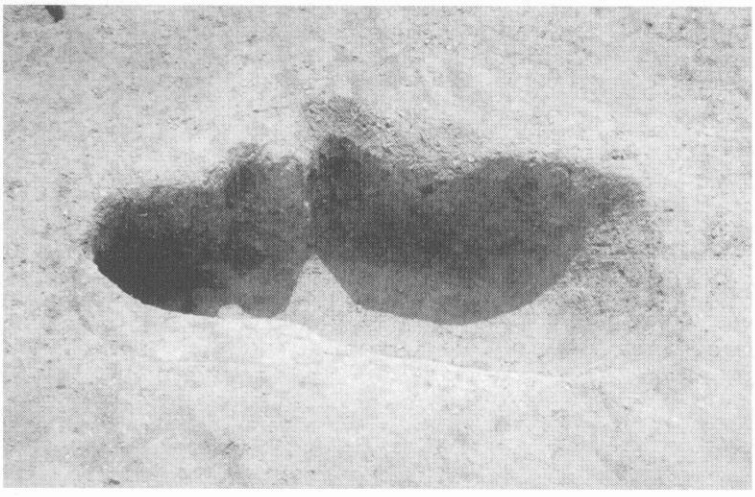
縄文時代3トレンチ土層断面（北から）



7SK040全景（南から）

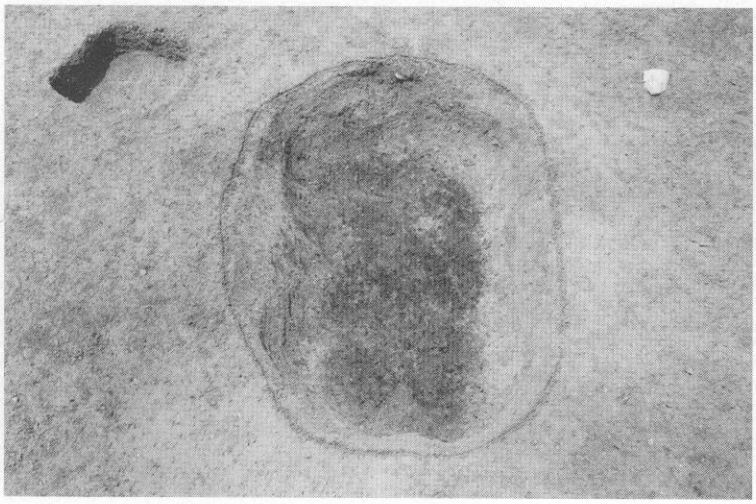


7SK037・7SK031全景
（西から）

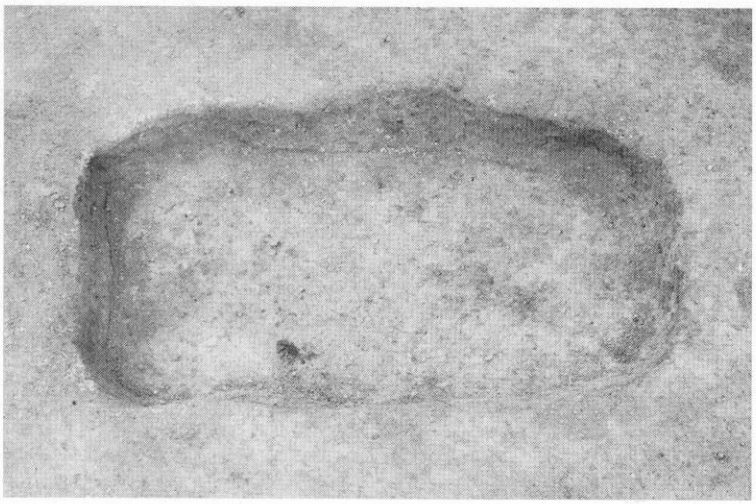


7SK039全景（北東から）

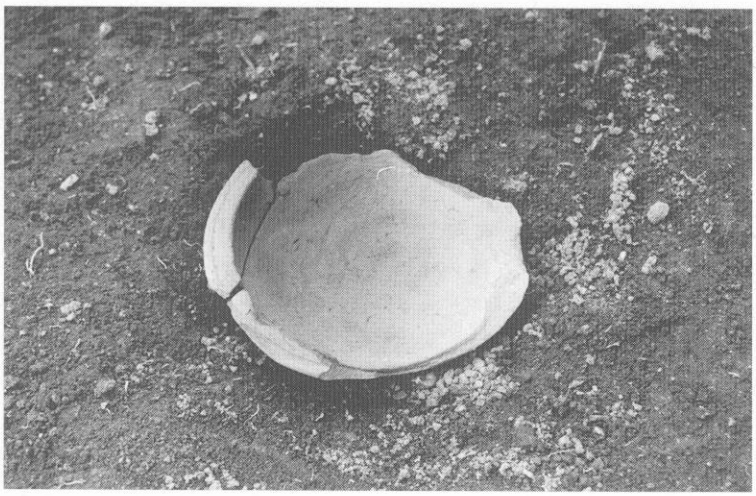
図　版　8



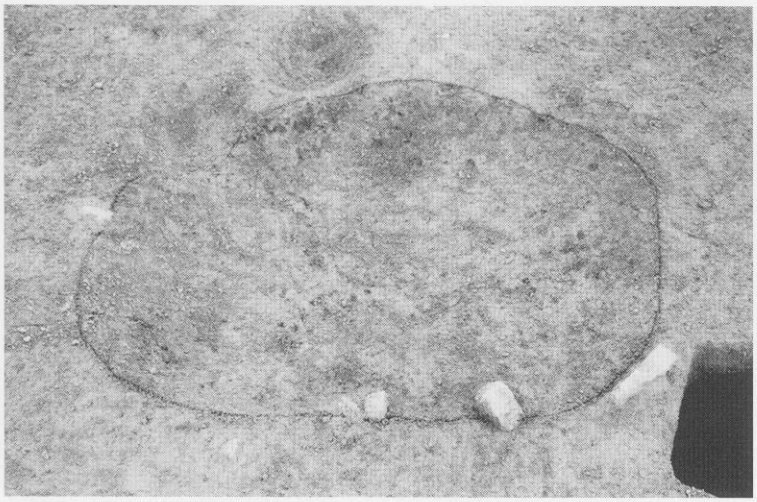
7SK026全景（西から）



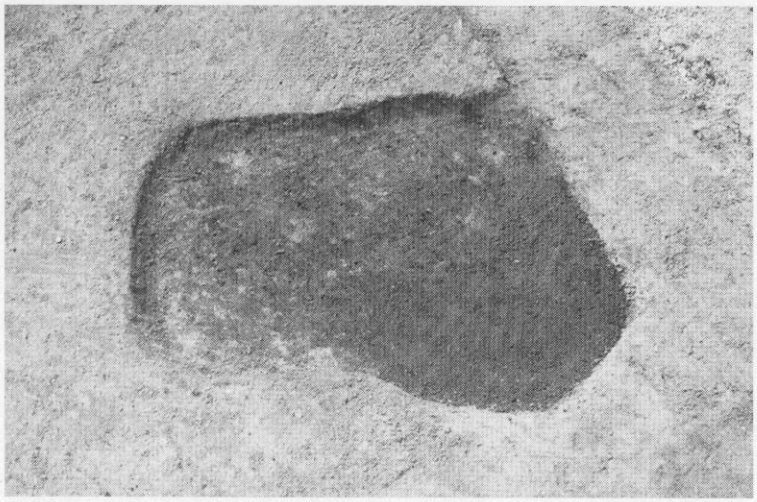
7SK025全景（北から）



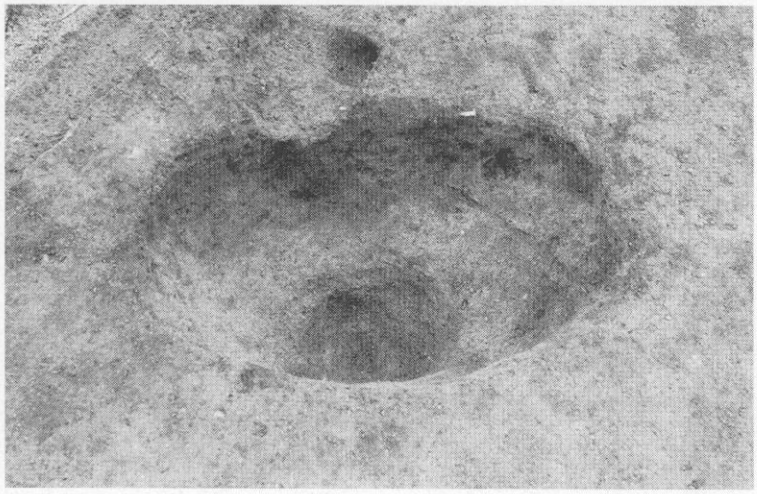
7SK025遺物出土状況
（第27図1）



7SK028全景（西から）



7SK029全景（北西から）



7SK030全景（西から）

図　版　10



7SK025～028全景（北から）



7SK002～004・006～009・011～
014・016～018全景（東から）



7SK002～004・006～009・011～
014・016～018全景（西から）

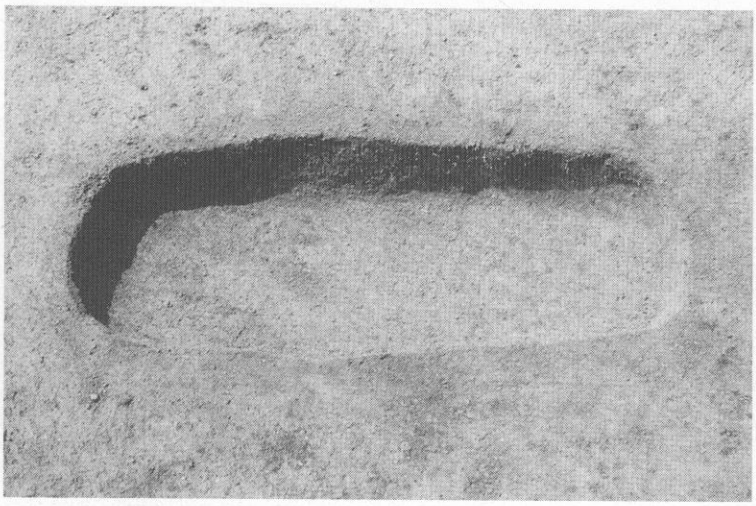


7SB001全景（東から）

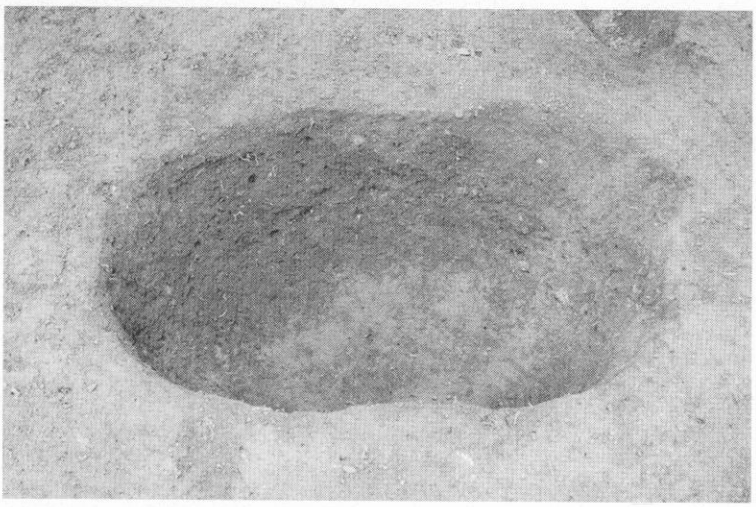


7SB001・7SX050全景（南から）

図　版　12



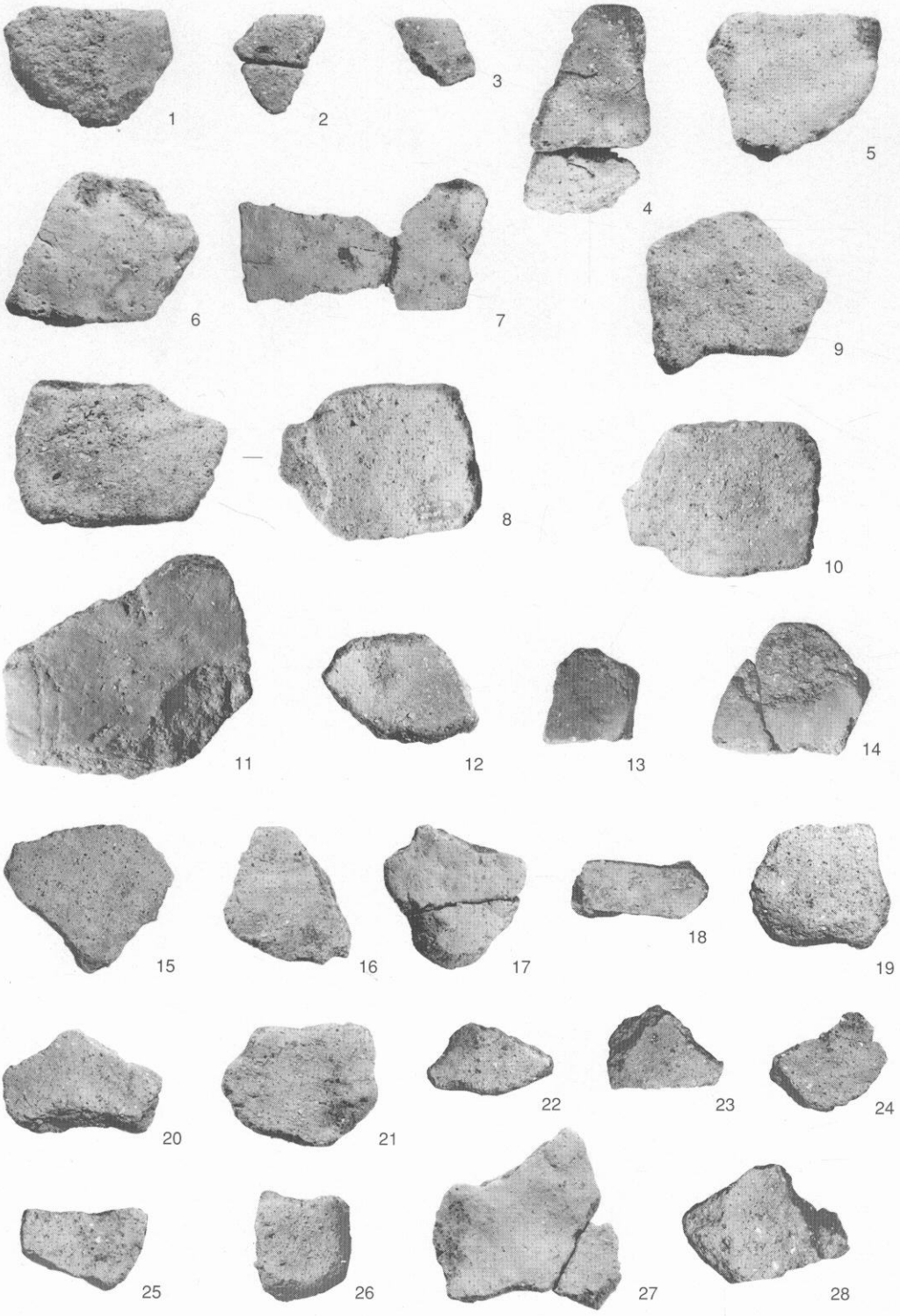
7SK022全景（南から）



7SK033全景（東から）

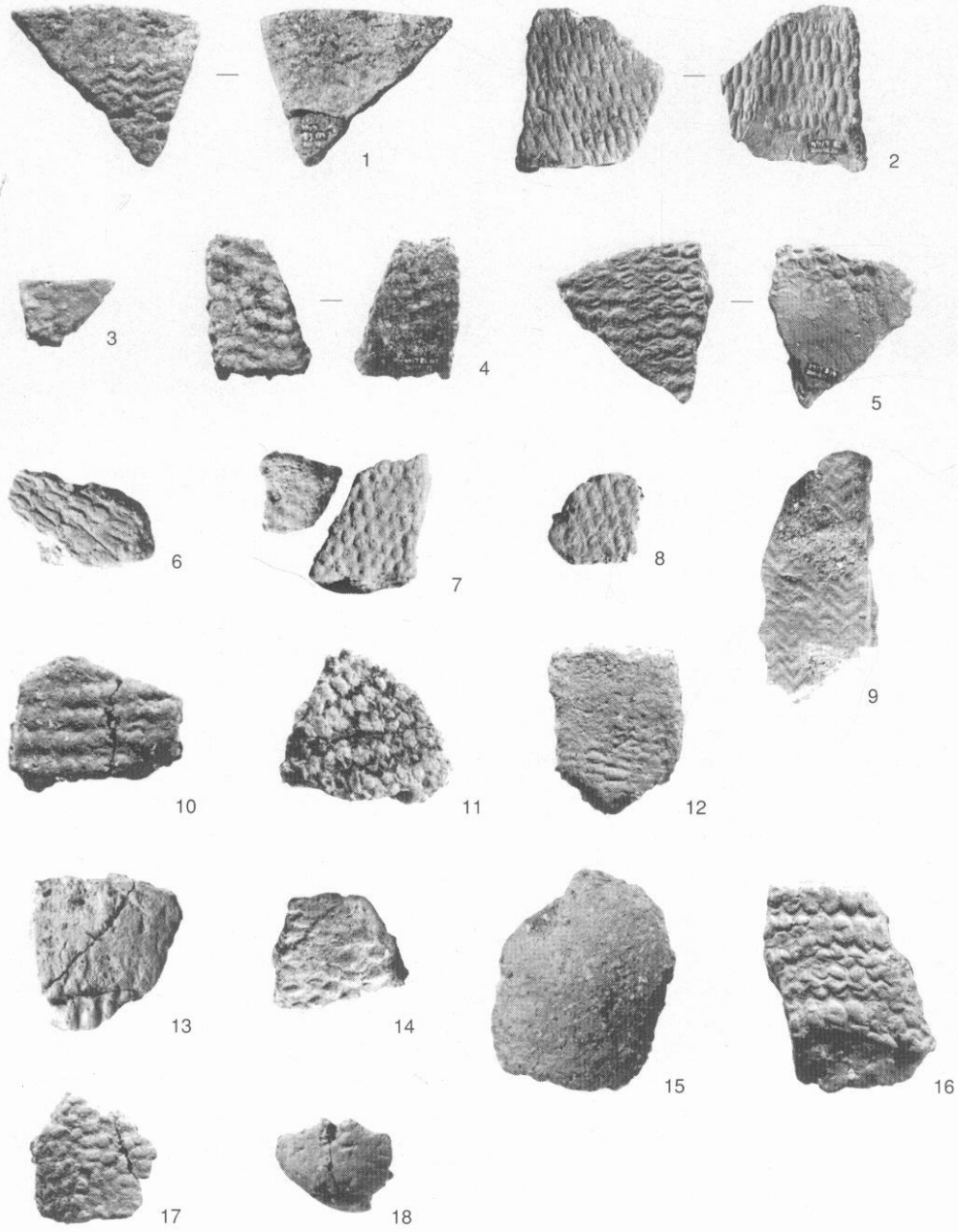


7SK035・036全景
（北から）

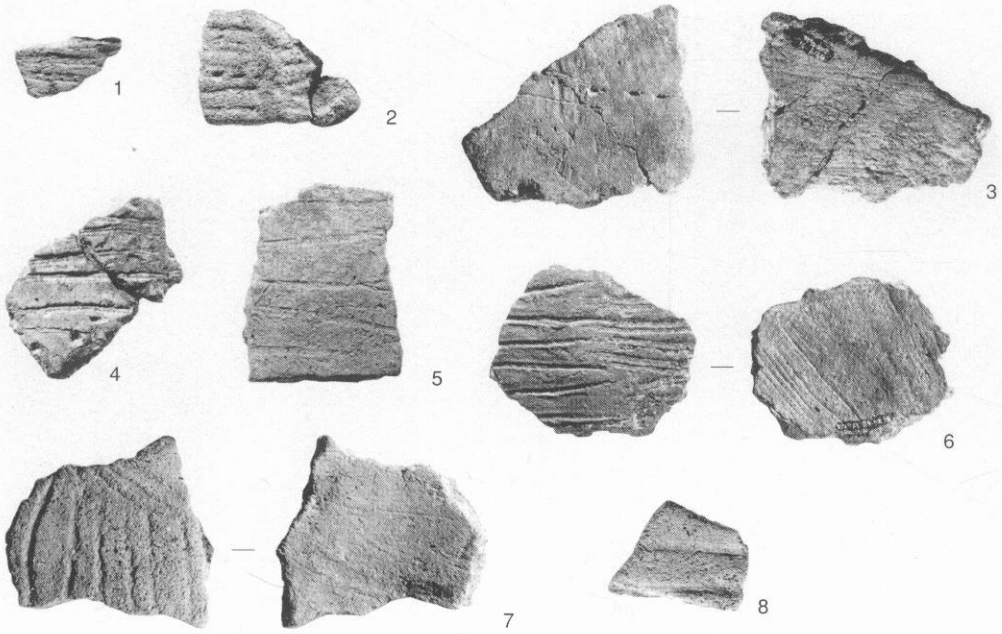


縄文時代第1群土器

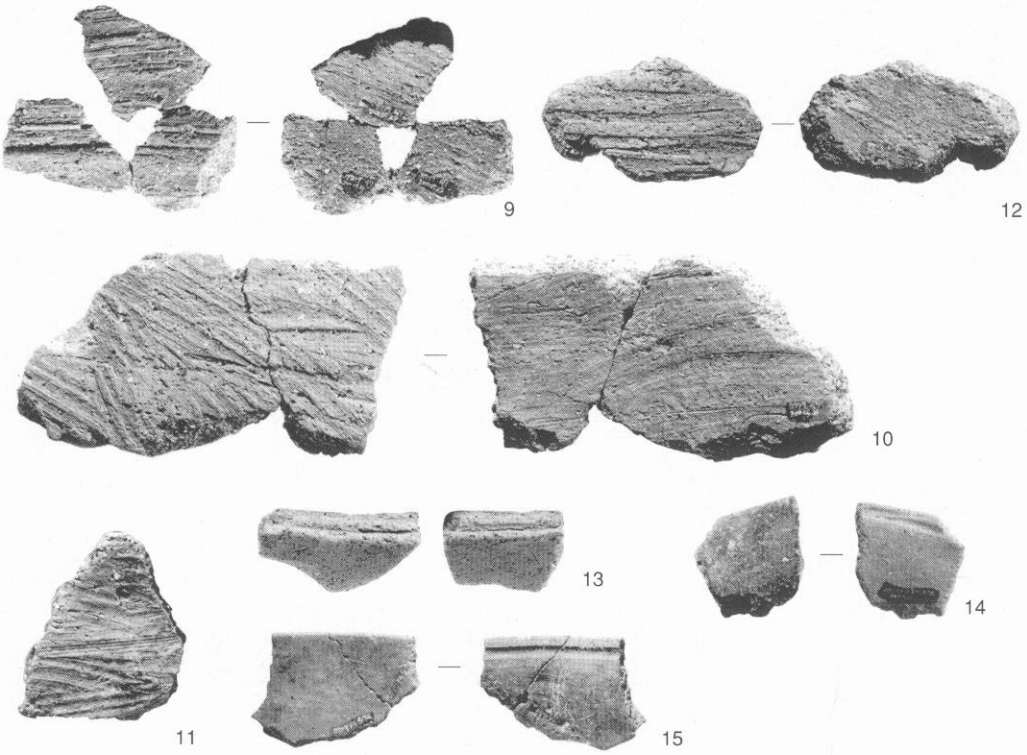
図　版　14



縄文時代第2群土器

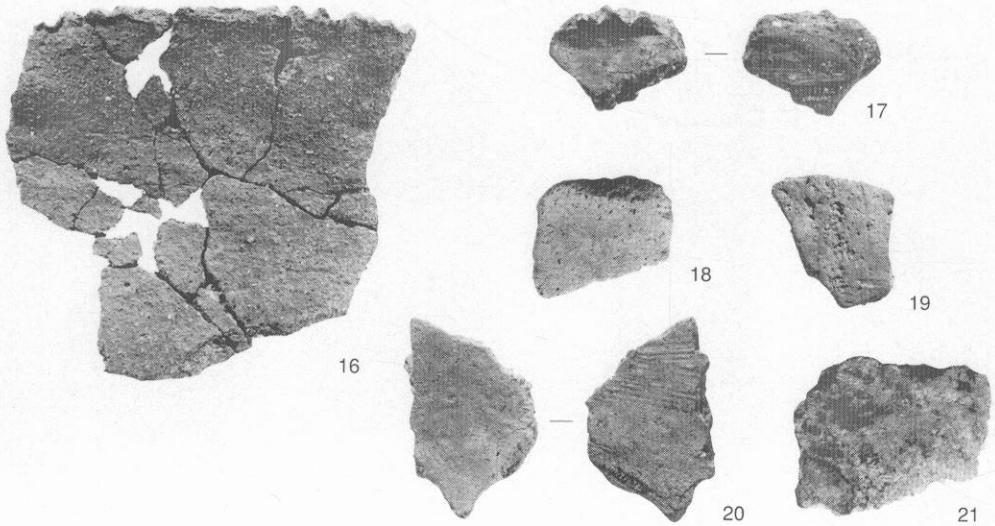


縄文時代第3群土器

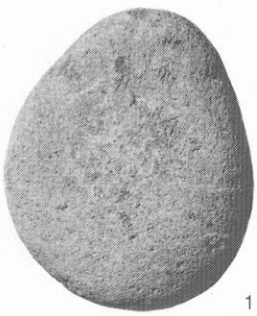


縄文時代第4群土器1

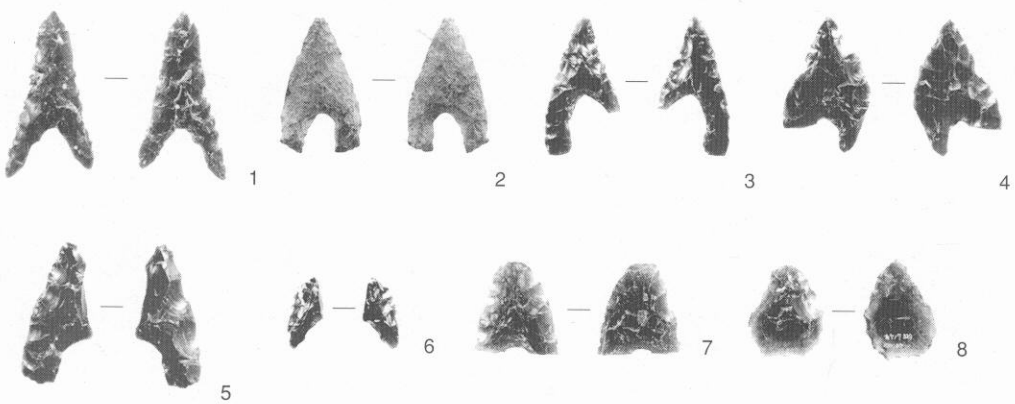
図　版　16



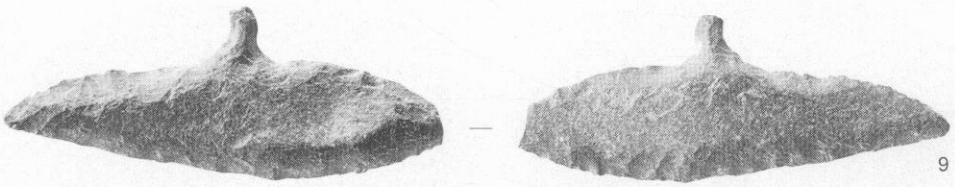
縄文時代第４群土器２・その他の無文土器

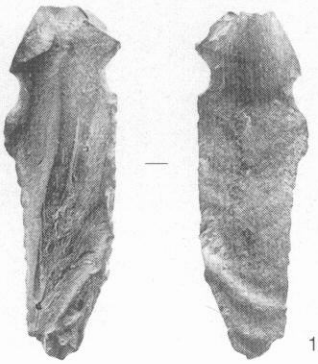


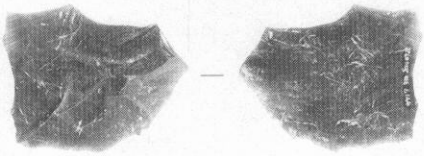
7SK040出土石器

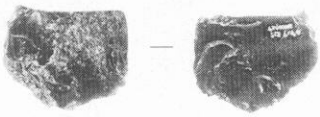


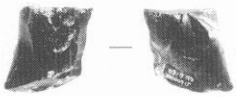
縄文時代出土石器１

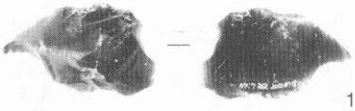

9

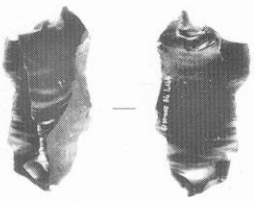

10

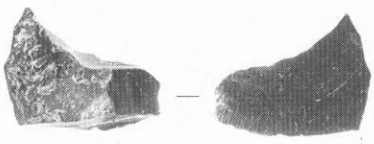

11

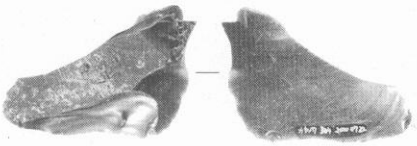

12

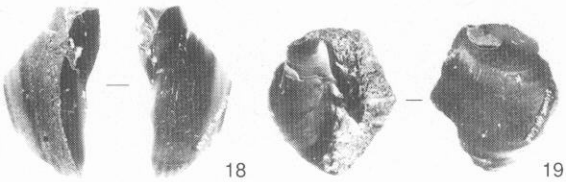

13

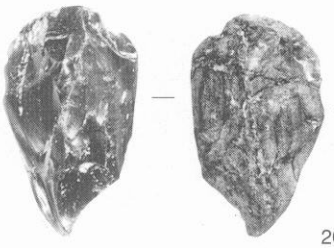

14

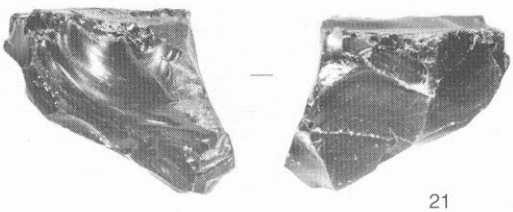

15


16


17

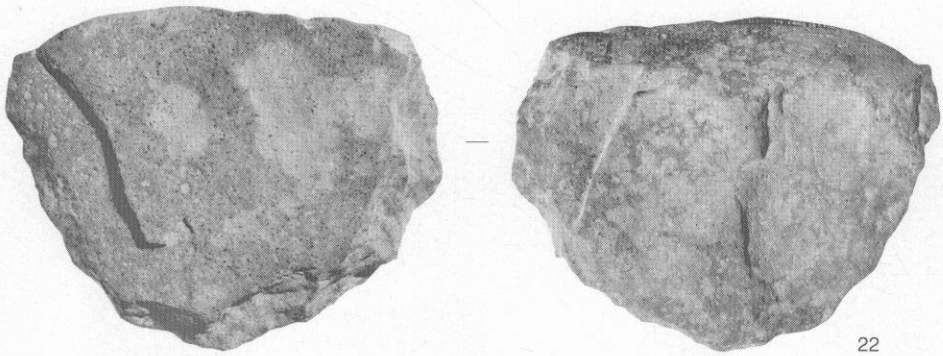

18 19


20

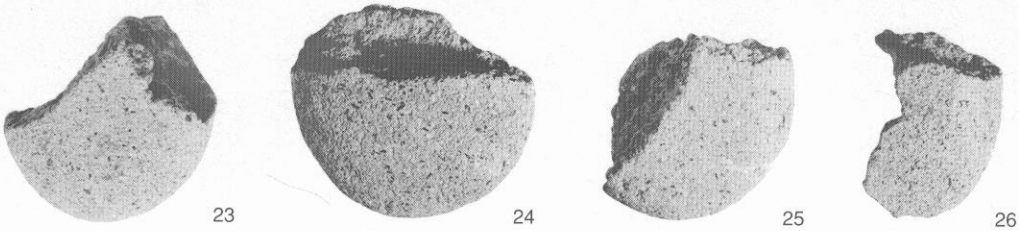

21

縄文時代出土石器2

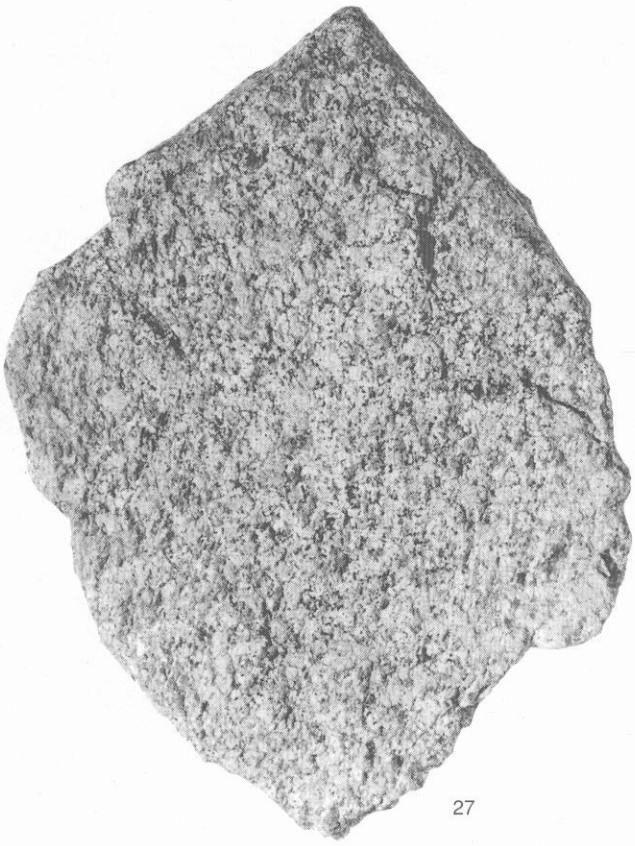
図　版　18



22



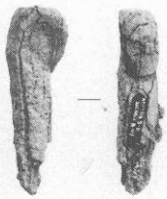
23　24　25　26



27

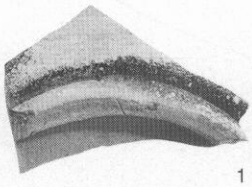
縄文時代出土石器3

7SK031



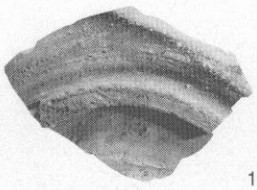
1

7SK039



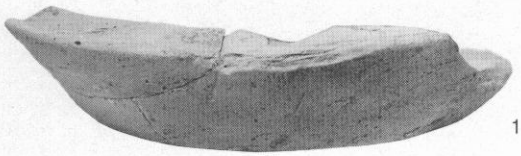
1

7SK026



1

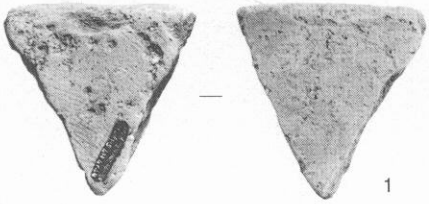
7ST025



1

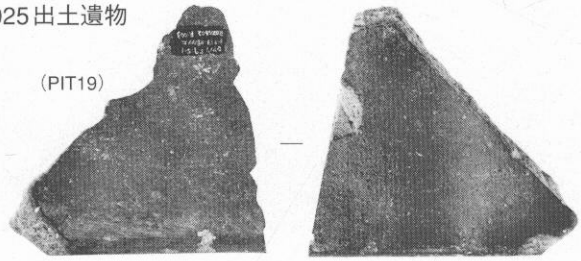
7SK031・7SK039・7SK026・7ST025出土遺物

7SX001（PIT27）



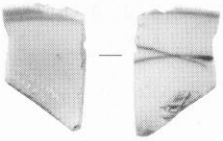
1

（PIT19）



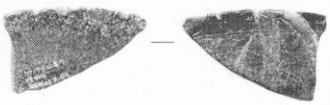
2

7SK009



2

7SK007



1

7SK013褐色土



3

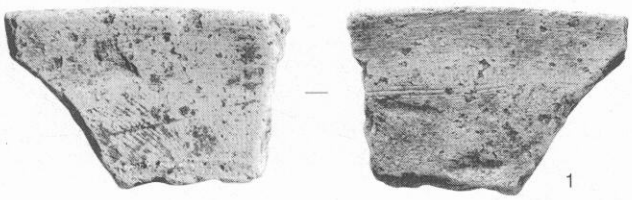
暗褐色土



4

（R－001）

7SX050



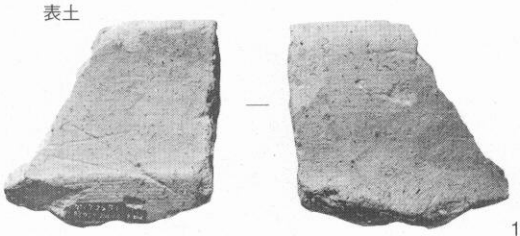
1



2

7SX001・7SK007・7SK009・7SK013・7SX050出土遺物

表土



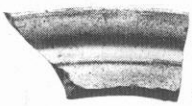
1

浅褐色土



2

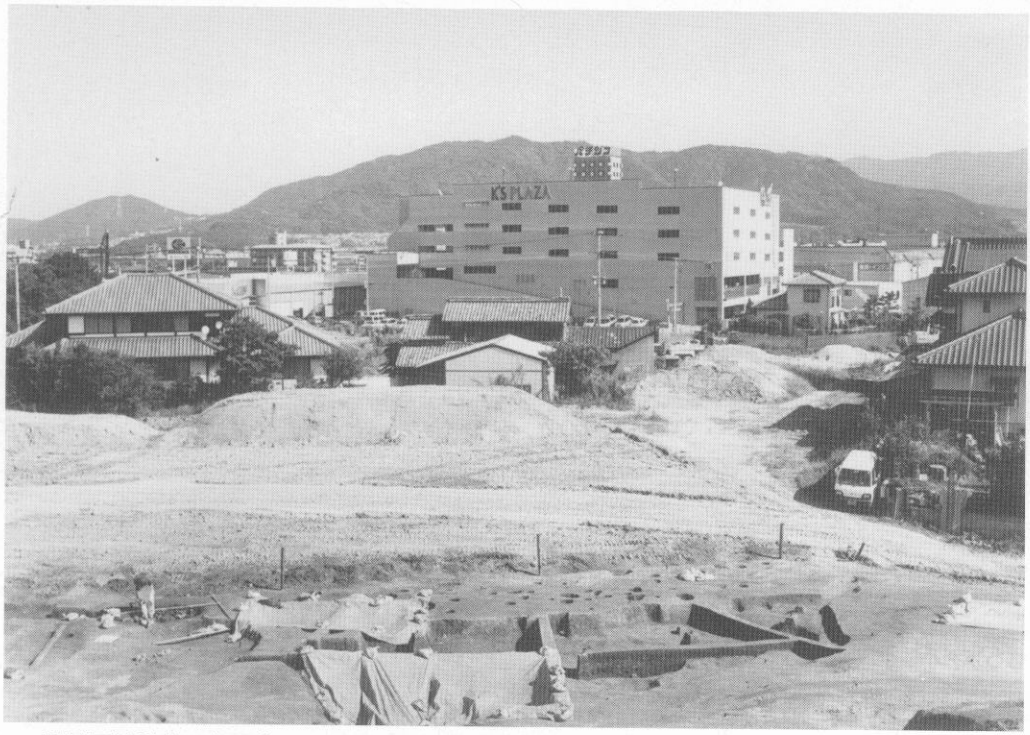
暗褐色土



3

表土・浅褐色土・暗褐色土出土遺物

図　版　20



殿城戸遺跡第6次調査区から大野城を望む（南から）



調査前風景（北から）

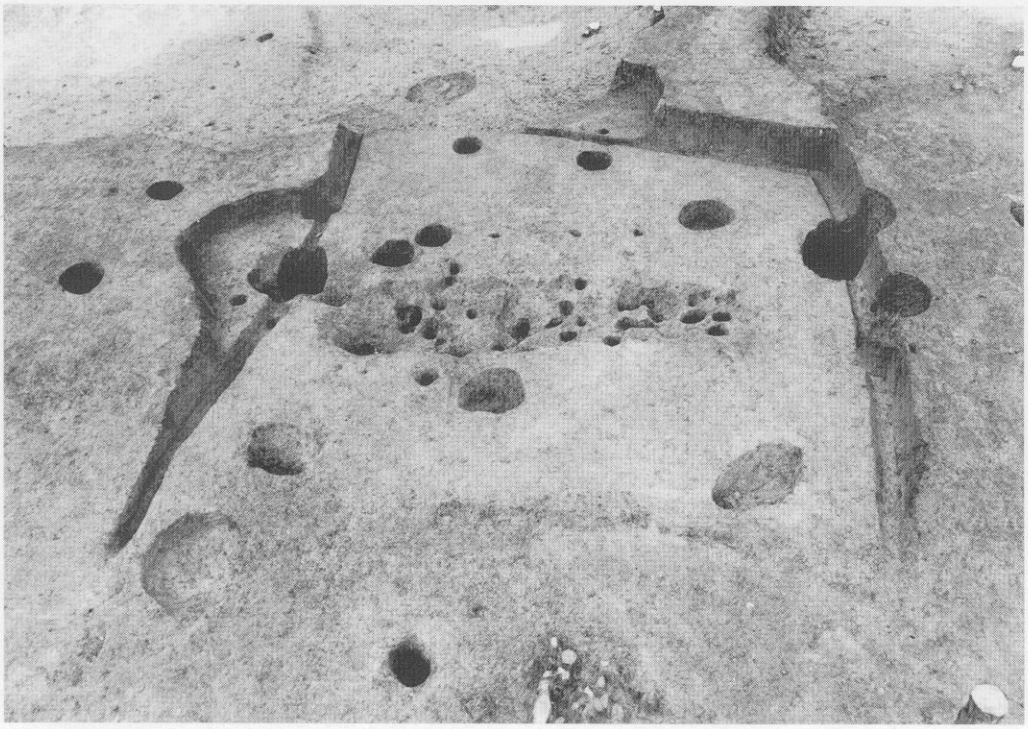


殿城戸遺跡第6次調査区全景（上空北から）

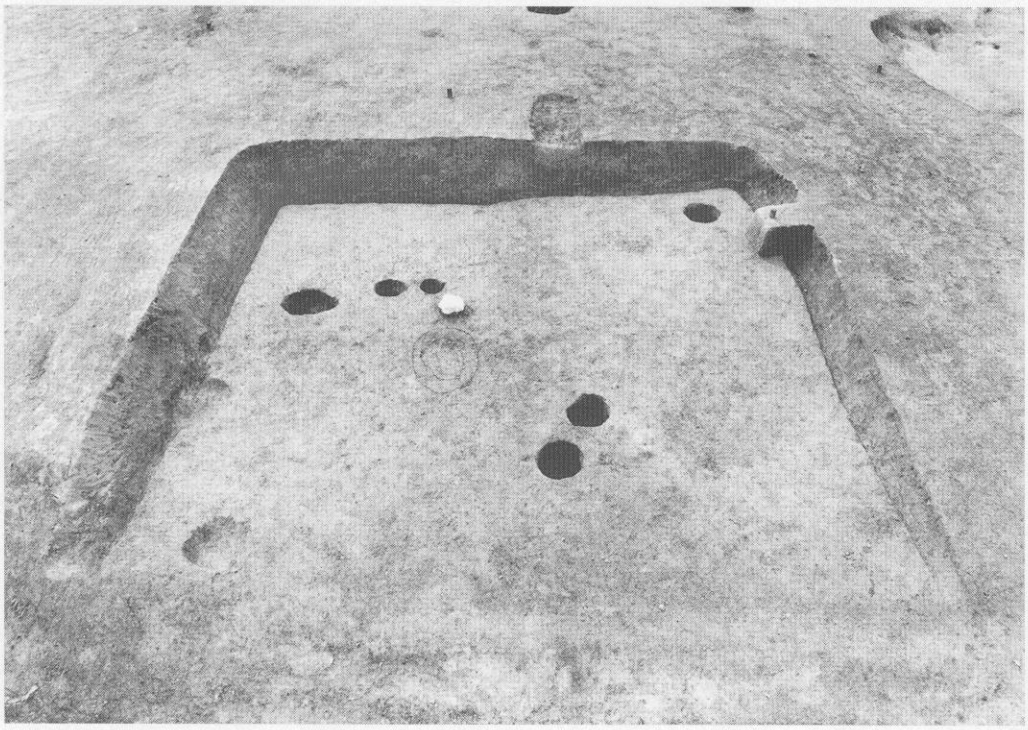


遺跡全景（上空から）

図　版　22



6SI005全景（北から）



6SI010全景（北から）



6SK006全景・遺物出土状況（北から）



6SK006西部遺物出土状況（北から）

図　版　24



6SK006東部遺物出土状況（北東から）



6SK006土師器甕出土状況（北から）



6SK059全景・遺物出土状況（北から）



6SD007全景（北から）

図　版　26



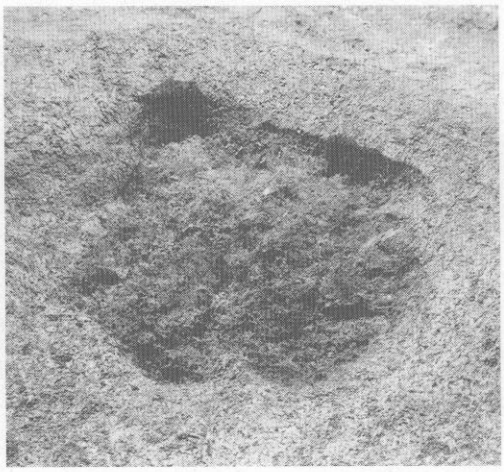
6ST001遺物出土状況（東から）



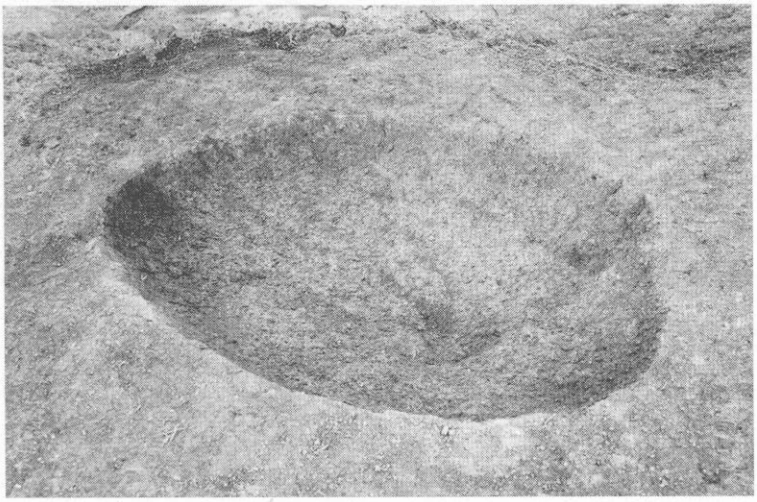
6ST002蔵骨器出土状況（北東から）



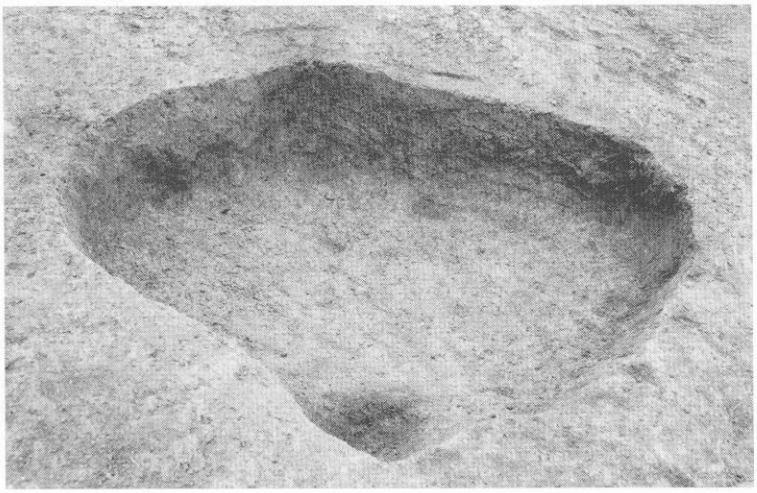
6SK001掘り方全景（北東から）



6SK002全景（南から）



6SK003全景（南から）

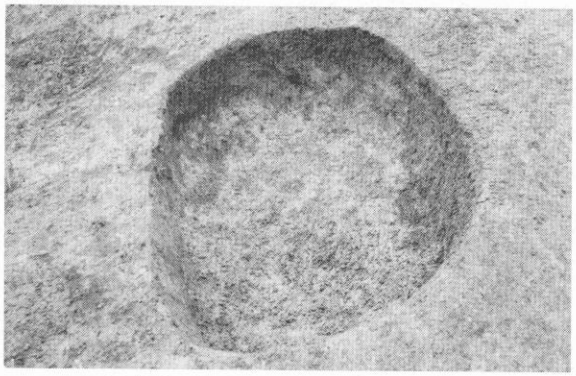


6SK004全景（南から）

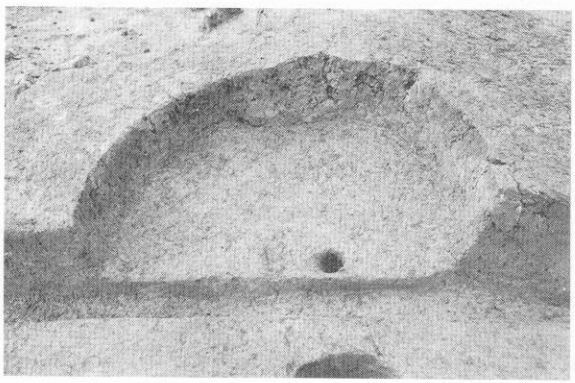
図　版　28



第2面ピット群（北西から）



6SK012全景（北西から）



6SK057全景（北から）



6SD008全景（北から）

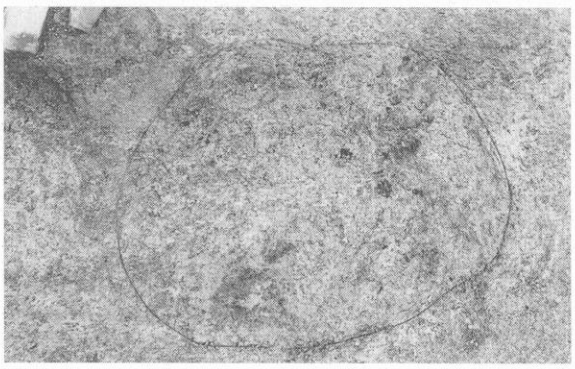


6SX050全景（東から）

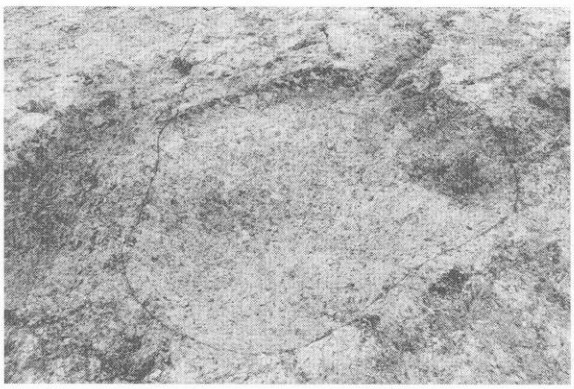
図　版　30



6SX056遺物出土状況（東から）



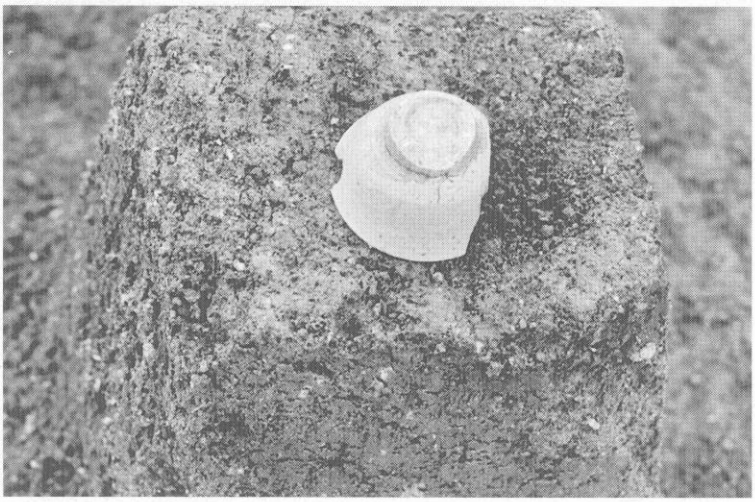
6SX056炭化物範囲1（南から）



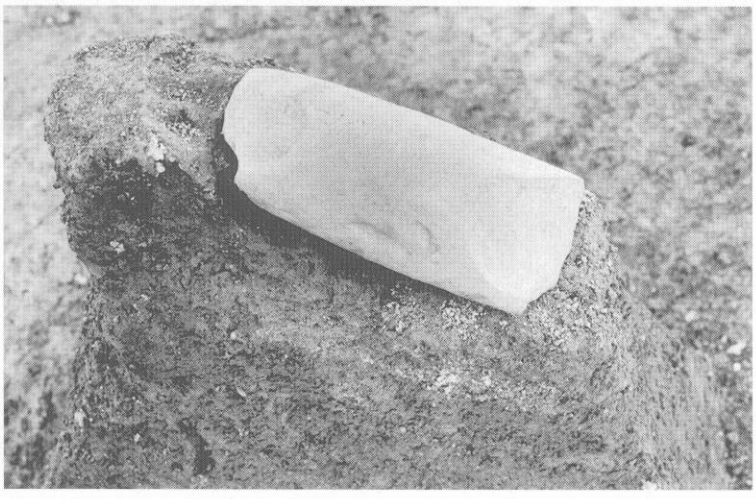
6SX056炭化物範囲2（南から）



第68図1



第68図2

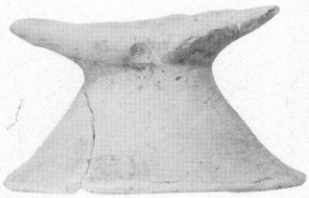


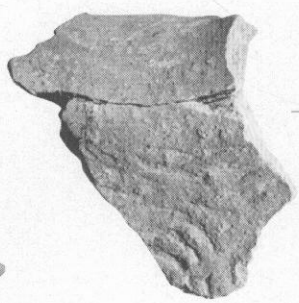
第68図6

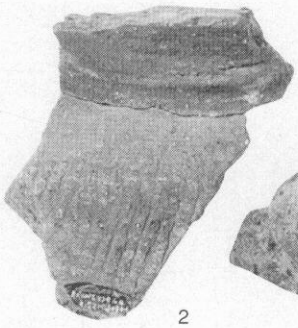
6SX056遺物出土状況

図　版　32

6SI005褐灰色土









1　2　3

6SI005出土遺物

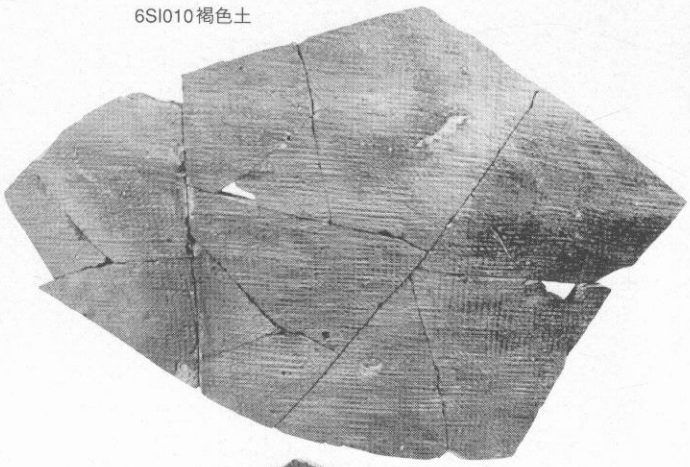
6SI010暗褐色土

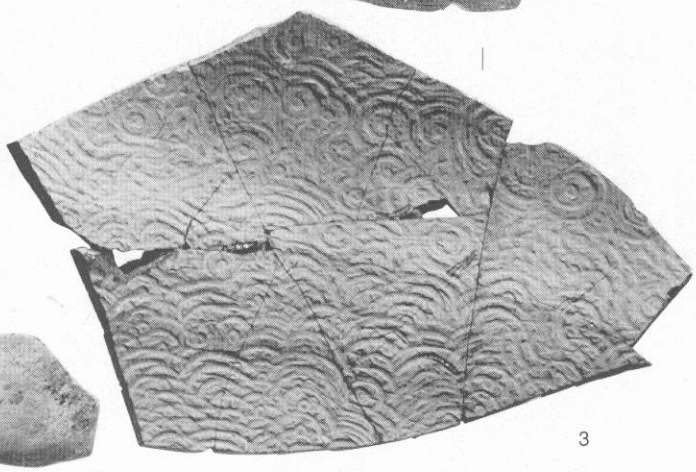




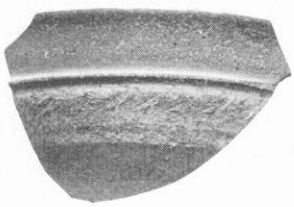
1

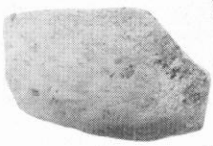
6SI010褐色土





3

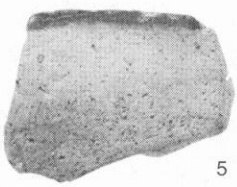




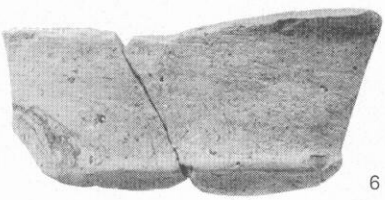
4



2



5



6

6SI010出土遺物

6SK006



1

2



3

4

6SK006出土遺物1

図　版　34

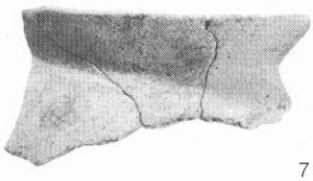
6SK006



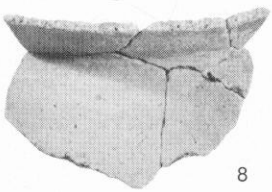
5



6



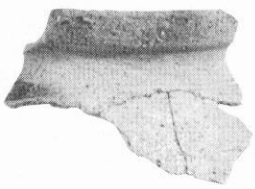
7



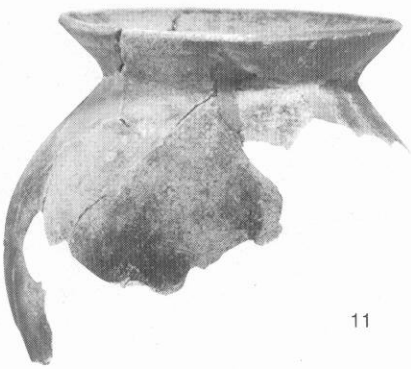
8



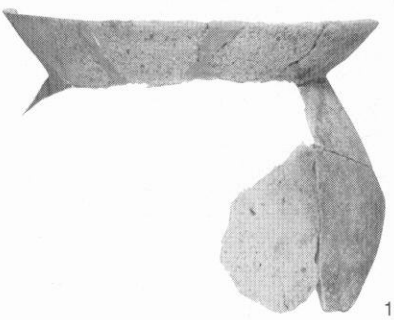
9



10



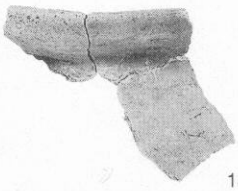
11



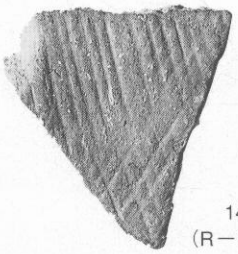
12

6SK006出土遺物2

6SK006



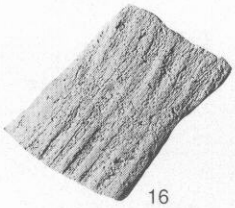
13



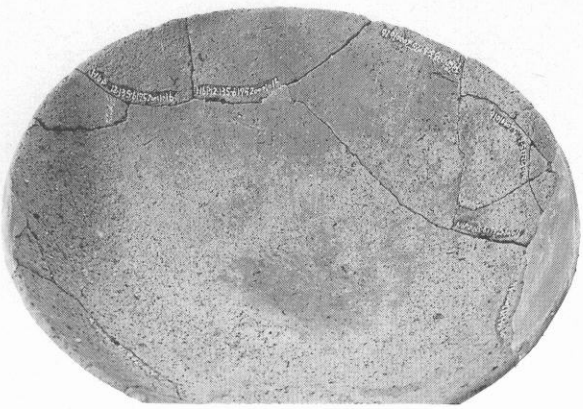
14
(R－023)

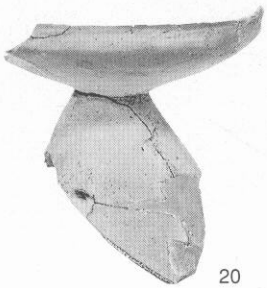


15
(R－024)

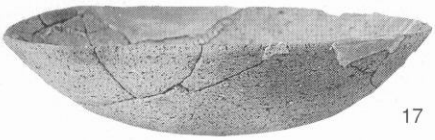


16
(R－025)





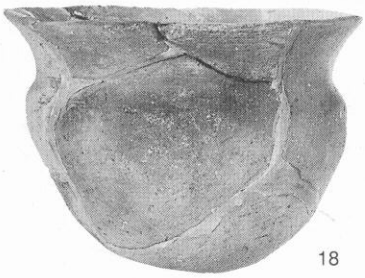
20



17



21



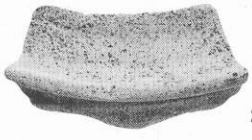
18



22



19



23

6SK006出土遺物3

図　版　36

6SK006褐色土

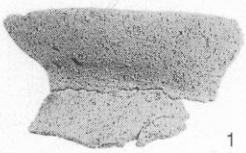


1

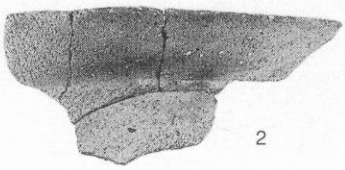


2

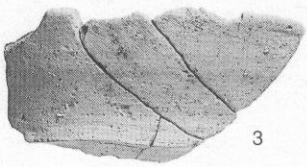
6SK006暗褐色土



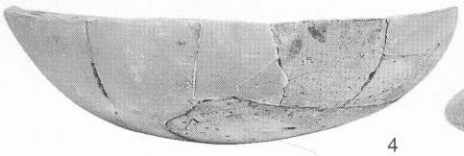
1



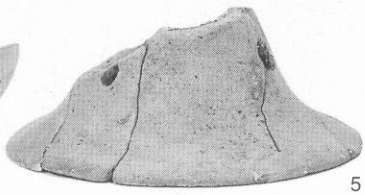
2



3



4



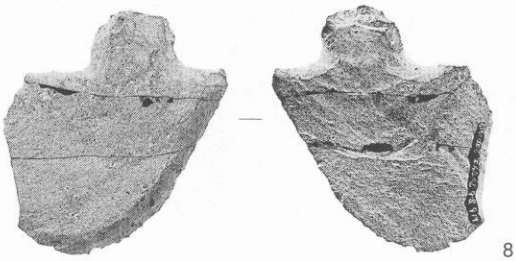
5



6



7



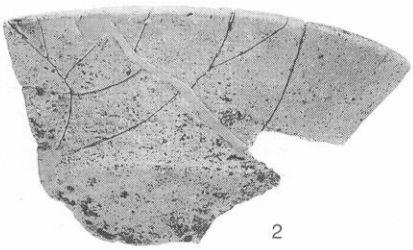
8

6SK006出土遺物4

6SK059

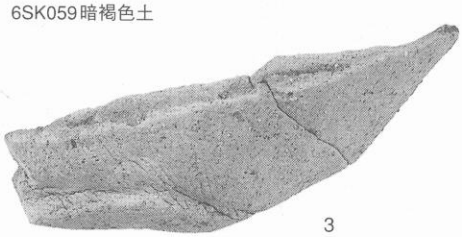


1



2

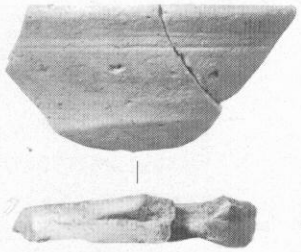
6SK059暗褐色土



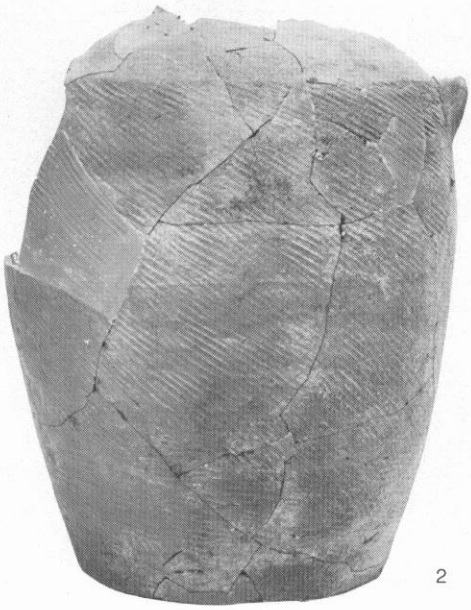
3

6SK059出土遺物

6ST001



1



2

6ST001出土遺物

6SD008褐灰色土



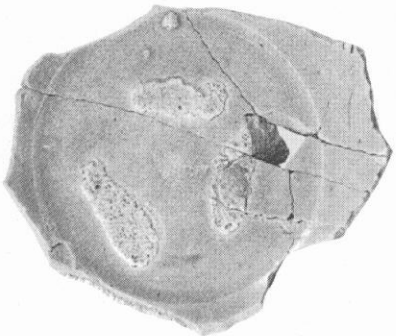
1

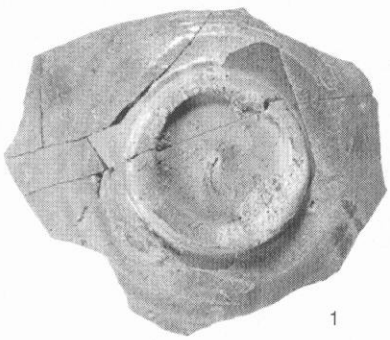
6SD008出土遺物



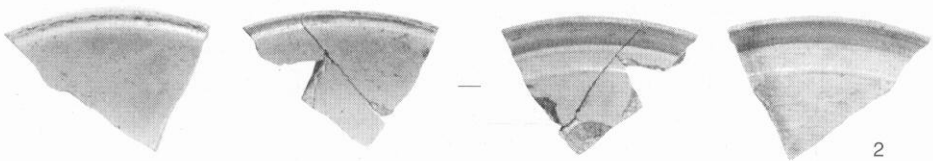
火葬人骨（R－003）

6SX053暗褐色土





1

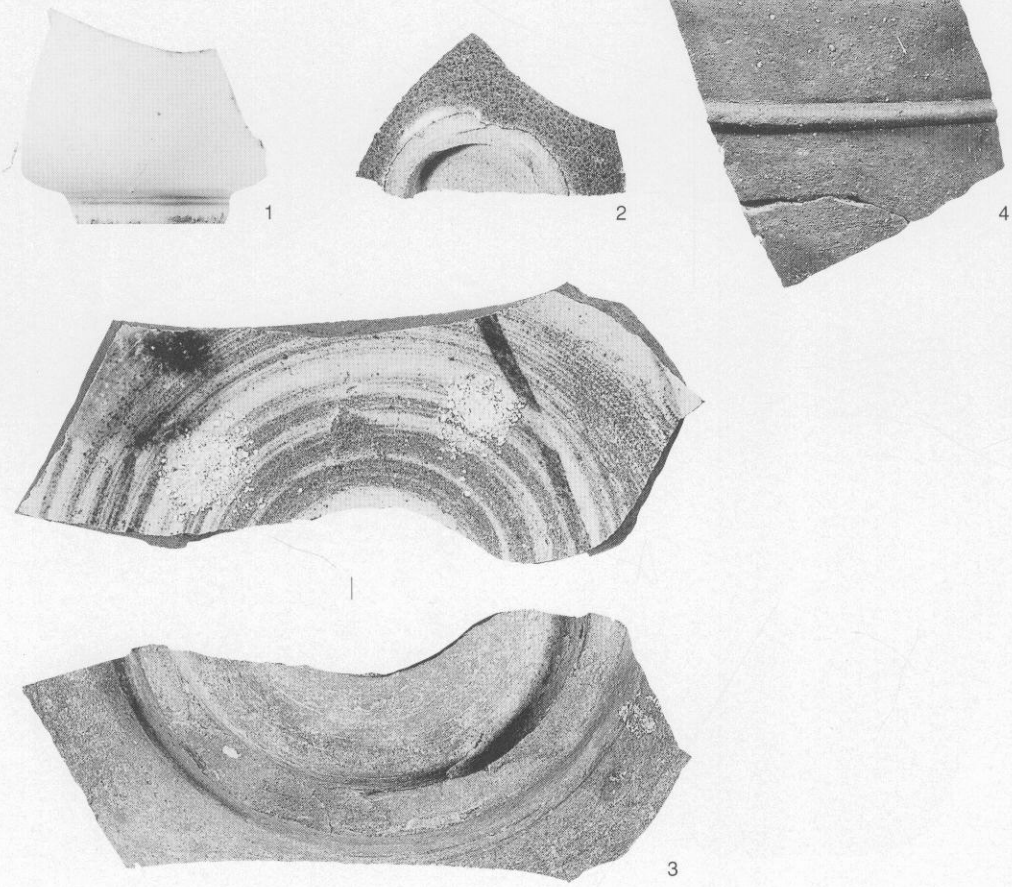


2

6SX053出土遺物

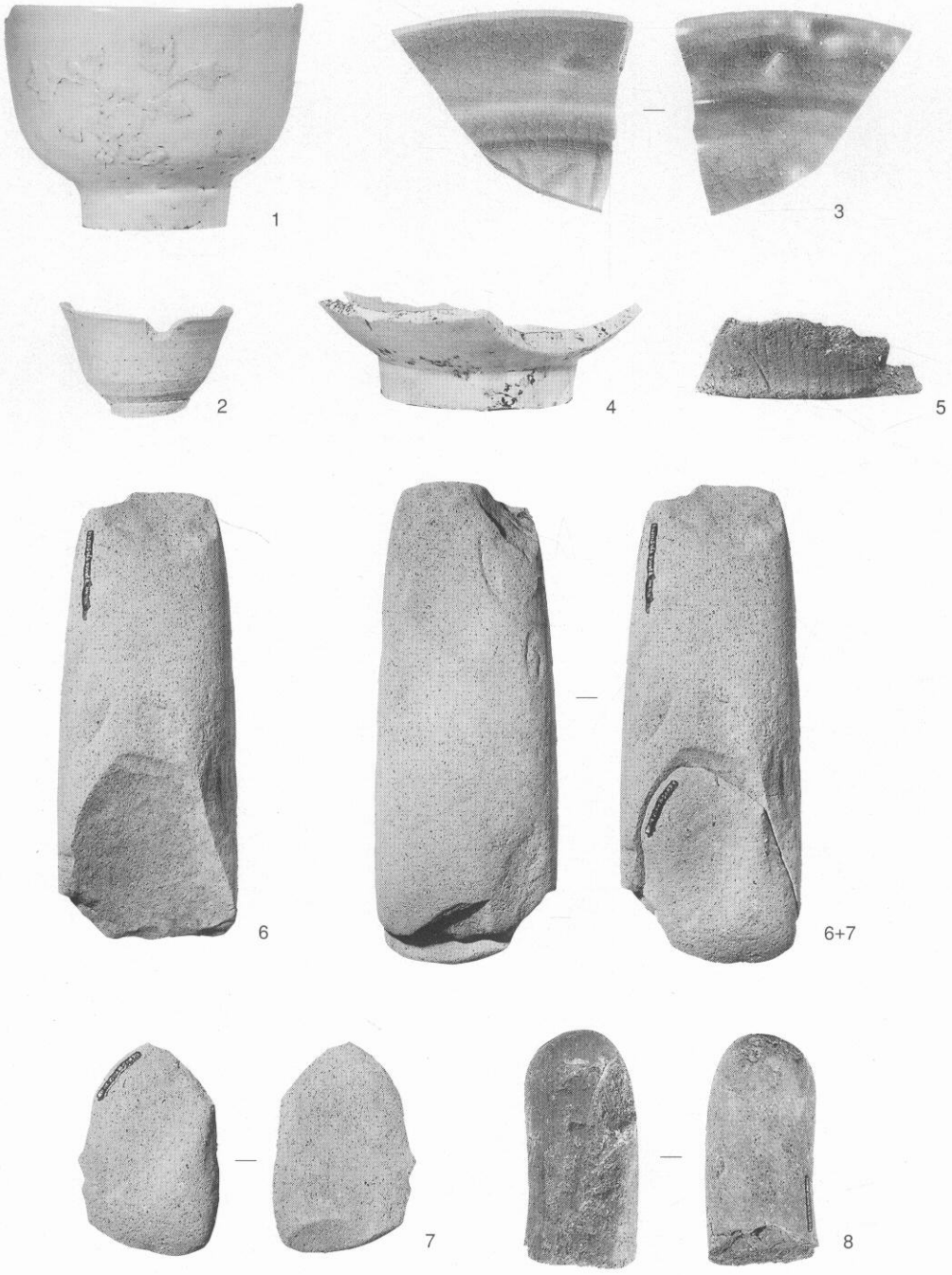
図　版　38

6SX050暗褐色土



6SX050出土遺物

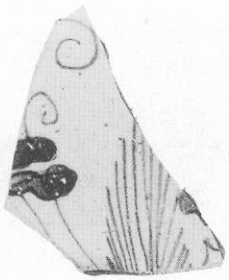
6SX056 褐灰色土

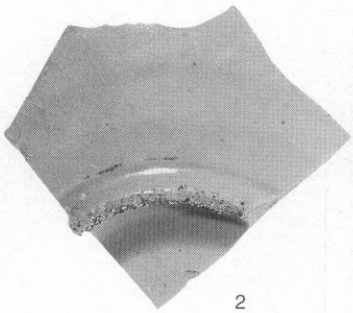


6SX056 出土遺物 1

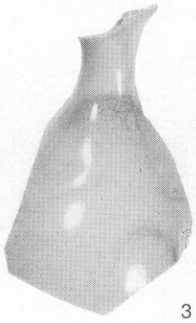
図　版　40

6SX056褐色土

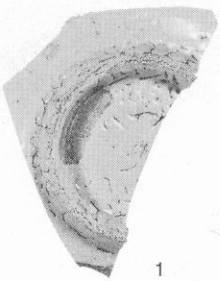




2



3



1



4

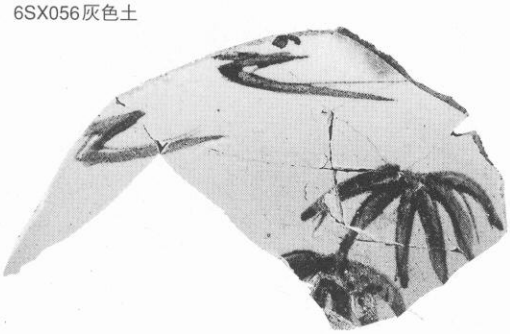


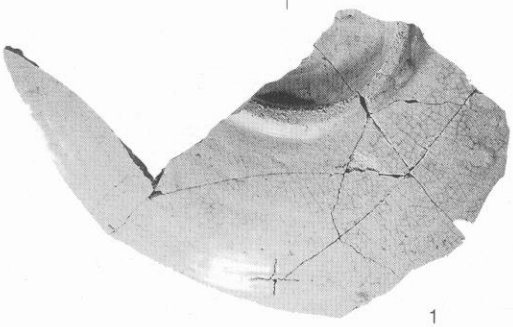
5



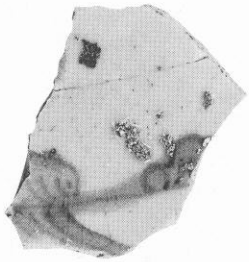
6

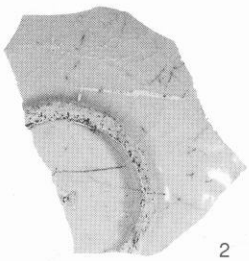
6SX056灰色土



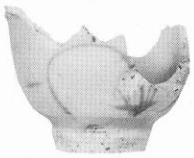


1





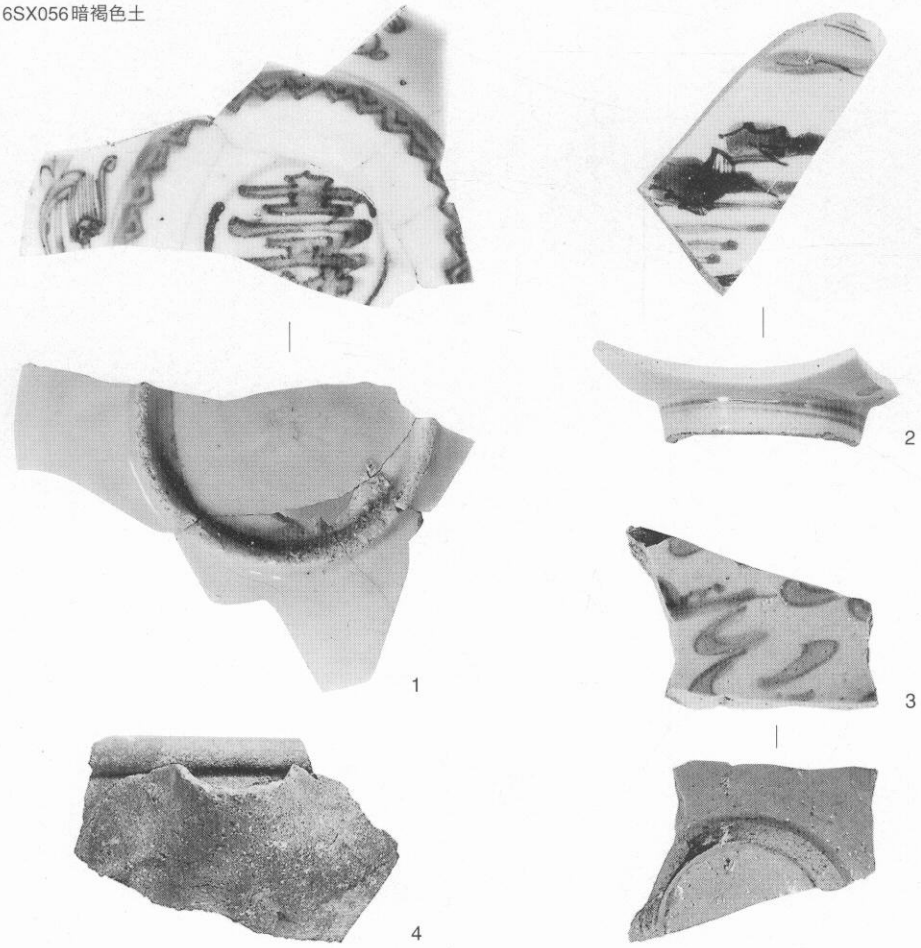
2



3

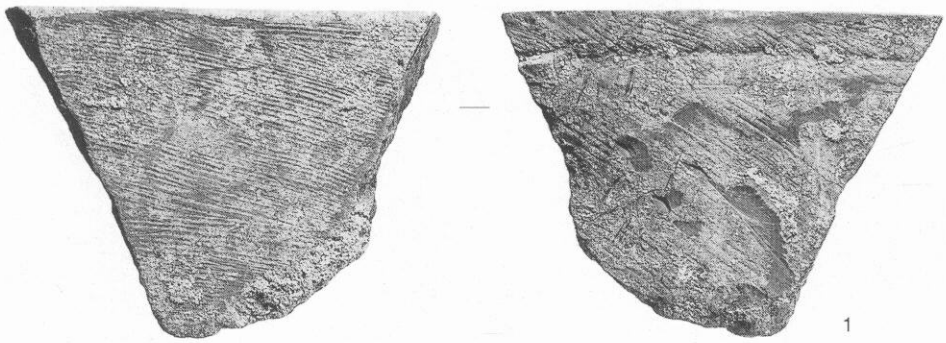
6SX056出土遺物2

6SX056暗褐色土



6SX056出土遺物3

6SX095



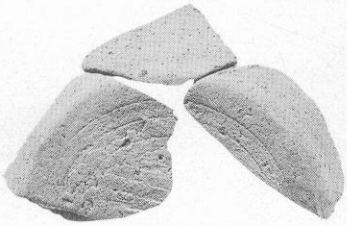
6SX095出土遺物

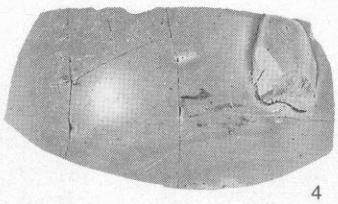
図 版 42

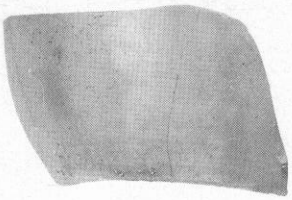
表 土

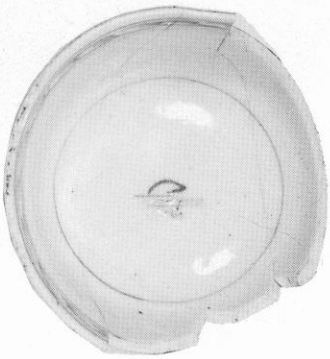

1

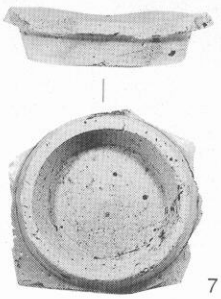

3

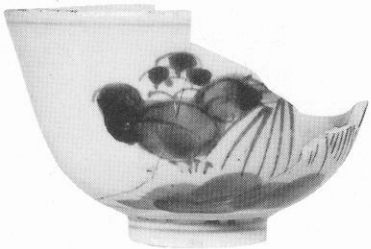

2


4
(R－011)

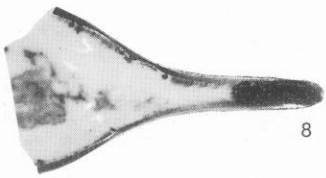

5

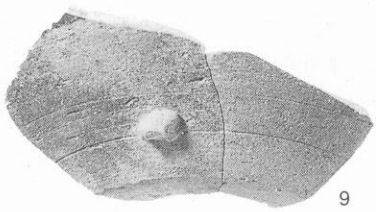



7




6


8

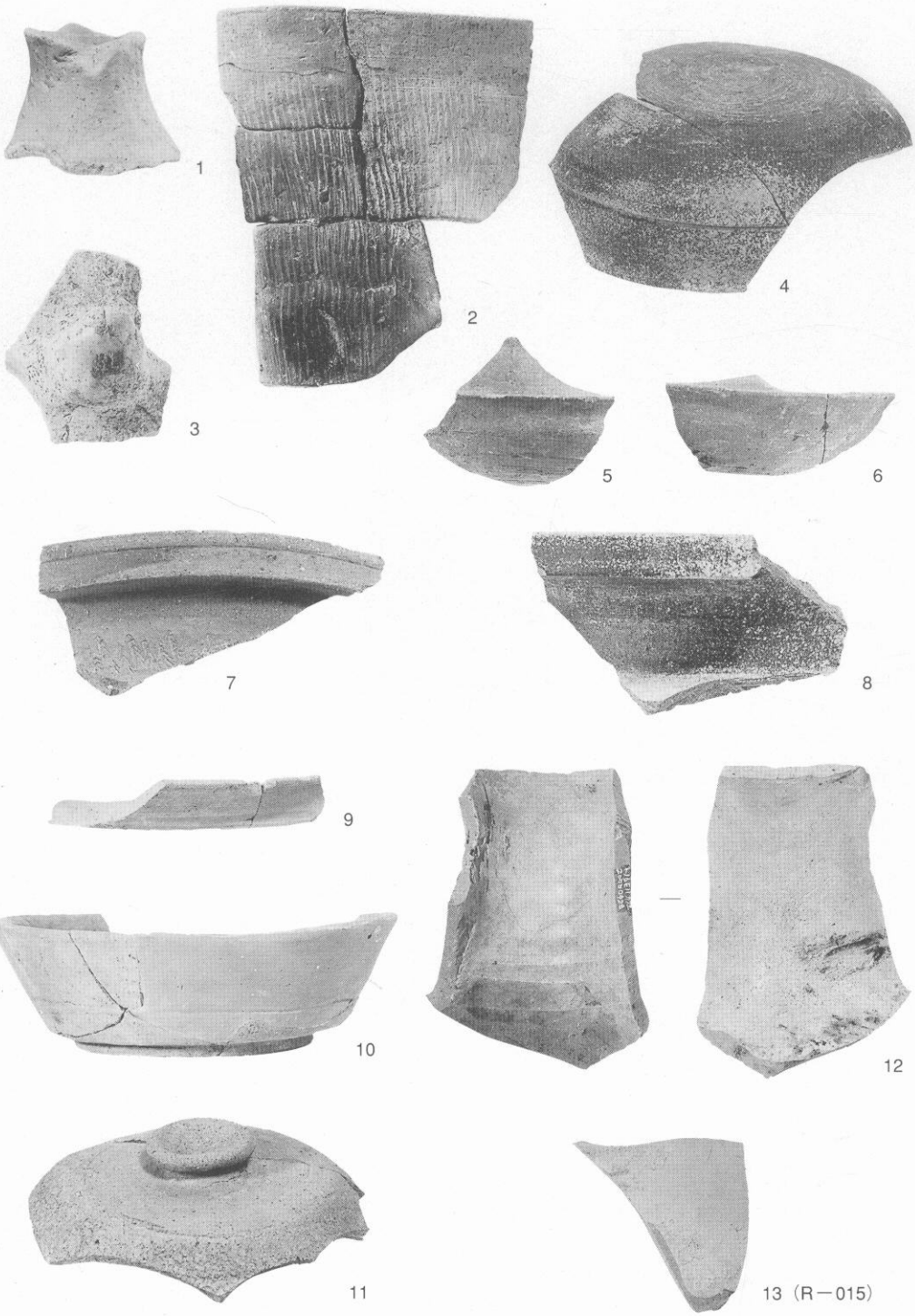

9




10

表土出土遺物

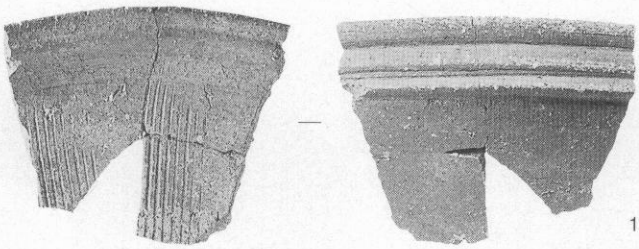
褐色土



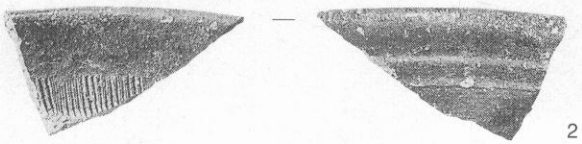
褐色土出土遺物（1）

図　版　44

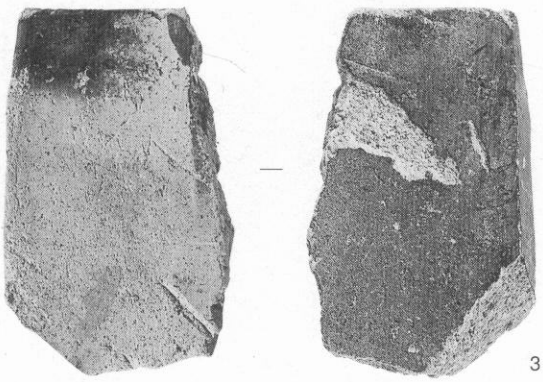
褐色土



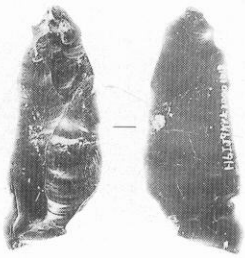
1



2



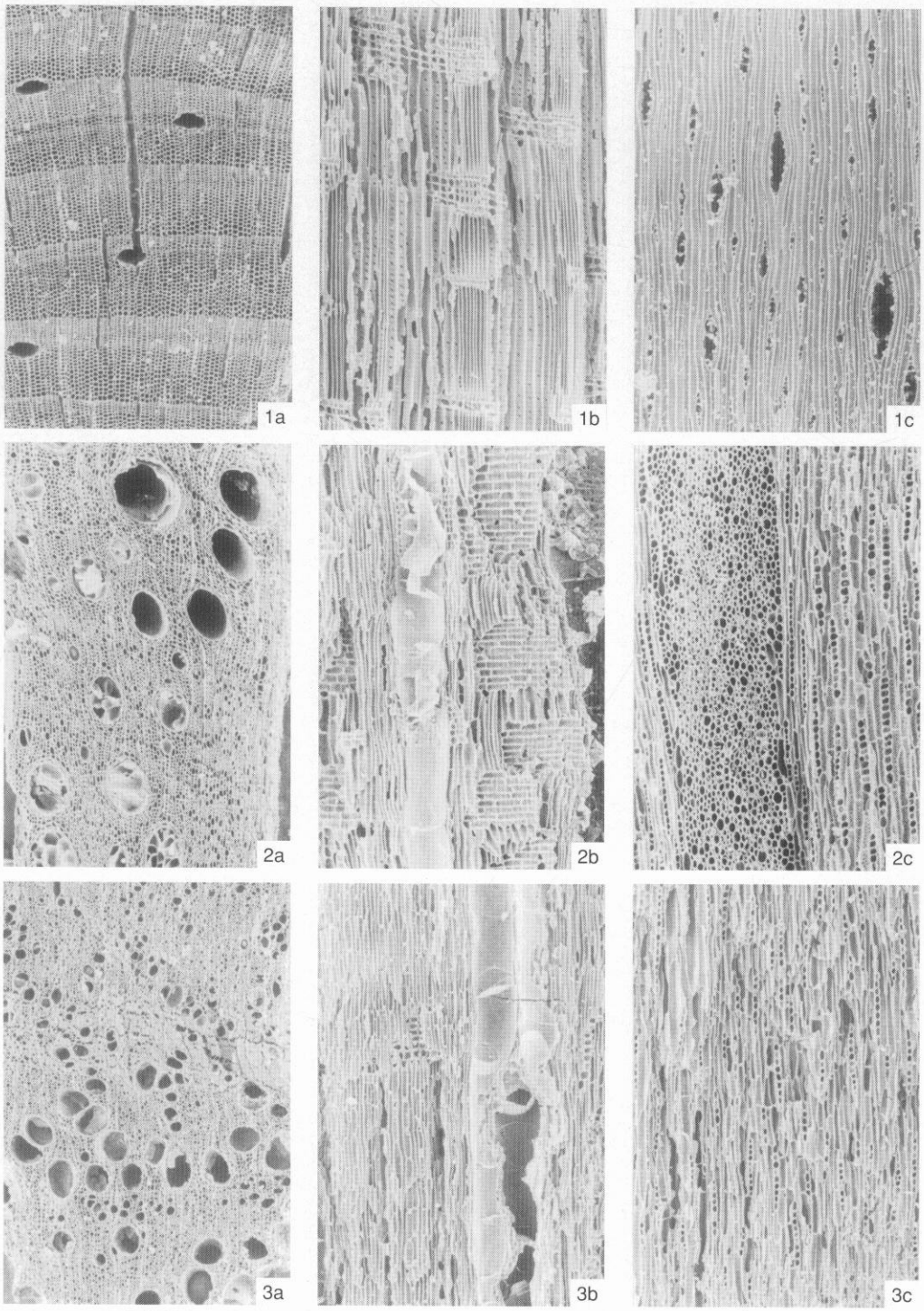
3



4

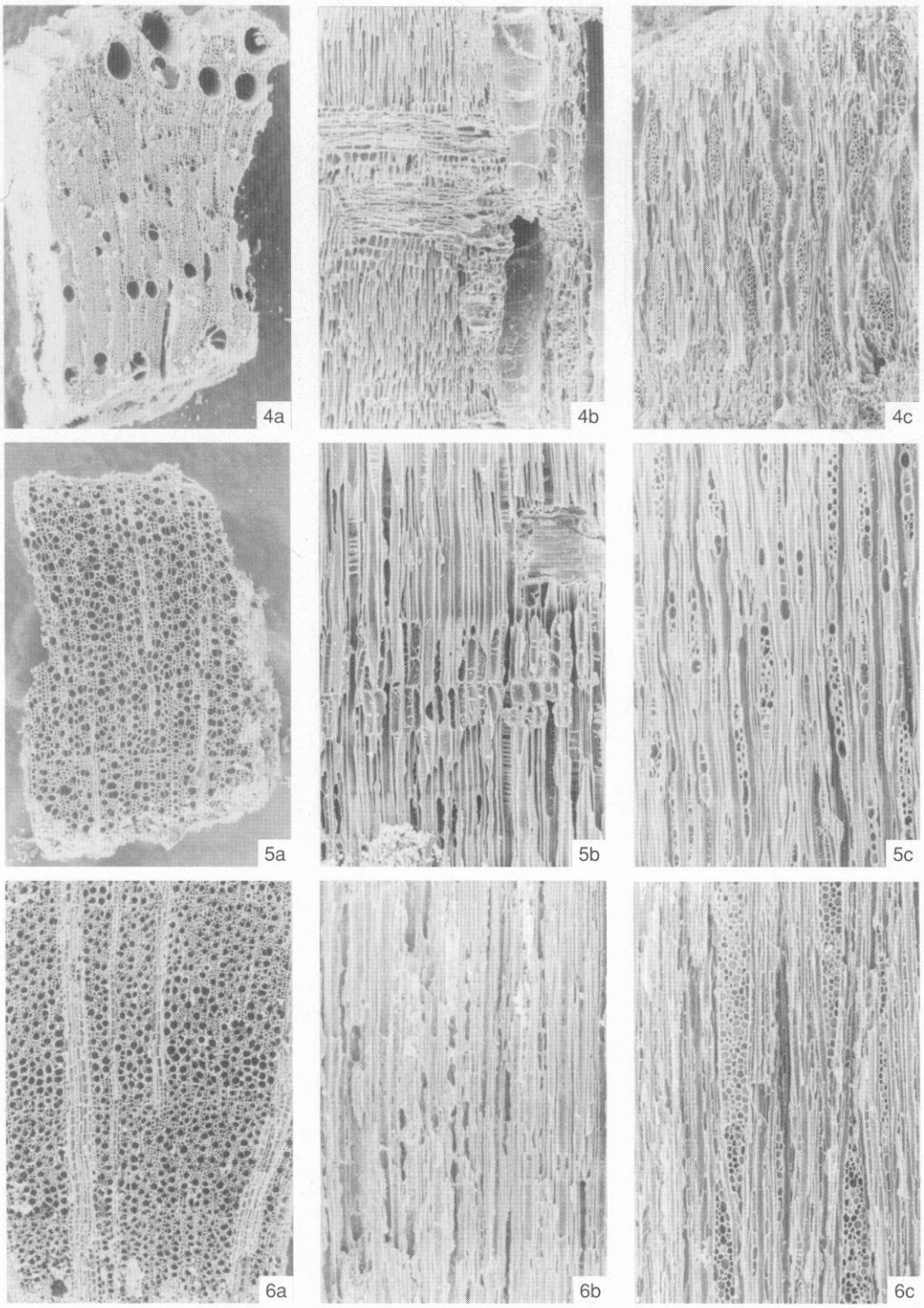
褐色土出土遺物（2）

図　版　45



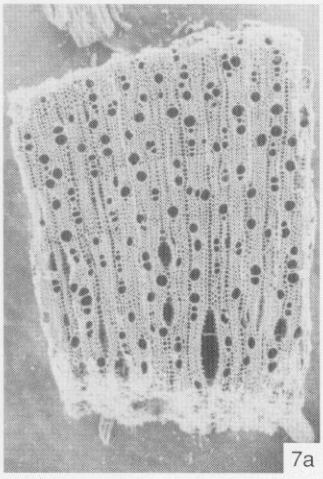
1．マツ属複維管束亜属（D－6 7SK025 3層）
2．コナラ属アカガシ亜属（試料№184）
3．クリ（H－6 7SK037）
a：木口，b：柾目，c：板目

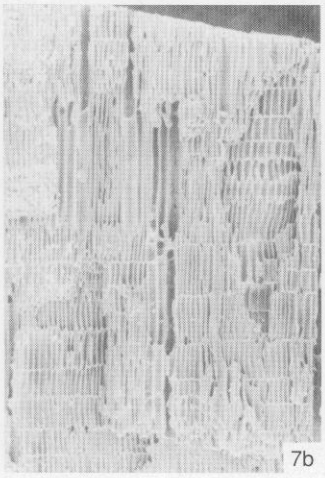
200 μm：a
200 μm：b，c

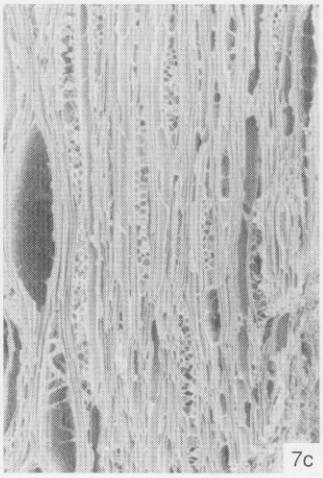


4．ヤマグワ（H－6 7SK037）
5．シキミ（H－6 7SK037）
6．シャシャンボ（F－11 7SK029）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c


7a


7b


7c

7．ムラサキシキブ属（F－11 7SK029）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μm：a
200 μm：b，c

報告書抄録

ふりがな	だざいふ・さのちくいせきぐん12
書名	太宰府・佐野地区遺跡群XII
副書名	カヤノ遺跡第7次調査・殿城戸遺跡第6次調査
シリーズ名	太宰府市の文化財
シリーズ番号	第58集
編著者名	戸田哲也・小山裕之・高橋勝広・中山　豊・山村信榮・佐藤道文
編集機関	太宰府市教育委員会・玉川文化財研究所
所在地	太宰府市教育委員会　〒818－0198 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1－1　Tel 092－921－2121 玉川文化財研究所　〒221－0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1－8－9　Tel 045－321－5565
発行年月日	西暦 2001年3月15日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
カヤノ	福岡県太宰府市 大字大佐野	402214	210887	33° 29′ 44″	130° 29′ 34″	20000522 ～ 20000703	約630	太宰府市都市計画事業佐野土地区画整理に伴う事前調査
殿城戸				33° 29′ 54″	130° 29′ 59″	20000828 ～ 20001031	1,287	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
カヤノ	集落	縄文時代	土坑 2基	土器・石器	縄文時代早期の土器・石器出土
		古代	土坑 10基	須恵器・土師器・鉄製釘	
		中・近世	柱穴列 1ヶ所	陶磁器・瓦	
			土坑 11基		
			土坑列 1ヶ所		
			畝溝状遺構 206条		
殿城戸	集落	古墳時代	竪穴住居址 2基	須恵器・土師器	廃棄土坑検出
			廃棄土坑 2基		
			溝 1条		
	墓	古代	火葬墓 1基	須恵器・土師器	
			土坑 3基		
			ピット群		
		近世以降	土坑 2基	陶磁器・瓦	
			溝状遺構 2条		
			ピット群		

太宰府市の文化財　第58集

太宰府・佐野地区遺跡群XII

－カヤノ遺跡第7次調査・殿城戸遺跡第6次調査－

平成13年（2001）年3月

編集　玉川文化財研究所
〒221-0822 神奈川県横浜市神奈川区西神奈川1-8-9

発行　太宰府市教育委員会
〒818-0198 福岡県太宰府市観世音寺1丁目1-1

印刷　(有)平電子印刷所
〒970-8024 福島県いわき市平北白土字西ノ内13